
天国の扉

藤井 紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国の扉

【Nコード】

N0205K

【作者名】

藤井 紫

【あらすじ】

魔女狩りから逃れるため国を追われた羊飼いの少女ジェードが、聖地で出会ったのは、異国の第二皇子ハリーファだった。

200年前に聖地を滅ぼした【王】の生まれ変わりの証である聖痕を持って生まれたハリーファ。

ハリーファを殺すという天命を知らされたジェード。

天使と悪魔に翻弄される二人の、過去からの因縁の恋愛物語。 中世風異世界ファンタジー。

（ 月1更新目標 ）

（＊ページに挿絵入れています。山田ジャム様による少女漫画風イラストです。挿絵なしがお好みの方は挿絵をOFFに設定してください。）

ヴァロニア王国 ジェード *

> i 3 3 6 2 9 — 4 0 3 9 <

東の大陸フロリスの大半を占めるヴァロニア王国。その中でも、最西に位置し暖かい田舎領、ヘンブルグにも冬が訪れていた。

1425年1月6日、ヘンブルグ領アレー村。

新年になり本格的な冬を迎えた。

ヘンブルグでは、羊が出産シーズンに入った。アレー村は小さな村で、村全体で羊や家畜を保有し世話をしている。年明け早々から村の羊飼いは朝から晩まで仕事に明け暮れていた。

ヘンブルグはヴァロニアでも暖かい地方に属する。そのため、今冬はまだ初雪は降っていなかった。それでも臨月の羊は産屋も兼ねた暖かい小屋の中に移動させられ、大人の羊飼いが交代で様子を見守っていた。

夕方近く、空が少しずつ黄昏てゆく頃。

ウィルダーは羊小屋近くの干草置き場で干草の積み下ろしをして

いた。幼馴染の少女ジェードが羊のための産屋から出て来たのが見えた。少女は三角に折りたたんだ布を頭にかぶっている。その背中にはゆるゆると波打った長く黒い髪が揺れていた。

ジェードはまわりをきよきよと見まわし、ウィルダーの姿を干草置き場に見つけると手を振りながら駆けよってきた。

「ウィル！ 生まれたわ！ 双子だったの！」

ジェードは興奮と外気の冷たさに頬を赤く染めながら、息を弾ませて白い息を吐いた。朝から産気付いた羊がどうにも難産で、それがようやく生まれらしい。

ウィルダーは一昨年義務教育を終えて羊飼いの職に就いたばかりだった。羊の出産期はまだ二度目の経験だ。同じ年頃の女の子達は少し早くから職に就いているので、同じ年の男達よりも経験では勝っていた。

「双子だつて！？」

ウィルダーは驚いて干草の山から滑り降りてきた。

「わたしも双子の出産は初めてなの！ すごくかわいいのよ！ 見に来て！」

そう言つてジェードはウィルダーの手を引いた。だが、ウィルダーは逆にジェードの手をしっかりと握り、その場に引き止めた。

「今日はジェードとホープも誕生日だろ？ おめでとう」

思いがけないウィルダーの言葉に、ジェードは一瞬戸惑いを見せた。

「……ありがとう、ウィル。でも、わたしとホーは今年は忌年だからお祝いも何もしなのよ」

クライス信仰者達は13を忌数としていた。その数にまつわる日に祝い事をする事を避けている。今日13歳になったジェードも、もちろんお祝いは禁忌だった。

「でもね、代わりにあの双子ちゃんのお祝いができるわ!」

ジェードは早く早くと急かす様に手を引いた。だが、ウィルダーはまだその場から動くことに抵抗した。

少しずつ日が落ち始め、空の色が赤から紺色に変化しつつあった。二人が呼吸するたびに、一緒に白い息がこぼれる。

なかなか動こうとしないウィルダーに、ジェードの顔が少し不機嫌になるうとした時。

「ジェード、これ」

ウィルダーが細かい干草がいっぱいまわりついた手袋を外すと、ズボンのポケットから何かを取り出した。

ジェードに差し出されたのは銀の聖十字のペンダントだった。言葉少ないが、これはジェードへの誕生日の贈り物なのだろう。

「これをわたしに? ……ありがとう……」

ウィルダーはかじかむ手で鎖の金具を外した。正面からジェードの首の後ろに手をまわし、金具を留めた。

「こっちはホープに」

ウィルダーは再びポケットに手をつ込むと、先にジェード渡したのと同じものを取り出した。

「ホープのやつ、ジェードと違う物にしたら怒るだろ？」

苦笑するウィルダーに、ジェードは申し訳なさそうな顔になった。

「……ごめんね、ホーはもう持っているの。あの子は教会から支給されてるのよ」

「えっ、そうなのか」

贈り物をすることを秘密にしていた事が裏目に出てしまった。今年誕生日祝いをされない双子の為に、なけなしの金をはたいたウィルダーの気持ちは半分だけ無駄になってしまった。

この村の人たちは皆それほど裕福ではないのを知っているだけに、二人の間に少し気まずい空気が流れた。

「……わたし、ウィルとおそろいで身に付けたいわ」

ジェードの提案にウィルダーは自尊心をくすぐられた。いつも同じものを好み、行動を一緒にしていた双子のジェードとホープだったが、一昨年からジェードの傍に居るのはホープではなくウィルダ

ーだ。

ジェードは白い息を吐きながら微笑むと、渡されたもう一つのペ
ンダントの金具を外した。ウィルダーがジェードにしたように、正
面からウィルダーの首の後ろに両手をまわす。首の後ろで鎖の先端
の金具をひっかけると、ジェードはそのままウィルダーに口付けた。

ほんの数秒、二人の周りの時間が止まった。

ウィルダーの唇は冷え切っていて、すぐにはジェードの唇の感触
を感じることが出来なかった。

キスを交わすのはこれが初めてではないのにウィルダーは相変わ
らず照れくさそうに笑った。そして誰かに見られてないかと慌てて
周りを見回した。そんなウィルダーを見てジェードも可笑しそうに
微笑んだ。

「ねえ、寒いわ。早く行きましょ！」

今度こそジェードに手を引かれ、生まれたばかりの双子の子羊を
見るために、二人は産屋へと走った。

* * * *

星明りがちらつく時間。

ジェードはようやく父母と弟の待つ自宅に帰宅した。

石造りの小さな家の中は、暖炉の火と奥のかまどの残りの火のおかげでとても暖かった。いつもは人数分しか点けない蝋燭も、今日はいつもより二本多く灯されている。部屋の中はいつもよりずっと明るく感じられた。

父は暖炉に新しく薪をくべ、母は食事の用意をしていた。双子の誕生日だと言うのに、今年は本当にお祝いムードはない。既に独立した二人の兄も、毎年末の双子の誕生日には実家に戻ってくるのだが、今年はその兄達の姿もない。

「おかえり、ジェード。遅かったね」

双子の弟ホープが話し掛けてきた。

「いつもの時間まで教会で待ってたんだけど、来ないから先に帰ってきちゃったよ」

ジェードは毎日仕事帰りには教会に行き、家族のために祈りを捧げていた。その後、ホープと一緒に家路につくジェードだったが、今日は羊の出産が長引きそんな時間はなかったのだ。

「ねえ、聞いて！ 今日生まれた子羊が双子だったの！」

ジェードはいまだ覚めない興奮と感動を、双子の弟に伝えようと声はずんだ。

「へえ、ぼくらと一緒にだね」

「そうなの。それも雄と雌だったのよ」

どちらとも無く、暗に今日誕生日の男女の双子と重ね合わせる。ジェードがホープの目を見ると、ホープは何か含んだように笑った。言葉には出さないが、お互い祝福と感謝の気持ちは通じ合っているようだった。

「でも雄と雌だから、乳断ちしたらすぐ別々の檻に入れられることになっちゃうわ」

ジェードは脱いだ上着を壁に掛けると、奥にいる母親のそばに行き支度を手伝った。

お祝いはないが、いつもと同じように他愛ない会話を交わしながら双子はテーブルに着いた。母親が「今日は夕食が随分遅くなっちゃったわね」と、二人に話し掛けながらテーブルに食事を並べてくれた。

「ジェード、明日は教会に寄れる？」

ホープは目の前に置かれたパンに手を伸ばした。

「またこんな時間まで出産が無ければ行くわ」

ジェードにとってはむしろ今日の方が例外だ。

「教会にはいつも行ってるのにどうして？」

「神父様が忌年の御被いをしてくれるって」

「そうなの？ わかったわ」

ジェードは手を合わせ小さく祈った。パンをちぎると母の作ってくれたスープに浸す。パンは作るのにも時間がかかり、小麦粉にするにも無駄が多い。贅沢品で普通の家庭では毎日食べられるものではない。父や母は特別にお祝いなどは言わないが、今日にパンを焼いてくれたことに、ジェードは心の中でこっそり感謝した。

「それにしても誰が忌年なんて決めちゃったんだろうな。そんなことクライスと天使の教えには載ってないのにさ」

向かいに座る弟は、まだ不満なようで今年の誕生日の事をぼやいていた。幼い頃から信仰心厚いジェードにとってはたいしたことではない。むしろそれを破ることの方が、ジェードの心には負担を与えてしまう。

「ホー！ そんなこと教会に勤めているあなたが言う言葉じゃないわよ」

向かいに座っている、まるで鏡に映ったような双子の弟に、ジェードは呆れて言った。

「それに、忌年の誕生日に贈り物を貰うと不吉なことが起こる、とか言つらしいし」

まだばやし続けるホープの言葉に、ジェードはどきりとした。

ホープにばれないようにと、ウィルダーから貰った贈り物のペリダントは服の中に隠してある。ジェードは服の上からそれに触れるように、自分の胸をそっと押さえた。

* * * *

双子が寝静まった頃、深夜に誰かがドアを叩く音が響いた。

父がドアを開け、誰かを部屋に招きいていた。
その音にジェードは目を覚ました。隣のベッドで寝ていた双子の弟のホープは気づかずに眠り続けている。

(…………誰？　こんな時間に…………)

ジェードは階下の声に耳を澄ました。毎日仕事帰りに通っている村の教会の神父の声が聞こえてきた。

「…………大変だ、ジャック、これを見てくれ…………」

「俺は読めない。アンジェ、お前が読んでくれ」

少しの沈黙後、母が泣き崩れた。

「そんな！　どうしてジェードまで！」

神父が父に何か話しているが、母の泣き声にかき消され、はっきりと聞き取ることが出来なかった。泣き声の奥で、神父と父は何か

を話し続けていた。

（わたし？ 何かあったのかしら……）

自分の名が出て、ジェードは階下の声に聞き耳を立てた。しばらくすると、誰かが階段を登ってくる足音が聞こえたので、ジェードは慌てて毛布にもぐりこんだ。

「ジェード……起きてくれ」

父はホープを起こさないようにそつとドアを開け、眠ったふりをしていたジェードの体をゆすった。

「降りておいで」

ジェードは今起きたかのように目をこすり長い黒髪を束ねると、寝間着の上にストールを羽織った。父の背中を追って階下を下りる。テーブルに神父と母が座っていた。

先ほどまで泣き喚いていた母だったが、それを思わせないくらい穏やかな顔つきだった。だが、ジェードには母の顔に涙の跡を見て取れた。それには気づかない様に振舞った。

「神父様、こんばんは」

挨拶をするジェードに対し、三人とも何かを言いたそうなのだが言い出せないようだった。奇妙な沈黙が続いた。

「ジェード……聞いてくれ、お前が行きたがっていた巡礼に行けることになったんだ」

「えっ？ 巡礼に？」

ようやく口を開いた父が言ったのは、ジェードにとって思いがけない言葉だった。

「聖地オス・ローだ。行きたがっていただろう？」

その言い方に、訳あり気な雰囲気はひしひしと伝わってくる。どうして今そんなことを言ってくるのだろう。確かにジェードは常々「聖地巡礼に行きたい」と言っていた。だが、なぜこんな時間に突然、父達がそんなことを言うのか全く想像がつかなかった。

ジェードは喜ぶどころか、何か異様な雰囲気を感じ取った。

「いつから行けるの？」

熱心な天使信仰の者なら、誰もが死ぬまでに聖地に巡礼することを望んでいる。しかし、ジェードの家のような農民には夢物語なのだ。

ジェード自身、まさか本当に実現するとは思ってもいなかった。

少しばかり浮かれ気分になりかけたジェードだったが、ジャックの言葉に緊迫感を覚えた。

「今すぐ出発するんだ。一人でだよ。そして夜が明けるまでに必ずヘーンプルグ領を抜けるんだ」

そついつと旅用の着替えを渡された。

「馬には乗れるね、ジェード」

神父が優しくジェードに話しかけた。

羊飼いの仕事をしているジェードにとって乗馬などたやすいことだった。男顔負けで裸馬も乗りこなす自信があった。

「アレー村で一番強くて速い馬を準備したから、とにかく一刻も早く聖地に向かいなさい」

大人たちはジェードから質問をさせないほどの素早さで、旅の準備を整えた。そして、神父の連れてきた馬の所までジェードを送り出した。

「パパ、ママ？　どういうこと？　どうしてわたし一人なの？」

ジェードの質問には誰も何も答えない。通常は一人で行く旅ではない。しかも、こんな急に……。

外に出ると辺りは真っ暗闇で、さすがにジェードも不安を隠せなくなつた。

風は吹いていないが湿った空気は硬く、ジェードは頬が痛くなつた。星明りの下、四人の白い息が小さな霧となって地面に落ちていった。

「巡礼の道は君が一番良く知っているだろう、ジェード」

「夜が明けるまでにヘーンプルグから出るんだ」

「ジェード、急いでね！」

神父、父、母に急ぎ立てられ、出発の挨拶もままならぬうちに馬は走り出してしまった。

「パパ！ ママ！」

ジェードは振り返って叫んだが、明かりのない真夜中のこと。すぐに三人の姿は闇の中に消えいつてしまった。

風で自分の長い髪が首にまとわりついたが、それを払いのける暇さえもなかった。

異様な旅立ちとで、ジェードの心は混乱していた。

ジェードは地理感のあるところは順調に馬を走らせた。しかし、辺りが暗いため段々道がわからなくなり、速度が落ちてきた。

騎手の心を悟ったのか、馬の歩みはますます遅くなり、やがて足踏みをして止まってしまった。

（本当にこのまま行って良いのかしら？）

大人達が自分をヘーンプルグから追い出したいのだろう。だが、その理由が全く想像できない。こんな気持ちでは巡礼なんて行けない。

「やっぱり戻ろう……」

一人そうつぶやいた時、

『戻ってはいけません』

ジェードに【声】が聞こえた。

「天使様！」

ジェードは思わず【声】の主の名を叫んだ。いつも聞いている声に心底安堵する。

『ジェード、夜明けまでこのまま道なりに馬を走らせなさい。休まないで。急いで』

「どうしてそんなに急ぐのですか？」

『聖地へ来れば、貴女の求めることを全てお話しましょう』

「わかりました」

ジェードは【声】に従順に従った。

『もうすぐ夜が明けます。急いで』

「はいっ」

その【声】を聞くと、途端に不安が遠のいていった。

ジェードは【声】に素直に従い馬の速度を速め、聖地オス・ローを目指した。

* * * *

「ホープ、起きろ！」

そう呼ばれた主は、次兄のユーリにまだ寝ていた体を激しく揺さぶられた。

「早く起きて教会へ行くんだ！ 父さんと母さんはもう行ってる！」

兄がなぜ実家に居るのか不思議に思ったが、ホープは寝起きの頭が回らず身体を起こしながら眠そうに目をこすった。

兄が何を急かしているのか全くわからなかったが、その様子は尋常ではない。急いで着替えると兄ユーリを追いかけた。

階下に行くと、部屋は昨夜の慌しい旅支度の痕跡を残していた。

（……なんだろう、これ？ 手紙？）

テーブルの上に無造作に置かれた筒状の書状が目にとまった。普段見ることのない珍しい羊皮紙だった。ホープはそれを手に取り広

げると、そこには驚くべきことが書かれていた。

それには双子の姉ジェードが魔女であると記されていた。そして、魔女引渡しの要求内容がものものしい筆跡で書かれている。封にはホープにも分かるヴァロニアの王族の紋章が烙印されていた。

「嘘だろ……」

ホープは目の前が真っ暗になった。

（も、もしかして……。ジェードの秘密がばれたのかな）

ジェードには【天使】の声が聞こえる。そして【天使】と会話できることを知っているのはホープだけのはずだ。自分は誰にも話したりはしていない。誰か他の人に【天使】と話している姿を見られでもしたのだろうか。

ホープは家を飛び出し、引渡し場所に指定されている教会まで走った。教会までの近道である牧場を、木で出来た柵を乗り越えて突っ切って走った。

息を切らして教会に辿り着いた時には、ちょうど軍人らしき数人が父を連行していくところだった。

捕縛された父が馬に乗せられた姿がホープの目に入った。教会の入り口付近には、アレー村の住人が集まっている。観衆の真ん中に、神父が倒れている。母の姿と長兄エージも、その傍らに見えた。

観衆を掻き分けて、ホープは母の元に駆け寄った。

「母さん！ 兄さん！ 神父様っ！」

泣き崩れる母を、周りで見ていた女達が支えて連れて行った。怪我を負って倒れていた神父も数人の男達に支えられて、村の診療所の方へ連れて行かれた。軍人達から暴行を受けたようだが、命に別状はなさそうだった。

「父さんは？　どうなっちゃうの？」

「わからない」

ホープの問いかけに、長兄エージは首を横にふった。

村人達は「気を落とすなよ、エージ」と兄に声をかけ、一人また一人と家に戻っていく。

その場には、ホープ、それに兄のエージとユーリだけになった。

「……ねえ、兄さん、父さんとジエードはどうなるの？」

姿を見なかったが、ジエードも軍人に連れて行かれてしまったのだと、ホープは思っていた。

「親父がどうされるかはわからない。だけど、ジエードは連れて行かれてないんだ。昨夜聖地に向かったらしい。無事に聖地に辿りつければ……」

うるたえるホープにエージは小声で言った。

その後、父ジャックは二週間後に解放され帰ってきた。

ヘーンプルグから聖地オス・ローへの巡礼となれば、通常三ヶ月もあれば戻ってこられるはずだった。

しかし、聖地オス・ローを目指したジェードは、三ヶ月、半年と過ぎても戻ってくることはなかった。

ジェードが向かった聖地オス・ローは、現在はファールーク皇国の領土となっていた。

【天使】アルフェラツ

東の大陸フロリスのおよそ80パーセントはヴァロニア王国、残り20パーセントは対岸の島国シーランド王国の領土となっていた。

現在ヴァロニア王国の戦域は、西のオス・ロー方面ではなく、元はヴァロニアの領地であった東部のガイアル領とシーランド王国に向けられていた。ヴァロニアとシーランドは共に伝承者クライスを信仰する国であり、時に血盟を組んで西の大陸モリスと争った。だが、ヴァロニア王国とシーランド王国は王族・貴族間の因縁が深く、大陸内部で百年以上も抗争が続いている。

その影響もあって、現在、聖地に向かう巡礼者はいなかった。

父母と神父によって国を追われるように出たジェードは、何百年も前にフロリス人が使った聖地に向かう街道を通って、二つの大陸の中心、聖地オス・ローを目指した。

ジェードは父の言ったとおり、出発した日の夜明けまでに、理由もわからないままヘーンブルグの領地を抜けた。

その後は、昔ながらの巡礼の道を進んでいった。

巡礼の道はほぼ一本道で一人旅のジェードでも迷うことはなかつ

た。

森の中や裾を通り、時折馬を引いて歩いた。道には馬車が通った。^{わだち}轍が行く先を示してくれ、途中所々に在った宿泊所が体を休めさせてくれた。宿泊所は今では無人ですっかり荒れ果てていたが、夜の闇や寒さと風雨をしのぐには十分だった。

無人の宿泊所には、過去の巡礼者たちの記憶が残されていた。ある所では壁一面に聖書の言葉を飾り文字で壁一面に刻みこまれていたり、ある所では鮮やかな塗料を使って壁や天井に天使の絵が描かれていた。

どこの宿泊所にも祭壇が作られており、その前に切り取られた長い髪が束ねられて収められていた。おそらく金品に余裕のない者達がお布施の代わりに収めていったものなのだろう。

金を持っていなかったジェードもそれにならって、先々で自分の髪を一束切り落としてはその束を収めた。ジェードの長かった曲のある黒い髪が随分短くなってしまっていた。

* * * *

ヴァロニアを出発してから約三週間。

ジェードは朝日が昇り始めるとすぐに無人の宿泊所を出発した。荷物を馬の背に乗せると、自分も馬に跨り道を進んでいった。

木々のトンネルを抜け周りの景色がどんどん赤茶けた色に変わってきた頃になって、ジェードは自分がフロリスを抜けていたことに気がついた。国境には誰も居らず、何もなかった。そこが国境だと気づかないほどに。

赤茶けた大地にはあちこちに人為的に作られた石垣があり、その石垣に鮮やかなピンク色の花を咲かす蔦植物が群生していた。自然だけが作り出せる鮮やかな色合いにジェードは心を奪われた。ピンク色の花だけが、ジェードを歓迎してくれているようだった。

そこを過ぎると、赤茶けた土は徐々に薄茶色の乾燥した砂地に変わっていった。いつからか気温が急激に上がっていて、ジェードは袖をまくり上げ胸元のボタンを一つ外した。

既にファールーク皇国の領土のはずなのに、人の姿を一度も見かけなかった。まるで見放された僻地のようだった。

徐々に高くなる太陽の日差しは、ジェードの左頬を刺すように照り付けてくる。

「聖地はもう少しかしら……」

ジェードが首やこめかみに滲む汗をぬぐいながら一人馬上で呟くと、

『このまま海岸沿いを南へ』

と【声】が後押しした。

ジェードには秘密があった。

ジェードには誰にも聞こえない声が聞こえていた。その声の主は【天使】だった。ジェードは【天使】と会話することが出来、またジェードの問い掛けに声は答えた。

ジェード自身はこのことを誰にも知られていないと思っていたが、ジェードとよく一緒に居た双子の弟ホープだけは、度々ジェードが自分には聞こえない声の主と会話をしているのを目撃していた。

聖地に近づくにつれて、ジェードにはその【声】が明瞭さを増しているように感じられた。

ジェードはオス・ローと呼ばれる土地に足を踏み入れた。そこは荒れ果てた土地だった。土のレンガで出来た家は皆崩れ落ち、人の姿はなかった。おそらく大通りだったと思われる道の石畳もほとんど砂に埋もれてしまっていた。馬から降りると、ジェードは自らの足で砂の上を歩んだ。

ジェードは馬を引きながら崩れ落ちたオス・ローの街を見回した。百五十年前にシーランド王国とファールーク皇国が聖地を巡り争った結果、この街が滅んだのだと学校で習ったのを思い出した。

通りの真横にも人が生活していた民家が立ち並んでいたのか、壺やテーブルなど、まだ元の形が見て取れる物も沢山散らばっていた。

（ここで戦争があつたのね……）

不安になつたジェードに【声】が囁いた。

『丘の上に門が見えますか？』

声の言うように丘へと続く元大通りを見上げたが、そこには門は見えなかった。見上げて見えるのは眩いばかりの青い空だけだった。

だが、天使の【声】を聞くと不思議と不安が遠のいていった。

「そこに行けば、天使様に会えるのですか？」

『ええ』

突然国を追い出されるように出発し、一人不安な旅だったがそれもつすぐ終わる。

ジェードの胸が高鳴った。

たった一人で何日もかけてここまで来たものだと思った。もうすぐジェードの旅の終着点に到達する。そうすれば、今度は来た道を逆に戻ってヘーンブルグに戻り、聖地やその途中に見たものなどを家族や神父に話そうと思った。

途端に、晴れ渡った空がまるで祝福してくれているように感じられた。

ジェードは馬の手綱を瓦礫の柱に引つ掛けると、荷物も置いたままで丘の上の門まで足早に歩き出した。不思議と歩みは小走りになる。ちょうど坂の上に太陽が位置し、眩しさに目を細めた。

この時、ジェードの思い描いていた、光溢れる聖地のイメージと現実が重なった。

聖地は光で溢れ、金色の髪に樹々の翠や空の蒼の瞳をした天使が降臨してくる。そんな光景をジェードはいつも心の中で思い描いていたのだ。

刺すように照りつける光を遮る物は何も無く、ジェードは両頬に少し痛みを覚えた。

丘に登りきると、崩れた城壁にかるうじて門の柱だけが姿をとどめていた。そこにあっただろう石の扉も、その向こう側の建物も崩れ去っていた。

ジェードは残骸と化した門を超え、奥へと足を踏み出した。

強い日差しが降り注ぐ中、砂の上を歩み進むジェードの微かな足音意外には何も聞こえてこなかった。

天使の言っていた門を越えて奥に進むと、建物が形を残しているところもあった。それらはヴァロニアの建築様式とは全く違うため、その残骸を見ても一体元が何だったのか、ジェードには想像も出来なかった。

さらに奥に進んでいくと、天井と壁が崩れ、床と柱だけがむき出しになった土台のようなものが見えてきた。そこに誰かが立っ

る。強い日差しの中に人影が浮かび上がり、距離が近づくに連れて、その人物の輪郭がはつきり浮かんできた。

（ 天使様！？ ）

『 よくぞここまで来てくれましたね、ジェード 』

その声は間違いなく、今まで聞いていた【天使】の声だった。胸の高まりを隠しきれず、ジェードは小走りになって駆け寄った。

ようやく、その人物の姿がはつきり見えた。

崩れた代理石の床の上に立ちジェードを待っていたのは、黒い肌に長い白い髪をした女性だった。その姿はジェードが描いていた【天使】のイメージとは全く違うものだった。

その【声】の主の姿を見た時、ジェードは驚いて声を詰まらせた。

ジェードは生まれて初めて黒い肌を見た。フロリスで真白い肌の人間しか見たことの無いジェードは好奇と嫌悪の眼差しでその姿を思わず凝視してしまった。黒い肌は、まるで聖書に版られた絵に出てくる悪魔のようで、ジェードにとって同じ人ではないように感じられた。

ジェードの心の内を知ってか、黒い肌の女性は母親のような笑みを浮かべた。その表情は求めている慈愛に満ちているように思えジェードは混乱した。

「天使様……？ 本当に……？」

驚きと不安の混じった動揺を隠せないまま、ジェードは崩れるように跪いて両手を胸の前で組んだ。

『どう呼ぼうとも構いません。私の名はアルフェラツです』

目の前に居るのに、その【声】は今までと同じように、ジェードの頭の中に直接語りかけてきた。

「……アルフェラツ様、なぜわたしをここへお呼びになったのですか？」

『あなたがここに來たのは、あなたの持つ天命と、そしてあなたが真実を求めたから』

「……で、では教えてください！ どうしてあの時姉を救ってくれなかったのですか？」

ジェードには七歳年上のルースという姉が居た。ルースは熱心な天使信^{クライス}仰者で、いつもジェードを連れて一緒に村の教会に行って祈りを捧げていた。ジェードの信仰深さも姉の影響があつてのものだった。

ルースは勉学を終えた13歳の時、領主の館の使用人として勤めだした。そして、17歳の時に恐ろしい事件に巻き込まれてその命を絶たれた。

誰も恨んではだめと母に言い聞かされていたが、その時10歳だったジェードは天使を恨んだ。あんなに熱心に祈りを捧げていた姉

をどうして救ってくれなかったのかと。

幼い頃、天使を恨んだ気持ちがわずかに心に甦ってくる。あんなに祈りを捧げて助けを求めたのに天使は姉を助けてはくれなかった。きっとルースは自分以上に救いを求めて祈り続けていたに違いないのに。

『私が人に救済を与えることはありません。救済や罪科は人の心から生まれるもの。私がこの世のものに与えられるのは「生」だけ。あなたの姉に「死」を与えたのは私ではありません』

「じゃあ、誰が……」

【天使】の言うとおりなのだとしたら、本当に恨むべき相手は命を奪った【悪魔】の方なのだろうか。でも、姉を殺したのは【悪魔】ではなく【人間】だった。姉ルースを【悪魔】と交わった魔女^{ウィッチ}として処刑したのだ。

熱さの所為もあって、ジエードは目の前が微かに揺れるのを感じた。

「……姉は、本当に魔女だったのですか？ わたしには信じられない。どうして姉さんが魔女として殺されなくてはならなかったの」

ジエードは組んでいた両掌を口に寄せると歯に押し当てた。

『その答えは、あなたが過去の天命に従えば、未来が教えてくれるはず』

「天命？ それは何ですか？ わたしは答えが知りたい！ わたしは何をすれば良いのですか？」

「もうすぐここに少年が来ます。彼を「生」から解放を」

「……「生」から解放？」

「殺すのです」

アルフェラツの言葉にジェードは言葉を失った。天使が人殺しを望むなんて事があるのだろうか。

【天使】の外見はジェードが描いていたものとは全く違うものだった。本当は天使のふりをした【悪魔】に騙されているのではないだろうかとさえ考えてしまう。だがアルフェラツの声は、今までジェードが信じてきた【天使】の声と同じだった。

結局信仰心厚いジェードが【天使】の言うことに逆らえるはずがなかった。

それでも聞かずにはおれずアルフェラツに問いかけた。

「……人を殺めることは罪ではないのですか？」

「あなたの心が罪を生み出したとしてもなさねばならない事。それがあなたの持つて生まれた天命なのです」

「でも……、殺すなんて……」

うつたえるジェードにアルフェラツは、

『その剣を』

とジェードの短剣を受け取り、不思議な力をその短剣に与えた。父が用意してくれた短剣で、ここに来るまでに何度も髪を切り落とすのに使ってきたものだ。

『これで彼の胸を一突きすればよい』

そう言つて、短剣をジェードに差し出した。

『私が与えていない「生命」は終わらせなければいけません』

「……………」

ジェードは短剣を受け取り、怯えながら頷いた。

しばらく押し黙つたままジェードは一人考えていた。

（人を殺すなんて、わたしに出来るのかしら……）

時々アルフェラツを見上げると、その表情は母親や姉を思い起こさせるような慈しみの表情を浮かべジェードに微笑みかけている。

（ルース姉さん……）

ジェードは不安に駆られながらもやはり答えが知りたい気持ちが勝つた。その為に天使から教えられた自分の天命に従おう……と、ジェードは一人心に誓った。

* * * *

じつと跪いたままのジェードの背後で、自分が歩いてきた時のように、瓦礫の上を歩く音が聞こえてきた。

その音にジェードは短剣を胸の前できつく握り締めると、立ち上がらずそのまま振り返った。

そこに居たのは、金色の髪に翠の目をした真つ白な肌の少年だった。白い半袖の服は薄汚れてはいたが、その外見はまさしくジェードの頭の中でイメージしていた【天使】の姿そのものだった。少年の髪に光が降り注ぎ、濃い金色の髪は眩しいほどに輝きを増していた。

（……天使？）

金の髪の少年はふらふらと覚束ない足取りでジェードの方に近づいてきていた。

（信じられない！　なんて綺麗なの……）

短剣をきつく握り締めた手が思わず緩みそうになった。

黒い髪しかないヘンブルグで育ったジェードは、本物の金色の髪を見るのも初めてだった。少年の右頬には横一文字の傷痕があった。だが、それすら気にならないほど絵のように秀麗な容姿に心を奪われ、ジェードは少年の姿に釘付けになった。

もつすぐここに少年が来ます。彼を「生」から解放を

ふと、ジェードは隣に立つ【天使】から言われたことを思い出した。

（まさかこの子のこと？　こんな天使みたいに綺麗な子を？）

アルフェラツの時と同じく、少年のあまりに予想外の姿に、ジェードは驚きを隠せなかった。天使が殺せと言うのだから、恐ろしい人物が来るのだと思っていた。

「【エブラの民】……」

少年が呟くように言葉を漏らした。少年の視線はジェードを通り越し、その奥に凜と立つアルフェラツに向けられていた。

少年はジェードのことなどまるで見えていないかのように、少しずつアルフェラツに近づいてきた。

「貴方達はまだここで暮らしているのですか！？　まだ滅んではないのですか！？」

アルフェラツに向かって叫ぶ少年の目にはジェードの姿は全く映っていないようだった。

ジェードがアルフェラツを見上げると、アルフェラツはジェードを後押しするように目を伏せた。まさに少年を殺すチャンスだった。

（今しかない！）

こめかみに汗が滲むのを感じながら、ジエードは短剣の柄をきつく握り締め、短剣を革の鞘から抜きそつと立ち上がった。

「居たぞ！ こつちだ！！ 急げ！」

遠くから近づいてくる別の声が響いた。アルフェラツに集中していた少年の意識は、その声に邪魔された。

瓦礫の上を走る複数の足音が聞こえてきたかと思うと、異国の兵士が数人向かってくるが見えた。その瞬間、少年の顔に怒りが浮かんだ。

少年は自分が丸腰であったことに気が付くと初めてジエードの方に向いた。ジエードの手に短剣が握られているのを見てジエードにぶつかる勢いで駆け寄ってきた。

「貸せっ！」

怒鳴りながら強引にジエードから剣を奪い取った。なかなか短剣から手を離さなかったジエードは振り落とされるように地面に倒れこんだ。ジエードに構わず少年は向かってくる兵士の方へ走って行くとした。

「駄目よっ！ 返してっ！」

ジェードが立ち上がるやいなや少年に体当たりすると、二人は砂の上にもつれ込んでしばし揉み合いになった。

「何するんだ！ 離せ！！」

奪われた剣を取り返そうとしたジェードは、いとも簡単に少年に組み伏されてしまった。馬乗りになった少年に、右手で左手を、左手で右手を掴まれ取り押さえられたが、短剣を取り返そうとジェードは暴れて必死で抵抗した。

その時、剣先が少年の右頬をかすめた。

「……っ！！……」

少年の真つ白な右頬に一瞬にして赤い縦線が浮き上がった。赤い線はじわじわと膨れ上がると顎の方につたい、ジェードの胸の上にポタポタと落ちてきた。ジェードは思わず抵抗する力を緩めてしまった。

少年は怯んだジェードから素早く離れると、切れた顔など気にも留めず、顔を真つ赤に染めたまま聞こえた声のほうに向き直った。

三人の兵士が足場の悪い瓦礫の中を二人に近づいてくるのが見えた。

「ハリーファ皇子！」

（……お、皇子！？）

地面にへたり込んだままジェードの心は混乱した。

そして全く汚れない軍服を着た兵士が抜刀すらせずハリーファと呼ばれた少年に近づいてきた。

「ハリーファ皇子！ ご無事ですか？」

その若い兵士はハリーファの前に跪いた。ハリーファの顔の傷を見ると、その後ろにいるジェードを睨み付けてきた。遠目に、先程ハリーファとジェードが揉み合っていたのを見たようだった。

「そのお怪我は、あの者の所ぎよ……」

兵士は言い終わらないうちに言葉が途切れた。何が起こったかすぐには分からなかったが、ジェードからは、その兵士の末魔の形相が見えた。

「……！！……」

兵士のみぞおちにジェードの短剣が斜めに刺さっていた。一気に呼吸を断たれ、声も出ない。後から来た二人の兵士は、背後からその異変には気付いていなかった。

若い兵士はそのまま前方に倒れこんだ。そこで初めて後から来た二人の兵士は仲間の異変に気が付いた。

「おいっ！ どうした！？」

ハリーファは若い兵士に突き刺した短剣を捨て置き、すかさずその兵士の腰から剣を抜き取って二人の兵士達に向き合った。

剣身が鞘をすべる音、砂地をこすった音を聞いて、ジェードは悪寒に襲われた。

「ハリーファ皇子!？」

「気でも触れましたか!」

兵士の一人がすいつと音を立てて抜刀し、その切先をハリーファに向けた。

「おい! やめろ! 必ず生かして連れ帰れとの命令だぞ!」

もう一人が制したが抜刀した兵士は止まらず、剣を振り上げるとハリーファに切りかかった。

びゅうと風の吹くような音がジエードの耳にも届いた。

ハリーファは敏捷な身のこなしでその剣筋をかわすと、両手で兵士のわき腹あたりを刺した。刺された兵士は苦痛に喘ぎ、絶叫にも似た悲鳴をあげた。すかさず剣を兵士のわき腹から引き抜くと、間髪入れず喉を掻っ切った。叫び声は止まり、代わりに兵士の首から血が噴き出し辺りは真っ赤に染まっていった。

その血しぶきは少し離れていたジエードの所にまで届いた。兵士が地面に倒れてもなお血は噴き出し続け、砂と石畳の隙間に吸われていった。

「ハリーファ様、何を!? ……くそっ!」

仲間が二人とも殺され、最後の兵士もとうとう抜刀した。ハリーファの目から感じられるのは狂気ではなく正気の殺意だった。

「ここまで来て捕まる訳にはいかない……俺は……」

ハリーファは自分に言い聞かせるように独り語ちた。その目は少年のものとは思えない鋭い光を湛えていた。

目の前で起こる戦慄の出来事にジェードは倒れこんだまま目を伏せた。暫くしてまた人が倒れる音が聞こえそつと目を開けた。

立っていたのは呼吸を乱しているハリーファだった。辺りは一面赤く染まり、返り血はハリーファの髪を茶色く染め滴り落ちていた。嗅いだことの無い血の匂いが広がり、遠くで馬が嘶いていた。

その光景は、ジェードが暮らしてきた田舎の牧歌的な生活とはかけ離れすぎていた。全身真っ赤に染まり地面に倒れている兵士達の顔が皆ジェードの方を見ているようだった。

（い、いや……）

まだ地面に倒れたままだったジェードは、腰が抜け、足が震え立ち上がることもできなかった。訳がわからず砂の上をもがいているだけだった。

（天使様、やっぱりわたしには出来ない……）

ハリーファは全身返り血に塗れ、剣を握る手からも血が滴っていた。そんなハリーファが振り返って今度は自分を睨んでいる。

（こんな風に人を殺めるなんて……）

ハリーファから殺意を感じ、ジエードは恐怖に襲われた。

気が遠くなり、ジエードは熱くなった地面に抱き寄せられるかのよう
に倒れこんだ。

白日夢

聖地「オス・ロー」のある中央の地を中心に、二つの大陸が蝶々の羽のように広がっている。東が光明大陸フロリス、西が暗黒大陸モリスと呼ばれていた。

西側の大陸モリスの入り口には、建国以来、宰相ワシルが統治しているファールーク皇国があった。この国では複数の伝承者の信仰が認められていたが、皇家がそうであったように、国民の大半は大陸と同じ名のモリスを信仰していた。

1425年1月6日、皇都サンドラ。

西の大陸モリスの気温は東の大陸の夏よりも高い。

新年を迎えた日もいつもと変わりなく黄金の太陽がファールークの王宮の真上を越えていった。

日中の気温は年中40度を越す。特別な季節の変化を持たないファールーク皇国の宮廷内でも、新しい年を迎えると、最初の七日間は毎夜祝宴が執り行われる。

年初から六日目。

ファールーク皇国の第二皇子ハリーファは原因不明の高熱でふせ
っていた。

時はまだ宵の口。階下から新年を祝う祝宴の喧騒や詠歌が、本宮
三階の片隅の部屋にまで聞こえてきた。窓からは月明かりが差し込
み、オイルランプよりも明るく狭い室内を照らす。

皓々とした月の光はベッドの上にも薄い掛け布のように覆いかぶ
さり、横たわるハリーファの姿を淡く照らした。月影に金色の髪は
白く清らかに光り輝くが、その下の表情は苦渋を呈し、身体は小さ
く震えていた。

ベッドに臥すハリーファのそばには宰相の女奴隷ジャーリアであり、ハリー
ファの乳母役のリューシャがその介抱をしていた。もう五日もハリ
ーファの熱がずっと下がっていない。

「……ファ……ティマ……」

ベットの上で高熱に苦しむハリーファがうなされながらつぶやい
た。

（ファティマ様……？ ハリーファ様の亡くなられたお母様のお名
前ね……）

ハリーファは時々胸元を押さえ、苦悶の表情を浮かべた。

「ハリーファ様……、お苦しいのですか？」

リユーシャは声をかけながら、額や首元ににじむ汗をそっとぬぐってやった。

（夢でも見ているのかしら。ファティマ様はハリーファ様が生まれてすぐに亡くなられたというのに……。やはり本当の母親というのは特別なですね……）

複雑な思いにリユーシャは小さくため息をもらした。

日が落ちて涼しくなれば少しは楽になるだろうと思っていたが、夜になってもハリーファの症状は良くなりず、熱冷ましの薬も効かなかった。

（医者は感染症だと言っていたけれど。こんな苦しみ方……、普通のご病気ではないわ）

宮廷内には、皇子の乳母役であるリユーシャの失脚を謀ろうとする者も居た。宮廷内の人間関係が原因で、以前にもハリーファは毒を盛られて死線を彷徨ったことがあった。

きつと今回もそうなのであろうとリユーシャは思っていた。今後はハリーファの口にする水や食料に対して、もっと気を配らねばと痛切に感じていた。

深夜にハリーファは目を覚ました。

傍らの椅子に座ったまま目を伏せている美しい乳母の姿が視界に

入った。滝のように真っ直ぐな金色の長い髪が、疲れを表すように珍しく少し乱れていた。

「……乳母上？」

ハリーファが弱々しくつぶやくと、リユーシャは目を開けた。金色の睫毛が何回か上下し、その奥の美しい蒼い瞳がハリーファを見つめた。

「お気付きになられたのですか？」

そう言っただけで乳母はハリーファの額や喉もとの汗を拭いた。その後、金色の前髪に下にそつと掌を滑り込ませ、少し眉をしかめた。

「大丈夫ですか？　ずっとうなされていましたわ」

「……嫌な夢を見ていました……」

「嫌な夢なのですか？　ファティマ様のお名前を呼ばれていましたけど……」

「……母上の……名前をですか？」

「ええ」

リユーシャは頷きながら、乱れていた掛け布を優しく掛け直した。椅子を寄せて、ハリーファを見つめていた。

銀色の月明かりの差し込む中、ハリーファはぼんやりと宙を眺めたまま眠ろうとしなかった。眠ればきつとまたあの『夢』の続きに

苦しめられるのだ。

目を閉じようとしなないハリーファをリユーシャは心配そうに覗き込んだ。

「……眠れないのですか？ お水をお持ちしましょうか？」

リユーシャの気遣いにハリーファはふしたまま頭を横にふった。熱の所為で白い顔が赤みがかったいた。

「オス・ローの医者や薬師が居れば、こんなご病気もきつとすぐに治せるのでしょうけどね……」

「オス・ロー……」

ハリーファはリユーシャの言葉を復唱するようにつぶやいた。

「……乳母上。昔みたいに聖地の話を聞かせてくれませんか？」

幼い子供の時のようにねだるハリーファにリユーシャは優しく微笑んだ。

「よろしいですわ」

リユーシャは椅子に座りなおすと、ハリーファが幼い頃から好きだった聖地オス・ローに住む【エブラの民】の話を語りだした。

「昔むかし、聖地オス・ローには【エブラの民】が住んでいました」

まるでおとぎ話を詠み聞かせるように、リユーシャの口から聖なる地の天使の末裔の話が紡がれる。

ハリーファはまだ熱でぼんやりする頭で、乳母の話す崩壊する前の聖地オス・ローの話にじっと耳を傾けた。

リユーシャの話を聞きながらいつの間にか目をつむり、ハリーファの意識は再び夢の中へと落ちていった。

聖地オス・ロー ユースフ

☐ 昔むかし、聖地オス・ローには【エブラの民】が住んでいました ☐

石と砂の国、聖地オス・ローはトリアナ海沿岸にある都市であった。海岸に面したその南端に通称「ドーム」と呼ばれる城砦ある。丘の上にある城砦^{ドーム}を中心に内陸側へ扇状に民家や市場や病院などが広がって城下を形成しオス・ローと呼ばれていた。

城砦^{ドーム}内部には神が降臨するといわれる大きな岩があるという。その岩に降臨する神を隠すため、外界とは隔絶するように高い城壁で囲まれており、外から中の様子を窺い知ることはできない。

そして、そのドームの中で天使の末裔、神に最も近いと言われる人種、【エブラの民】は暮らしていた。

ユースフが天使の末裔と呼ばれている【エブラの民】を初めて見たのは、7歳の時だった。

中心の地の南端にある聖地オス・ローには、東のフロリスや西の

モリスと呼ばれる大陸から沢山の巡礼者が訪れる。

その聖地を管理しているのは、オス・ロー北部にある小国シユケムであった。

ユースフは、シユケムの將軍であつた伯父に連れられ初めて聖地のドームを訪れたとき、偶然ドームの門の外に出てきた「エブラの民」を見ることが出来た。

「エブラの民」はほとんど門の外に出てくることはなく、その姿を見た者は死後天国へ行くことが出来るとの迷信が囁かれている。彼らのその異様なながらも美しい不思議なオーラに、幼かつたユースフは一瞬で魅了されてしまった。

神に最も近い存在と云われる彼らと、彼らの住む聖地オス・ローを維持するため、ユースフはシユケム王国の要人であつた父の後を継がず、伯父と同じ軍人の道を選んだのだつた。

* * * *

ドームの入り口、通称「天国の扉」と呼ばれる石造りの門の前には、毎日のように巡礼者が訪れる。門の前の広場に集まるのは、白人、黒人、褐色の肌、髪の色、瞳の色も違う多種多様の巡礼者達だつた。あるものは両手を合わせ、あるものは跪き、あるものは地に口付けする。各宗派それぞれの形で、門の向こうに降臨するという神に祈りを捧げていた。

現在オス・ローは東西の大陸の均衡を保つため、北部にある小国シユケムの管轄にあった。

この時、巡礼者のほとんどは東からやってくるフロリス人達で、巡礼者以外のフロリス人の侵入を防ぐため、シユケムから軍人が派遣されフロリス国境の監視に当たっていた。

ユースフもその軍人の一人だった。

伯父の権力や持ち前の才能で、ユースフは17歳の時にはすでに軍務長官の座に就いていた。

ユースフも天使信仰者^{エブラ}なので、ドームに来たときは礼拝を欠かさなかった。

そしてユースフはよく一人で城壁沿いをトリアナ海を見下ろせる岸壁まで行つて、その高波を眺めるのが好きだった。岸壁から海を臨むと、風景が薄茶色から一転してブルーに変わる。

壁の向こう側の【エブラの民】が見ている光景と同じかと思うと、それだけでも心が満たされた。人は全くやってこない場所であり、ユースフにとっては自分の内面を曝け出せる癒しの場所だった。

中央の地は日中はきつく日が差し、気温も40 近くまで上がるが、夕方になると急激に気温が下がり深夜には吐く息が白くなる。一日の中に四季が存在した。

ユースフが25歳の頃。

夕暮れ近く、ユースフはトリアナ海の見下ろせる岸壁へ向かった。ドームの正面から左手に回る。右手に高さ20メートルほどの石垣の城壁がそそり立つ、その下を一人歩いて行った。

手前の数十メートルまでは石畳で舗装されていた地面も、奥に行くとやがて砂地がむき出しになってくる。すっかり傾いた太陽の光は城壁にぶつかって、ユースフの歩む方角は既に薄暗い影が帳とぼりとなつて下りていた。

昼間は日光を避ける為の外套が、今の時間は冷え始めた空気を遮る役目に変わりつつあった。外套の中で、長い剣が歩みに合わせて揺れると、それを留めるベルトの金具が力チャ力チャと音を立てる。砂の地面の上をサツサツと鳴らし歩く靴音と重なって規則的に音を奏でていた。

しばらく歩き続けていると、その砂地の上に何かが倒れていた。

(……人か?)

ユースフは最初はそれが人であるのか目を疑った。いまだかつて、この場所で人に出会ったことはなかった。

薄暗がりの中、生きているのか死んでいるのか、うつ伏せに倒れた身体は微動だにしない。

それは少女だった。

黒い肌に白い髪、それに砂に塗れて汚れてはいるが白い独特の衣服を身に着けている。

「おい！ 大丈夫か？」

傍らに跪き、軽く肩を叩きながら声をかけても少女の反応はなかった。

ユースフがそつと身体を抱き上げると、息はしているようだが意識がなかった。少女の顔や腕や足のあちこちに擦り傷があつて滲んだ血に砂が張り付いていた。落ちてから誰にも見つけられず、随分時間が過ぎたようだった。

ユースフが城壁を見上げると、壁の上部に滑落痕が見えた。

（まさか！ あそこから落ちたのか？！）

高さは二十メートルくらいだろうか？ あんな高さから落ちて生きていくことのほうが奇跡的だ。過つて滑り落ちたのだとしたら、この城壁の上には人が通れる通路でもあるのだろう。

「誰か居ないのか！ 人が落ちたぞ！」

ユースフが壁の向こうに向かって叫んでみるが人の気配は全く無かった。自分の声が壁に当たって微かに木霊しただけだった。

仕方が無いので少女を抱き上げると、ユースフはもと来た道を引き返した。

ユースフが少女を連れてドームの門前まで戻った時には、門の前の広場もすっかり暗くなっていた。日没と供に巡礼者も姿を消し、門はいつものとおり固く閉ざされたままだった。

普段ならドーム前に数人残っている筈の自分の部下達も、今日に限って居なくなっている。茜色の西の空も、どんどん群青色から勝色へと変わっていこうとしていた。

ユースフは迷いながらも、少女を自分の外套で包むと、抱きかかえて城下の程近い自分の住居へ連れて行った。

住居の入り口に屯していたユースフの奴隷達は、少し遠くに主人の姿を見つけると慌しく働きだした。

黒人奴隷の一人が、入り口近くで待機していた。ユースフが何かを抱きかかえて帰って来たのに気がつく、扉を開け放ったままにして厨房のほうへ引っ込んでいった。

ユースフは少女を抱え開け放たれた扉をくぐりぬけると、そのまま中二階にある部屋へと階段を上がって行った。

下で奴隷達が話しているのが聞こえてくる。彼らが少女の姿を見ないようには引き払ってくれたことは、ユースフには都合が良かった。

ユースフは少女を狭い自室へ連れて行くと、外套を外しながらそっとベッドの上に降ろした。

「うつ……」

少女が痛みを感じたのか、少しうめき眉を顰めた。

その声に、日頃大抵のことでは感じなくなっていた緊張が走る。
ユースフは固唾を呑んで少女を見守った。

この白い独特の服、それに黒い肌に白い髪……。間違いなく、この少女は【エブラの民】だ。

オス・ローの城下には優秀な医者も沢山いるが、【エブラの民】をドームの外に連れ出した件でユースフも、またそれを診た医者も大罪に問われる事は間違いない。

だからといって、気温が下がる夜に意識のない少女をドームの門前にほっておくこともユースフには出来なかった。

思わず少女を連れ帰ってしまったが、結局手当てらしいことは何も出来ぬまま一晩が過ぎてしまった。

翌朝になってようやく少女は目を覚ました。見知らぬ狭い部屋を見回す。干し煉瓦の壁には四角くくりぬかれた窓に木で出来た戸がつけられ、その隙間から漏れる光が室内をぼんやりと明るくしていた。部屋の中には他には物書き用の台しかない。入り口に扉はなく、布が掛けられ区切られているだけだった。

ふと枕元に置いてある水の入ったグラスに気が付き、少女は手に取るとむさぼるようにそれを一気に飲み干した。

少女がベッドから下りようとする身体がぐらりとふらついた。咄嗟に掴んだ毛布と一緒にベッドの足元の床に、うずくまるように倒れ込んでしまった。

扉代わりの布がぱさつと捲られユースフが戻ってきたのを見て、少女はあつと驚いて毛布で口元を覆った。

「大丈夫ですか？」

毛布を掴んでしゃがみこむ少女に、ユースフは手を貸すとベッドの上に座るのを手伝った。グラスの中の水が無くなっているのに気づき、ちょうど持ってきたピッチャーの水を注ぐとグラスとピッチャーを並べて置いた。

ユースフが木の窓を開け放つと光で室内が明るく照らし出された。少女の黒い肌と白い髪がはっきりと見て取れる。瞳の色は董色をしていた。

少女の瞳にも、漆黒の髪と瞳、そして小麦色の肌をした青年ユースフの姿が映った。

ユースフは少女よりも目線が下になるように、床に片膝を付いて【エブラの民】の少女を見上げた。

「貴女はドームの城壁の下に倒れていたんです」

少女に恭しく話しかけた。本当は話しかけることさえ許されないのかもしれない。【エブラの民】は外界では言葉を発しないのだ。

少女は毛布で口元を隠したまま動かず何も話さず、ただじつとユースフの様子を眺めていた。その表情からも何を考えているのか全くわからなかった。

目を開いた少女を間近で見れば見るほどその美しさに気付かされる。少女の董色の瞳を見て、ユースフの脳裏には幼い時初めて見た【エブラの民】の姿が鮮明に蘇った。

ユースフは改めて、少女の怪我の具合を確かめた。顔や手足に複数の擦過傷が出来ていた。どうやら足は両足とも捻挫しているようだ。だが、あの高さから落下して、この程度で済んだのは奇跡しか言いようが無かった。

沸かしたお湯を汲んではきたが、ユースフには【エブラの民】である彼女の素肌に触れて良いのかわからず、どうにも治療らしいことはしてやれなかった。絞った布を少女に渡すことしか出来ないでいた。

少女の命に別状は無いと分かれば、さっさとドームに帰してしまつたほうが良さそうだった。【エブラの民】をドームから連れ出すなど罰当たりな事は早く止めなければ。

「ドームへ行けば門は開けて貰えるのですか？」

ユースフの質問に少女は黙って首を横に振った。

「では門はいつ開くのでしょうか？」

また横に振る。言葉は通じているようで、『わからない』とでも言いたげに少女は唇をきつく結んだ。

「わからないのですか？ あの儀式がいつ行われるのかも？」

その問いかけには少女は首を縦に振った。

【エブラの民】が門を開けて外界へ出ることは極めて稀なのだ。不謹慎だと思いつつも、物凄くやっかいな拾い物をしてしまったとユースフは後悔した。

「参ったな……」

ユースフは少女には聞こえないように独り言を呟いた。ユースフの困った顔を見て、少女も落ち込んだのかうつむいてしまった。

だが、天使信仰のユースフが【エブラの民】である少女を見捨てられるはずがなかった。門が開くまでの間、少女はユースフと暮らすことになってしまったのだった。

【エブラの民】サライ

少女の名前はサライといった。

年の頃は十代の前半くらいに見える。黒い肌に真白な髪、董色の瞳した、天使の末裔と言われている【エブラの民】だ。

【エブラの民】は外界では言葉を発しはずだったが、ユースフと一週間も一緒に過ごすと、信用したのか、諦めたのか、普通に言葉を話すようになってしまった。ユースフとしては拍子抜けだったが、会話できない不便さを思えば、話し出したサライの覚悟には感謝した。

職務の合間を見てユースフは連日ドームに通ったが、門が開く様子は全く無かった。サライが居なくなつた事で、中で騒ぎが起きているような様子も見受けられなかった。

一体【エブラの民】とはどういう生活をしているのか、全く想像が出来ない。

サライは人目に付かないように、オス・ローの女達と同じ服を着させた。たとえ家の中でも髪は一本も出ないように染布で頭を巻き、家からは出ないように言い聞かせていた筈なのだが、サライは奴隷達と一緒に頑張ってよく働いていた。

「ユースフ！ おかえりなさい！」

夕暮れ時にユースフが帰宅すると、毎日満面の笑みでサライは迎えてくれた。日が暮れ始め薄暗いはずの家の中が不思議と明るく感じられる。思わずつられて笑顔になってしまい「ただいま」などと答えてしまった。その様子を奴隷達が覗き見て、可笑しそうに笑っているのが聞こえてきた。

サライの今までの生活環境ではどうやら「おかえり」という言葉は無かったようだ。ドームの中の生活では不必要なものが、外界には沢山溢れている。外界の言葉、食事、習慣など【エブラの民】の知らない概念を、サライは楽しそうにユースフに訊ねてきた。

そんな様子を見るたび、ユースフは焦りを感じずにはいられなかった。外界の空気によって神聖な【エブラの民】が汚されていくような感覚を覚えた。

早くサライをドームに返さないと……。あれからもう二ヶ月も経っているのだ。

そんなユースフの気など知らないサライは、外套を壁に掛け馬具を片付けるユースフのわきにやってきて、その日得た外界の知識を嬉しそうにしゃべりだした。

「ユースフ、聞いて！ 今日アブド達と馬を見たのよ！ ^{ハイス}本当にびっくりしたの！ あんな大きな動物が居るなんて知らなかったわ！」

目を輝かせて話すサライだったが、

「そうか……」

と、ユースフの返事はそっけなかった。

サライが普通の女だったら、こんなに喜ぶ顔が見られるのなら次の休みに馬に乗せてやろうと思ったことだろう。だが、サライは【エブラの民】なのだ。

ドームに戻るまで、御高く尊大に構え【天使】らしく大人しくしてくれていれば良いのに、ユースフの思い通りにはならなかった。サライが何かをしたり、話をするたびに、外界の少女達となんら変わらない事を嫌と言うほどユースフは実感させられた。

サライが言葉を話し初めてすぐに、敬語使うことすらばかしくなってしまったほどだ。サライがユースフの話し方は変だと言うので、聞けば【エブラの民】には敬語という概念が無いようだった。

【エブラの民】が何か特殊な能力を持っているかといえばそうでもない。サライから神秘的なオーラも全くと言って良いほど感じない。むしろ世間知らずなサライは、外界の同年代の少女達よりも幼さを感じさせた。

ユースフの記憶に残る【エブラの民】とサライは、まるで違う者のようにさえ感じる事があった。サライが来てからというものの、ユースフは自分の信仰心は本当に確かなものなのかと、心の奥で形にならない不安がもやもやとし始めていた。

「ユースフ？ 疲れてるの？」

背の低いサライは素っ気無い態度のユースフを見上げながら、少

し寂しそうな顔をした。

疲れているかと言われれば疲れていた。この二ヶ月、いくら信用できる自分の奴隷達とは言え、サライを家に残し心配が絶えなかった。夜は夜で、オス・ローで付き合っている女の元にも全く通っていない。そのうち女の方がユースフを尋ねてくるのではないかと、それも気が気でなかった。

ユースフはようやく頭に巻いていたターバンを外し、こぼれてきた黒い髪を手櫛で整えると衣服の首もとの紐を緩めた。

そんな時。

「ユースフ、いるかい？」

入り口の扉を叩き、初老の男がオイルランプを手にして入ってきた。

ユースフは素早くサライに厨房の方へ行くように指で指示した。

「ちょっと通りかかったんでな、水をもらえないか？」

「どうぞ」

と、入り口のすぐ脇に置いていた水瓶から、ユースフはグラスで水をすくって男に渡した。乾いた土地故の慣習で、水を求める者には何時でも誰でも水を与えるのだ。

「なんだい、新しい女奴隷ジャーリアかい？」

サライの後ろ姿が目に入った男は、ランプをくいと上下させた。

向かいの壁でサライの影が揺れる。サライはそのまま厨房へ駆け込んだ。

しかし、口が裂けても【エブラの民】の事を【奴隷】だなどとは言えない……。

「ハザン先生、お久しぶりです。アリシャはお元気ですか？」

ユースフがオス・ローで付き合っている女の父で、医者ハザンだった。

「最近君が来てくれないと嘆いていたよ」

ハザン医師がそんな事をわざわざ言いに来る男ではないのは知っていた。おそらく本当に通りかかっただけなのだろう。

「それは申し訳ありません。少し思うところがあって巡礼を続けていますので」

ユースフの言葉にハザンの眉が興味深げに上がった。

「ユースフよ、何か罪を犯したのか？」

「まあ、そんなところです」

医者が罪とかけてきたところを見ると、おそらくユースフは他の女の所に通っていると思ったのだろう。都合が良いのでユースフは敢えて否定しなかった。

「お前さん程の男なら、昼も夜も忙しいんだろっね。エブラの教えも人によっては過酷なものだな」

エブラ信仰は伝承者エブラが多妻だったことから、一夫多妻制度を認めている。奴隷の保有数以上に、妻の数というのは単純に権力と財力を表す指数とされていた。特にユースフのような王侯貴族の関係者ともなると、体裁だけの為に妻を養うことも少なくなかった。

ハザンはグラスの水を飲み干すとテーブルの上に空になったグラスを置いた。

「生き返ったよ」

「先生に死なれるとオス・ローの価値が下がってしまいます」

ハザンの言葉にユースフは苦笑した。

「儂みたいな鞍替えモンにも扉は開くんだろうかね。お前さんには【天国の扉】が開くことを祈ってるよ」

お決まりの文句を言うと、ハザンはぎいっと扉を軋ませて帰っていった。

（【天国の扉】が開くことを祈ってる か）

全くだ…とユースフは思った。

ハザンが帰った後、ユースフはようやく食事にありつけた。サライは向かいに座って、ユースフの食事風景をまじまじと眺めている。テーブルの上でランプの灯りが揺れ、サライのどことなく落ち着か

ない表情を照らした。

皿の上には今まで味わったことの無い味のするスープが並んでいた。

「……もしかして、お前が作ったのか？」

サライがあまりに見つめてくることを不審に思い、なんとなく聞いてみた。

「どうしてわかったの！？ わたしの心の声が聞こえた？」

相変わらず、サライが奴隷と一緒に働いている事を知り、ユースフは肩を落とし軽く溜息をついた。

「サライ、お前はちゃんと食ってるのか？」

「うん、食べてるよ」

そうは言っが、ユースフの居ないうちに奴隷達と一緒に食事を済ませているようで、サライが物を食べている姿をユースフは一度も見ることが無かった。

ドームの中の【エブラの民】は何を食べて、どのように生活しているのかは全く分からないが、そこは追求してはいけないと思った。奴隷達に聞けば分かることだが、そこまで詮索する気はなく、詮索してはいけない事なのだと思っていた。

サライと話していると、時々とんでもない内容が飛び出してくることがあった。大抵は【エブラの民】に直接関わることで、ユース

フは外界の人間が知ってはいけない事なのだと、サライの発言を制止することが度々あった。

「ユースフ……、あのね」

また止められると思っっているのか、サライは言いづらそうな顔をしていた。

ユースフは食べる手を止めてサライの話に耳を傾けた。

「あのね、もうすぐ門が開くと思うの……」

「本当か？」

「うん」

根拠は分らないが、サライが言うのだからきつと本当なのだろう。

「あの儀式が行われるのか？」

ユースフの瞳が子供のように輝きだした。七歳の時、魅せられたあの美しく不思議な儀式をまた目に出ることが出来るかもしれない。そう思うと足が地につかなくなるような感覚を覚えた。

サライを無事にドームの中に返すこともだが、あの儀式をまた見られるかもしれないと思うとユースフの心が高鳴った。

「多分、器が焼かれて、その後かな……」

意味が分からないが、これも多分聞いてはいけない事だとユース

フは判断した。明日からしばらく、サライを連れてドームへ行こうと決めた。

一人自室に戻ったユースフはどっと疲れて、寝るには早い時間からベッドに倒れ込んだ。低い天井にランプの灯りがちらつくのをぼんやりと眺めた。

もしかしたら、サライは明日にはドームに帰れるかもしれないと思うと、随分肩の荷が下りた気がした。

きつとこの二ヶ月に【エブラの民】であるサライに対して、随分不埒な振る舞いをしてしまったに違いない。【エブラの民】に対して、自責の念と恭順の意がユースフの心に甦ってきた。

「ユースフ、寝ちゃった？」

声のする方を見ると、部屋の入り口に掛けられた薄いカーテンに、サライの影が灯りに照らされて映っている。

「いや、起きてるよ」

そう答えると、サライが灯りを持ってユースフの部屋に入ってきた。台の上に持っていたオイルカップの灯りを置くと、ベッドの傍に来てしゃがみこんだ。

灯りが二つになり、狭い部屋の中は十分に明るくなった。

「明日でさよならだよ。ありがとう」

サライはそう言っただけでベッドで仰向けに寝転んだままのユースフの顔をじっと覗き込んだ。

どうして明日門が開くとわかったのだろうか？ この確信は一体どこから来るのだろうか？ 聞いてはいけないと思いつつ、これで最後だと思つとユースフの気がつい緩んでしまった。

ユースフは身体を転がすと片肘を立てて頭を支え、横たわったまま、傍らのサライに話しかけた。

「なぜ明日、門が開くと分かったんだ？ 最初はわからないって言うてただろう？」

「中の誰かが死んだから……」

「死んだ？」

怪訝そうな顔をするユースフにサライは少し声を落とした。

「死者の弔いの為に扉を開けるのよ」

サライの言葉に、ユースフは思わず絶句した。

あの美しく幽玄な儀式は【エブラの民】の葬儀だったのだ。外界の概念とは違いすぎる。

知ってはいけない事だった、とユースフは聞いたことを後悔

した。

幽玄なる儀式では、長と思われる人物を先頭に、何人かの【エブラの民】が灰を撒く。全員が驚くほど無表情で、その神秘的な光景に外界の人間はなぜか皆魅せられてしまう。

「……あれは葬儀だったのか……」

「うん、魂だけが旅立てるように、身体を焼いて灰にしてしまうのが死人を火葬するなど、ユースフにとっては信じられなかった。魂が復活した時に戻る身体が無くても良いのだろうか？」

それに、なぜサライは誰かが死んだというのが分かったのだろうか？ 気になったが、やはり突き詰めないでよい。

「ユースフは弔いを見たことあるの？」

「子供の頃にな」

それこそがユースフがオス・ローで軍人になった所以だった。

「弔いに参加できるのは大人だけなの。わたしはまだ見たことないんだ」

「そうなのか。あれは本当に美しい儀式だ。ああいう風に【エブラの民】に送られるのなら、死ぬのも悪くないな」

「ユースフが死んじゃ嫌だよ」

サライが悲しそうな顔をしてユースフをじっと見つめた。

「人が死ぬと、どうして涙が出てしまうのかな？ 天国に迎えられるのね」

「別れは辛いものだろ？」

まあ、俺は親父が死んでも涙は出ないだろうな……とサライには聞かせたくない言葉をユースフは心のうちだけで考えた。

「大人になると涙出なくなるのかな。我慢してるのかな」

舌足らずだが、サライはあの儀式での時のことを言っているのだろつ。

「嬉しくても笑わない。悲しくても泣かない。大人ってやつは、子供以上にややこしいのかもな」

成人して10年経った今でも、ユースフは自分が大人に成れた気がしない。

「自分の感情に従って、素直に涙を流せるほうが良いんじゃないか？」

そう言って顔の真横に居るサライを見た。

まだ儀式を見たこと無いというサライにユースフは問いかけた。

「お前は何歳なんだ？」

「もうすぐ14よ」

この時初めてサライの年齢を知った。ユースフより12も年下だった。

「成人は何歳なんだ？」

「15歳」

「エブラ信仰と同じだな」

ああ、そりゃそうか、とユースフは笑ってみせた。

ところが、サライは傍らでベッドに伏せて鼻を嚙りながら泣いていた。

「どうしたんだ？ 別れが辛いのか？」

ユースフが大きな手で優しく頭を撫でてやると、サライは顔を上げた。その瞳は涙で潤みユースフを恋うように見つめていた。

「……戻りたくない……、ユースフと一緒に居たい」

サライは聞こえないほど小さく呟いたが、ユースフはそれに気付き

「大人になってから出直してくれ」

と言って、サライの気持ちには応えなかった。

* * * * *

サライがドームに戻ってから、ユースフは以前のように時々トリアナ海を眺めに岸壁に足を運んだ。

時々城壁の上からサライの視線を感じたが、もちろんサライは声はかけてこなかった。

ユースフはなるべく上を見ないようにし、気づかぬ振りを繰り返していたが、そのうち頭上から小枝や麦の穂のような物を投げられるようになった。これはさすがに無視できず、見上げると泣きそうな顔をしたサライが城壁からユースフを見下ろしている。ユースフは声は掛けず、空に向かって敬礼するとその場を立ち去った。

そんな事を繰り返していると、今度はサライは怒っているようだった。怒っていたかと思うと、次に見た時には目に涙を溜めていた。

さすがに堪りかねたユースフは頭上のサライに向かって

「どうした？ 何故泣いてるんだ？」

と声を掛けると、サライは涙をこぼしながら小さく頭を横に振って、そのまま向こう側に姿を消した。

* * * * *

それから約一年。

ある夜、ユースフのもとに思いがけない来客があった。来客なのだが、先に家に入り込んでユースフの帰りを待っていたという方が正しい。

「ユースフ！ おかえり！」

と、扉を開けると満面の笑みが眼中に飛び込んできた。

サライだった。

髪は隠していて見えないが、顔立ちは幼さが抜け更に美しく成長していた。身体つきも小柄ながら、服の上から見てもわかる程度に大人っぽくなっていた。だが、笑顔は以前と全く変わっていない。

ユースフは一瞬眩暈を感じた。まさか本当にやってくるとは思っていたいなかった。

ユースフの言ったとおり、サライは15歳になって出直してきたのだろう。

もうどうやってドームを出てきたのか敢えて聞かなかった。

ユースフがランプを持たずに部屋に行くと、後からサライが着いて来た。

暗い部屋で着替えをするユースフの背中に向かって、入り口で仕切り布をぎゅっと握り締めてサライは呟いた。

「わたし、ユースフが好き……」

現実にサライの口からその言葉を聞いて、ユースフは心臓が止まる思いだった。

あの城壁の中でずっと思いを募らせていたのだろう。

サライが自分のことをこんなにも慕ってくれていた事が驚きであった。いや、本当は気がついていたのだが目を背け続けていた。

ユースフは今までサライを一人の女として見た事がなかった。ユースフにとってサライは【エブラの民】で、信仰の対象だった。だが、ユースフに対するサライの想いは違ったようだった。

ユースフが動揺を隠せず振り返るとサライが抱きついてきた。サライが何を望んでいるのか分かりユースフは狼狽した。

今までサライを天使だと思い、ユースフなりに大切にしてきたつもりだった。

「サライ、やめてくれ。俺は聖人じゃないんだ……」

そこらへんにいる女とサライは違うのだ。神聖なサライを、【エブラの民】を汚したくはない。

「わたしだって聖人なんかじゃないよ……」

サライの声が震えている。ユースフの胸元に顔をうずめ、ぴったりと抱きついてきた。

「わたしずっと前から見てた。ユースフが海を眺めてたのをずっと

見てたの」

その言葉にユースフは再び言葉を失った。

まさかサライが城壁から過って落ちたのは、自分の姿を見ていた所為だったのだろうか？ それともずっと以前から、ユースフの岸壁での挙動を見られていたのだろうか？

「……あそこで泣いてたでしょ？」

その言葉を聞いて、あの事故のずっと前からサライが自分を見つめ続けていたことをユースフは知った。己の不甲斐なさに心が押し潰されてしまいそうだった。

あの場所だけが、誰にも甘えることの無いユースフが心の内を曝け出す事が出来る場所だった。微かに嗚咽を漏らしたとしても荒ぶる波の音が声を掻き消してくれた。いくら成人しようと、軍務長官の座に就こうと、自分の心を殺しきれず未だに子供のようにもがいている。そんなユースフの姿をサライは知っていたのだ。

「……ユースフが好き」

薄暗い部屋の中では、ユースフを見上げるサライの肌も髪も瞳の色も見えなかった。きっとサライからもユースフの情けない顔は見えていないのだろう。

いつしかユースフは両の腕でサライを抱きしめていた。

一度一線を超えてしまうと、深みにはまるのはあつという間だった。

二度目は無いと思っていたが、その後もサライは度々ユースフのもとを訪れ夜を過ごした。

【エブラの民】が望んだ事だと、ユースフは自分に言い聞かせていたが、逢瀬を重ねる度にユースフの中でサライの神格は薄れていくようだった。

* * * *

夜にユースフの家の扉が五回叩かれた。サライが来た時の合図だった。

ユースフに家の中に招き入れられると、サライは冷えた身体を震わせながら、オス・ローの女が着ている上着を脱いだ。その下に着ているのは【エブラの民】の着ている白い一枚布の服だった。

灯りを全て消すと、ユースフの部屋で二人は身体が熱くなるまで抱き合った。

今やサライとも付き合っているユースフだったが、彼女が【エブラの民】であるという事実は常に頭から離れなかった。サライ自身はただの少女にしか思えないというのに。

「【エブラの民】にこんなことをして、俺はきつと地獄に落ちるな……」

狭いベッドの上でサライと向き合いながら、ユースフは自虐的な笑みを浮かべた。

ユースフはサライと関係を持つてから、ドームへ巡礼にも行かなくなっていた。人に相談することも、神に救いを求めることも出来なかった。

「大丈夫だよ。もしユースフが地獄に落ちても、わたしが絶対助けるよ！」

まだ暗がりの中、顔は見えないがサライが少しむきになって言った。サライはいつも少し子供っぽい事を言うのだ。

ユースフはそんなサライを愛しく思っていたし、そんな言葉に癒されもしていた。

「ねえ知ってる？ 本当は天国は地にあるんだよ」

「地に？」

「そう。死ぬ時、人間も動物も鳥も、皆大地に抱かれて死んでいくでしょ？」

確かに生物は死ぬと横たわる。それを大地に抱かれていると言うのが可笑しくてユースフは頬が緩んだ。

「地が天国なんて初めて聞いたな。なら地獄はどこにあるんだ？ 空なのか？」

「地獄はね、この世界」

ユースフの冗談にも、サライはいつも真剣に答えてきた。

「でも神様は平等に死を与えてくれる。だからユースフが地獄に落ちることはないよ」

「死を下すのは神じゃない、悪魔だろ」

「悪魔って何？」

閉鎖的な社会で暮らしているサライは、時々自分たち、外の人間とは全く違う概念を持っていて、ユースフ驚かせたり呆れさせたりした。

二人はそんな話をしながら、明け方まで身体を重ねじゃれ合っていた。

はじめこそ【エブラの民】のサライが望んだ事だと、ユースフは自分の行為を正当化しようとしていたが、会うたびにサライが普通の少女にしか思えなくなってきた。

だが、【エブラの民】は天使の末裔なのだ。王族の娘に手を出して、命を代償に許しを請うのは話が違う。この罪は許されるのだろうか……。いつも心の中で葛藤していた。

そうして会うたびに距離を縮めていった二人だったが、ユースフ

の罪の意識はどんどん深まっていた。

ユースフの弟

聖地オス・ローは一日の中に四季が在る代わりに、一年に四季は無く、一年中変わることなく同じ気候が続く。

夏の時間。

ドーム城下の軒と軒の間には大きな布が張られていて、石畳で整備された通りには強い日差しを遮り快適な影に覆われていた。

ドームを頂上に石畳の道を下っていくと、中腹辺りでは軒先の日陰に椅子や机を出して路上診療する医者達や、日干、凍干や生の薬草などを売る薬売りの姿が見られた。

麓まで下ると城下街入り口に大きな石畳の広場があった。広場の中央には小さな水場が作られており、オス・ローに住む者と、オス・ローに來た者達で溢れている。東と西の言葉と人種が交じり合う場所だった。

広場の壁際には屋台やテントが並んで小さな市場となっており、巡礼者の為の宿泊所や酒場などもこの広場を中心に立ち並ぶ。他所から來た巡礼者の生活の拠点となり、昼も夜も盛り場となっていた。

正午を少し過ぎた頃。オス・ローのユースフの元にシュケムから実弟のアーディンが尋ねてきた。

アーデインはオス・ロー城下の雑踏まぎれ、居住区の入り口で馬に水を飲ませた。出迎えに来ていたユースフの奴隷にその手綱を預けると、案内されユースフの住居まで丘を上っていく。

兄ユースフが父の後を継がず軍人に志願して強引にオス・ローに来てしまったため、弟のアーデインは父の後を継ぐべくしてシュケムの要職に就いていた。三年前に父と同じ法官の職に就いてから、アーデインはユースフよりも位が上になっていた。

旅装束の下に華やかな色味の上質な衣服を纏う姿は、オス・ローの人ごみの中では明らかに浮いていたが、そんなことを気にする者はオス・ローには誰も居なかった。混み合う通路で時折人と肩をぶつかけたりしたが、年齢身分に関わらず互いに頭を下げあつた。

兄の奴隷に案内され、アーデインは人々の行き交う石畳の通りをドームのある丘の方に向かって上っていった。

オス・ローの北東に在る軍の居留地に居たユースフは、奴隷から連絡を受け自宅へと戻ってきた。

ユースフが自宅の扉を開けると同時に、アーデインは座っていた椅子から立ち上がり入り口に立つ兄にシュケムの敬礼をした。ユースフもそれに応え敬礼で返した。

「お久しぶりです、シフナ軍務長官殿」

そう言いながら、澱みない漆黒の瞳がユースフを見据え、ユース

フの方に歩み寄ってきた。

この時、ユースフは28歳、弟のアーディンは21歳だった。弟に最後に会ったのは実に五年前で、ユースフより七つ年下のアーディンも、もうすっかり青年に成長していた。いつの間にか目線も同じ高さになっていた。

今回アーディンがオス・ローの兄を訪れた目的は、オス・ローの薬師を尋ねること、巡礼、そして、一通の令状をユースフに直接届けるためだった。

ユースフは令状を手渡たされ、アーディンの口からも直接その内容を聞かされた。

「ウバイド皇国への同行を貴殿に命じます。出立は七日後の早朝に」

「御意」

法官から直々伝えられる内容を断れるはずもなく、ユースフは即答した。

「貴殿が一緒なら心強い」

ユースフに応え返すアーディンは、引き締まった顔にもどこか優しさが滲み出ている。いつもどこか憂愁を帯びた表情のユースフと違い、似ているようであまり似ていない兄弟だった。

ユースフは広げていた令状をくるくると丸めると、テーブルの上に置いた。

「堅苦しい事は止めてくれ。アーディン」

ユースフの言葉を合図に、二人とも表情が柔らかくなった。

「兄さん、お元気そうでなによりです」

年は離れているが兄弟仲は良かった。

ユースフが家を飛び出した後、アーデインは父親からの過剰な期待を一身に背負ってきたはずなのだが、そんな苦労は微塵も感じさせなかった。

弟に家督と責任を押し付けたユースフのことを恨んでいるかと思っていたが、その逆で定期的にユースフに手紙をよこすほど兄に傾倒していた。幼い頃、ユースフが【エブラの民】に憧れたように、アーデインは兄に憧れを抱いていたようだ。

実際、頭も人柄も良く、誰が見ても兄より良く出来た弟だった。

「お前、少し見ない間に親父にそっくりになってきたな」

「兄さんみたいに母上似なら、もう少しもてたんでしょうけどね」

そう言っつて、アーデインはどこか少年っぽくはにかんで笑った。

「仕事に戻られるのなら、私も一緒に行っても良いですか？」

「ああ、そうしてくれ。伯父上にも顔を見せておいて欲しい」

「そうですね。私が挨拶にも来なかったと、父上ともめられては困るので」

アーディンが苦笑した。

二人の父と伯父は、実の兄弟でありながら非常に仲が悪かった。

弟である父親は『シユケムの英雄』と呼ばれる人物で、シユケムの王位継承権第一位を持っている。一方、その兄である伯父はというと、地位や名誉より戦いを好む性格だったので、自分の地位には全く興味が無くシユケムの將軍であることに満足していた。

だがそんな伯父でも、甥のユースフの話となるとまた別だったようだ。ユースフとその父である自分の弟との関係が険悪になる一方、三年前にとうとうアーディンが父と同じ職に就いた。この時、伯父は自分の弟に食って掛かり『お前の次はアーディンではなく、ユースフに王位継承権がある！』と、流血騒ぎを起こしてまで主張したことがあった。

伯父のユースフへの入れ込みようは半端無く、そういった伯父の行き過ぎた行動は、父親と深い確執のあるユースフに『自分の本当の父親は伯父ではないか』と疑いを持たせるほどだった。

だからといって、伯父がアーディンの事を嫌っているということとは全く無いので、父と伯父の二人の間を取り持つことが出来るのはアーディンだけだった。

とにかく、ユースフとアーディンにとっては、伯父と父の二人は良い反面教師となっていたようだ。

アーディンはウバイド皇国へ出発までの一週間をユースフの家に

滞在する事になった。

弟の滞在中、二人は毎晩酒を酌み交わし、幼い頃の話や、シユケムの話、君主の話、家族の話、軍事、政治、女の話まで語り明かした。

15歳で家を出たユースフとアーディンの二人が、こんなに話し込んだのは初めてのことだった。

* * * *

アーディンが来て三日目の夜のこと、二人はいつものように晩酌をしていた。

宴も酣を過ぎ二人とも随分と酔いが回っていたこともあって、男同士の話も随分下世話になっていた。そんな時、サライがユースフに会いにやって来た。

冬の時間。

扉の隙間から漏れている灯りで、サライはユースフが帰っていることを確認した。そしていつものように扉を五回叩いた。

その音に、ユースフとアーディンの二人は深夜の訪問者に気が付いた。

「誰か来たんじゃないですか？ 私が出ますよ」

そう言って、扉に近い方に座っていたアーディンがユースフよりも先に席を立った。

サライはいつもより灯りの数が多く、部屋の中からは酒の匂いが漂ってきて、来客だと気が付いた。きっとユースフが出て来て、いつものようにドームに戻るように言うのだろうと思っていた。

アーディンは入り口の扉を押し開け出て来たが、訪問者は灯りを持っていなかったので、小柄な身体がアーディンの影に隠れてしまい、すぐには顔が分からなかったようだった。

サライは夜の暗がりと部屋からの柔らかな逆光で、背の高さも髪の色もユースフと同じアーディンを、ユースフと見間違えてしまった。サライが小さな声で「ユースフ？」と問いかけると、「あれ？」とユースフと似たような声が返ってきた。

「兄さん、女性が来られてますよ」

アーディンは振り返ってユースフを呼んだ。軒先では声と一緒に吐いた息が白くなった。

来客だと分かったらいつも顔を見られないように帰っていたのだが、今日は運悪くアーディンと鉢合わせしてしまった。サライは慌ててそのまま帰ろうとしたが、出てきたユースフに腕を掴まれて引き止められた。

「サライ！ 待て。俺の弟だ」

そう言つて、ユースフはサライを家の中に招き入れた。いつもなら決してサライを人目に晒したりしないユースフだったが、弟なら大丈夫という期待もあったのかもしれない。今日は深酒をしすぎていたようで、大分分別がつかなくなっていたようだった。

サライはオス・ローの女性がよくするように、日よけも兼ねた薄手の布で髪をすっぽりと隠し、服装も外界のものを身に着けていた。アーディンにはサライが「エブラの民」とは分からなかったようだが、美しさの中に幼さを残す少女の表情に思わず見とれてしまっていた。

「彼女も一緒にどうですか？」

アーディンから提案があつたがサライは何も答えず、助けを求めるようにじつとユースフを見上げた。

ドーム近くの居住区はいわゆる高級住宅だったが、それでもオス・ローの住居は狭かった。入り口入ってすぐのリビングで、手の届きそうな位置に居るサライをアーディンはずっと見つめていた。だが、サライは最初にアーディンとユースフと見間違えた時以外、一度もアーディンの方に視線を向けなかった。

「いや、サライは飲めないんだ」

「それは残念だな。兄さんがどうやってこんな可愛い人を射止めたのか、武勇伝でも聞けるかと思つたのに」

アーディンの言葉にサライは顔を真っ赤にしてユースフの後ろに隠れてしまった。

「あんまりからかわないでくれ」

兄に制され、アーディンは「ごめんなさい、さすがに今日はちょっと飲みすぎたかな」と謝った。

ユースフとサライの関係を知る者は誰も居なかったので、こうしてアーディンにからかわれたりする事がサライにはこそばゆく感じられ、アーディンの人柄もあつてか嫌な気はしなかった。

「俺の部屋で待っていてくれないか」

アーディンの見ている前だと言うのにユースフに耳元で小声で甘く囁かれ、またサライの顔が紅く染まった。そして、ユースフはサライにオイルランプを一つ手渡すと、奥の自分の部屋へと困惑する背中を押した。

中二階への階段もリビングの横にあり、サライは戸惑いながら階段に足をかけた。

「私は明日は朝から薬師の所に行かないといけないので、今晚はもうお開きにしましょう」

二人の事情を察したアーディンが気を遣ってくれた。そして、兄に向かって

「それにしても、兄さんが滅多にシュケムに帰ってこない理由がわかりました。オス・ローにあんな可愛い人が居るんじゃ仕方ないですね。彼女、兄さんにぞっこんみたいだ」

と笑いながら意地悪そうに言った。

「帰ったらエイダ義姉さんに伝えておこう。そうしたら、ますます帰れなくなっちゃうかな」

「お前には会ってないだけで、時々帰ってるよ」

ユースフの言い訳を聞いても、アーデインは悪戯っぽく笑っていた。

「エイダはプライドが高いんだ、勘弁してくれ」

アーデインが本当にそんなことを言うはずがないのを分かっているながら、ユースフは肩をすくめてみせた。

サライは部屋の中で一人突っ立っていた。部屋に扉も無いような狭い住居の中で、ユースフとアーデインの話し声は全て筒抜けだった。

（ユースフの弟……）

ユースフに弟がいることを、サライは聞いたことが無かった。

そして二人の話から、ユースフにはシケムに妻がいたことを、サライはこの時初めて知った。ユースフに既に妻が居ることではなく、その事を知らなかったことに胸が痛んだ。

サライは今更ユースフのことをほとんど何も知らなかった事に気が付かされた。他人と楽しそうに話したり、酒に酔っているユースフを見るのも今日が初めてだった。

逆にユースフからサライの私生活やドームのことを聞かれたことも無かった。その理由は、ユースフが神の領域に踏み込んではいけないと歯止めをかけているのだとわかってはいた。

頭ではわかっていたが、やるせなさに気持ちが乱れた。

どんなに体の距離が縮まっても、心の中に二人の間を遮る何かがあるのだ。そんなことを考え出すと、サライは孤独さに胸が締め付けられるように苦しくなった。

（寂しいよ……）

目頭が熱くなったが、こぼれそうな涙を必死で堪えた。素直に涙を流せばいいのに、何故か必死で堪えていた。以前ユースフが言っていたように、サライは自分も「ややこしい大人」になっていた事に気が付くと、余計に救われない気持ちになってしまった。

宴会はお開きになり、二人の男の足音が階段を登ってきた。一人の足音はそのまま奥の部屋へと消えていった。入り口の布を捲ってユースフが心もとない足取りで自分の寝室に入ってきた。

ユースフは部屋の中で一人立ち尽くしていたサライを後から抱きしめると、もたれかかるようにサライの肩に頭をのせた。ユースフがこんな風にサライに甘えてくることは今まで一度も無かった。今日は完全に酔いがまわっているようだ。

「会いたかった」

いつものユースフなら、サライに対してそんな仮初めなことも決して言わない。酒の勢いで出た口説き文句だと分かっているのに、ユースフの甘い言葉にさつきまでの悲しみが誤魔化されてしまう。

「……ユー……」

振り返ると名前も言い終わらないうちにきつく抱き寄せられ、唇を塞がれてしまった。

それは深く、長いキス。台の上に置いていたランプが絡まる二人の影を壁に映し出した。甘美で濃密なキスで、息が詰まりそうになり顔が紅潮する。頭の芯をぎゅっとつかまれているような……。こんなキスは初めてだった。

流れるような手つきで頭に被っていた布をするりと外され、サライの白く長い髪がさらさらと背中中に滑り落ちた。そのまま床に押し倒されると、衣服を剥ぎ取るように脱がされ乱暴に身体をまさぐられる。床の上に広がった髪を踏まれサライの目に涙が滲んでも、ユースフは気が付かなかった。

いつもとは違う執拗な愛撫から逃れようとしたが、手首を捕えられて押さえつけられた。抵抗してみるが、身体は悩ましいほど反応してしまふ。消し忘れたランプの灯りが、いつもは見えない二人の

表情を照らした。気恥ずかしさに顔が熱ったが、やがてそんな事も考えていられなくなった。

今夜のユースフはまるで別人のようだ。少し恐怖を感じたが、サライは抵抗せずユースフを受け入れた。

抱き寄せる力はいつもよりずっと強く、押し掛かる重みや痛みでサライの口からもいつもと違う声が漏れる。快楽に喘ぎ、息を弾ませながら嬌声を漏らすと、それが更にユースフの欲情に火をつけたようだった。

ユースフは何度も情熱的にサライを求めてきた。いつもならサライの身体に決して痕跡を残さないユースフだったが、そんな配慮は今夜はまるでなかった。

* * * *

冬の終わり。

夜明け前にサライが目を覚ました。いつもは必ずサライより先に起きていたユースフが、まだ隣で眠っていた。

サライはユースフの顔にかかっている髪を指先でそつとすくいあげ耳のほうへと梳いた。12も年上のはずなのに、随分子供っぽい寝顔にサライは母性をくすぐられるようだった。

額にそつとキスをしたが、それでもユースフは目を覚まさなかつ

た。

薄明かりの部屋の中で、サライは初めて見るユースフの寝顔を、夜明けまで見つめていた。

早春の時間。

ユースフが目を覚ました時には窓の外は随分明るく、部屋の中にも淡い光が差し込んでいた。

隣にサライが居ないことに気付き飛び起きると、既に服を着たサライが部屋を出ようとしているところだった。

サライはユースフを起こさないように黙って帰ろうとしていたが、裸のままベッドから降りてきたユースフに後ろから抱きしめられ捕まった。

「待ってくれ！」

ユースフに捕まり、その腕の中で振り返ったサライはユースフを見上げた。ユースフは一晩ですっかり酔いが醒めたようで、昨夜の事を思い出したようだった。

「サライ、昨夜の事を怒ってるなら謝る……」

「違っの……」

昨夜のように、あれほど激しく情熱的に愛されたのは初めてだった。乱暴ではあったが、素のユースフを感じた気がした。二人の間

に立ちはだかる【何か】がなくなったように感じられた。

その事で、ユースフにとってサライは、未だに神聖な存在【エブラの民】であることに気が付いたのだ。昨夜のユースフは、今までサライが知っている理性的で紳士的なユースフとはまるで違っていた。

シュケムにいるユースフの妻やオス・ローの他の女達は、ユースフにいつも昨晚のように抱かれているのだろう。普通の女を愛すのと同じように、自分を愛してくれていた訳ではなかったのだと。そう思うと、サライの心に初めて「嫉妬」という感情が生まれた。

この感情をどうしたらいいのかサライは分からなかった。胸の内がざわついて気分が悪かった。

二人の間にどうしても超えられない【壁】を感じずにはいられない。自分が【エブラの民】であることがもどかしくてならなかった。

「どうしてわたしは……」

サライは叶わない我俣を言つのをやめ、違う言葉に換えた。

「キスして……」

ユースフを見上げているサライの唇にユースフの唇が軽く触れた。いつもと変わらないキスだ。いつもユースフはサライの嫌がるようなことはしなかったが、そのことが返ってサライを傷つけていた。

「昨夜みたいにキスして欲しい……」

サライがダダをこねるように言うと、ユースフはばつが悪そうな

顔つきでサライを抱き寄せた。互いの顔を寄せ合い、サライの腕がユースフを包み込むと再び唇を重ねた。

* * * *

アーデインが来て五日目のこと。
その日はユースフは軍の仕事で国境近くの居留地まで行く予定だった。

奴隷達が慌しく朝食の支度をする中、ユースフとアーデインは身支度を整え階下のリビングへと下りてきた。

アーデインは朝から薬師の所へ行き、その後ドームへ五回目の巡礼に行くらしい。

「今日、兄さんも一緒にドームへ巡礼に行きませんか？ ウバイド皇国までの安全祈願も兼ねて」

アーデインから誘われたが、サライとの事があってからドームへは一年以上足を向けていない。昨夜のサライとの事を考えてもとても行ける気分ではなかった。

折角の弟の誘いだったが、丁重に断るとユースフは自分の職務へと向かった。

初夏の時間。

日が一番高く上る夏の時間が巡礼のピークとなる。アーディンは薬師の元で用事を済ませ、他の巡礼者に混じってドームまでの石畳の坂道を登っていった。

城下では日陰が作られそれほど気にならなかった気温も、城下街の日陰を抜けると眩みそうなほど急激に熱さを増した。

目の前にはドームの城壁が見えている。同じように坂を上る人々は、皆ドームの門【天国の扉】を目指していた。

アーディンが【天国の扉】の近くまで辿り着くと、門前には既に沢山の巡礼者が来ていて様々な形で神に祈りを捧げていた。

彼らの後ろにつき、アーディンも祈りを捧げようとした時。

突然、ずずと石が擦れ合う音が響き、ドームの門が開き始めた。石の車輪が砂と地面を擦る重い音が当たりに響いた。

その瞬間、まるで時が止まったかのように、辺りは静まり返った。目を伏せていた者は目を開き、跪いていた者はゆっくりと立ち上がった。

【天国の扉】は人が通れるくらいだけ開くとぴたりと動きを止め

た。隙間からドームの中の様子が垣間見えて、巡礼者達は微かにどよめいた。中から白い服を身に纏った【エブラの民】が十数人出てきたのだ。

門前に居た巡礼者達は皆押し黙ったまま、誰の指示も無く、自然と通りを空けるように後ろに下がってきた。先に祈っていた者達が皆立ち上がり、アーデインの前に人垣となつて壁を作った。

ユースフから嫌というほど【エブラの民】の話を聞かされていたアーデインは、【エブラの民】を是非自分の目で見てみたいと常々思っていた。首を伸ばして【エブラの民】を見ている人垣をかき分け、巡礼者で出来た壁の一番前までなんとかたどり着くことが出来た。

【天国の扉】をくぐつて出てきた【エブラの民】は不思議な神秘的なオーラを放っていた。その場に居た巡礼者全員が、滅多に無い機会に息を呑んで【エブラの民】を崇め、じつとその不思議な儀式を眺めた。

一番先頭は【エブラの民】の長らしい男だった。長にしては随分若かったが、後に続く【エブラの民】は、無言で彼の後に従う。彼らは黒い肌と白い髪をあらわにして、独特の白い衣装を身に纏っていた。白い衣装は太陽の光を受けて眩く輝いていた。

【エブラの民】は誰も表情を変えず順に地面に灰を撒いた。彼らの手からさらさらと零れ落ちる灰は、時々風に晒されるように辺りに舞い散る。天から注ぐ太陽の光がその灰に反射して、地面までもがきらきらと光っているような錯覚を覚えた。

それは不思議な光景だった。炎天の下にすることを忘れてしまうほどだった。光る地の上に立つ【エブラの民】から誰も視線を逸らす事が出来ないでいた。

アーディンも【エブラの民】のその美しい神秘的な儀式から目が離せなくなっていた。

まるで感情など持っていないかのように無表情な様子で不思議な儀式を続ける【エブラの民】だったが、アーディンはふとその中の一人に違和感を覚えた。その【エブラの民】の女性はとっさに手で拭い取ったが目に涙が浮かんでいた。それをアーディンは見逃さなかった。

「あれは……」

その【エブラの民】が、一昨日の晩兄を訪ねてきたサライに似ている。あの時は布を頭からかぶっていて彼女の髪の色までは分からなかったが、思わず見惚れるほどの美しい女だった、その顔を忘れる訳が無かった。

「……サライ？」

アーディンは夢を見ていたような気分から、一瞬で現実を引き戻された。

サライに似ている女性は気づかなかったようだが、【エブラの民】の一人がアーディンの声に気がついたようで、微かにアーディンの方を見たような気がした。

* * * *

先に家に戻っていたアーディンは昨夜の出来事を思い出し葛藤していた。リビングのテーブルの上に置かれたランプを睨みつけ考えを巡らせた。

聞きたいことがあるのにユースフがなかなか帰宅しないことに、余計にいらだちが募ってきた。

（兄さんとサライ……）

もしサライが【エブラの民】なのだとしたら、兄は神を冒瀆していると思えない。アーディンはユースフほど信仰心が厚いわけでもなかったが、【エブラの民】に手を出すなど神の領域を侵犯しているとした考えられなかった。今まで傾倒してきた兄だからこそ、それだけは許せなかった。

一人でテーブルに向かい、険しい形相のアーディンに、ユースフの奴隷達も声をかけることも出来なかった。

深夜になりようやくユースフは帰宅した。

ユースフが家の扉を開けると、アーディンがリビングで灯を灯したまま一人ユースフの帰りを待っていた。オイルランプの灯りがリビングでテーブルに向かって座る弟の姿をぼんやりと照らしていた。

「まだ起きていたのか」

そう言いながら、ユースフは馬具を入り口の床に置いた。

「今日巡礼の時、【天国の扉】が開き、【エブラの民】に会うことが出来ました」

「お前は運がいいな」

ユースフは外套を壁の鉤にかけながら、振り向かないで返事をした。そしてそれ以上何も会話が続かなかった。

「……兄さん、もしかして、サライは……」

アーディンに単刀直入に聞かれ、ユースフは答えた。

「……そうだ、【エブラの民】だ」

その答えを聞いてアーディンは怒りを露にした。アーディンは勢いよく立ち上がり、その勢いで椅子は後ろに倒れた。

「【エブラの民】は不可侵な存在！ 兄さんは神を冒瀆してる！」

声を大にし、

「聖裁を！」

と言うやいなや、ユースフの喉元に切りかかった。

部屋の中を橙色の閃光と風が走り、壁と床に鮮血が飛び散った。
アーディンの剣は、ユースフの顔面、右目の下を横にかすめ、ユースフの顔と衣服も一瞬で真紅に染めた。

「なぜ避けないのですか……？」

アーディンが剣を逸らさなければ、ユースフの首は飛んでいただろう。ユースフを睨むアーディンの顔にやり切れなさが浮かんでいた。

ユースフは弟の問いにすぐに答えられなかった。

「……俺は、多分、裁きを受けたいんだ……」

どうにか答えたユースフの言葉にアーディンは身をふるわせた。

「兄さん、ひどいな……。もう私も同罪だ」

ユースフを殺すことを躊躇い、聖裁を下せなかったアーディンもまた神に背いた事になる。

「……すまん」

アーディンを自分の罪に巻き込んでしまったことをユースフは後

悔した。

やはりどこかで救いを求めていたのだ。でなければ、いくら酒が入っていたとはいえ、アーディンにサライを会わせたりはしなかった。弟なら、自分に裁きを下せると思っていた。

「お前が許されるのなら、俺を殺してくれればいい」

ユースフは目を伏せて、床に胡坐をくむと両手首を合わせて床に着けた。

「兄さん……」

アーディンは、床に座り込んだ兄を上から見下ろした。

「兄さんが父上によって、君主の従兄妹である義姉上と意に沿わぬ結婚を強いられたことも知っています。代官職を放棄した兄さんでも、君主の為に主情を無視しそれを拒まなかった。『シユケムの英雄』の子として生まれた以上、私も兄さんも自我尊重の心は捨て置いてきたはず。それなのに……、何故ですか……？ 何故……」

アーディンの兄に対する怒りと落胆と疑問が交じり合った声に、ユースフは何も答えることが出来なかった。弟にこんなにも憧憬を抱かせるほど、自分は一体何をしたというのだろうか。

「彼女を、……サライのことを本気で愛しているのですか？」

ユースフは下を向いて黙ったまま、微かに頭を動かし頷いた。だが、半分は嘘だ。本気でサライを愛していたかどうか自信がなかった。

そんな兄の挙動を見てアーデインは言った。

「もしかして……、彼女の方が……？」

信仰心の厚いユースフが【エブラの民】を拒絶することなど出来るはずが無い。

サライが望まなければこんなことにはならなかった。【エブラの民】に対してユースフは禁忌を犯すこともなかっただろう。

「俺に、【エブラの民】を……サライを愛する資格はあるのか……？」

ユースフは独り言のように呟いた。

自分でも、言っていることとやっていることが矛盾しているのは判っている。だが、これこそがユースフがずっと抱えてきた罪の意識だった。

アーデインは、剣についたユーフスの血をぬぐうと鞘に収めた。カチンと金属の鏗音が部屋に響いた。

「わかりました、私も同じ罪を背負いましょう。私も兄さんも神に悖る行いをしてしまったのですから」

「俺の所為だ、お前はまた戻れる」

「兄さんとなら、共犯者となりましょう」

アーデインは、兄の為に神をも捨てる覚悟なのだろう。その澱み無い漆黒の瞳は真っ直ぐにユースフを見つめていた。

「一緒に地獄行きだぞ……」

「覚悟の上です。でも、もしこの罪が償えるなら一生かけても償いましょう。一生かけても償えないなら、何度でも生まれ変わって償いましょう、兄さん」

アーデインの言葉がユースフの罪悪を自由へと導いてくれるようだった。

ウバイド王国

シュケムとオス・ローの在る中央の地と、西の大陸モリスの間にある砂漠の砂は小麦粉のように細かく、そこを通るものの息を詰まらせる。

砂漠を越える旅人達は日差しを遮るターバンを頭に巻き、鼻から下は砂避けの布で顔を覆って馬に跨る。馬の口にも防砂のマスクが付けられた。

オス・ローを出発したユースフとアーディンの一行は、シュケムを経由し、三日かけてウバイド王国の皇都サンドラに到着した。

その道すがら、ユースフはウバイド王国の実情をアーディンから聞かされた。

モリス信仰のウバイド王国とエブラ信仰のシュケムとは、現在とりあえず親交状態を保っている。ウバイド王国の宮廷内部では、ここ数年宰相の座を巡って混乱が続いており、ウバイド王国の若き皇帝サーリムが助けを求めてきたようだ。

「ウバイド王国の皇帝は現在15歳のサーリムです。その姉のシャーミール姫は王国の四番目の姫君なのですが、皇帝以外に帝位を継承できる者は、王国にはもう皇帝の子か彼女が産む子しか居ないのです」

だが、そのシャーミールは結婚もしていないのだという。子などいるはずもなかった。

一日で最も太陽の高い時間を過ぎた頃、ユースフとアーデインの一行はウバイド皇国の皇宮に着いた。

二人は年老いた文官に案内され本宮へと入ると、まず大きな丸い天井のホールに圧巻された。長い歴史のあるウバイド皇国の宮廷内はいたるところに幾何学模様を組み合わせた装飾が施され、床には色の違う大理石が紋様を描きながら敷き詰められていた。土煉瓦建での質素なシユケムの宮殿と比べると全てが壮麗で、その美しさに二人は思わず溜息を漏らしそうだった。

その日、体調を崩し床に伏していたウバイド皇国の若き皇帝サーリムとアーデインの会談は、本宮の上階にあるサーリムの私室で行われた。

ウバイド皇国の皇帝サーリムは、ユースフ達と変わらぬ小麦色の肌に黒髪の少年であった。謀略や事故で相次いで親族を亡くし、昨年に14歳で帝位に就き、年老いた代官達に助けられどうにかやっているといった感じだった。

ユースフはサーリムに御目通りした後退室し、そこに同席したのは先程の年老いた文官一人だけだった。

サーリムは部屋を出て行ったユースフと目の前にいるシユケムの

要人のアーデインを見比べた。

「^{カーディー}法官殿、先程の方は……？」

「我が国の^{シフナ}軍務長官の副長で、私の兄です」

「ああ、やはりそうでしたか。お二人は随分似ておられると思った！」

「^{シャキーク}同胞の兄ですから」

そう言つてアーデインが穏やかに微笑むと、サーリムの緊張も少し和らいだようだった。

元気の無かったサーリムの顔にも白い歯がこぼれた。

「^{シャキーカ}法官殿は、私の同胞の姉のシャーミールとは面識があると、姉から聞きました」

「ええ、年に二回聖地巡礼に来られる時、いつもシュケムに立ち寄ってくれています。ですが、ここ二年程はお会いしていませんが……？　どうかされましたか？」

ここ二三年の間に、皇家の者が次々と亡くなったのは知っていたが、若いサーリムが切り出しやすいようにと話を投げてやった。

「実は今回折り入つてお願いしたいのは、その姉の身上のことなのです」

年老いた文官だけが見守る中、二人の話は進んでいった。

ユースフはサーリムの部屋の前の廊下で仁王立ちになり、時間が過ぎるのを待っていた。

遠くから廊下を走ってくる足音と服の裾が床を擦る音が聞こえてきた。音の方に視線を向けると、長い黒髪に小麦色の肌の若い女がユースフの姿を見つけ小走りにやってきた。

女の頭に飾られている装飾の宝石が煌きながら揺れた。黒い髪がその装飾の美しさを際立たせ、またその装飾が黒い髪の美しさも際立たせていた。

女はユースフに後数メートルという所まで近づいてくると、人違いだった事に気が付きその歩みが止まった。そしてその後を、体格の良い黒人の宦官が追ってきた。

「姫、行つてはならん！ お戻りなさい！」

黒人の宦官が女の腕を捕まえ引き戻そうとしていた。ユースフは黙って視線だけを動かしてその様子を見ていた。

「離しなさい、離してっ！ 客人の前なのよ！」

女が声を荒げると、黒人の宦官はユースフの視線に気が付き、女の腕を離した。

同時に女がユースフに駆け寄ってきた。

「お久しぶりでございます、ユースフ様！」

猫のように大きな黒い瞳がユースフを見上げた。ユースフはその女に全く見覚えが無かったが、アーディンから聞かされた4番目の姫で間違いないだろう。

「ご無沙汰しておりました、シャーミール殿下。息災そうだなによりです」

そう言って少し笑みを見せ、話を合わせた。黒人の宦官は悠然と歩み寄ってくると、ユースフを見て言った。

「『シユケムの英雄』のご子息が来られるとは聞いているが、御主は軍兵であろう。このような処まで入ってくるとは関心せぬな」

「なんてことを言うの！ アーディン様の兄御様よ！」

おそらくユースフと変わらぬ年齢と思われる宦官は、ユースフの服装を上から下まで見定め、顔にある新しい傷痕を見て眉根を寄せた。

「兄……？ ただの軍人ではないか。なんとも血の気が多そうだ」

「口を謹んで！ ムータミン！ ユースフ様、どうかお許し下さい」

シャーミールは強い口調で黒人宦官を諫めると、ユースフを見上げ許しを哀願した。

「構いません」

ユースフはシャーミールにそう言うと、宦官の方を見た。

「確かに私は軍人だ。貴殿の言うとおりにさせて貰う。だが、我が主君に何かあった場合は」

そう言つて鋭い眼光で自分より背の高い宦官を睨みつけた。

「弟君を主君と申すか。面白い御方だな」

宦官はユースフの身分を分かつていて、ユースフを揶揄したようだった。ユースフはその言葉がまるで耳に入っていないかのように、宦官の横を通りその場を立ち去った。

ユースフは本宮から外に出ると、入り口近くの回廊に待機していた二人の部下と合流した。

少し傾きかけた太陽が、西側の回廊に出来た日陰を小さくしていた。まだ眩むような熱さの中、そこにシャーミールがユースフを追つて出てきた。

「ユースフ様、お待ちになつて！」

服の裾を乱し、膝下の素足を露にして走つてきた。

「……先程は、……どうかご無礼をお許し下さい」

軽く肩で息をしながらシャーミールはユースフに謝罪を述べた。
先程言葉を交わしたときから、シャーミールの表情はどこか悲壮さを湛えていた。そんな様子を見ても、ユースフにはやはりシャーミールに見覚えがなかった。

「シャーミール殿下？」

「はい？」

「以前に私と何処かでお会いしたことがありましたか？」

そう言うと、シャーミールはユースフが自分の事を覚えていないのだと気が付いたようだった。さっきは黒人宦官から助けるためにユースフが一芝居したのに気が付いたようだ。

「はい、六年ほど前に一度だけオス・ローでお会いしたのですけど。覚えて居られなかったですね」

そんなことは全く覚えていなかった。六年前というと、ユースフは22歳の頃だ。まだ年若いシャーミールは成人するかしないか程度の年端だっただろう。

「随分昔のことですね」

「あの時、ユースフ様に怒られたことを、わたくしは今も忘れていません」

そう言われユースフは面食らった。この姫が自分に怒られたということは、一方的に見ただけではなく、直接会って言葉を交わしていたわけだ。それなのに、何時何の話をしたのか皆目検討が付かな

かった。

そんなユースフの表情から察したのか、シャーミールは付け足した。

「上の兄姉に甘えて、皇族の娘が遊びまわってではダメだと怒られてしまいました。それが……今、こんなことになってしまつて……。本当にユースフ様のおっしゃる通りでした」

父・母・兄・姉という皇族が相次いで亡くなり、今年15になつたばかりの弟と自分しか皇家の血を引く者が居なくなつた。それまでは末の姫だつた自分に皇位継承のお鉢が回ってくるとは思つてもいなかったのだろう。

涙を滲ませてうつむきがちにそう言われ、ユースフはようやく思ひ出した。

アーデインが15歳になり成人を迎えた時の事だ。父の後継の件も含め、ユースフの身分やその扱いについて父親と激しく衝突していた時期だつた。父の言うことを聞くつもりは毛頭ないが、弟には少なからず罪悪感を感じていたのだ。シャーミールは運悪くそんな時期のユースフと会い、そのとばっちりを受けていたようだ。

御気楽な皇族の少女に向けた厭味でありながら、ユースフが自身を叱責した言葉だ。少女と同じ歳のアーデインは自分の割を食っているのに、この少女はなんと暢気なのかと。……言わば八つ当たりだつた。

「……ああ、それは申し訳ありません」

その言葉を言つた相手ではなくその言葉の真意を思い出し、ユースフは苦笑するしかなかった。

その時のことを気に病んでいるのか、ずっと申し訳無さそうな顔をしているシャーミールにユースフは優しく語りかけた。

「お許し頂けますか？ あの時私は私もまだ若かったので」

「はい。でも、ユースフ様は今もお若いわ。あの時とお変わりありませんよ」

そう言うシャーミールの顔に、ようやく笑みが浮かんだ。確かにユースフは22歳の頃から背も体格もほとんど変わっていないかった。もしかしたら、精神も成長していないのかもしれないとさえ思えた。

「そのお顔……、どうされたのですか？」

ずっと気になっていたのか、数日前に傷を縫合した右頬の傷痕をシャーミールは心配そうに見上げた。

「砂漠に盗賊が出ると聞きましたが、まさか……」

「いいえ。これは出立前に、弟と兄弟喧嘩をした時に」

「喧嘩？ アーデイン様とですか？」

シャーミールは猫のような魅惑的な瞳を大きく見開いた。

「あのアーデイン様が、お兄様とは喧嘩をなさるのですか？」

「意外ですか？」

「ええ。いつもとてもお優しいお方なので、喧嘩なさるような御姿は想像も出来ません」

アーデインの性格の善さは隣国にまで響いているようだ。だが、本当はただの優等生なだけの弟では無いことが、この十日間一緒に過ごした事でよく分かり、ユースフのアーデインへの信頼度は格段に上がっていた。

二人がそんな話をしている所に、アーデインが本宮から外に出てくるのが見えた。

「アーデイン様！」

アーデインの姿を見つけた、シャーミールに安堵の表情が浮かんだ。

「シャーミール殿下、ご無沙汰しております。挨拶もせず失礼しました」

「いいえ。ユースフ様共々、ご足労お掛けいたしました」

シャーミールはそう言っつて腰を落とすとアーデインに深々と頭を下げた。ユースフはアーデインを見つめるシャーミールに人並み以上の好意を感じ取ったが、アーデインはそんなことは気にも留めず、真顔でユースフに話しかけてきた。

「兄上、どうぞこちらへ。陛下がお呼びです」

そう言われ、ユースフはシャーミールに敬礼すると踵を返し、アーデインと連れ添って回廊を去っていった。

ユースフとアーデインの二人は階段を上り、先程立ち去ったサーリムの部屋に戻ってきた。

さっきまで椅子に腰掛けていたサーリムは寝台へと移動し、そこで起き上がって二人を待っていた。そして、二人に対してまず自らの体たらくを詫び、呼び戻したユースフに話を始めた。

「ユースフ殿、先程はアーデイン殿の兄御殿とは気付かず。失礼しました」

アーデインの人柄のお陰か、年若いサーリムは随分緊張がほぐれ寛いでいる様子だった。だが、アーデインとは違い、公の場で殺伐とした表情を崩さないユースフに、まだ年若い皇帝は話し辛そうな様子を見せた。

「もう姉シャーミールとはお会いになれましたか？ 外で声が聞こえましたが」

「はい。時を味方につけられ、随分美しくおなりでした」

姉を褒められ弟として悪い気はしなかったようだった。そこにアーデインが口出しをしてきた。

「陛下、兄は軍人です。回りくどく言う必要はありませんよ」

そう言われると、サーリムは途端に幼い表情を見せ、申し訳なさそうにユースフに言った。

「……この事は本来はアーディン殿にお願いしようかと思っていたのですが、アーディン殿よりもユースフ殿の方が適任かと判断しまして……」

アーディンはサーリムの言葉には口出しせず、横から黙ってユースフの様子を眺めていた。

「我がウバイド王国の宰相ワジールになって頂けないでしょうか。その為に、姉を妻として迎え入れて欲しいのです」

「……私が？ 宰相に？」

寝耳に水の話だった。ユースフがアーディンの方をちらりと見やると、その一瞬アーディンと目が合った。

「私がこのような状態なので、宮廷内で内乱が起こる気がしてならないのです。奴隷兵軍が無法の振る舞いをしていると聞きますが、今、軍をまとめられる者が居らず手を拱いている状態なのです」

すでに軍務長官シフナの副長であり、父の後を継ぐ気もないユースフにはうってつけの話だった。サーリムの提案を後押しするようにアーディンが付け加えた。

「ウバイド王国の軍を取り仕切れる者が居ないと、遠からず我が国シユケムにも危害が及ぶでしょう」

年若く病弱なサーリムの身にも危険が及び、ウバイド王国最後の皇族であるシャーミールの地位が利用されてしまふというのだろう。君主が皇家以外のものに替われば、おそらくウバイド王国とシユケ

ムの関係も崩れてしまうに違いなかった。

「そしてもしシュケムが倒れば、左右の大陸の均衡が崩れ、聖地にも危険が及ぶことになる」

「なるほど……」

アーデインの表向きな言葉もちろんだが、その裏に別の思惑があることをユースフは感じ取った。そして、若き皇帝のサーリムは自分の命と姉の身の安全を願っているだけだった。

「どうか私と姉を助けてください」

言いながらサーリムは頭を低くした。傍に居た老文官も、皇帝の行為に何も言わなかった。

「不肖ながら私で宜しければ、謹んでお受けいたします」

ユースフは一分も迷うことなく強い口調で答えた。

* * * *

砂漠の中を、四頭の馬が粉砂を巻き上げながら東へと向かっていった。頭上の空は茜色から勝色へと変化しつつあり、東の空には星が

ちらつき始めていた。一つだけ赤く煌く星が、進行方向を指し示してくれていた。

ウバイド皇国からの帰途、馬上で兄弟の会話が交わされる。

アーデインはターバンの砂避けを指で顎まで引き下げると、ユースフに話しかけた。

「兄上。お気づきでしょうが、サーリム帝は現在ほとんど実権を持っていません。宰相となれば実質あの国を動かすことになります」

「ああ……。皇帝はまだ若いのに、身体が芳しくないようだな」

ユースフの声は砂避けを介して少し聞き取りにくかった。

「それにしても、あの似非宦官、厭わしいな……」

ユースフはわずかの滞在の間に、いずれ自分の敵となる人物の目星をつけていたようだった。

「さすが、勘が良いですね。彼が黒幕の一人です。黒人奴隷軍を操っているのも彼です。それに……」

アーデインは言葉を止め、隣のユースフを見やった。数日前自分がつけた顔の傷の所為か、右目の表情が少し辛そうに見えた。

「……ですが、兄上があのお話を素直にお受けになるとは思いませんでした。いつも面倒くさいことは私に全部押し付けていたのに」

アーデインは権威や地位に縛られることを嫌うユースフが、まさかサーリムの申し出をこうも簡単に受諾するとは思っておらず、今

更驚きを顔に表した。

「そのために俺を同行させたんじゃないのか？」

ユースフに見抜かれ、アーデインは淡々と答えた。

「……そうです。皇族の若年化と代官の老齡化があ国の問題を引き起こしているのです。中堅の宦官の暴挙を抑えられないでいる。その点、じき三十路になる兄上なら若すぎず、老いすぎず、宰相として身分も実力も申し分ない。私ではまだ年端が足りないでしょうから」

ユースフを護衛として同行させるという時点で、ユースフはアーデインに何か目的がある事に気が付いていたに違いない。そしてユースフが自分の頼みを断れるはずがないということも、アーデインは計算の上だった。

「シャーミール姫はお前の事を良く見知っていたみたいじゃないか」
シャーミールのアーデインに対する淡い恋心を、ユースフが見抜くことも分かっていたことだった。

「彼女が巡礼に来られる度にお会いしてました。ただそれだけです
よ」

アーデインはシャーミールとの関係にそれ以上触れず、ユースフもそれ以上何も聞いてこなかった。

女の為に取った行動が、結果としてその女と結ばれなくなる事など、主情を捨てて生きてきた二人には大したことではなかった。

「まったく。兄さんは本当に勘が良いですね。やはり、先に話しておかなくて正解でした。昔から、私の事となると急に甘くなるのだから、あやうく断られるところだった」

「いや、そんな事はない。今回の件、お膳立てしてくれたお前に感謝してる。……俺は、お前のためじゃなく、結局何に対しても自分のためにしか行動できないんだ。お前にはいつも申し訳ないと思ってる」

ユースフの言葉に、自分の思惑通り事を運んだはずのアーディンは不思議そうに兄を見た。

「俺がウバイドの宰相ワジルになれば、シュケムの王位継承権は剥奪されるはずだ。それなら伯父上も納得するだろうし、親父が死んだらお前がシュケムの王になる」

「やはりそんなことを考えていたんですね」

アーディンは呆れたようにため息を漏らした。今までアーディンがどんなに尽力しても、父親と兄の間を取り持つことは出来なかった。

「これでようやく親父の呪縛から逃れられる」

ユースフはそう言ったが、この時アーディンはユースフがサライの為に行動を起こし始めたのではないかと感づいた。

「兄さん、もう一人お忘れです。きっと義姉さんの呪縛からは逃れられませんよ」

アーデインが厭味っぽく言うと、ユースフもようやく肩の緊張をほぐして溜息をついた。

「エイダはお前が寝取ってやってくれ。気はきついがいい女だぞ」

「……冗談はほどほどにしてください。皇国の宰相の妻なら義姉さんもきつと満足するでしょう」

二人で冗談を言い合いながらも、アーデインは、目的のために兄はいずれ父にも手をかけるのではないかとうすうす感じ始めていた。

そして、ユースフは聖地オス・ローを手中に納めようとしているということをし、この時予感した。

オス・ローを落とすのは簡単だ。

だが、そうなればフロリスの大国ヴァロニアやシーランドが侵攻して来ることは間違いない。シュケムの軍事力だけではフロリスの軍隊に太刀打ちできないことをユースフは理解していた。それを迎え撃つだけの兵力が必要だった。

ユースフは決して手に入れることの出来ない【エブラの民】を手

に入れる為、聖地の概念を覆すような何かを引き起こそうとしているのではないかと思ったが、アーデインはその言葉を飲み込んだ。

一行の馬が通った後には砂埃が舞い上がり、その姿も話し声もかき消していった。

【悪魔】ラース

一年の中に四季の無いオス・ローは時間の流れが緩やかなのに比べ、ウバイド皇国では微かな変化を見せる自然がまるで生き急ぐように時間を追い立てる。

ユースフとアーデインがウバイド皇国から帰ってから、早くも七ヶ月が過ぎようとしていた。

その頃、29歳になっていたユースフは皇女シャーミールを妻に迎え、正式にウバイド皇国の宰相ワジルとなりアル・ワジル・ユースフ・アル・ウバイドを名乗るようになった。皇国の宰相兼軍司令官として住処をウバイド皇国の宮廷内に移していた。

そしてこの時、ユースフはエブラ信仰からモリス信仰へと改宗していた。

所用でシユケムに戻るようになったユースフは、そのままオス・ローまで足を伸ばし、久しぶりに一人で自分の家を訪れた。

初夏の時間、変わることなく麓の広場は多くの人が行き交い活気に溢れていた。ユースフは石畳の大通りを、巡礼に向かう人の波に乗って坂道を上っていった。

ドーム城下は、軒と軒の間に布が張り廻らされ太陽の熱を遮る。日の高く上る時間でも、その影に人々は屯し、立ち話や、時に座り込んで話していた。その様子を見ると不思議と懐かしい感じがして心が安らいだ。

途中で一人脇道に入り、自宅のある方へと流れを抜け出した。扉を開けて家に入っても今はもう誰も居ない。当然ながら、扉のすぐ横にある水瓶も干上がったままで、この家には長い間主がいないうことを物語っていた。奴隷達はユースフがウバイド皇国に行く際に、十分な金品を与え全員解放してやった。

ふと、懐かしい家の匂いと共に、「おかえり！」と無邪気に微笑むサライの幼い顔がユースフの頭をよぎった。

部屋は元奴隷のアブドがたまに訪れて、いつでも使える様に整えてくれていた。皇国へ行ってからというもの、常に誰かと行動を共にしていたので、久しぶりに煩わしさから解放された気分だった。

数ヶ月しか経っていないのに、自分の部屋もベッドも随分粗末に見えた。この狭いベッドでよく二人も寝れたものだと思った。

まだ日も高かったが、ユースフは久しぶりに自分のベッドに身体を横たえた。低い天井を仰ぎながら、サライのことを思い出した。

あの後、多忙のまま時が過ぎサライとは一度も会えていない。サライに何も告げないまま、このオス・ローの家を出る事になってしまったのだ。

最後に見たサライの表情を思い出し、あの時サライが何を思っ

いたのか考え出すと、サライの事が頭から離れなかった。

会いたい……

あの【壁】の向こう側から、サライを連れ去ってしまおうか……

そんな風に思ったのは初めてだった。

どうやらユースフはうたた寝をしてしまったようだった。随分長い時間寝ていたのか、気が付くともう日が傾き始めていた。

ちょうど巡礼者達が宿に戻る時間帯なのだろうか、少し表の通りが騒がしかった。大通りから少し逸れた家の中にまで外の喧騒が届いた。

ユースフが表へ出てみると、丘の方から騒ぎながら帰ってくる者と、騒ぎを聞きつけて丘を登っていく者達で大通りはごった返し、いつもと何か様子が違った。

人々は口々に「悪魔が現れた」というような事を言って騒いでいた。

（悪魔……？）

秋色の空の下、ユースフは数年ぶりに丘の上のドームを目指した。

怯えるように丘を下って帰る者に逆行しながら石畳の丘を登っていくと、徐々にドームの門【天国の扉】が見えてくる。

【天国の扉】の前には、まるで弔いの儀式が行われる時のような人垣が出来ていた。

だが、弔いの儀式は真夏の時間に行われるはずだ。そしてその美しい儀式を眺める観衆たちは声が出せず静まり返っているはず。ザワザワとさざめく声と異様な雰囲気不安を駆り立てるようだった。

人垣を掻き分け前に進み出たユースフの目に信じられない光景が飛び込んできた。

そこには背の低い磔柱が立てられ、【エブラの民】の女が磔になっている。白い服の裾の方が紅く染まり、鮮やかな濃淡を成していた。

それを見た瞬間、ユースフの心臓が早鐘を撞くように鳴った。

女の首は力なく項垂れ、長い髪が顔を遮っていたが、その髪も、腕も、身体も、足も、全てがユースフの記憶にあるものだった。

「サライー!!」

ユースフは人を押し退けて磔柱の真正面まで駆け寄った。

そしてサライの両手首と胴体を縛っている綱を切ろうとした。すると周りにいた男達がユースフにすがり付いてそれを止めた。

「やめる！ これは【エブラの民】の所業なんだ！ 何か意味があるはずだ！」

「さっき悪魔が現れてその【エブラの民】と話していたんだぞ！」

口々に投げかけられたが、ユースフは男達を振り払い構わず綱を切りサライの身体を抱きとめた。

「呪われちまえ！」

制止を聞かなかったユースフに汚い言葉を吐くと、男達は逃げるようにその場を去っていった。

空が茜色に染まり秋気に包まれる中、まだ野次馬でユースフを遠くから眺めている者もいれば、丘を下って逃げていった者もいた。

ユースフによって捕縛から解放されたサライはまだ息があった。地にサライをそっと下ろす。

「サライ！」

ユースフが呼びかけると、サライは目を虚ろに開いた。

「ユースフ……、ごめんね……」

サライの董色の瞳がユースフを見つめていた。

「……もう、会えないって……思ったの……」

サライの瞳から涙が耳に向かって流れ落ちた。

「……お願い、助けて」

「必ず助けてやるから喋るな」

「……わたし……、【エブラの民】を助けて……」

最期の力を振り絞ってサライはユースフに何か伝えようとしていた。

「……、【エブラ……】……、ラースと……」

サライの声はますます小さく、聞き取りにくくなっていった。

その時。

サライがその名を口にした時だった。

辺りが一瞬にして真っ暗になった。

すぐ前にあるはずの【天国の扉】さえ見えなくなった。

壁など存在しないはずなのに、歩けば踵が反響しそうな、そんな閉塞感が辺りを取り巻いている。

ユースフは一瞬、自分が盲してしまったかと思った。

ユースフがサライを抱いたまま顔を上げると、一人の男が静かに傍らに立っていた。

真っ白な肌に金色の髪、翠色の目をした、この世のものとは思えない美しい男だった。暗闇の中でも男の金色の髪は明るく輝いていた。力強く萌える樹木のような色の翠の目に、吸い込まれそうな錯覚を覚えた。

だが、その男の瞳にユースフは全く映らず、サライの姿だけが映っていた。

『アルフェラツの娘よ』

男の声は直接頭の中に聞こえてきた。

『二つ目の魂を預かりにきた』

「ライス・アル・グフル……」

ユースフの腕の中に居たサライが先ほどよりもはつきりと答えた。

『さあ、望みを申せ』

ユースフは男に圧倒されて声が出なかった。

「……わたしの望みはユースフにしか叶えられないよ……」

ライスと呼ばれた男は黙ってユースフにすがりつくサライを見つめていた。

サライはライスを無視し、瞳を潤ませながらユースフに語りかけた。

「ユースフ……、キスして……」

サライの腕がユースフの頭を包み込んだが、ユースフは軽く唇を重ねただけだった。

「違うよ、あの時みたいに……」

ユースフは照れくさそうに微笑んで言うサライを抱き寄せると、サライの望むとおりのキスをしてやった。

いつの間にかラースと呼ばれた男は居なくなっていた。
ちゃんと周りの風景も見えている。

そして、ユースフの腕の中ではサライが息絶えていた。

* * * *

ユースフのベッドの上でサライは眠っていた。

【エブラの民】の白い衣服を脱ぎ、オス・ローの女達と同じ服を

着て眠っている。

ユースフはその傍らに椅子に座って伏せていた。昨夜から夜が明けても、何時間もずっとそのまま動けないでいた。

ユースフはサライの言葉を思い出した。

【エブラの民】は死を迎えると、灰になり、地に帰る。
天国は地にあり、地獄はこの世界だと教えてくれた。

そしてサライは天国の地に帰ることは許されず、磔柱に括られ、地獄に晒された。

地獄に晒されるほどの罪をサライに負わせたのは、ユースフだった。

* * * *

夕方、ハザンがユースフのもとを訪れた。

心配して来ていたアブドにユースフの部屋へと案内されたハザンは、ベッドの傍らに伏せているユースフの背中を見て溜息を漏らした。そしてベッドに横たえられたサライの姿を見て頭を横に振った。

「なんと……。大罪を背負ったものだな……。ユースフ。彼女のた

めに祈ろう」

ハザンがそう言うのと、今まで動かなかったユースフが突然立ち上がり怒鳴った。

「やめろ！ 一体何に祈るって言うんだ！ 神か？ 悪魔か？」

感情を剥き出しにするユースフにハザンは黙り、ユースフはハザンに背を向けた。

「ユースフ……、実は私も昨日【天国の扉】の前に居たんだ」

そう言っ、振り向かないユースフの背に向かって話し続けた。

「悪魔は二度現れたんだよ。お前さんがドームに来るより前にも悪魔は現れて、その場に居た全員がそれを目撃したんだ……」

「悪魔……？」

ユースフが振り返った。

「……ラース・アル・グフル……？ あの男は【悪魔】………なのかな？」

「おそらく皆そう思っているさ。その悪魔が、彼女に向かって言ったんだ。『大切なものと引き換えに望みを叶える』と……」

ユースフが居た時にもラースはサライに『望みを申せ』と言っていた。

「彼女は何も言わなかったよ。だが、悪魔は一人話し続けて、【エブラの民】に呪いをかけると言うと言っていった……」

「【エブラの民】を呪う……？」

昨日のサライの今際の言葉が蘇る。助けて欲しいのは【エブラの民】にかかった呪いの事なのだろうか。

「私に手伝えることがあったらいつでも言うてくれ。力になろう」

「帰ってくれ……」

そう言うだけで今は精一杯だった。考えが上手くまとまらない。

「ユースフ、アリシャから聞いたよ。こんな時に何だが、皇国のワジルになったそうだな。素晴らしい昇進だ、おめでとう」

そう言うて、ハザンは帰っていった。

部屋に一人残ったユースフは、眠り続けるサライの頬にそっと触れた。サライの身体は冷え切って、温かさは伝わってこない。

重ねて置いたサライの手の下の膨らんだ腹が目に残った。通常とは全く違う、大きく膨らんだ腹は、失われた命は一つだけではなかったことを物語っていた。

この七ヶ月の間、子を宿したサライは一体どんな想いで過ごして
いたのだろうか……。

この小さい命を喜んだのだろうか？

一人悩み苦しんだのだろうか？

助けを求めてユースフの所に来たのではないか？

その時この無人の家を見てショックを受けたのではないか？

サライのことを知ろうとしなかったユースフには、サライがあ
のドームの【壁】の中で、何を思いどんな生活をしていたのかさえ
到底思い及ばなかった。

「……呪うなら、俺を呪えばいい……」

ユースフは唇を噛み一人呟いた。

サライが死んだと言うのに、涙は一滴も出なかった。

ファールークの【王】

ファールーク王国の皇都サンドラの皇宮で、リユーシャが献身的に看病を続ける中、ハリーファは高熱を伴って深い記憶の夢の中を彷徨い続けていた。何度か熱が下がり一時快方に向かったが、落ちていたと思った頃に再び熱を出しては床に伏せっていた。

リユーシャが水を含ませた布をハリーファの額に乗せると、ハリーファは苦しそうにうわ言を呟いた。

「……ライ、……サライ……」

ハリーファのうわ言を聞いてリユーシャは一人苦笑した。

《お母様のお名前の次は、伝承者エブラの妻の御名なのね。わたくしの名前は呼んでももらえないのかしら……》

「……！？……」

頭の中に直接声が聞こえ、ハリーファは突如飛び上がるように上体を起こした。息をするたび苦しうに肩が上下し、翡翠色の目を見開き部屋の中を見回した。

ここがファールーク王国の本宮である事は理解できた。比較的小さく、質素な部屋ではあるが見覚えはある部屋だった。

「大丈夫ですか？ ハリーファ様？」

覗き込んで声を掛けてくるリューシャを、ハリーファはじつと見つめた。

「……………」

名前が出てこなかった。夢で見た沢山の男の記憶と現実が混乱して、ハリーファは目の前に居る金色の髪的女奴隷の名前が思い出せなかった。

「ハリーファ様、お薬をお持ちしますわ」

リューシャはそう言つと部屋を出て行つた。

ハリーファは自分の手のひらをじつと見つめ、その後顔に手をあて自分の姿を確認した。

「ハリーファ……………」

独り、小さな声で呟いた。

「これは現実なのか……………」

今度は夢ではなく現実の名前だと実感するのに、少し時間がかかった。

（俺は生まれ変わったのか？ 一体何回目なんだ……………これは……………）

どこか見覚えのある壁や天井を眺めながら、またサンドラにある宮廷に連れて来られたのだと思い込んでいた。

「ハリーファ様、お召し替えもなさいますか？ 随分汗を……、あら」

リユーシャが熱冷ましの薬を準備し、水を注いだピッチャーとグラスを盆に乗せハリーファの部屋に戻る頃には、ハリーファは再び眠りに落ちていた。

ハリーファが見ていた夢は、ある男の記憶だった。

。・*：・
。・*：・
。・*：・

ハリーファは馬上から聖地オス・ローの空を見上げていた。

日が傾き始め青空は東から少しずつ茜色に染まり、頬に触れる空気は少し冷たくなってきていた。

オス・ロー麓の石畳の広場は、宿に戻る前の巡礼者で溢れかえっていた。

その雑踏の中を人を避けながらゆっくりと馬に跨ったまま坂道を上ると、途中の共同の厩舎に馬を預けた。

通りに戻ると乱れた外套をばさつと大きく翻してかけなおした。坂を下る巡礼者とは逆に徒歩で坂を上っていった。

ドームに程近い高所得層の住む地区にある家の扉を開ける。中から暖かい空気が表に流れ出した。

「おかえり！」

扉を開けると、黒い肌の少女が満面の笑みを見せてハリーファを
迎え入れてくれる。

「おかえりなさい！ ユースフ」

○
.
*
:
.

.
○
.
*
:
:
○
.

○
○

:
:
:
*
.
○
○

.
*
:
:
○
.

:
○

:
*
.
○

夢の中の少女に過去の名を呼ばれ、ハリーファの意識はユースフへと変わっていった。

ユースフの死

サライの死後、ユースフはウバイド皇国に戻り、宮廷内で勢力を振るっていた黒人宦官ムータミンを殺害、その奴隷軍兵を撃破し、シュケムの国制を導入や体制の切り替えを行った。そして確実に政権を固めていった。

四年後、ウバイド皇帝サーリムが20歳で病死した。

この時、ユースフにはエイダとの間に第一子アフダルが生まれたが、シャーミールとの間にウバイド皇家の血を引く子供は生まれていなかった。

結果ウバイド皇国は跡継ぎのないまま終焉を迎えた。

この年、ウバイド皇国に代わって、ファールーク皇国がアル・マリク・ユースフの名の下に成立する。

ユースフはシュケムの君主とその従兄妹である妻エイダの為に、シュケム王国に臣従するという形式でファールーク^{マリク}皇国の王を称した。

ユースフ・アル・ファールークは、アル・マリク・アル・ファールークと名乗るようになった。

翌年、シュケムでは王が崩御し、ユースフの父ファールークがシュケムの王となったが、後を追うようにファールークが急逝した。

それを機に、モリスの大国ファールーク王国が中央の小国シユケムを取り込んだ。ユースフがファールーク王国の実権を握り、弟アーディンを宰相に迎えた。

この年にユースフとシャーミールの間には長女メイサが誕生した。

ウバイド王国と、中央の地にあったシユケムという小国は、相次いで地図と歴史上から姿を消した。

* * * *

さらに歳月が過ぎユースフが五十路になる頃、聖地オス・ローにヴァロニア・シーランドの連合軍が侵攻して来た。

ユースフ率いるファールーク軍はこれを撃破し、今まで独立していた聖地オス・ローは事実上ファールーク王国のものとなった。

晩年のユースフは、皇都サンドラの事はアーディンに任せ、戦線だったオス・ロー近くのシユケムに居を構えていた。

シュケムの住民たちは大陸方面に移動し、シュケムは今ではファールーク皇国の対フロリスの軍事拠点となっていた。

中央の地の北方にあるシュケムの宮殿は、ウバイド皇国の遺産であるファールークの宮廷に比べると非常に質素な造りだった。切り出した石と干しレンガで出来た清貧な城には無駄な装飾などは何一つ無かった。

ほとんどの部屋の中には、ただ寝るためのベッドとものを書くための小さな机と椅子が一組あるだけで、他には何もなかった。

そのシュケムの元宮殿で、55歳になったユースフは病床に伏していた。

オス・ローがファールーク皇国のものとなった頃から、ユースフの身体は病魔に冒されていた。

自分の呼気が喉を通る嫌な音が、やたらと耳についた。

ユースフはベッドに身体を横たえ目を閉じてはいたが、その音が頭の奥に響き眠っているのか起きているのか自分でもわからなくなっていた。

医師以外の者がユースフの病に気づかぬようと、ここ六年間ユースフは気丈に振舞っていた。だがそれも限界で、とうとう最期の時が近づいたようだった。

おそらく医者が気遣ったのか、数日前に皇都からアーディンとユ

ースフの一人娘のメイサが呼び寄せられていた。

今まで薬草で紛らわしてきた身体の痛みが、不思議と今晚は感じられなかった。だがもう身体を自分の意思で動かすことが出来なくなっていた。

空はすっかり勝色に染まり星がちらついていた。

土色の質素な宮殿の、君主の私室に取り付けられた大きな硝子の窓からもその様子が見えた。

ベッドの横に置いてあるオイルランプの灯りが微かに揺れ、ベッドの傍らから窓辺へと歩く女の影が壁に映った。

「お父様、窓は閉めておきますね。新月の夜は神魔^{シン}が現れると言いますから」

モリスにある皇都と違い、中央の地は夜になると冷えて昼夜の寒暖差が激しく、病床のースフの身体には堪える。ースフの長女であるメイサは開け放たれたまま忘れられていた窓を閉め、中央の小さな門をかけた。

娘のメイサはちょうど結婚した頃のシャームールと同じ年頃になり、母親に良く似ていた。モリス信仰の成人年齢である12歳を迎えたアーディンの息子ナーシルと数ヶ月前に結婚したところだった。

メイサはベッドの傍に戻ってくると、猫のような魅惑的な漆黒の瞳でースフを見つめた。

「メイサ、新妻が夫をおいてこんなところに来ていいのか？」

ユースフが言うと、メイサは明るく微笑んで言った。

「叔父様まで皇都を離れてこちらに来ているんですもの。わたくしの可愛い君主様は、マリクマリクのアフダル兄様と一緒に皇都でお留守番です」

「そうか」

ユースフは自分の経験からか、長男アフダルを始め他の息子たちと上手く父子関係を結ぶことが出来なかった。メイサは気を遣って誤魔化したのだろうが、だからこそ今自分の傍に息子たちの姿は無いのだと悟った。マリクの継承権をアーディンの次席は、嫡子のアフダルではなくアーディンの息子ナーシルにしたことにも腹を立てていたのだろう。

「お父様、ゆっくりお休みになって」

メイサはそう言ってベッドに横たわったユースフにキスすると、部屋を出て行った。

ユースフが目を閉じると、瞼の裏に光る大地が映った。

そこに白い衣装を纏った無表情なサライが居て、両手から零れ落とすように灰を撒いている。サライの足元に落ちた灰はそこだけは光らず、くすんだ影がサライの足元に広がっていた。まるで何かを暗示するかのように。

この幻覚は自分の弔いなのかとユースフは思った。

扉をノックする音に、幻想的な映像はユースフの脳裏から消えた。扉を開けてアーディンが入ってきた。ベッドの横まで来てユースフに話しかけた。

「兄さん、具合はどうですか？」

「ああ、最悪だ」

「昨日よりは元気なようですね」

どこか寂しげに微笑むアーディンの顔が、先程のメイサの顔とダブった。

「俺は【エブラの民】に送りたいのに、お前たちが次々見送りに来る」

「六年前のフロリスの侵攻以来、【エブラの民】は一度も【天国の扉】を開けていませんからね……」

【エブラの民】は外界との扉を閉ざしてしまったのだらう。

アーディンはベッドの横にあった椅子に腰掛け、横にあるランプの灯を調節し少し大きくした。

「アーディン、俺は償えただらうか」

「……わかりません。ですが償い切れなかったなら、来世で償え^{アーヒラ}ば善いのです」

ユースフは自分の死期を悟っていたつもりだったが、アーディンの答えからそれがもう間近なのだと確信した。

「お前の信仰はエブラなのかモリスなのかわからないな……」

「私の信仰は兄さん、貴方ですよ」

「……俺はお前を救済するどころか劫罰を課した」

「謝罪は兄さんの信じる神にすればいい。扉の向こうで……サライが迎えてくれますよ」

アーディンは26年間、一度も出してこなかったサライの名前を初めて口に出した。ユースフは何も答えず、二人の間にしばらく沈黙が続いた。

「俺はサライには会えない……」

しばらくしてユースフがそう呟いた。

「【エブラの民】を助けるとサライと約束をした」

「フロリスの侵攻からオス・ローを守ったではないですか」

だがユースフには、サライがそんなことをユースフに頼んだようには思えなかった。

六年前のフロリスとの会戦で、戦場となったオス・ローの街は大

きな被害を受け半分以上が崩れ落ちてしまった。城下は少しずつ復興しつつあったが、フロリスから国境を越えることは禁じられ、巡礼者も訪れなくなった。

そして、【エブラの民】が【天国の扉】を開けて外に出てくることはなくなってしまった。

【エブラの民】を呪う……伝え聞いた【悪魔】の言葉が常にユースフの頭から離れなかった。死を目前にして、ユースフの心に残ることは【エブラの民】とサライの言葉だった。

「もう下がってくれ」

アーデインは素直に従い、静かに部屋を後にした。

深夜、誰も居なくなったユースフの居る部屋を微かに流れていた風が止まった。

それは窓が閉められたからだけではなく。うるさいほどの静寂が辺りを包み込んでいる。

部屋の中にいつの間にか男が現れ、ユースフの枕元へと近づいてきた。

その男は不気味なほど真っ黒な服を身に纏っていた。だが、透き通るような真白な肌、明るい金色の髪、吸い込まれそうな翡翠色の瞳を持つその姿は、まるで美しい天使を思わせた。

男はベッドの傍らに腰を掛け、不思議な笑みを浮かべてユースフを眺めていた。

ユースフの心に過去の出来事が次々と浮かび上がった。

聖地、サライ、【エブラの民】、呪い、皇国。

王となり、オス・ローを手に入れても、サライとの約束は果たせていない。

【エブラの民】を助けて

そう言ったサライの本当の気持ちが分からないままだった。

『ふふつ、欲望だらけだね。人間らしくていいな』

「……ラース……来たのか……」

かすれた声でユースフが男の名を呼んだ。

『しゃべらなくてもいいよ、僕は心の中が読めるから』

ユースフは目を開けて枕元に居る男の姿を見た。【悪魔】に年齢など関係ないのだろうが、サライが死んだ時に見た姿より若干若く見える。だが、その容姿は変わらず美しかった。暗闇の中でも金色の髪は光のような明るい輝きを放ち、翠色の瞳は力強く萌える樹木を思わせた。

『ああ！ あの娘、覚えてるよ。命を二つ持っていたね』

ユースフの心の中にサライの今際の姿を見たようで、ラーズは饒舌になった。時折一人でくっくつと笑う。

『【アルフェラツの子】に呪詛させるなんて。人の想いは本当に恐ろしいね』

《アル・フェラツ……？》

『ああ、人間は【エブラの民】って言ってるんだっけ』

ユースフの心の声にラーズは答えた。

《教えてくれ、サライの、【エブラの民】の呪いとは何なんだ……》

『あの場に居たのに、あの娘の心はあんたに伝わらなかったんだね。人間は本当に不便だな』

ラーズの表情は心なしに冷ややかになり、ユースフを睨みつけていた。

『あの娘はエブラの血に苦痛を与えた。【エブラの民】はやがて滅びる』

《なぜそんなことを……》

『【エブラの民】が混血を認めなかったからだよ。そりゃあ、あの娘もただの人だから怨みもするだろう。僕はそういう自我^{エゴ}は大好きなんだ。それこそ人間の美しさだ』

と、ラーズはうつとりした表情をみせた。

ただの人、という言葉がユースフに押し掛かる。【エブラの民】は自分とは違う神聖な存在だと信じ、サライと自分の間にあった心の【壁】を壊せないままだった。

サライは腹の子を殺され、【エブラの民】を怨んで呪いをかけたというのだろうか……。過ちを犯したのは、律を破ったユースフとサライだというのに。

『そんなだから、あの娘の心が分からないんだよ』

ユースフの心の葛藤を聞いて、ラーズは楽しそうに笑みを浮かべていた。

『まあ、女を理解しようなんて男には絶対無理だろうけどね』

ラーズは楽しそうに足を揺らした。

『ああ、そうだ!』

ラーズはどこからか細かい装飾の施された腕輪を出すと、ユースフの右腕にはめた。

『これはあなたに返しておこうかな。その方が楽しくなりそうだ』

それはユースフにとって見覚えのある腕輪だった。【エブラの民】が門を出て弔いの儀式を行う際、先頭に立つ男の右腕にはめられていたものだった。

『これは、あの娘の望みを叶える代わりに貰った物だよ』

《この腕輪は【エブラの民】の長の物……！　なんてことを！》

ラースは挑発的な笑みでユースフを見つめた。

ユースフはショックで咽で、激しく咳き込み、胸元が真っ黒に染まった。

『もうあなたの身体が限界みたいだね』

ラースがベッドから立ち上がった時、ユースフの部屋の扉を激しく叩く音がした。部屋の主の返事を待たずに扉が開けられた。

「兄さん？　大丈夫ですか？」

瞬間、部屋の中は不気味な閉塞感と、盲しいたかと思わせる闇が辺りを取り巻いた。

ラースの瞳にアーディンは全く映らず、ユースフの姿だけが映っていた。頭に聞こえてくる口調が先程までとうって変わり、表情は微かに冷たい微笑を湛えていた。

それは、初めてラースを見たあの時と同じだった。サライが死んだ、あの時と。

『ユースフ・アル・ファールークよ、お前の望みを叶えよう』

「ラース・アル・グフル……」

『さあ、望みを申せ』

「私は……すぐに、生まれ直したい」

自分の死期を悟った頃からユースフはずっと考えていたのだ。今生では果たせなかった事を成す為にどうしたら良いのか。

その時浮かんだのは、若い頃に自分の罪悪を許してくれたアーデインの言葉だった。

一生かけても償えないなら、何度でも生まれ変わって

《サライとの約束を果さなくては……》

ラーズはにやりとした。自我^{エゴ}に溢れた人間を見るのが実に愉快そうだった。

『いいだろう。但し、私はアルフェラツのように命を与えることはできない。だから、新しく生まれた命の中にお前の記憶を埋めてやるでしょう。』

その代わり、生まれ変わっても女に子供を生ませてはならない。
決して生に関わるな』

その言葉を最期に、【悪魔】とユースフの魂は姿を消した。

ユースフの急変を感じて扉を開けたアーデインは、目の光景に言葉を失った。

アーデインが見たものは真つ暗な空間と、そこに浮かび上がる美しい【悪魔】と兄ユースフの今際の姿だった。

* * * *

ユースフの死後、ファールーク皇国の王はアーデインが、宰相はその長男ナーシルが勤めていた。

最高司令官を失ったファールークの軍事力は落ち、一度ファールークのものとなった聖地オス・ローは、シーランド軍によって制圧され奪われた。

シーランド王国に奪われたオス・ローを取り戻す為に、ユースフの時と同様、アーデインは皇都を息子に任せ自ら戦蓋の下に身を置いた。

そしてユースフの死から18年後。

ユースフを失って以来、弱体化の一途を辿っていたファールーク軍だったが、とうとう聖地オス・ローをシーランド軍から奪還する

悲願を成し遂げた。

アーデインは老齡とは思えぬ健脚さでオス・ローの瓦礫の中を歩いていた。

かつての活気に溢れていたオス・ローの街は見る影も無い。建物はほとんど崩れ落ち、日を遮る物は何もなくなっていた。真夏の時間、太陽が容赦なく頭上に降りそそいだ。

数日前にシーランド軍が撤退し明け渡されたオス・ローには、まだ生々しく戦いの痕があり、あちこちで小さな煙が立ち上っていた。

「アル・マリク、こちらです」

少し先を歩く案内人が、アーデインをファールークの奴隷軍がいる場所へと案内してくれた。むせ返りそうな匂いがたちこめ時折咳払いをしながら、ドームのある方へと足場の悪い道を上っていった。

アーデインは今回の戦いも敗退を余儀なくされると計算していた。今回の勝利は奇跡的な誤算であったが、不思議な噂を耳にしたのだ。

奴隷の一兵が戦いを勝利に導いたのだと。
その奴隷兵の右頬に傷痕があったと。

（まさかとは思うが……。だが、もしそうなのだとしても『あの人』が自ら名乗り出てくる訳が無いだろうな）

途中、地べたに座り込んで何かの作業をしている黒人奴隷兵達は、通り過ぎるアーデインを自国の王の顔は知らなくとも、その出で立ちから明らかに高貴な人物だと判ったようだった。アーデインが通り過ぎると、皆の視線はその老王の背中を追っていた。

そのまま瓦礫の転がる坂道をずっと上っていくと、ドームを囲う城壁と【天国の扉】が見えた。さすがに象徴であるドームはシーランド軍の攻撃も免れたようだった。その門前の広場にたくさんの奴隷兵が屯していた。

「アシュラフ！」

案内人が叫ぶと、地べたに座って話し込んでいた集団から一人の黒人奴隷兵が立ち上がった。ターバンを撤いたその黒人奴隷兵は、案内人に手招きされ二人の近くに歩み寄ってきた。

青年と言うにはまだ少し歳若い黒人の奴隷兵だった。白いターバンを頭に巻き、砂除けで顔を覆っていた。漆黒の瞳がその隙間からアーデインを見据えていた。

騒がしくしていた奴隷兵たちは国王の姿に気が付くと口を閉じ、作業を止めて仲間の背中を見守った。

「彼がアシュラフです、アル・マリク」

アシュラフは無言で敬礼した。それはシュケム式の敬礼であった。

アーディンははたと思い出したかのように、同じようにシユケムのやり方で敬礼して返した。

目の前に来た若い奴隷兵を、アーディンは思慮深げに眺めた。タバンの隙間に見える黒い瞳に、見覚えのある憂愁を湛えていた。

「この度のオス・ローの解放、『貴殿』の活躍あつてのものだったと聞いている」

案内人がアシユラフの耳の横で「アル・マリクだ、布を外せ」と言うと、兵士は首の後ろに手を回し鼻と口を覆っていた砂避けを外した。

「……なんでも褒美を取らせよう」

何も言わず真っ直ぐにアーディンを見据える兵士の顔を見て、アーディンの声が微かに震えた。

「申すがいい」

「では、自由を」

そう答える黒人兵士の右頬に、かつて自分が聖裁と言ってユースフに切りつけた太刀筋と全く同じ傷痕があった。

ファールーク皇国 皇子ハリーファ

ファールーク皇国では新年を向かえてから、一月近く日が過ぎようとしていた。

井戸水の水位が最も高くなり、モリスの短い冬もこれから終わりに向かうことを知らせていた。

日が暮れかけた頃だった。

ハリーファが目を覚めたのは皇都サンドラにある宮廷内で、ハリーファに与えられていた部屋のベッドの上だった。

汗ばんだ身体を半分起こしてみると、高熱も治まったようで身体が随分軽く感じられた。

ハリーファは長くうなされ続けた夢の中で、本宮ではない部屋で監禁され続けていたのを思い出した。

（ここは【王の間】じゃない……）

そして夢の中で、足に長い鎖の付いた枷を付けられていたことも思い出した。

恐る恐る、右足を引き摺るようにそつと動かしてみた。だが、夢の中の記憶のような重さも感じず、ジャラジャラと金属同士が擦れる嫌な音も聞こえなかった。

（足枷も付いてない……）

ハリーファは砂色の壁に囲まれた部屋の中を見回した。

皇子の部屋としては随分質素な部屋だったが、ウバイド皇国時代から受け継いだ壮麗な本宮の中だとわかりハリーファは心底安堵した。

夢の合間には何度もリユーシャの顔を見たが、珍しくリユーシャが傍に居なかった。

ハリーファはベッドから静かに下りると、ドアを開けて廊下を見渡した。今はおそらくモリス信仰者の夕方の祈りの時間なのだろう。窓の外から歌うような祈りの言葉が聞こえてくるが、廊下に人気は感じられなかった。

ハリーファは上着を羽織り、女のように布を頭に被るとそつと部屋を抜け出した。

長い廊下を足音を立てないようにひた走る。

その途中、ある部屋の前でハリーファはふと足を停めた。この宮殿の中で最も良い位置にある部屋だったが、ハリーファが生まれる前からその扉は固く閉ざされ、一度も開けられたことはなかった。その事を疑問に思うことも、理由を問うものも居なかったが、ユースフの記憶が甦った今その理由がわかった。

ハリーファは、レリーフが彫られた重厚な扉にそつと手を触れ、そこに描かれた絵文字をなぞった。

（ここはウバイド皇国最後の皇帝の部屋だ……）

この部屋の前でシャーミールと再会した記憶も鮮明に甦る。ウバイド皇国の最後の一人となったシャーミールの為に、この部屋の扉はユースフ自身が閉ざしたのだった。

ハリーファは感傷に浸る想いを振り払い、その扉の前から走り去った。部屋を出て一度遠くなった祈りの歌声が、また階下から響いて聞こえてきた。

ハリーファは人目に付かないよう本宮から抜け出すと、今まで行った事もなかった厩舎へと向かった。

夕刻の祈りの時間であったことが幸いしたようだ。厩舎から馬を連れ出すと、祈りに勤しむ門番の目を盗み王宮から抜け出した。

城門を出ても市井の人々も祈りのために家に入っているようで、城下の通りにも人の姿は無かった。この間に城下を抜けてしまおうとハリーファは急いで馬を走らせた。

城下街を抜けたところで一旦馬の速度を落とした。

目の前に広がるのはただ砂漠だったが、オス・ローへ行く道のは過去に何度も通った道だ。目を閉じていても馬を操れそうな感覚に包まれた。粉砂の上を馬を駆る感覚が甦ってきた。

ハリーファは馬から下りると、帯を外して広げ馬の鼻革と頬革にくくりつけ、簡易に砂除けを作ってやった。

そして自分も頭に被っていた布を使って鼻と口を塞ぐと、再び鎧に足をかけた。

後方に砂塵が巻き上がり、空気を砂色に混濁させていく。

奴隷兵アシュラフは、オス・ロー奪還の戦功を認められアーディンから異例とも言える『解放』の恩情を受けた。そしてその後は聖地の為にその身を捧げる事を誓い聖地復興に尽力していた。

だが解放された六年後、自由を約束してくれたアーディンが死ぬと、アシュラフはアーディンの子らによって捕らえられ、宮廷内の建物に監禁され自由を奪われてしまった。

聖地や【エブラの民】がその後どうなったのか全く分からない。サライとの約束さえ果たせていない。

自分の目で聖地や【エブラの民】がどうなっているのか確かめずにはいらなかった。

ハリーファを乗せた馬は速足で聖地オス・ローを目指した。

* * * *

ハリーファは休むことなく馬を走らせ、一晩かけて砂漠を駆け抜けると中央の地に辿り着いた。

聖地オス・ローと呼ばれた廃墟に到着した時には、太陽は頭上を少し通り過ぎ、真夏の時間に差し掛かっていた。

二百年前、ユースフの死後一度シーランド王国に奪われたこの聖地オス・ローを、ファールーク皇国はアシュラフの活躍によって奪還した。その時の戦いでオス・ロー城下の町は崩れ去ったのだ。

オス・ロー奪還後の六年間、アシュラフは町の復興に加わってきたが、その時から街の崩壊具合はまったくと言っていいほど変わっていなかった。むしろ、何もせぬまま時間が過ぎ、争いによる人的な破壊だけでなく、自然に風化倒壊した町並みはアシュラフが最後に見たオス・ローの町の風景よりさらに荒廃を進めていた。

その光景を見てハリーファは馬上で言葉を失った。

軽い頭痛と嫌悪感に襲われ、下馬してこの土地に足を着きたくないと思っただ。ここは聖地だというのに……、そんな風に思う自分の心にも焦燥感が押し寄せた。

（ドームはどうなったんだ。【エブラの民】はまだここに居るのか……？）

【エブラの民】の事を思うとハリーファの気持ちは急いた。古い記憶の町の風景を重ね合わせるように、瓦礫の中を手綱を操ってゆ

つくりと丘を登っていく。

熱さにこめかみに汗が幾筋も流れるのを感じたが、汗は頭に巻いている布に吸われていった。

真夏の時間は巡礼者がドームの【天国の扉】を訪れるピークであった。過去に二度だけ見た【エブラの民】の幻想的な弔いの儀式が行われる時間だった。

ドームの前まで辿り着くと、ハリーファはまたその光景に愕然とした。

城壁は崩れ落ち、【天国の扉】は柱しかその姿を留めていない。外界からの進入を阻むものは、そこにはもう何も無く、門の向こうに崩れた建物の姿が見えた。

今まで想像する事すら出来なかったドームの内部が丸見えになっている。もう【エブラの民】がここで生活していないことは明白だった。

ハリーファは門前でようやく馬から下りると、門のぎりぎりまで歩み寄った。

弔いの儀式のとき以外に開けられることの無かった石の扉が今は崩れて無い。記憶の中の石の扉に手を触れようと、掌を伸ばしたが、現実に扉は無く、差し出した掌は虚しく空を押しただけだった。

ハリーファは長い時間そこで立ち尽くしていた。

門柱を超えた向こう側に、ユースフが踏み入ることの出来なかった領域が見えている。【天国の扉】がこんな状態の今でさえ、この門の跡を跨いで向こう側に入って善いものか迷わずにはいられなかった。

自分が何度も唾を飲み込む音が直接耳に響いた。頭に巻いていた布も随分汗が滲んで不快だった。

どの位の時間が経っただろうか。

ハリーファは頭に被っていた布を外し足元に投げ捨てると、内外の境界であった門の跡を超えてドームに足を踏み入れた。

【王の間】

一年中熱いファールーク皇国にも四季がある。

皇都サンドラでは気温は年中同じ位で真昼には40度を越す暑気となる。

数キロ西に流れる川の支流が春の初めから夏の終わりまで干上がるため、下流の川の流れが無くなる。川がなくなる代わりに、所々に小さな水場が出来る。秋になると一気に水量が増した川は氾濫し、それが落ち着いた頃に冬が来る。

そんな変化に、砂漠の大陸モリスの人々は四季を感じて生活をしていた。

ファールーク皇国の王宮は、周りをぐるりと城壁で囲まれた城砦になっていた。

その中に、本宮、後宮、礼拝堂、警備兵舎、倉庫、記録局、旅館と言った独立した建物が点在する。

土地柄、海岸沿いが高台になっているので、見晴らしの良い東の海側に本宮が建てられていた。その屋根を見上げると、東の大陸フロリスとは全く様式の違う丸い大きな屋根があり、槍のような尖った塔が四方に建っている。その周りにはアーチ状の柱が規則的に並び、開放的な回廊が巡らされていた。

そして、宮廷の中には【王の間】と呼ばれる建物があった。

【王の間】とは皮肉で付けられた名称で、本宮の外に建てられた小さな館だった。

その小さな建物は周りをさらに鉄柵で囲まれ、窓にも鋳物の面格子がはめられている。

中から外が見えないようにしているのか、その周りには背の高い刃物のような葉の植物や、窓の格子を這うような蔦植物が植えられていた。出入りの扉から間を置かず、同じ鋳物の門扉までつけられていた。

入り口を入るとすぐの廊下に飲料水を汲んでおくための大きな水瓶が置いてあった。

少し奥に進むと扉のない部屋があり、そこは応接室になっていた。中央に長椅子が二台向かい合うように置かれ、椅子の大きさには合っていない丸いテーブルも置かれていた。

応接室の奥に二枚戸の扉があり主寝室になっている。ベッドの横の壁には、まるでそこに何かを繋ぎとめておけるような大きな金具が打ち付けられていた。

廊下をさらに奥に進むと、奴隷が使うための小さな部屋まで作られていた。

砂色が基本の本宮とは違い、この館を作った土煉瓦の色は朱鷺色をしていた。全体に幾何学模様のタイルが装飾として施されており、長椅子やベッドなどの調度品も決して質素なものではない。

【王の間】だけは他の建造物とは建てられた時代が違うようで、人目を避けるように造られた館は、そこだけ明らかに異質だった。

* * * *

正午を過ぎた頃だった。

ここ一ヶ月ほど、ハリーファが目覚めた時の光景はほとんど同じだ。ハリーファが目を開くと、リユーシャが心配そうに覗き込んでいる。

そしてリユーシャは優しく声を掛けながら、ハリーファの額に手を当ててくるのだが、今日のリユーシャはハリーファの顔を見ても、眉根を寄せたまま手を差し伸べてこなかった。

「ああ、良かった……。お気づきになられて」

ハリーファはそう言って涙を流すリユーシャの顔を見た。

リユーシャの頭上に、茶色の焼煉瓦を埋め込まれた天井が見えた。少しゆるやかなに円形を描く天井に、茶色の焼煉瓦で幾何学的な模様が描かれていた。

それを見た瞬間、ハリーファの顔が引きつった。後ずさるようにベッドの上でもがき半身を起こした。

「じ、じじは……」

「ハリーファ様？ もう大丈夫ですよ。ここは宮廷なのです」

青褪めたハリーファを見てリューシャは安心させるように言葉を掛けてきたが、リューシャの後ろに見える朱鷺色の壁を見て、ハリーファはますます身を硬くした。

本宮の片隅にあったハリーファの部屋より広く、壁にもタイルを使って美しい幾何学模様の装飾が施されている。ここは夢の中で閉じ込められていた、嫌な記憶のある【王の間】と呼ばれる部屋だった。

「聖地で……何か恐ろしい目に合われたのですか？」

横でリューシャが心配して声を掛けてきた。

「血まみれになって、お戻りになられて……。わたくしの所為でこんなことに……。死んでしまったのかと思い生きた心地がしませんでしたわ……」

リューシャは、自分が目を放した隙にハリーファが居なくなった事に深く責任を感じているようだった。

「ハリーファ様の為に、宰相様がすぐにお使いを出してくださいましたのですよ」

オス・ローまで追ってきた兵士達の事なのだろう。

リューシャの美しい声を聞くうちに、ハリーファは少しずつ落着きを取り戻した。

【王の間】に連れ込まれてはいるが、足枷は付けられていない。それにリユーシャがここに居ると言うことはまだ鍵も開いているはずだ。

「でも、どうして聖地なんかに向かわれたのですか？ わたくしが聖地の御話などお聞かせしたから……？」

よく見るとリユーシャの頬が赤く腫れ、目の横は青茶色く変色している事にハリーファは気が付いた。父である宰相ジャファルの仕業だとすぐに察しがついた。あの男は、たとえ相手が自分の氣に入りの女だろうと容赦ない。今までもハリーファに何かあるとジャファルの怒りは乳母のリユーシャに向けられていた。

だが、そんな事よりも、ハリーファは崩壊したドームや居なくなった【エブラの民】の事が氣になって、傍で優しく語りかけるリユーシャの言葉もハリーファの耳を素通りしてしまっていた。

何を問いかけてもハリーファが答えないので、暫らくしてリユーシャも何も言わなくなった。

ハリーファが目を閉じてベッドに横たわっていると、眠ったと思っただのか、リユーシャは考え事をしているようだった。

《本当にハリーファ様が御無事で良かった……。ハリーファ様の身にもし万一のことがあったら、もうわたくしは宰相様の御傍には居られなくなる。そんなことは絶対あつてはならないわ……》

リユーシャの心の中で呟く声が、ハリーファの頭に聞こえてきた。

人の心の声が、まるで普通の声のように聞こえてくる。それはハリーファが生まれ持った、人智及ばぬ能力だった。

大小の格子を組み合わせた木枠の付いた窓から橙色の光が斜めに差し込み、もう時間が夕刻になったことを知らせていた。

【王の間】の入り口でガチャリと大きな鍵を外す音が聞こえてハリーファは目を開けた。

漆黒の髪と目をした小麦色の肌の長身の男が、無然たる態度でハリーファが寝かされている寝室まで入ってきた。ハリーファの父親で宰相のジャファルだった。

ジャファルはリユーシャとハリーファを見て二人を睨み付けた。

《まだここに居たのか、リユーシャ……》

足音と共にハリーファにはジャファルの心の声が聞こえてきた。

リユーシャはジャファルに気がつく、自分の主人に対して腰を落として深く頭を下げ、ハリーファには何も言わず部屋を出て行った。ジャファルと二人になり部屋の雰囲気が一気に陰鬱になった。

《ハリーファめ、兵士の話だとフロリスへ逃げようとしていただと

？」

ジャファルは眉間にしわを寄せたまま、ベッドに近づくと横たわるハリーファを見下ろしじろりと睨み付けてきた。

今まで父親の怒りの形相から視線を逸らしていたハリーファだったが、射るような視線をジャファルに向け返した。二人の視線がぶつかり、間に見えない火花が散った。

ハリーファの様子にジャファルは忌々しげに声のトーンを一段落とした。

「命に別状は無いようだな……、ハリーファ」

「お前に死なれては困る。お前には精々長生きしてもらわないといかんのだからな」

ジャファルの声は耳に、心の声は頭の中に聞こえてきた。

「ハリーファよ、なぜ勝手に王宮を出たりした？ 世間知らずなお前が一人では無理だろう。誰の手引きがあつた？」

言うやいなやジャファルは答えなど待たず、ハリーファの手首を掴んで無理に身体を起こさせると、顔をきつくはたいた。

その勢いで、ハリーファはベットから落ちてしまい、顔の傷からまた血が滲み出た。

「……………」

まだ体力が戻らないまま、立ち上がることも出来ずハリーファは

無様に床に這いつくばった。血の滲む顔だけを持ち上げて、無言で父親をキツと睨んだ。

ジャファルは冷たい表情のまま、床にうつ伏せのハリーファの左足を容赦なく踏みつけた。何かが折れる嫌な音が室内に響き、ハリーファの身体に激痛が走った。苦悶のあまり顔を顰めるが、外に居るリユーシャに聞こえるのではないかと叫び声は出さなかった。その事が余計にジャファルの癪に障ったようであつた。

《ファティマとリユーシャの為と思い、女どもに任せてきたが……。やはりハリーファを皇子として育てるべきではなかったのか》

「今後王宮を出るような真似は絶対に許さん！」

そう言うと、ジャファルはハリーファの右手首を踏みつけた。ハリーファが苦痛に顔を歪めても理不尽な行為をやめようとはしない。ハリーファの全身から汗が滲み出た。

「本宮への立ち入りも禁止する。今後はここがお前の部屋だ」

ジャファルが踏みつけていた足を退けると、ハリーファの右手首はあらぬ方向へ曲がっていた。

《何故私の代でこんな厄介事ばかり起こるのだ……》

ハリーファは右手首と左足の激痛に身動き出来ず、ジャファルの激高する心の声もほとんど耳に入ってこなかった。

《ハリーファ、お前は生きていればそれでいい》

「後で医者を呼んでやる。治るまではここから出ずに大人しくしている」

ジャファルは自分の服の乱れを整え、【王の間】から立ち去っていった。

床に突っ伏したまま動けないハリーファの耳に【王の間】を外側から施錠する音が届いた。

ジャファルとリユーシャの話す声も聞こえたが、二人の声は小さくなりやがて聞こえなくなった。

その日リユーシャはハリーファのところに戻って来ず、医者が来たのは翌朝になってからだった。

* * * *

「ハリーファのことを考えているのか？」

宰相の寝所で、隣に居るジャファルにそう言われ、リユーシャは主人に目を向けた。さっきまで小さくしていたランプの灯りを、お互いの顔が見えるように大きくした。

ジャファルはいつものように居丈高な態度でリユーシャを鋭く見つめる。その視線にリユーシャは抱えていた思いを口にした。

「……最初はあなた様の為にと思ってハリーファ様をお育てしていただきましたのに。いつの間にかハリーファ様が、本当に自分の子のような気になってしまつて……」

「１１年も育てれば、お前でも情が湧くものなのだな」

「……初めてでしたわ。ハリーファ様がわたくしが問いかけても何も答えてくれないなんて……」

リユーシヤはハリーファの態度にショックを隠しきれないようだった。そんなリユーシヤを見て、母親の顔をする自分の女奴隷にジャファルは軽い苛立ちを覚えた。

「アレの乳母にしたのは、お前の為になると思っていた。だが間違いだつたな」

この国で宰相の妻はファールーク皇家の血を引いていなければならぬ。その為、宰相の女奴隷だけは例外的に奴隷から解放されても妻となることは出来なかった。

「いいえ、この１１年間女としての幸せを味わわせて頂きました」

「私よりハリーファの方が良かったか」

ジャファルはリユーシヤを鼻で笑った。

「そういう意味では……」

主人にわざと嫌味を言われ、リユーシヤは悲しそうな顔をしてジャファルから目を逸らした。

「乳母の地位を頂けたからこそ、あなた様のお傍にこうして居られるのです。わたくしにはあなた様の妻になることも、子を産むことも出来ないのですから」

リユーシャはそう言い返すと、悲哀がジャファルの妻達に対する怒りにすり替わったようで、きつい口調でジャファルに進言してきた。

「ジャファル様、ハリーファ様は一人で馬には乗れません。剣で身を守る術も持っていない」

「ああ、何も教えなかったからな」

「それに今年に入ってから病でずっと伏せておられたのです。今回の件も、……いいえ、その病の件も後宮の誰かの嫌がらせなのかもしれない。一度良くお調べくださいませ」

ジャファルもリユーシャと妻達の折り合いが悪いことは十分に知っていた。そしてハリーファの事をこの宮廷内で最も理解しているのはリユーシャだ。

ジャファルは今回のハリーファの逃亡もリユーシャの言う通り、妻の謀略なのかもしれないと思えた。だが、ハリーファが既に宮廷に帰還している事実で正直追及する気がなくなってしまった。

「お前の気の済むようにすればいい」

そう言って、ジャファルは寝台に身体を横たえ目を閉じた。

* * * *

ハリーファは右手首と左足の腓骨を骨折していて、右頬の傷も縫合しなければならなかった。

ハリーファの右頬には聖痕と呼ばれる横一文字の太刀筋の傷痕がうつすらとある。聖地で負った怪我はその聖痕を打ち消すかのような縦一文字の切り傷で、古傷と重なり合ってまるで十字架のようになっていた。

医者に痛み止めの薬草を勧められたがハリーファは頑なに拒み続け、痛みを堪えて治療を受けた。

翌日もリユーシャはハリーファの傍に来たが、ハリーファは昨日から一度もリユーシャと言葉を交わしていなかった。

ハリーファが黙っている所為なのか、リユーシャの心の声がいっつもよりよく聞こえてきた。リユーシャは食事の介助をしてくれていたが、食事が進まないハリーファに、その手も止まったままになっていた。

《聞いてはいけないと我慢していたのですけれど……》

「ハリーファ様？……王宮から出るなんて、一体何があったのですか？」

《何処かへ向かうとされていたのですか？ 宰相様の言うように、本当にフロリスへ向かわれていたのですか？》

フロリスへ向かうなどとんだ見当違いだと思ったが、ハリーファは相変わらず黙っていた。

そんなハリーファの様子にリューシャは俯き軽く溜息をついた。

右頬の傷が脈打つように疼いた。

ハリーファの中で、現実の痛みと過去の記憶の痛みが交錯する。

『【エブラの民】は不可侵な存在！ 兄さんは神を冒瀆してる！』

アーデインの言葉が脳裏に響いた。

あの時は聖裁を下しきれなかったアーデインも、今ハリーファがドームに足を踏み入れ、あげくそこで血を流したなどと知ったら、今度こそ間違いなく断罪するだろう。

ハリーファはドームで見た【エブラの民】の事を思い出していた。

黒い肌、白い髪、董色の瞳の一族。彼らはまだ滅びてはいなかった

た。

そして異国の服を着た黒髪の少女が【エブラの民】の前に跪いて、何か話していたように見えた。あの少女は一体何者なのだろう……。

その後、ハリーファも体力の限界で意識を失った。薄れゆく視界に映ったのは瓦礫と青い空だけで、【エブラの民】の姿は映らなかった。一体何処へ行ってしまったのだろうか。

連れ戻される途中気が付いた時には、ハリーファは捕縛され馬車の荷台に乗せられていた。そこには男達の遺体と一緒に、あの黒髪の少女も居た。

あの少女はその後どうなったのだろうか。

ハリーファは黙ったまま傍に座っているリューシャの方を見やっ
た。

「……乳母上、私と一緒に居た短い黒髪の女を知りませんか？」

突然声を掛けられ、リューシャは驚いてハリーファを見た。

「……あのフロリスの少女は、奴隷として売られるようですよ」

ハリーファが話しかけてきたので、リューシャの顔に安堵の色が表れた。

「あの女はフロリス人なのですか？」

「ええ。フロリスのヴァロニア人だそうです」

「ヴァロニア王国……」

ヴァロニア王家とその臣下の12貴族が治めるクライス信仰の大国ヴァロニア。

二百年前にファールーク皇国がシーランド王国を打ち破り聖地オス・ローを手に入れてから、現在はフロリスからの国境越えは禁止されていて巡礼者はいないはずなのだが……。

あの少女が生きて捕らえられているならば、【エブラの民】の話聞き出せる。そう気付くと思いがけない言葉がハリーファの口をついて出た。

「乳母上。その女を私の奴隷にすることは出来ないでしょうか？」

ハリーファは今まで奴隷を持つことを嫌っていた。奴隷の所有数で権力が測られることにも反感を持っていたが、何より奴隷達の心の声が聞こえてくることが嫌だったからだ。そのため今までは、奴隷に任せるようなことを全てリユーシャに委ねていた。

「……こんな状態では食事も困りますものね。わたくしから宰相様に頼んでみましょう」

リユーシャの顔が少し寂しそうに見えたが、ハリーファは気付かない振りをした。

リユーシャが【王の間】を出ると、扉の外に立っていた見張りは扉に素早く施錠をした。

（どうして突然奴隸を持つなどと言うのかしら。あの異国の娘は何なのかしら……）

リユーシャは溜め息をついた。

ハリーフアの異能を知っているリユーシャは、心の中の不審の念を読まれそうで、早々にその場を立ち去った。

皇族の奴隷

ジェードが捕らえられていたのは、ファールークの王宮の地下に作られた牢だった。

低い天井は丸く削られており、窓などは一切無かった。所々に作られた空気孔から微かに光が入ってくるが昼間でも薄暗い。

聖地を離れてからは【天使】の声も聞こえなくなってしまう、闇の中でジェードはすっかり氣力を失っていた。

夜になると真っ暗な闇に包まれる牢の中を、微かに風が通り抜けた。

人の気配は全く無いにも関わらず、その音はまるで誰かが悪魔の名を呼んでいるようで、恐怖に夜は眠れなかった。

ここに連れられて一体どのくらいの時間が経ったのだろうか……。

空腹感も脱水感も疲労と睡魔に誤魔化され、ジェードの時間の感覚を狂わせた。仄暗い牢の中でジェードはただ眠り続けていた。

牢への入り口の扉が開いて、地下に続く階段に光が刺した。階段を下りてくるのは女性とその召使のような男性だった。昼間でも涼しい地下牢の中で、女性は身震いをした。

男の方が鍵を取り出し、ジェードが入れられていた入り口に最も近い牢の鍵が開けられた。

「こんなところに長く居てはいけないわ。早くこの娘を運んで」

女性の声が牢に反響して響いたが、ジェードは目覚めることなく、男性に抱きかかえられて運ばれていった。

* * * * *

どこからか微かに気持ちよい風が流れてきた。

ヴァロニアの朝とは違い妙に暖かったが、朝の空気の匂いを感じジェードは目を覚ました。

ジェードが寝ているベッドには鮮やかな色の清潔な寝具が敷かれ、頭の下にも柔らかい少し小さな枕があった。身体を起こして見ると、掛け布は蔦植物を模した美しい刺繍の縁取りで飾られている。むき出しの木で出来た寝台で倒れるように眠っていた昨日までが、まるで悪夢を見ていたかのように感じられた。

（ここは天国……？ わたし……死んだのかしら……？）

部屋一面の異国の装飾はジェードが今まで見たことも無い模様で、その不思議な美しさに目を奪われた。自分が寝かされているベッドだけでなく、壁や天井、窓枠までも、鮮やかな色合いの細かい幾何学模様の見事な装飾が施されている。

(……ここは何処なのかしら……?)

ジェードはベッドからそろりと降り、窓の方へ歩いていった。

窓から外を見ると、少し遠くに城壁がありその先の視界が遮られた。目下を見やると、高層に居るのか下に丸い屋根が見える。視界を遮る城壁の内側は砂地の庭園になっていて、石畳の遊歩道が作られていた。その道を目で追っていくと別の建物もいくつか見えた。庭園には所々にナツメヤシの木と背の低い木が植えられている。きつい朝日が遊歩道の石を焼き始め、人影もなく閑散としていた。

部屋の中も外も、今までジェードが住んでいた世界とはまるで別世界だった。

窓から外を眺めていると、部屋の主と思われる女性が扉を開けて入ってきた。

「お気づきのようね」

ジェードはどうしていいのか分からず、その場に立ち尽くしていた。

女性は静かに扉を閉める。歩くと透けるような金色の長い髪が揺れる様に目を奪われた。同じ金色の長い睫毛の向こうには、朝日を浴びた海のような蒼い瞳がジェードを見つめていた。

目の前にいるこの女性はなんて美しいんだろう。同じ女なのに、ジェードは思わず見惚れて女性を見つめた。もしこの女性に羽根が生えていたら、それこそまるで聖書に描かれた天使のようではない

か。

フロリスにも金色の髪の間人は沢山いるはずだが、ヘーンブルグには金色の髪の間人は居なかったので、ジェードは聖地に来るまでは見たことが無かったのだ。

女性の真つ直ぐな金色の髪はとても美しく、短くなってしまった癖のある自分の黒髪がみすばらしく思え、ジェードの劣等感を煽った。

「あなた、お名前は？」

「……ジェードです。……ジェード・ダーク……」

「『^{ジェイド}厭世』？」

女性はジェードとは少し違う韻律でジェードの名を繰り返した。

「わたくしのことはリューシャと呼ぶといいわ」

リューシャは見た目の美しさに違わず、紡ぎ出される声音も美しかった。

「あの……、ここは何処？」

「ここはファールーク王国の首都、サンドラです」

「ファールーク……？　じゃあ、ここは暗黒大陸なの？」
モリス

「そうです」

ジェードは驚いて言葉を失った。

中心の地を越えて、暗黒大陸モリスまで来てしまっていたのだ。

ジェードが学校で見たことのある地図には左側の大陸モリスは途切れて載っていないかった。ジェードには左の大陸がどのような形をしているのかさえ分からなかった。

「あなたは一体何者なの？ ヴァロニア人だとは聞いているけれど」

「わ、わたしは……巡礼者です」

ジェードは羊飼いと言ったほうが良いのかと迷いながら答えた。

「オス・ローは二百年も前にシーランドとの戦いで崩壊しています。それを知っているの巡礼？」

「……物見にきたわけじゃないわ。わたしは天使様に会いに来たんだもの！」

ジェードはついむきになって言い返してしまった。

リユーシヤはジェードを見て眉を顰めた。心なしか口調もきつくなりジェードを問い詰める。

「今は調停でヴァロニアからの国境超えは禁じられているはずですよ」

「そんなこと……聞いてないわ……」

「では同行者は？ 誰かと一緒に来たのでしょうか？ 何処へ行ったの？」

「同行者は居ないわ。わたし一人で来たから」

その答えに到底納得できなかったのか、リユーシャは溜息を漏らし、あからさまに疑いの眼差しをジェードに向けた。

嘘をついていると思われるようで、ジェードは少し胸が苦しくなった。嘘をついている訳ではないのだが、どうしてヴァロニアから追い出されたのかわからなかった。そして、追い出されたと思いたくなかった。

「では聖地で一体何があったのですか？」

その問いかけにジェードは聖地であったことを思い出した。

聖地で天使に会い、金色の髪の少年を殺すという自分の天命を教えられたのだ。そして生まれて初めて見た金色の髪の少年に、薄茶色の世界が真っ赤に染められていった。

聖地で最後に見た光景が脳裏に甦る。

ジェードは恐ろしい光景を思い出すと、黙りこんで口を開かなかった。

そんなジェードの様子に、リユーシャは少し辛そうな表情を見せた。

「……もう少しお休みなさい」

そう言って、女性は窓際に立っていたジェードの手を引いてベッ

ドに座らせた。

「わたくしには本当のことを話して頂戴」

先程までのきつい口調とは変わって、リューシャはジェードの手を取ったまま、今度は穏やかに微笑んだ。まるで天使のような微笑だ。ジェードには聖地で少年を殺すように言ってきた天使よりも【天使】のように見えた。

ジェードはその微笑を見て、今目の前にいるリューシャに全て話してしまいたい衝動に駆られた。

話してしまえば恐怖が薄れて楽になるかもしれない。それに他に頼れる人は居ないのだ。

「……次はわたしが殺される……」

聖地で最後に見た光景が甦った。金色の髪の少年が敵意を剥き出しにジェードを睨みつけていたことを。

「え……?」

「……三人ともあの子に殺されたのよ」

「あなた、何を言っているの?」

「ここに連れてこられた時に、大人の死体があったでしょ! あれは全部あの子が殺ったのよ!」

「あの子って……。ハリーファ様……ですか?」

「いやっ！」

リユーシャの口からハリーファの名を聞いて、ジェードは両手で耳を塞き目を閉じてうずくまった。

リユーシャは、信じられないと言つように頭を振り、眉を顰めてジェードを見つめた。

* * * *

ジェードが居た部屋は、本宮にあるリユーシャの部屋だった。

皇子の乳母であるリユーシャは、宰相ジャファルジャリアの女奴隷の中でも最も高い身分であり、皇族並みの立派な部屋を与えられていた。

リユーシャは自分のベッドをジェードに明け渡し、夜は何処かへ行つてしまつて朝まで戻らなかった。

翌朝、リユーシャは部屋に湯船を用意するとジェードに沐浴をさせた。

リユーシャが連れてきたリユーシャと同じ歳格好の胡桃色の髪の女がジェードの服を脱がせ、湯船へと導いてくれた。

「わたし……これからどうなるの?」

女ばかりとはいえ、裸にさせられジェードの不安は強くなった。

「あなたはハリーファ様の奴隷となるのです」

「……」

聞きたくない名前にジェードは思わず目を閉じ顔を背けた。

「聖地であなただが出会った御方はこの国の皇子です。どこかへ売られるはずだったあなたの身柄を買い取ってくれたのですよ」

そう言つて、リユーシャはジェードを湯船に立たせると、リユーシャに指示された胡桃色の髪的女奴隷がジェードの髪や身体の汚れを洗い流した。

「あの子は嫌よ! わたし、殺されてしまつわ!」

ジェードの記憶の中で、オス・ローでのあの恐ろしい出来事が蘇つてきた。しかも自分が殺さなくてはいけない相手なのだ。そんな相手の奴隷となるなんて信じられなかった。

「ハリーファ様を恐れているのですか? わたくしにはあなたの話の方が信じられません」

「わたしは天使に誓つて嘘なんか言わないわ!」

「あなたの国ではどうか分かりませんが、皇族の奴隷になれるのは

これ以上ない名誉なのですよ」

「……わたしはこの国の名誉なんか知らないわ！ それに……奴隷なんて絶対嫌！」

裸であることがジェードの不安を余計に煽った。

ジェードは湯船から飛び出すと、近くにあった布で身体を覆った。

「勘違いしないで。我が国では天使モリスの教義に従って、主人は女奴隷に夜伽させることはありません。ここはあなたの国ではないのよ」

ジェードの前ですっと穏やかだったリューシャが少しむっとしたようだった。

モリスで奴隷ラキークというのは、簡単に言えばお抱えの使用人の様なものだ。いわゆる報酬の代わりに、自分の主人から衣食住の全てを死ぬまで与えられる。奴隷から解放される場合、以降の生活に十分なほどの金品を与えられ自由を得る事が出来た。解放された者は、自由人ツルとなり奴隷を持つことを許されるようになる。

「……わたしを逃してくれないの？」

ジェードは顔を覆って泣き出してしまった。その様子にリューシャは溜め息をもらした。

「そんなこと宰相様がお許しにはなりません。奴隷として売られる

はずだったのです。ヴァロニアが身代金を出すと言うならば、身柄は引き渡されますけど」

それを聞いてジェードは顔を覆ったまま頭を横に振った。

「わたしみたいなただの羊飼いに、国がお金を出すわけが無いわ……」

「では、主人に潔く奉仕することね。奴隷から解放されれば、国に帰ることも出来るかもしれませんよ」

「奉仕って……何をすればいいの？」

「そうね、最初は主人が直接指示します。そしていずれは主人の意思を汲み取って働けるように。今ハリーファ様はお怪我をされているので、食事や着替えのお世話になるでしょう」

ハリーファの怪我……。それはジェードの短剣を奪った時の顔の怪我のことだろうか。

あの時、ハリーファの姿に見惚れていないでハリーファを殺せていれば、こんなことにはならなかっただろう。天命を果たし、答えを得て、ヴァロニアへ帰っていたのかもしれない。

ジェードが求めた答えを得るためには、天命を全うしなければならぬ。たとえ逃げてヴァロニアに帰れたとしても、それでは答えは得られないのだ。

（奴隷としてあの子に近づけば、あの子を殺すチャンスがくるかしら……）

結局、そうする以外に道のないジェードは、ハリーファの奴隷となることを受け入れるしかなかった。

沐浴後、リユーシャはジェードに飾り気の無い簡素な服を着させた。

麻色の生地で作られた半袖の服だった。初めて着た半袖の服がとも心もとなく、ジェードは寒くも無いのに腕を組むようにして肘をさすった。

「これは着けておいてもいいわ」

リユーシャはジェードが身に着けていたものの中から聖十字の銀のペンダントを取り出した。

「モリスには多くの人種と多くの信仰が混在しています。ジェード、あなたが自分の信仰を曲げることはないわ」

そう言うリユーシャはクライスの聖十字のペンダントを手に取り、ジェードの首に掛けてくれた。

「ファールークはモリス信仰なんですよ？ 改宗させないの？」

「改宗？ 同じ天使信仰なの？」

「同じ……？」

異教徒なのに……？

ジェードにはリユーシャの言っている意味が、この時は理解出来なかった。

* * * *

その日の夕刻、ハリーフアの耳に【王の間】の鍵が外される音がガチャリと聞こえてきた。

「ハリーフア様、ジェードをお連れしました」

リユーシャがヴァロニア人の少女を連れて【王の間】にやって来た。

部屋の真ん中にあるテーブルに山積みになった、糸で綴じられた書物を眺めているところに二人が入ってきた。ハリーフアは自分で杖について歩けるようになっていたが、まだ【王の間】から出ることは許されていなかった。

「さ、ジェード、あなたの御主人になられる御方です」

《……怖い……》

リユーシャの後ろに隠れるように立っている黒髪の異国の少女の

心の弦きが聞こえてきた。

前に出るようにリユーシャに背を押されても、少女はハリーファの顔を見ようとはしなかった。

「ハリーファ様、これからは何でもこのジェードにおっしゃって下さい」

「乳母上様、ありがとうございます。ちょうど話し相手が欲しいと思っていました」

ハリーファはいつもと変わらない笑顔を見せてそう言った。その様子を見てリユーシャは少し寂しそうに微笑んで部屋を出て行った。

再び見張りが扉を施錠する音が聞こえ、【王の間】にはハリーファとジェードだけが残された。

正直なところ、ハリーファは奴隷を必要としているわけではない。リユーシャが姿を消した途端ハリーファの表情から笑みが消えた。

ハリーファは翡翠色の瞳で冷やかな視線をジェードに向けると、一人突っ立ったまま動かないジェードに短く言い放った。

「座れ」

椅子に座ったままのハリーファは、自分の向かいの長椅子を指差

した。ジェードはそれに従って、下を向いたままぎこちなく椅子に腰掛けた。

「俺は奴隷なんか必要ない」

真っ先にそう言われ、ジェードは顔を上げてハリーファの方を見た。

ハリーファは聖地で会ったときと同じ、飾り気のない白い服を着ていた。右手首は三角の布で釣られ、左足には添え木が当てられていて、テーブルには杖が立て掛けられている。聖地でジェードと揉み合いになった時についた右頬の傷の縫合痕が、赤く腫れていて不気味で痛々しかった。

それを見たジェードはまた視線を顔より下に落として俯いた。

「お前に聞きたいことがあってこうするしかなかった。答えによってはすぐに解放してやる」

ハリーファの言葉にジェードは驚いてまた顔を上げた。

「オス・ローで【エブラの民】と会っていたらどう」

「エ……エブラの民？」

《エブラ信仰のエブラのことかしら？》

ハリーファの能力を知らないジェードの心からは、嘘偽りない言葉が聞こえてきた。

「【エブラの民】を知らないのか？ お前がドームで話していた白い髪の黒人だ」

《白い髪って……、アルフェラツ様のことを言ってるんだわ……》

上手く隠すことの出来ないジエードは、顔色にも心の動揺が表れていた。

（アルフェラツだと！？）

ハリーファはジエードが心の中で言った名前に聞き覚えがあった。

悪魔ラースがサライのことをアルフェラツの娘と呼び、【エブラの民】を【アルフェラツの子】と呼んでいた。ラースが【悪魔】なら、アルフェラツは【天使】なのだろうか。

ハリーファはいきなり核心を突いた気がした。

驚きを顔に出さないように、ハリーファは質問を続けた。

「彼女と何を話していた？」

「……………」

《もしかして……聞かれてたのかしら？》

ジエードの顔が青褪めた。ジエードの鼓動は早くなり、こめかみに汗が滲むのがハリーファにも見て取れた。ハリーファがジエードを見つめるほど、隠せない動揺が伝わってくるようだった。

「あの女性は何処から来たんだ？」

「わ……わたしがあそこに着いた時、先に居たわ……」

「あの後何処へ行ったか知っているか？」

「分からない……」

ジェードはそう言って俯いた。

「お前は何をしにオス・ローに行ったんだ？」

「何って……」

《わたしは国を追い出されたの……？ 違うわ……、天使様の御導きなよ……》

「……巡礼よ」

「一人でか？」

「……………」

《本当のことなのに、一人で来たって言ったらまた疑われてしまう……》

ジェードは口をつぐんだ。

「お前は何か罪を犯したのか？ それとも病でも抱えているのか？」

「……………いいえ」

「じゃあ、救いを求めているのか」

その言葉にジェードは微かに頷いた。

「……わたしじゃないの。姉の魂を救いたかったの」

ジェードは顔を上げハリーファを見つめた。

ハリーファはその視線にまるで祈りのようなひたむきさを感じた。

「……お前はオス・ローで神に会えたのか？」

《……ええ、そうよ。わたしは天使様に会うことが出来たのよ。だから姉さんの為に、天使様の言うとおり天命を果たさないといけないんだわ》

心の声と一緒にジェードはこくりと頷いた。

ジェードの揺ぎ無い心の答えを聞いて、ハリーファは確信した。

（あれは【エブラの民】ではなく、【天使】アルフェラツの姿）

過去にハリーファは二度【悪魔】ラースの姿を見たが、【天使】の姿を見たのは初めてだった。【天使】の外見は【エブラの民】そのものだったが、どこことなくサライに似ているようにも見えた。きつと【エブラの民】が天使の末裔と呼ばれる所以はそこにあったのだろう。

ドームが崩壊する以前、人々は【エブラの民】を天使として崇めていたが、【天使】は本当に存在したのだ。

神様はちゃんといるんだよ

そうサライは言っていた。

天使の存在を疑っている訳ではないが、今までユースフの罪悪感を知ってそう言ったのだとずっと思っていた。

○
 ●
 *
 :
 ●
 ○
 ●
 *
 :
 :
 ○
 ●
 ○
 :
 :
 :
 *
 ●
 ○
 ○
 ●
 *
 :
 ●
 ○
 ●
 ○
 :
 :
 :
 *
 ●
 ○

「ユースフ、【エブラの民】は天使じゃないよ」

ユースフの隣でサライは囁いた。

ユースフの部屋の狭いベッドの上で頭の下敷きになった髪をかき上げて除けると、こましゃくれた表情でユースフを見つめた。

「神様はちゃんといるんだよ、なか……ンシー！」

突然ユースフの大きな手が「それ以上は言うな」とサライの口を塞いだ。また肝心なところで言葉を制された。

サライは少しむっとしながらユースフの手を除けると、

「あの【壁】がなくなっちゃえばいいのにな」

と少し膨れて笑った。

あれから二百年経った今、ドームの城壁は崩れ落ちていた。それはサライの望んでいたことなのだろう。

「神はお前に何と言ったんだ」

ハリーファの質問にジェードは黙ったまま少し唇を噛んだ。

ジェードは答えず黙ったままだったが、ハリーファはジェードの心の声を聞いて納得した。

されるのか)

ラースは『転生後に子供を作ると【アルフェラツ】にばれる』と言っていた。曖昧な夢の記憶だが、おそらく過去の自分が間違いを犯したに違いない。

(だから【天使】にばれて、俺を殺しに遣わしたというのか)

だが、なぜジェードは【天使】に会うことが出来たのだろうか。

もう一度【天使】に会いたい。その為にはジェードを手放さず、手元に置いておく必要があると思った。

「答えられないなら解放の話は無しだ」

ハリーファはジェードが答えられない事が分かっているながら、冷たく言い放った。

異国人の女奴隷

ジェードには早朝の水汲み、配膳、洗濯、掃除、そしてハリーフアが右手が使えない間は食事の世話などの仕事を与えられた。ハリーフアが必要としていることと、ジェードが出来ることと言えばその程度しかなかった。

初めは仕事をこなしながらも、主人であるハリーフアに対して反抗的な態度を取っていたジェードだったが、今まで自分の暮らしていたアレー村での貧しく牧歌的な生活とはまるで違う、異国の壮麗な王宮での生活に日に日に感化されていつている様子でもあった。

ジェードは他の皇族付きの奴隷達から、ハリーフアの奴隷だと言う理由で不要な嫌がらせにもあった。相手にされない事は当り前で嘘を教えられたり、中傷されたりもした。国文化の違いで分からないことも多くあり、早々から苦勞が絶えなかった。

そんな生活の中で、ジェードが気が付いた事があった。実は奴隷には「人付の奴隷」と「家付の奴隷」が居るということだ。

「人付の奴隷」はジェードのように「主人」が居て、その主人に仕える奴隷のことだ。人付の奴隷の場合、主人から解放され自由人になることもあれば、主人の死後、その主人に跡取りの無い場合、仕えていた奴隷から後継者を選ぶこともあり、後を継いだ奴隷は家、財産、妻までも引き継ぐことがあるとのことだった。

一方、「家付の奴隷」には「主人」は居らず、その「家」に仕えることになる。こちらは生涯奴隷から解放されることはなく、死ぬまで奴隷としてその家に仕えなければならなかった。

家付の奴隷というのは、基本的に奴隷と奴隷の間に生まれた子がそれに定められた。したがって王族や貴族など、抱える奴隷の数が多いところに「家付の奴隷」と言うのは多く存在していた。

そして「人付の奴隷」と「家付の奴隷」の間には微妙な格差があるようだった。

* * * *

ジェードがハリーファの奴隷として生活を始めて三週間程過ぎると、ようやく異国の王宮での生活にも慣れてきた。それでも城壁内はとても広く色々な建物が点在している為、ジェードが行ったことのない場所はまだ沢山あった。

【王の間】の入り口には、まだ朝から夕方まで見張りが居て、ジェードが出入りする時だけは門扉の施錠を外してくれる。

ハリーファは左足は随分回復し杖がなくても歩けるようになったが、右手首の具合は悪く、未だ【王の間】から出られず、日々苛立ちが募っているようだった。

ハリーファは早朝に扉の外で瓶に水を注ぐ音が聞こえて目を覚ました。昨夜は遅くまで文献を読み漁っていたのでまだ瞼が重い。朝の空気の気持ちよさにそのまま二度寝したい衝動にかられた。

水音が止むと、ジェードが再び水を汲みに【王の間】の扉を開けて出て行くのが聞こえた。腹立たしいことに、その後直ぐに、扉前に居る兵士が施錠をする音も聞こえる。一日分の水を確保するため、王宮内に在る貯水井戸と【王の間】を毎朝三往復しなければならなかったが、それが終われば、ジェードは厨房に回って食事を持つて戻ってくるはずだ。

いつもとほぼ同じ時間をかけてジェードが戻ってきた。

「ハリ、起きて。食事を持ってきたわ」

ジェードはトレイを持って、【王の間】の応接の奥にある寝室の扉をノックもせず、身体で押し開けた。扉が開くと微かに風が流れて窓際にかけられた白い透かしの布が心地よく揺れる。たいして広くない寝室の角に置かれたベッドにハリーファはまだ横たわっていた。ハリーファは目を覚ましてはいたが、うつ伏せのまま振り返りもしない。

《良い御身分ね》

いちいちジエードの心の声が聞こえてくる事に、ハリーファはさすがにうんざりしていた。今までハリーファの特殊な能力を知っていた乳母が、どれほど心でものを考えないようにしていたのが、今になってよくわかった。

「早く体を起こしてよ」

「知らない、お前が食べればいいだろ」

「ずっとともに食べてないじゃない！」

ジエードの口ぶりは、文句を言いながらもまるで弟の健康を気遣うようだ。だが、ジエード自身もそれに気づくと、そんな自分にも腹を立てたようで、

「庶民がどれほどの飢えを味わっているか一度知るといいわ！」

《勝手に餓死すればいいんだわ！》

と言って寝室を出て行った。

ハリーファが身体を起こすと、体重がかかった右手首にまだ鋭い痛みが走った。右手首を押え顔を顰めた。

ジエードは応接で脇のテーブルに無造作に積まれた写本を立った

ままパラパラとめくっていた。ハリーファが奥の寝室から出て来ると、はっと気付いて本を閉じた。

「別に見ても構わないぞ」

歴史家が書き記したここ何十年かの宮廷内部のことや、財務長官の手記やらがほとんどで、数冊だけ三百年以上前から巷で流行っている物語の書かれた本が混ざっていた。

「いいの、どうせ読めないから」

「読めないのに何を見てたんだ。写本が珍しいのか？」

「ええ。こんなに沢山色のついている本は見たこと無いわ。とても綺麗ね」

ジエードが見ていたのは、沢山の色を使って手描きされた挿絵の入った物語の本だった。

一冊一冊手書きされる写本は挿絵だけでなく、文字やそれを囲う飾りも様々な色を使って書かれている。

「わたしが見たことのある本は墨一色だけだもの」

ヴァロニアでは二百年前程から簡単な印刷技術が確立され、聖書や教科書が印刷されるようになっていた。手書きの写本と違い、印刷された本は黒一色で印刷されている。大量に出版される宗教書や教科書以外の本は未だ手書きされているが、そういった本は庶民の手に渡ってくる事はまず無い。印刷技術のおかげで、クライスの教えを説いた聖書はフロリス全土の庶民階級にも普及し、教科書のおかげでフロリスにはモリスにはない教育制度まで出来上がっていた。

「ファールークは二百年前から時間が止まっているからな……」

ハリーファがポツリと呟いた。発展することも衰退することも無く、他国からの干渉も受けずにただ時だけが流れているとハリーファは感じていた。だからオス・ローも復興しないのだ。

そういえば、ヴァロニアでは12か13歳までの義務教育制度によつて、国民全てが最低限の読み書き計算が出来るはずだ。そのことに気が付いたハリーファにふと疑問が沸いた。

「ジェード、お前は何歳なんだ？」

「もうすぐ14よ」

その答え方にハリーファは一瞬気持ちが波立った。似ても似つかないのに、サライとジェードの姿が一瞬重なった。

サライと同じ言い方をされ妙な既視感を覚える。

あの時は、なぜサライがそんな言い方をしたのか考えようともしなかったのに。きつと年上のユースフに追いつこうと、子供扱いされないようにと、サライは必死で背伸びをしていたのかもしれない。今になってそんなことに気付く。

「13だろう？」

ジェードがサライと同じ言い方をする事が気に障り、ハリーファはわざわざ言い直した。

「忌みし数字よ。口に出して言わないで」

（ ああ、そういうことか ）

クライスの忌数だ。ジェードの答えの理由を聞いてハリーファは変にほっとした。

「じゃあ何故お前は文字が読めないんだ？ ヴァロニアには教育制度があるんじゃないのか？」

ヴァロニア王国では12歳になるまで義務教育がなされていたが、ヘインブルグのような田舎では女の教養は全く重視されず、女生徒たちは結局教養を身に着けないまま教育を終えることが多かった。ジェードもまたその例に漏れなかった。

「村で羊を飼ってるだけなら必要なかったんだもの。数ならわかるわ」

「じゃあ必要なら覚えるのか？」

「必要なら覚えるわよ」

《覚えないうわよ！ わたしはあなたを殺して国に帰るんだから！ 必要になんかならないわ》

「いちいち口答えをするな」

呆れた声で溜息混じりにハリーファが言うと、ジェードは怒った声で言い返してきた。

「口答えなんてしてないじゃない！」

今まで、乳母以外の人とまともに会話をしたことがなかったので、どうにもペースを乱されてしまう。ハリーファはそんな自分を情けなく感じながら、深い溜息をついた。

「ジェード、地位や名譽はお前を裏切っても、身に着けた教養だけはお前を裏切る事はないんだぞ」

《なによ、偉ぶって！》

「心を許さなければ裏切られることもないわ！」

そう言つてぷいと横を向いてしまう。

ハリーファは本当に手に負えないなと思いつつ、ジェードのこういった可愛げのない反応を段々予想できるようになっていた。思った通りの反応を返されると何故か気分が良く、一人笑いを堪えるが、つい不敵な笑みが漏れてしまう。そんなハリーファの様子をジェードはいつも訝しげに眺めていた。

「知識は時に剣より強い武器になるぞ」

「じゃあ、その知識でわたしを殺してみてよ」

「簡単すぎて馬鹿馬鹿しいね」

ジェードと話している間にいつの間にか、自分の口から歳相応とも言える子供じみた言葉まで出るようになり、これにはハリーファ自身も驚いていた。

今にして思えばユースフという男は、死ぬまでどこか子供じみた所があったのかもしれないと、他人事のように考える事も多くなった。

ジェードの方は、言葉で言い返せなくなるといつもハリーファの瞳をじっと睨みつけてくる。その澱みない漆黒の瞳の色は、ハリーファには何処と無く見覚えがあるものだった。

《……なんて不公平なの。ハリーは身分も高いし、見た目もこんなに綺麗だし、教養もあって……、》

強くて……とても言おうとしたのだろうが、そこで一旦ジェードの思考が飛んだ。まだ聖地での事を受け止められていないようだった。

《ハリーはわたしなんかとは違うのよ。どうしてわたしは……》

ジェードはそう言ったきり俯いてしまい、心の声も聞こえなくなった。

そんなジェードを見て、何故こんなに劣等感を持っているのか理解し難かった。そしてこういう時、ジェードはいつも自分の黒髪を弄っているのだった。

* * * * *

朝の水汲みが終わる頃には、掻き回された井戸水は底の砂が舞い上がり徐々に透明度を失っていた。井戸に集まるのは、その脇で洗濯をする家付の女奴隷達だった。毎日五、六人が身を寄せ合って、話に花を咲かせながら洗濯をする。彼女達は年齢は様々だが、全員白人で黒や栗色の髪だった。

粗末な井戸端小屋やそこで働く家奴隷達の姿は、金色の髪の人や華美な生活に馴染んでいないジェードに郷里の生活を思い起こさせた。

ジェードはハリーフアの奴隷だからと、家奴隷達も初めはジェードに対して肩に力が入っていたが、一週間も過ぎた頃にはすっかり親しくなっていた。

朝と夕方、一日に二度顔を合わすこともあって、ジェードも若い家奴隷達とは特に気心が知れ、彼女達の仕事の傍らでよく立ち話に加わっていた。

他の皇族付きの奴隷達は井戸まで直接足を運ぶことはないので、ジェードはここなら嫌がらせにあう事も無かった。

ジェードが洗濯女に衣服や寝具を渡すと、その中の一人、ジェードより少し年下位の黒髪の少女、ルカがいつものように話しかけてきた。

「ねえ、ジェード。奴隷皇子様はまだお怪我が治らないの？」

「……そうみたいね」

奴隷達の間でハリーファは『奴隷皇子』と呼ばれているようだった。

ハリーファはもう杖なしで歩いているが、本当のところは良く分からないのでジェードは適当に答えた。そんなジェードの答えに、ルカは心配そうな表情を浮かべる。

ルカの髪と瞳の色は、黒髪黒目の人しか居ないジェードの故郷ヘインブルグでは見慣れた色だった。だが、同じ黒髪に黒い瞳の白人でも、きめの細かい肌質のジェードに対し、モリスで強い日差しを浴びて生活している白人の奴隷達の顔にはうつすらとそばかすが浮かび、睫毛も心なしか長いようだ。

一見似たような風貌の二人だったが、ルカはヴァロニア人にはない異国的な雰囲気を感じていた。本当はジェードの方が、彼女達から『異国的』と思われるのだろうが。

井戸の横に木枠で作られた長方形の水桶が運ばれ、年長の二人が向かい合って洗濯物を始めた。

「ほら！ あんたたち早く水を汲んどくれよ！」

ルカと、ジェードより年上の家奴隷は井戸水を汲み上げ、手馴れた様子で桶に水を移していった。ジェードも話しに加わりながら、時々手を貸す。洗濯女達は色々話しながらも手は忙しく仕事を続けていた。

「それにしても、ルカは奴隷皇子様にえらくご執心だね。毎日ジェードに聞いちゃって」

熟年の洗濯女がしゃがんで洗濯をしながら、水を注ぐルカに向かってからかうように言った。ジェードの母親くらいの年齢の家奴隷だ。からかつてはいるが、言葉尻はどこか優しげだ。

「だってまだ一度もお姿を見たことないんだもん。気になるじゃない」

「奴隷皇子様は皇家の血筋とは全然違う毛色だよ。リユーシャ様みたいな金色の髪なんだよ」

「えっ！？ 本当なの？」

ルカは、井戸で水を汲み上げていたジェードの方に首を向けて確認した。

「本当よ」

「じゃあ、宰相様やシナーン様とは全然似てないのね」

ルカが驚いていると、後ろから年配の家奴隷が口を出してきた。

「奴隷皇子様のお祖父様が白人だったからね」

ファールーク王国の王宮では、皇族は浅黒い肌に黒髪で、奴隷は白い肌をしていた。家奴隷は奴隷同志の子供を指し全員白人だった。

ファールーク皇国建国後、宰相を継承しない皇族の男子は全て養子として出されており、ハリーファは初めての例外となった。ハリーファの姿は今まであまり人目に晒されてこなかった為、どうやらハリーファの事をよく知らない奴隷は多いようだった。ジエードが来る以前はどうだったのかは知らないが、他の皇族が濃い色に美しく染め上げられた服を着ているのに比べると、ハリーファは奴隷達と同じような素地のままの白色の服を着ているのしか見たことが無い。肌の色の所為もあって、ハリーファの姿を見たとしても、家奴隷達は皇子だとは気付かなかったのかもしれない。

「ねえ、奴隷皇子様はどんなお方なの？」

ルカにそう聞かれて、ジエードは何と答えて良いのかわからなかった。

（わたしの方が教えて欲しいぐらいよ）

初めこそ聖地での件で、ハリーファに対して怯えていたジエードだったが、最近ではそんなことはすっかり忘れてしまっていた。丸一日ハリーファと口をきかない日だってある。家奴隷たちの質問に答えられるほどジエードはハリーファの事を良く知らなかった。

「……まだよくわからないわ。いつも本ばかり読んでいて……。あんまり話すこともないし……」

「ふーん。シナーン様はたまに王宮内で馬を乗り回したり、剣術の稽古とかしてるのを見るのよ。奴隷皇子様は乗馬とかしないのかな？」

「怪我が治ったら乗馬もするかもしれないわ！」

乗馬と聞いて、ジェードの心がときめいた。

ジェードは汲み上げた水を、足元にルカが置いた木桶に流し込んだ。

「ねえ、今まで第二皇子様は生まれてすぐに養子に出されてたんでしょ？ どうして奴隷皇子様だけが残っているの？」

水の注がれた木桶を持ち上げながら、ルカは一番年配の家奴隷に話を振った。

「そんなことリューシャ様の為にきまつてるだろ」

年配の家奴隷の投げ槍で簡潔な答えを聞いて、その場に居た中でも一番若いルカは「やっぱりそうなのね！」と顔を赤くした。抱えていた木桶をすぐ近くの洗濯桶に向かって少々乱暴にひっくり返した。

主人の妻として娶られる事は、奴隷の女達の共通する夢だ。

女奴隷に教養を施して妻に迎えると天国で二倍の報いがあるという口承から、女奴隷を妻として迎える主人は少なくない。女奴隷が自由人になるのには、奴隷からの解放だけを受けるよりも、その後妻として娶られる方が圧倒的に多かった。

「ルカでもそんな事いう歳になったんだ」

若い家奴隷がルカをひやかす様に言った。

「リューシャ様位綺麗じゃないと有り得ないからね。それにあんた

たち！ あたしらは家付なんだから、そんな夢みたいな話したってダメだよ」

母親くらいの家奴隷が若い二人をたしなめるように言った。

「でも、ジェードは奴隷皇子様付きなのよ！」

ルカが口を尖らせて言い返した。

ジェードは黙って話を聞きながら井戸際で水を汲むのを手伝った。

「奴隷皇子様も宰相様やシナン様と同じなの？ ジェードは解放されても結婚できないの？」

思いがけないルカの言葉にジェードはぎょっとした。

「いいや、奴隷皇子様はできるさ。アーラン様が嫁いだ相手は、あんたらは知らないだろうけど先々代の第二皇子ハリード様の息子だしさ」

年配の家奴隷の言葉にルカの顔が明るくなった。

ジェードはさっきのルカの言葉を否定しようと、焦る頭の中で苦情を考えていると、背後から抱き付かれわしっと両胸を掴まれた。

「きゃーっ！！」

乾いた空気の中をジェードの悲鳴が響いた。少し年上の家奴隷が後ろから抱きつくようにしてジェードの両方の乳房を掴んできたのだ。

ジェードの手から掴んでいたはずの井戸水の汲み上げロープが離

れた。井戸の上の木枠に付けられた滑車がガラガラと激しい音を立てて回った。驚いたジェードは慌てて家奴隷を振り払うと、胸を庇うように腕で隠した。服越しとはいえ、寒いヴァロニアでは考えられないような薄着の上から胸を触られひどく動揺してしまった。

「な・何するのっ!？」

頬が熱くなり顔が真っ赤になっているのが自分でも分かった。謝るように、家奴隷がジェードに片目を閉じてみせた。

「ルカもジェードも、あんたらの胸じゃ皇子様の妻になるなんてムリムリ! アタシくらいはおつきくないとね!」

楽しそうに笑いながらルカに向かって言うのを聞いて、ジェードはますます顔が熱った。

「だいたい! まず人付の奴隷として雇ってもらわなきゃだめですよ!」

年上の家奴隷の言葉にルカはぷうっと頬を膨らませた。

ジェードを含めた若い娘達のかましい様子を見て、年配の女奴隷はやれやれと肩をすくめた。

「あたしらは、宮廷と言う『家』に生まれてこれた事を感謝して働いてりゃいいの」

「そうだよ。市井じゃ人付の奴隷でも、ご主人次第で相当ひどいつて話も聞くからねえ」

年長の二人は口を動かしていても、決して手は止まらない。目線

だけで「早く水！」と言われ、若い家奴隷の二人は慌てて井戸の口
ープを引っ張った。

「そっぴやさあ、奴隷皇子様は十歳で奴隷として高値で売るために
宮廷に残してる、なんて噂もあつたけどさ」

母親くらいの家奴隷が話を蒸し返した。若い二人が水を汲む間に、
向かいでせつせと洗濯桶の壁に布を押し付けて擦っている年配の家
奴隷に話しかけた。

「ああ、金の髪だからかね」

「あんまり言いたくないけど、アーラン様は宰相様から酷い扱いさ
れてたでしょ。でも、奴隷皇子様にはそんな事なかったからさ。傷
付けず、綺麗なまま、奴隷として売られちゃうんだって、あたしも
思ってたわ」

「ねえねえ、でも、今回の奴隷皇子様の怪我は宰相様がやったって
話なんでしょ？」

年上の家奴隷は水を足しながら、また噂話に加わった。年配の家
奴隷は「滅多なこと言うんじゃないよ」と若い家奴隷をたしなめた。

「でも、ま、要するに奴隷の話は間違いだったってことさね」

「奴隷皇子様は今までリユーシャ様に守られてたんだよ。母親役を
辞められた途端に、誘拐されたり大怪我したりだもんね。可哀想に
ねえ」

年長の二人も噂話に火が点いたようで話を続けた。

「何があつたか知らないけど、今回はリユーシャ様まで殴られてたじゃない。ああ、恐ろしい」

「リユーシャ様が奴隷皇子様を手放したくなくて、宰相様に我俣でも言つたのかな？」

今度はルカが水を注ぎながら話に割り込んだ。

「ああ、そうかもしれないね」

「そういえば奴隷皇子様の誘拐は、リユーシャ様は奥様方が犯人だつて、またひどくやり合つたつて言つじゃない」

「宰相様の方が『綺麗で賢いリユーシャ様』を離さないからだろ？ 宰相様が後宮に行かないから奥様が気分を悪くされるのも仕方ないさね」

「第三夫人様と第二夫人様は亡くなられたし、第四夫人様はずっとご病氣だし。リユーシャ様の敵は、後は第一夫人様か」
ファティマ アイシャ

ハリーファだけでなくリユーシャの事も良く知らないジエードは、話に入らず横で一人突っ立って聞いていた。洗濯女たちは気にせず手と口を動かしていた。若い二人も交互に水を運び続けていた。

「だけど、リユーシャ様は母親役を頑張つたと思うよ」

「そうしないと宰相様のお傍に居れなかつたんでしょ？ そりゃあ、がんばりもするよ」

家奴隷達による皇族の噂話は、まだまだネタが尽きそうになかった。

ハリーファとは違って、リユーシャの事は井戸端で頻繁に話題にあがった。そして奴隷達は、同じ奴隷身分のリユーシャにだけは尊称をつけて話すのだった。

作業を手伝う隙を失ってしまい、ジェードは邪魔にならぬよう井戸端から立ち去った。

ファールーク皇国のある西の大陸では日が最も高い時間になると気温が40度を超す炎天となる。

宮廷に暮らす人々は朝や夕方に生業をこなし、日中は部屋の中に籠って暑さをしのいで過ごしていた。皇族達は昼間に睡眠をとって夜中は起きている事が多いと聞いてジェードは驚いた。ハリーファは、夜はもちろん昼間もまだ一人寝室に籠っている事が多く、起きているのか寝ているのかジェードには分からなかった。

家奴隷達は一日中働き続けているが、皇族付の奴隷にとって昼間は自由な時間だ。

ジェードも自由な時間を与えられていたので【王の間】の中にじっと籠っているはずもなく、この時間に宮廷の中を散策する事だけが一日の楽しみとなっていた。

城壁の中は広く、迂闊に歩くと道に迷って【王の間】に戻れなくなりそうだった。ジェードは毎日少しずつ行動範囲を広め、頭の中には徐々に【王の間】を中心とした宮廷内部の地図が出来上がっていった。

入らせて貰えない場所や、ジェードには何か良く分からない場所も沢山あった。厩舎や厨房裏の家畜小屋、小さな畑のようになっている場所を見つけると、退屈しのぎによく覗きに行った。自分の馬がどうなったのか気になって厩舎を覗いてはその姿が無いことに落ち込み、家畜や小さな農園を見て郷里のアレー村での生活を思い出していた。

ジェードが自由になる昼の時間には、炎天の下作業をしているのは家奴隷ばかりで、皇族や皇族付きの奴隷達も建物の外には出てこなかった。

* * * *

家奴隷達の賄いは日に一回、朝食の残り物で昼にだけ用意された。ジェードは家奴隷と同じ扱いだだったので、昼間に家奴隷達と同じ様に、一日一回の食事を自分で厨房に取りに行く。それを夜と朝の二回に自分で分けて食べていた。

自分で持参した椀にその日の賄をよそってくれるがスプーンなどは添えられない。謀反を起こさないように配慮されているようであ

った。

ファールーク皇国にも春が訪れ、夏に向けて井戸の水位が少しずつ下がりはじめた頃。

この日は厨房がいつもより少し騒がしかった。

いつもなら料理人たちは既に調理を終えて、夕食の支度を始めるまでは休憩しているはずだ。ジェードが自分の食事を取りに行く時間は、厨房は大抵もぬけの殻で、大きな鍋の傍に一人だけ痩せた家奴隷の男が座って居るだけだった。

だが、今日は厨房に料理人が三人調理に勤しみ、いつも鍋の傍に居る家奴隷の男も料理人の手伝いをしていた。ジェードがお碗を持ってきたことに気付いた痩せ男は「今日は自分でよそっておくれ」と騒がしい中声を張った。

ジェードは鍋から硬めに炊かれたお粥を木の尺ですくった。ふと近くの調理台の上に目をやると、そこには綺麗にカービングされた果物とそれ彫ったと思われる細身のナイフが横たえられていた。

いつもの時間は鍋番以外無人の厨房からは調理道具は全て片付けられている。賄い食をよそうための木尺にさえジェードは触れられない。

だが、今日は料理人も慌しく働いていて、誰もナイフを放置したままだということに気が付いていなかった。ジェードがさっと視線をめぐらしたが、四人ともジェードに背を向けたままだった。

ジェードはそつと調理台に近づき、ナイフに手を伸ばした。

その時。

「ジェード―！」

突然名前を呼ばれ胸が早鐘を突いた。

厨房の入り口に現れたルカが、ジェードに気付き小走りに寄つてきた。

ナイフを盗ろうとしていた手を、ジェードはさつと引つ込めた。

ルカは大きな盆を抱えていて、そこには不揃いの碗が六つほど重ねて乗せてあつた。仲間の分も食事を取りに来たようだ。

ナイフを盗ろうとしたところを見られたのではないかと、ジェードは一瞬血の気が引いた。だが、ルカの笑顔から杞憂であると知つて胸をなでおろした。

ルカはジェードの心の内など何も知らず、ナイフが置かれたままの台の上に持つてきた盆を無造作に置くと、重ねていたお碗を一つずつ並べながら話しかけてきた。

「ジェード、今日は南方からの行商が来てるんだって！」

ルカはお碗の一つ一つに食事をよそいながら話した。

年に数回、南方の国アルザグエからの行商隊がやって来ているらしい。厨房が騒がしいのもその所為だった。

ジェードが学校で習った世界地図には現在ファールーク皇国領土の中央の地までしか載っていない。左の大陸のその更に奥にある土地の名前など聞いたことも無かった。

「見に行きましょう！ ジェード！ もしかしたら、誰かがわたしを人付きの奴隷として買い取ってくれるかもしれないし！」

ルカは目を輝かせてジェードを誘った。両手で抱えるように持ち上げた盆を睨みつけると「わたし、これを置いたら、なんとか仕事を抜け出して行くわ！」と付け加えた。

ジェードは一度【王の間】に戻ってから、ルカの言うように門前の広場へと向かった。

この時間はいつも閑散としている城門の前の広場から、離れた所まで人や動物の喧騒が響いていた。いつもの砂や草木とは違う、甘ったるい匂いと獣の匂いが広場を漂っていた。

広場を囲うように鮮やかな朱色の絨毯が敷かれ、その上に様々な細工品などが所狭しと並べられていた。白い肌や少し浅黒い肌の行商人と、皇族付きの奴隷達や家畜の仕入れに來た家奴隷達が門前の広場に沢山集まっている。そこに異国人のジェードが混じっても誰も気に止めないほど活気に満ちていた。

人にぶつからない様に、広場に敷かれた朱色の絨毯の前を歩くと、行商人達はジェードにも声を掛けてきた。時折知らない言葉が混じ

る話し声は、ジェードにはまるで不思議な呪文の様に聞こえる。絨毯の上には、色んな大きさの皿、椀、杯など様々な形や大きさを取り揃えた銀器が並べられていた。

隣には、透明、緑、青、赤色の硝子で作られた雫のような形の瓶が沢山並べられていた。太陽の日差しが硝子の曲面に反射して、周囲に薄い色付きの影がきらめいていた。

「綺麗……」

硝子瓶をうつとり眺めながらジェードはその前に腰を屈めると、掌で色とりどりの影を受け止めて遊んだ。

乾燥させた葉っぱや、白い石が山のように盛られた前を通ると、ジェードは最初に漂ってきた甘ったるい香りに包まれた。

別の場所ではいくつも並べられた小さな皿の上に、透明、黄、茶色の液体が入れられていた。花の甘く優しい香り、柑橘類の甘酸っぱい香り、不思議なスパイシーな香り、蜜のような奥深い香り。複数の香りが入り混じって心地よい香りを織り成していた。

行商人達が唱える不思議な呪文が飛び交う中を、ジェードは魔法にかけられたかのようにふわふわした足取りで歩きまわった。

赤絨毯で囲われた円の内側には、木箱が順序良く積み重ねられていた。木箱の側面は格子になっていて、ジェードから一番近い箱の中では茶色い鶏がバサバサと羽根を散らかしている。その隣の同じ形の箱の中では、耳の無い兎のような小動物が鼻をひくひくさせて緑の葉っぱをかじっていた。ジェードが指でその耳無し兎の鼻を突いてみると、兎似の動物は食事の邪魔をされ迷惑そうに短いひげを少し揺

らした。

他にも様々な小動物達が、同じように格子の箱に入れられていて、小さな声をあげていた。

まるで建物のように積まれた箱の間を、ジエードは一つ一つ眺めながら恐る恐る歩いた。しかし足取りとは裏腹に心は小躍りするようにわくわくしていた。故郷の村の年に一度の祭りでもこんなに胸が躍ったことはなかった。

城門近くには、二羽の大きな鳥が首に縄が掛けられ馬を繋ぐ木にくくられていて、ジエードの視線を釘付けにした。

（何！？ あれは鳥なのかしら？）

遠めに見ても背はジエードよりずっと高そうだ。二羽の大鳥のギョロギョロしたきつい視線は何処を見ているのかさっぱり分からない。二羽は向かい合って体のわりに小さな翼をバサバサと音を立てて羽ばたかせ、まるで喧嘩をしているかのようであった。ジエードは少し離れた場所から、子供のように胸を高鳴らせながら二羽の様子を眺めた。

城門の方に視線を廻らすと、乾いた砂色の毛の不思議な動物が目に入った。立っているものと、座っているものと、全部で合わせて十二頭は居る。馬と同じように轡を付けられ、その先を地面に置いた大きな石にくくりつけられていた。半分くらいは、頭とほぼ同じ高さの背に朱色を基調としたマットが背に掛けられていて、それには極彩色の系で何重にも菱形の刺繍されていたり、綺麗な房が縫い付けられていた。色とりどりの服を着せてもらった彼らは可愛くてジエードは思わず笑みがこぼれた。その姿はまるで『おめかし』をし

ているようだ。

先程の大きな鳥とは違って、『彼』らは暴れることもなくのんびりしている。大人しそうな様子にジェードはそつと『彼』らに近づいてみた。すると、『彼』らを驚かせてしまったようで、突然立ち上がると鼻をブルルと鳴らした。

立ち上がると馬よりも背の高い『彼』にジェードも少々怯んで後ずさった。だが、優しそうな瞳がジェードを見ているのに気付くと、そつと傍に近づいていき横から『彼』の足に触れた。

（なんてふかふかなの……！ 気持ちいい）

ふかふかの毛並みあまりに気持ち良くて、随分長いこと触っていたようで、『彼』が尻尾を振ってジェードを叩き、まるで苦情を言っているようだった。

（触りすぎちゃった？ ごめんなさいね）

ジェードが心で呟くと、『彼』はジェードの方にゆっくりと顔を向け、瞬きして長い睫毛を上下させた。

結局ル力は門前広場には姿を現さなかった。

（きっと仕事を抜け出せなかったのね。こんなに楽しいのに残念だわ……）

商隊の見学に夢中で、ジェードは時間が経つのをすっかり忘れていた。

自分の影が靴の長さより長くなったら、昼の休憩も終わりだった。昼からは【王の間】の掃除、オイルの補充、乾いた洗濯物を取りに行かないといけない。

いつもより少し時間が遅れてしまい、ジェードが慌てて【王の間】に戻ると、珍しくハリーファが応接室に出てきて本を読んでいた。右手首の怪我が思わしくないのか左手で胸に本を押し当てて支え、指先で器用にページをめくっていた。

「……起きてたの？」

ジェードが驚いて声を掛けるとハリーファは急に不機嫌そうになった。

「俺は昼はいつも起きてるし、今何時だと思ってるんだ」

「ごめんなさい……」

《楽しすぎて時間のことを忘れちゃってたわ……》

ジェードが素直に謝ると、ハリーファは呆れたように息を吐いた。

「獣臭いな。何処へ行ってたんだ」

「さつき広場で大きな動物を見たの！ あんな大きなのは初めてだわ！ 何か知ってる？」

さつきまでの興奮した気持ちを隠し切れず、それを表すように舌足らずで答えたジエードだったが、

「……馬のことか？」

と、ハリーファの返事はそっけなかった。

「もう、馬鹿にしないでよ！ 馬なら知ってるわ！」

ハリーファに冷やかな視線を向けられ、ジエードは高揚した気持ちが冷めてくるのを感じた。ジエードがハリーファの釣れなさにつかりしていると、珍しくハリーファから声を掛けてきた。

「アルザグエから行商隊が来てたんだろ？」

ハリーファが商隊のことを知っていたので、色々と話したい気持ちがジエードに湧き上がってきた。だが、浮かれて話していいのかわからず、話しづらくてジエードは戸惑った。

「^{ジャムル}駱駝を見たんだろ？」

「ジャムルって言うの？ 聖地の土の色の毛をした馬よりも大きな子よ！ 背中の大っきな！」

「お前が大きな鳥を見たなら^{ナーマ}駝鳥だ」

「そうよ！ 大きな鳥も居たわ！ あんなの見たの初めてよ！」

ハリーファが答えてくれてジェードの目が輝いた。再び胸に興奮と感動が甦ってきた。

心なしハリーファの口調が優しくなった気がした。

ジェードが故郷の村で毎日戯れていたのは羊の群れと馬だった。山羊や家畜としての鶏等も居たが、野性でも鹿や兎、鳥位しか動物を見たことはなかった。

ジェードにとってこんな心躍ったことは初めてだった。

「アサドは居たか？」

「アサドって？」

「『^{アサド}獅子』だ」

「獅子!？」

ジェードはハリーファの言葉に驚きの声を上げた。

ジェードはさっきから驚きの連続で、自分が子供のようにしゃいでいる事に気付いた。ハリーファは足を組み替えて、ジェードが驚く様子を面白そうに眺めていた。

「獅子は見なかったわ。獅子も居ることがあるの？」

さっきまで嬉々としていたジェードの顔が少し不安そうになった。

フロリスに獅子は存在しない。だけどジェードもその名を寓話や民話で聞いたことがあった。

金色の鬣に闇の中で緑に光る目の凶暴な獣の王は、金色の髪と緑

色の瞳のシーランド人の容姿に例えられる。シーランド王の異名でもあり、ヴァロニアの大人達は時折子供達に『　　していると獅子が来て喰われてしまうよ』と言って戒めていた。

「祝事がある年なんかは居るんだけどな。今回は居なかったのか」

ヴァロニア人は同じ金色の髪でも、目は青い。ジェードに語りかけるハリーファはシーランド人と同じ容姿だ。

「あの動物達はここで飼われるの？」

シーランドでもヴァロニアでも、王族達が自分達の権威を示すためやその家系の象徴に、異国の珍しい動物を愛育するような話は聞いたことがあった。

「食用だろ？」

さらりと返すハリーファの言葉に、ジェードは驚かずにはいらなかった。

「食べちゃうの？　もしかして獅子も？」

「いや、獅子は食わない。モリスでは獅子は神の象徴だとする教えも多いからな」

「神の象徴……」

そう言われてジェードはふと【天使】の事を心に思い浮かべていた。金色の鬘、緑の目とは程遠い容姿の天使の姿を思い出した。

そして【天使】に教えられた天命を思い出して、浮かれていた心が徐々に沈んでいくのを感じた。

* * * *

数週間後、ジェードはある事が気になって、ハリーファの食事風景をまじまじと眺めていた。

《この料理にあの駝鳥が入っているのかしら？》

昨日家畜舎からあの駝鳥が居なくなっていたのだ。

《あんな大きな鳥をどうやって絞めるのかしら？ 鶏と同じやり方でいいのかしら？》

およそ穏やかでない事を考え巡らせていた。想像すれど答えは分かるはずもなく、疑問は膨らむばかりだった。

すると突然ハリーファが嘔き出すようにむせ咽たので、ジェードの思考は中断した。ハリーファの顔は緩み、傍に立っていたジェードを見上げて問いかけてきた。

「お前はちゃんと食ってるのか？」

「食べてるわよ！」

《いやだ！ そんなに物欲しげにでも見えたのかしら！？》

「そういえば、お前、最近厩舎に行っているらしいな」

ハリーファはこの部屋からまだ出られないはずなのに、何故知っているのかとドキリとした。

「昼に何処に行こうがお前の自由だが、あんまりうろろするな。王宮の中でも粗暴や奴らも居るんだ」

「……………」

急に自分の行動を注意され、まるで父親と対峙している様な錯覚を覚えた。が。

「それに逃げようなんて考えるなよ」

父親らしからぬ言葉で脅迫される。

《まだ逃げようなんて思っていないわよ…………》

ジェードの顔が少し曇った。今はまだ逃げようとは思っていない。まだ、ハリーファを殺せていないのだから。

ジェードが厩舎に通っていたのは事実だが、聖地に置いてきた村の馬が気になったの行動だった。あの時一緒にここに連れてこられていないか知りたくて、頻繁に厩舎に足を運んでいたのだ。

「何度厩舎に行っても、お前の馬は居ないぞ。ヴァロニアの馬では

オス・ローとモリスの間の砂漠は越えられない。オス・ローからヴァロニアの国境までは半日も走れば十分辿り着ける。だからきつと自力でヴァロニアに帰っただろ」

そう言われてジェードは少しほっとした。こればかりはハリーファの言葉を信じたかった。

ジェードは朝の食事を片付けた後、洗濯物を抱えて井戸に足を運んだ。いつものように井戸端にはルカ達が居て、今朝もジェードがやってきたのに気付くと話しかけてきた。

「奴隷皇子様って乗馬も、剣術指南も受けてないんだってね。乗馬も剣の稽古もしないんじゃないか、わたしが奴隷皇子様に会える機会がないじゃないのよ、ねえ？」

残念そうに話すルカの言葉に、ふとジェードは心に引っかかるものがあつた。

馬に乗れないというのなら、あの時ハリーファはこの王宮から聖地までどうやって来たのだろうか。

それにどうしてあの兵士達を躊躇いなく簡単に殺せたのだろうか。

ジェードの心にもややとした疑問が浮かんだが、しばらくすると洗濯女達の明るい笑い声と水音に、不穏な考えは洗い流されていた。

「ねえ、ジェード、ちょっとは奴隷皇子様がどんなお方かわかった？」

ハリーファに対して淡い憧憬を抱くルカに悪い言い方は出来ない。せめて何か良い表現は無いかと必死で考えた答えが、

「……なんだか『パパ』みたいな感じよ」

だった。

肩を竦めながら言うと、ルカは不思議そうな顔をしてジェードを見つめた。

第一皇子シナーン

井戸の水位はますます下がり、年中暑く季節感の無いファールルク皇国にも、夏が来たことを知らせていた。

この国では季節に係わらず、日が最も高くなる時間帯は気温が40度以上にもなる。宮廷では昼間は家奴隷達以外は室内に閉じこもり、外は人氣がほとんど無かった。

太陽が頭上からギラギラと照りつける中、ジエードは閑散とした中庭を一人歩きながら、どうやってハリーファを殺したら良いのか考えていた。

（こんな調子じゃ、いつまで経ってもハリーを殺せないわ……）

ハリーファを殺さねばならないのに、日々の生活にすっかり流されてしまっていた。

何か武器でもあれば寝こみを襲うことも出来そうだが、あの部屋には全くそういうものが無かった。もちろん手に入れることなど出来ない。ヴァロニアを出る時父から渡された短剣は、聖地でハリーファに奪われて失くしてしまった。力ではハリーファにはかなわないのも、聖地で揉み合いになった時の事でなんとなく分かっていた。食事に毒を盛ることも出来そうだが、毒なんて手に入るはずもなかった。

（そういえば、知識が剣より強い武器だ、なんて言ってたけど……。

それでどうやって人を殺すって言うのよ……)

ハリーファの言葉を思い出し、ジェードは歯がゆさに思わず唇を噛んだ。

ハリーファの怪我が治り切らないうちがチャンスなのだと一人焦っていたが、ジェードは活路を開くことが出来ないうちにいた。

眩むような炎天の下、庭園の脇にあった石に腰掛け一人ため息をついた。

暑い土地の習慣でこの王宮に住まう人達は、日が高いうちはほとんど部屋から出てこない。ジェードが昼間に【王の間】から出て、忙しく働く家奴隷以外に出会う事はなかった。

だが、石に座って砂の地面を睨んでいたジェードの背に声が掛けられた。

「そんなところに座っていて熱くないのか？」

声の方に振り返ると、一人の少年がジェードに近づいてきた。少年は小麦色の肌に黒い髪を短く整え、豪華な縁取りのついた緋色の服を身に纏っている。歳はジェードやハリーファと変わらないように見えた。

「異国人の女奴隷というのはお前のことか？」

「……そうよ」

ジェードは座ったまま少年を見上げて答えた。逆光に思わず目を細めた。

ジェードは今まで何度か遠目にこの少年の姿を見たことがあった。少年が自分の姿を目で追っていたのに気が付いていた。彼にはいつも誰かが同伴していたので、今まで近づいてくることも声をかけにくることは無かった。

その少年はジェードをじろじろと見定めているようだった。その視線に抗議するようにジェードは眉をしかめた。ジェードは異国人というだけで、髪も男のように短く、白人ではあるが特に目立って美人というわけでもない。

「何故ハリーファはお前みたいなのを奴隷にしたんだろう。聖地であいつの命でも救ったのか？」

「……………」

少年の口から『聖地』と聞いて、ジェードは視線を斜め下に落とした。忘れてはならない大切な事と、忘れてしまいたい恐怖を思い出した。

「ヴァロニアに帰りたいか？」

「当たり前でしょ。奴隷なんて不本意なのよ」

「よく言ったな。あれでも一応皇子だぞ」

ジェードには『皇子の奴隷』という価値は全く理解できなかった。以前リユーシャにも言われた事だったが、どうしても釈然としない。

「私の言うとおりにすれば、お前を私の奴隷にしてから解放してやる」

ジェードは少し考えたが、今は国に帰ることよりもハリーファを殺す事を優先しなければならない。ハリーファを殺さずに国に帰っても仕方ないのだ。姉の魂を救済する為に聖地まで来た意味がなくなってしまう。

ジェードが少年の立派な服装を上から下へと見てみると、腰辺りに携えている少し曲がった形の短剣が目に残った。

（……あの剣を手に入れられれば、ハリを殺せるかもしれないわ！）
ふとそんな事がジェードの脳裏を過ぎった。

「あなた誰なの？」

ジェードの質問に少年はハハッと笑った。

「そこから説明しないといけないのか」

少年に対するジェードのぶしつけな態度も、異国人だからという理由で許されていたようだ。

「こんなところで話すことじゃない。着いてこい」

うだるような暑さの中、ジェードは黙って少年の後に着いていっ

た。

少年に連れられジェードが辿り着いた部屋は、本宮の三階に位置していた。

本宮の建物は口の字型になっており、リユーシヤの部屋とは反対側に位置しているようで、窓から遠くに青い海が見える。部屋の装飾もリユーシヤの部屋以上に立派なものだった。

部屋の方角の所為もあるのかこの部屋は随分涼しかった。代理石の床の上に、植物を模した柄が細かく編み込まれた赤い絨毯が敷かれている。

ジェードはその美しい絨毯を踏んで良いのか分からず、思わず手前で立ち尽くしていた。少年はそんなことは全く気にせずその上を歩き、丸いテーブルの横の椅子に一人腰掛けた。

「水を淹れてくれ」

ジェードは自分に言われていることにしばらく気付かなかったが、少年の視線を感じて慌てて部屋を見回した。

金細工の取っ手の付いた棚の上にピッチャーを見つけ、傍にあったグラスに水を注ぐと少年のところへ運んだ。

「まずお前が飲むんだ」

そう言われ、ジェードはよく分からないままグラスの水を一口飲んだ。

少年はジェードからグラスを受け取ると、ジェードが口をつけた部分から水を飲んだ。間接的にジェードと唇を重ねる行為にジェードは少しどきつとした。少年の漆黒の髪と瞳を間近に見て、ジェードは不思議と懐かしいものを感じた。

「私はシナーン。ハリーファの兄だ」

黒髪の少年はテーブルの上にグラスを置きながら話し始めた。

「ハリのお兄さん……？」

ということとは、この少年もこの国の皇子ということになる。噂には聞いていたが、兄弟で髪も目も、肌の色まで全く違うことにジェードは驚きを隠せなかった。ジェードの顔には『兄弟なのに似ていない』と現れていた。

「クライス信者のお前には分からないだろうが、私達は母親が違う」

シナーンの言うとおり、母親の違う兄弟などジェードには理解出来なかった。伝承者クライスの教えは一夫一妻で不貞は禁忌だ。

「奴隷と言うのは『身内』だぞ。あいつはお前に自分の身の上話もしないのか？ それともお前……」

「ジェードよ」

「ジェード、お前はハリーファに信用されてないんだな」

確かにジェード自身もハリーファから信用されているとはとても思えなかったが、そう言われると何故か癪に障った。

「……じゃあ、あなたは信用されてるって言うの？ 本当の身内なんでしょう？」

ジェードが言い返すと、シナーンの顔から笑みが消えジェードを睨みつけてきた。

「私もハリーファもお互い信用してなどいない」

「奴隷は信用するのに、兄弟は信用しないなんておかしな話だわ」

「従属階級と一緒にするな。ヴァロニアでも王太子とその姉が王位を巡って争っているだろう。それと同じだ」

自分の国のことであるのに、ジェードは王族や王都で起こっている事などは全く知らなかった。

「そんなことはいい」

シナーンが話題を変えた。

「お前はハリーファの事を、不気味に思う事はないのか？」

「……不気味？」

「心を見透かされているような気がしないのか？」

そう言われてみて、ジェードも、的外れではないのに会話がかみ合わない事は今まで何度もあった事を思い出した。だが、そんな人知を超えた事を疑ったことはなかった。

「人の心を覗くなんて悪魔の仕業のようね。そんなこと有り得るの？」

「私はハリーファは神魔^{ジン}が獲り付かれているんじゃないかと思っている」

「神魔^{ジン}……？」

「人間と神の中間的な存在の精霊のことだ。神魔にとりつかれた人間は、その姿も変えてしまふらしい。お前も私達兄弟は似ていないと思っただろう？」

「そうだけど……」

（もし人の心を見透かすのなら、わたしがハリを殺そうとしてることも気付いてるのかしら……）

そんな不安がジェードの頭に浮かんた。

「異国の伝承は信じられないか？ ヴァロニアの魔女^{ウィッチ}と同じだぞ」

魔女^{ウィッチ}。
。

そう聞いてジェードは眉をしかめ、姉の事を思い出した。

「……魔女と神魔は違うわ……」

本当に姉は魔女だったのだろうか……、その真実が知りたくて聖地までやって来たのだ。そして【天使】の言うとおり、天命に従えばその答えが得られるはずなのだ。

天命に従い、ハリーファを殺さなければならない。

人に取り憑くという、人間と神の中間的な存在、ジン神魔。
悪魔と交わり特殊な能力を身に着けた、ウィッチ魔女。

そんなモノが本当に存在するのだろうか……。

（姉さんは絶対に魔女なんかじゃないわ……）

神魔の存在を否定できれば、魔女の存在も否定できるのではないかと、半ば強引にジエードは思い始めた。

「わたしは……魔女が本当に存在するのか知りたいの」

「ならば自分の目で確かめるといい。神魔も魔女も、悪魔の存在あつてのものだろう？ 私も弟に取り憑いているものの正体が知りたいんだ」

「どうやって確かめればいいの？」

「そんなことは自分で考えろ」

ジェードにとって一番簡単な方法は、ハリーファの食事に毒を混ぜることだ。ジェードの心の声が聞こえずにハリーが服毒して死ねば、ジェードは天命を果たせる。神魔と魔女の存在が否定され、姉が魔女ではなかったことを証明できる。

（ハリーを殺すことが出来れば全て上手くいくんだわ。でも……）

ジェードにはシナーンが自分に何をさせたいのかはつきり分らず、シナーンの考えていることがよく掴めなかった。

「それを確かめる為に、ハリーが死んでもいいの……？」

ジェードの問い掛けにシナーンは答えなかったが否定もしなかった。

「何か必要な準備してやろう」

シナーンは立ち上がるとジェードの横を通り壁際の棚の方へ行った。そして引き出しから何かを取り出した。

「もしハリーが本当に神魔に取り憑かれていたら……？」

「神魔に憑かれた人間は死なない。その時はお前が死ぬことになるだろうな」

シナーンは冷たく答えながら、ジェードに瑠璃色のガラスの小瓶をそつと手渡した。

シナーンの部屋を出たジェードは、すぐに【王の間】に戻る気分にはなれず、回廊に腰掛け庭園をぼんやり眺めていた。

太陽が真上を通り過ぎ、それまで日陰だった回廊にも少しずつ西から日が差し始めた。暑さでこめかみにうつすらと汗が滲んだが、ジェードは不穏な気持ちを包み隠すように膝を抱えた。

姉の死後に突然聞こえるようになった【天使】の声は、ジェードに聖地に来るようにと導いていた。
聖地で天命を知らされ、その後は全く【天使】の声が聞こえなくなっていた。

「天使様……」

ジェードは助けを求めるかのように、空を見上げて呟いた。

「お前の【天使】は空に居るのか？」

背後で聞き覚えのある声がした。ジェードは驚いて声のした方を振り返ると、金色の髪の少年が立っていた。

「ハリ!？」

ジェードは慌てて余計なことを心で考えないようにした。

「もうあそこから出ても良いの?」

立ち上がって、衣服に付いた砂をはらった。二人の目線の高さがほぼ同じになる。

「ああ、さっきやっと許可が出た。部屋の前の見張りが居なくなつてせいせいする」

ハリーファは今までに見たことも無いような清々しい顔をしてジエードに近づいてきた。

強い日差しに慣れているのか、太陽の光にさらされても目を細めることすらしない。明るい場所で見えるハリーファの瞳の色は透き通るような翠で、ジエードは見たことも無い宝石を見ているようだった。

澄んだ翠の色に一瞬心を奪われていた。

「お前がいつもの時間に戻ってこないから心配してたんだ」

ハリーファの言葉に、意識が引き戻される。以前遅刻してからというものの、必ず早めに【王の間】に戻るようになっていた。

「逃げてないかどうかの心配でしょ」

答えながら、ジエードは心では何も考えないようにした。シナーンの言っていたように、ハリーファの透き通る翠色の瞳で見つめられると、まるで本当に心の中まで見透かされているようだった。

「誰かと話してたのか？」

「話す人なんて居ないわよ……」

「そうだな。お前は俺意外の人間と話す必要はない」

「……わたしのことなんか全く信用して無いくせに」

ハリーファがどういいうつもりで言ったのか分からなかったが、いつものようにジェードは言い返した。

咄嗟に後ろに隠した手には、先ほどシナーンから渡された瑠璃色のガラスの小瓶が握られていた。

すれ違い

ここ数日、毎朝ジェードは【王の間】に戻る前に人目を忍んでハリーファの食事にシナーンから渡された液体を混ぜ込んでいた。

周りに人が居ないことを確認すると服の中に隠し持っていた瑠璃色の小瓶を取り出し、穀物を煮込んだ乳白色のスープに数滴混ぜる。この瞬間だけは気温の暑さは全く感じず、自分のしている背徳的な行為に背筋に冷たいモノが走りぞつとした。そうかと思うと、次はこめかみに汗が滲んでくる。

それでもジェードは、これは天命なんだと自分を正当化し、心中の恐怖を隠して冷静さを保つようになっていた。

【王の間】に入る前に深呼吸して緊張をほぐし、心音と呼吸が整うのを待った。

盆を持つ手の震えが止まると、何食わぬ態度でハリーファの前に食事を配膳した。

それなのに……。

「いらなから下げてくれ」

ハリーファは毎回、ジェードの顔を見るなりそうを言った。

「……またなの？ いい加減にして」

ジェードは抗議の声を上げたが報われなかった。シナーンから渡

された液体をハリーファの食事に混入すると、その時に限ってハリーファは食事には手を付けようとせず、全く口にしようとはしない。

《何か変わってる？ どうして判るのかしら？》

味の方はもちろん知る由もないが、その液体は色もついていないし臭いもしなかった。

ジェードは一人眉根を寄せ、皿の上に盛られた食べ物を睨み付けていた。

「ジェード、何してるんだ。もういいからさっさと下げろ」

ハリーファは膳を下げるようしつこく言つと、明らかに苛立った様子で【王の間】を出て行ってしまった。

（何なのよ！ シナーンの言うように、本当に心を見透かされているのかしら）

おそらくシナーンは『ハリーファは神魔^{ジン}に取り憑かれています』という答えを望んでいるのだろう。だが、ハリーファが神魔^{ジン}に取り憑かれているのかどうかなど、ジェードにとってはどうでも良い事だった。

【天使】に教えられたとおり、ハリーファを殺すことが出来れば自分の天命を果たすことが出来る。姉の魔女の疑いを晴らすことが出来る。ただ、それだけだ。

それなのに、用意した食事はいつも拒否され、ジェードは途方に暮れた。その上、ハリーファがこう何日も食事を食べないでいるの

を見ると、自分の行動と矛盾しているが心配にもなってきた。

（……どうなってるの？ これじゃ、逆にハリが神魔に取り憑かれる事を証明してるようなものじゃない）

【王の間】に一人取り残されたジェードは一人唇を噛んでいた。

正午近くになって、ジェードが部屋の掃除をしていた所に、ハリーファはまだ少し不機嫌そうな顔をして戻ってきた。

ハリーファはジェードを連れ出すと、宮廷内の保管庫に向かった。保管庫の前に着くとハリーファは懷から古びた鍵を取り出した。微かに砂の積もった鍵穴に息を吹きかけて砂を落とすと、ハリーファはそこに鍵を差し込んで扉を開けた。そこは滅多に人の出入りが無いようで、何年もの間空気が動いていないかのようなだった。

光の入る窓は無く、二人はそれぞれランプの灯りを頼りに足元や周りを照らし、保管庫の奥へと進んでいった。

壁際には古めかしくもう使えなさそうな武器が束ねて立てかけられていた。革の蓋が張られた長い大きな壺や、小さな壺も所狭しと置かれている。その間を縫うように闇を奥に進むと、紐で綴じられた紙束や本のを積んである書棚がいくつも並んでいた。

「ジェード。お前、数は判るんだろ。そっちの下から1218年の

年号が入ってるものが無いか探してくれ」

ジェードは小さなランプを床に置き、しゃがみこんで綴られた紙の束を端から順に確認していった。

ハリーファは梯子の上に登り、棚の上段に平積みになった書物を一つずつ確認している。

二人は言葉を交わすことも無く黙々と作業を続けていた。

《1218……、1218……》

ジェードの心の声がハリーファにはずっと聞こえてきた。ジェードは他の事を考えることも無く、ただひたすら心で規則的なリズムで読み上げていた。

時折ハリーファがジェードを見下ろしても、その視線にさえジェードは気が付かない。いつもは何かと食って掛かってくるのに、与えられた仕事に関しては文句を言ったことは一度も無かった。倦むことなく働き続けているジェードの姿を見て、ジェードがヴァロニアでどういう生活をしていたのだろうか、探し物の傍らでハリーファは思いを巡らせた。

昔、サライがユースフの家で暮らす間、奴隷達と同じように休み無く働く彼女を見て、今と同じように【エブラの民】がドームの中でどのような生活をしているのか思い描いたことがあった。

ドーム内の【エブラの民】の生活は知ってはいけない事だと敢えて詮索しなかったが、ジェードは只の村娘だ。ヴァロニアでどんな暮らしをしていたのかジェードに直接聞けばいい話なのだ。

……だがハリーファは聞かなかった。

心にある枷のようなものが、ハリーファの口を重く閉ざさせる。ハリーファはサライの時と同じように、ジエードの事を問うことはしなかった。

保管庫で探し物を始めてから、随分時間が経っていた。

「……見当たらないな」

ハリーファは額の汗を拭い、紐で綴じられた紙の束をいくつか抱えて梯子から下りてきた。自分の持っていたランプをジエードに渡すと、その灯りを頼りに更に紙束を選別した。要らないものは棚の手の届く所に適当に詰め込んだ。

「1218年だなんて。二百年も前のものなんてあるの？」

「普通はあるんだ。その年は初代の宰相が死んだ年だ。無いはずがない」

アーデインの死んだ年の記録だけが抜け落ちていた。ハリーファでも入れるような、こんな保管庫に保存されている書類など、きつと大した事は書かれていないのだろうが……。ハリーファは考え込んだが、一人首を横に振った。

「……一旦終わろう。これ以上無駄だな」

二人は保管庫を出ると、開けたときと同じようにその扉を閉めた。

日が西に傾き始め、ハリーファとジェードの足元の影も少し長くなっていた。

回廊を渡り部屋に戻る途中、前を歩いていたハリーファが急に立ち止まった。

後ろからハリーファの金色の髪をぼんやり眺めながら物思いに耽っていたジェードは、驚いてハリーファにぶつかる直前で足を止めた。

ハリーファの視線の先に、回廊の正面から歩いてくる厳しそうな表情の男性とリユーシャの姿が見えた。

男性は青年と言うには歳を取り、中年と言うにはまだ少し早い。傲然そうなのに、どこか思慮深い表情をして、眉間には深いしわが刻まれていた。

《あの人は誰……？ 何所かで会ったかしら？》

ジェードは何処かでその男性を見たことあるような気がして、記憶を思い返した。

「宰相だ。端に寄れ」

ハリーファに言われて、その男がシナーンと似ている事にジェー

ドは気が付いた。

初めて見るファールーク皇国の宰相の姿だった。漆黒の髪に、微かに憂いを帯びた瞳。すれ違う瞬間、何故かジェードの胸がざわついていた。

宰相とリユーシャは二人に気付いたようだったが歩みを止めることはなく、すれ違う時も無言のままだった。

リユーシャは二人の姿などまるで目に入って居ないかのように、ハリーファともジェードとも目を合わさなかった。表情に以前見た穏やかさは無く、その代わりに隙の無い高貴な美しさを纏っているように感じられた。

井戸端での家奴隷達の噂通り、この宮廷の中で最も美しい女奴隷なのだろう。もっと歳若い女奴隷も沢山いるが、まだまだその美しさはリユーシャには及ばないのだろう。

女奴隷の中で誰よりも豪華な衣服を纏い、宰相の傍を悠然と歩く姿は、表舞台に立たない妻以上の女王の風格を感じさせていた。

ジェードはそつと振り返って二人を見たが、二人は振り返ることもなく黙って宮殿の奥へと姿を消した。

ジェードは再び歩き出したハリーファの後を慌てて追いながら、金色の髪を後から眺め、家奴隷達の噂話を思い出した。

【王の間】に戻ったハリーファは、早速保管庫から持ち出した書物を読みだした。

飾りのような文字を右から左へと指を滑らせて、ジェードの事など気にも留めず書物を読みふけるハリーファの様子を見て、ジェードは黙って応接室から出て行った。

休憩時間も残り少なかった。今から厩舎まで行って戻ってくる程の時間は無い。ジェードは【王の間】の奥にある自室に戻ると、一人狭いベッドにうつ伏せになって物思いに耽った。

（ハリーは家族とも仲良くないのかしら？ 皇子ってそういうものなの？ ここに友達も居ないのかな？ 最近よく一人で出て行くけど何処に行ってるのかしら？ 寂しくないのかしら？）

心の中に疑問ばかりが浮かび上がる。もう一ヶ月以上もハリーファの傍で一緒に暮らしているというのに、ルカにハリーファの事を問われても何も答えられなかった。ハリーファの事を何一つ良く知らない事に今更気が付いた。

裕福ではなかったが、田舎で兄弟に囲まれて育ったジェードは、こんなに広くて沢山の人が生活している宮廷なのに、ハリーファは随分寂しい生活をしているんだなと思わずにはいられなかった。

ヴァロニアの家族のことを思い出した所為か、ハリーファの自身の事を孤独だと思った所為か、ジェードの瞳から一粒だけ涙がこぼれ落ち、ベッドに滲んで消えた。

休憩を終えたジェードは、ハリーファの居る応接室の横を素通し時刻からの仕事に戻った。

ジェードがランプのオイルを持って【王の間】に戻ってきた頃には、日は落ち室内は薄暗くなっていた。

ジェードが応接に行くとき薄暗がりの中、ハリーファはまだ書物に見入っていた。黙って部屋にある三箇所ランプに火を灯すと、ハリーファはやっとジェードの存在に気づいた。

「ああ、……ありがとう」

顔を上げて、素っ気無くそう言っているとハリーファはまた書物に目を戻した。ハリーファから労いの言葉を初めて聞いてジェードに不思議と優しい気持ちが生まれた。

多分今までずっと書物を読むことに集中していて、水分も取っていないに違いない。ジェードは入り口の水瓶からグラスに水を注ぎ、長椅子に座っているハリーファの横のテーブルに置いた。

「どういうつもりだ」

途端に不機嫌そうな顔つきでジェードを見上げるハリーファは、ジェードが注いだグラスを口に運ぼうとはしない。

「……毒なんか入ってないわよ」

ハリーファの嫌疑の視線に、ジェードは思わず言い訳をした。

「ずっと何も飲んでないみたいだから心配になっただけじゃない。心配しちやいけなかった？ 奴隷は『身内』なんでしょ？」

シナンから聞いて知ったことを言ってみた。どうもフロリスとモリスでは『奴隷』という身分に相違がある。モリスでは『身内』だが、フロリスでは『罪人』だ。

「俺はお前を奴隷だと思った事はない」

喜ぶべきかどうか悩む言葉だったが、ハリーファの言葉尻から良い意味で言われたわけではなさそうだ。人の心が読めないジェードでもそれくらいは判った。

「……わたし、信用されてないのね」

ハリーファはジェードの言葉を無視して、また書物に目を落としたりした。

ジェードはハリーファに言われた『お前を身内とは思っていない』という意味の言葉がひどく寂しく感じた。ハリーファの隣にぽつんと突っ立ったまま、自分の事など眼中に無いハリーファの横顔を見つめた。この寂しさはお互いに相手のことを知らないから湧き上がってくるのだらうとジェードは思った。さっきこぼれた涙もきつとその所為なのだろう。

ジェードはこの寂しさを振り払おうと、ハリーファの読書の邪魔をして、しゃがみこむとハリーファを見上げて話しかけた。

「ねえ、昼間のあの金色の髪の女の人、ハリのママなんでしょ？」

ジェードの問いかけに、ハリーファは視線を書物から床にしゃがんだジェードに向けた。

「リユーシャの事か？」

ジェードはリユーシャの名前を聞いてこくりと頷いた。

「リユーシャは父の女奴隷だ。俺を生んだ母親じゃない」

「そうなの？」

てつきりハリーファの母親なのだと思っていたが、言われてみれば、同じ金色の髪でも質が違う。ハリーファの明るい金色に比べると、リユーシャの髪は光を透かしてしまいそうな繊細な色だ。ハリーファとリユーシャは目の色も違い、確かに顔立ちも似てはいなかった。

「ああ、だが男の方は俺の父だ。この国の宰相^{ワジル}、……最高権力者だ」

「宰相……って？ 王様のこと？」

自分には縁遠い世界の事などジェードにはまるで分からなかった。

「違うけど似たようなものだな」

ハリーファはそれだけ言うと、また視線を書物に戻した。

ジェードは床に視線を落とすと、すれ違ったジャファルの姿を思い出した。

国の頭とも言える人物にまみ・見える事など、ヴァロニアでのジェードの生活では考えられない事だった。自国ヴァロニアの王族な

どには、きつと一度もまみ・見えることなく生涯を終えるのだろう。

《あの人がファールーク皇国の宰相……。シナーンには似てたけど、ハリとは全然似てなかったわ。本当に親子なのかしら？》

ハリーファの視線が一瞬動いたが、ジエードはそのことには気がつかなかった。

「リユーシャさんは宰相の女奴隷だったのね。宰相の夫人や他の女奴隷があの人失脚を狙ってるって噂を聞いたわ」

「奴隷同士でそんな話をしてるのか？」

ハリーファの言葉には明らかに厭味がたつぷり含まれていた。

「……井戸端で聞こえてくるだけよ」

「リユーシャは特に父のお気に入りだからな。他の母達の手前、俺の乳母にしたようなものだったんだろうな」

ジエードが解せない顔でハリーファを見つめていると、それに気づいたハリーファが説明した。

「宰相の妻は皇族の血を引いていなければならない。だからリユーシャは宰相の妻にはなれない。だが皇子の乳母なら宰相の寵愛を受けても文句はないだろ」

「……………」

それを聞いてジエードは言葉に詰まった。

《あの人……、主人は女奴隷に夜伽はさせないって言ってたのに。嘘つき！》

リユーシャに少し裏切られた気分になった。

「^{モリス}天使の教義では女奴隷に夜伽させてはならない。だけどこの国の宰相だけは例外だ。皇族の血を引く女しか妻に出来ないからな。父上はリユーシャを妻にしたいくても出来ないんだ」

ハリーファはリユーシャを擁護するような言い方をした。それもまたなぜかジエードの胸には詰まる。多分、理由は井戸端で聞いた話の所為だった。

「宰相はリユーシャさんを傍に置いておく為に、リユーシャさんをハリの乳母にしてハリをここに残したの？ 第二皇子は本当は王宮に残れないんでしょう？」

「そんな専横で宰相が勤まるわけないだろ！」

ハリーファが強い口調で怒鳴った。ジエードの言葉に気分を害したのか、忌々しげな視線をジエードに向けた。

《やっぱり父親の事は庇うのね。足と手の怪我だって宰相にやられたんじゃないの！？ やっぱり皇子なんてわたしには理解出来ないわ！》

何かきっかけがあればハリーファを理解できるかと思ったが、共感できることは何一つ無く、ジエードは自分がどんどん泥沼にはまっていく気分だった。知ろうとすればするほど、何故かハリーファ

とますます距離を感じてしまう。

「自我尊重の心を捨て、主情を無視出来なければ宰相なんて勤まらないんだ」

ハリーファは怒ったように言葉を吐いた。

しかし、言つてすぐに苦い表情になり言い直した。

「……いや、お前の言う通りだ……。父は主情を捨てきれないでいる。だけど理由はそれだけじゃない」

《……理由？》

「……父の肩を持つ訳じゃないが、一国の宰相ともなれば相当な苦悩もある。それは宰相の女奴隷だって同じだ。お前なんかに解かるわけない」

「宰相になったこと無いくせに、ハリにだって解からないでしょ！」

「……解かるさ」

ハリーファの顔が急に暗くなった。それに気付いたジェードは、きつくなり過ぎた口調を少し緩めて聞いた。

「同じ奴隷でも、宰相の女奴隷だとそんなに偉いの？」

リユーシャにだけは同じ奴隷達が尊称をつけていた。それも不思議でならなかった。

「……それを言うなら、お前は『皇子の女奴隷』だ」

「それはいつかわたしを裏切る『地位』よ。ハリが自分でそう言ったでしょ」

ハリーファはジェードの返答に驚いているようだった。

「……そんなこと覚えていたのか」

「あの人だって同じじゃない。いつか裏切られるわ」

「同じだと？ お前とリユーシャが同じなわけない！」

ハリーファは怒鳴ったが、先ほどと同じように、また苦々しげに顔を歪め溜め息をついた。

「いや、お前の言う通り、お前もリユーシャも同じだ……。だがな、リユーシャが偉いと思われるなら、それは宰相の女奴隷だからじゃない。彼女が努力して身に着けた知性とカリスマのおかげだ。それがリユーシャとお前の違うところだ」

ハリーファはジェードに対して反論ばかりしてくるのかと思ったら、ジェードの意見を肯定して言い直したりもする。言い方は決して優しいわけではないが、ジェードを頭から否定している訳ではない事は理解できた。

皇国の慣習など知らないジェードは、ハリーファは庶子で、リユーシャがハリーファの母親だと思っていた。ハリーファにとって唯一の味方はリユーシャなのだろうと思っていた。複雑な人間関係とそれぞれの想いに、ジェードはだんだん訳がわからなくなってきた。

ハリーファの事を少しでも知ろうと努力してみたが、余計にわからなくなるばかりだった。

外は日がすっかり落ちて室内はますます暗くなり、三箇所灯りではお互いの表情は判りにくくなっていた。

ジェードはそっと立ち上がると、ハリーファにぽつりと呟いた。

「あなたの本当のママは後宮に居るの？」

「いや、もう死んだ」

「そう……」

ハリーファと血の繋がった家族があゝの宰相以外誰も居ないのかと思うと、ジェードは急に寂しくなって目元が熱くなった。そして両手で顔を隠して鼻を吸った。

ハリーファはうんざりした様子でジェードを見上げた。

「泣いてるのか？」

「だって……。悲しいじゃない……」

ハリーファは書物を閉じてテーブルに置くと、横で突っ立ったまま泣き出しそうなジェードを見た。

「別に悲しくなんか無い。生まれてすぐの話だ。母親の顔も覚えてないのに」

「何言ってるの？ 家族が死んで悲しくない訳無いじゃない。死は別なのよ。わたしは姉さんが死んだ時、辛くて悲しくて、あんなに泣いた事はなかったのに……」

ジェードは姉が死んだ時のことを思い出した。

ジェードが十歳になった頃、姉のルースに魔女の疑惑がかかり、ヴァロニアの王都ランスで火刑に処された事を……。

「わたし、三年前に姉が殺されたの。魔女の疑惑がかかって……」

「魔女？ それは何だ？」

「……悪魔と契約して、能力を身につけた人間のことよ」

「悪魔と？ 契約……？」

ハリーファは座ったままジェードの方に体を向けた。

ジェードは自分の話に初めて興味を持ってもらえたことに心地よさを感じたが、それが悲しい出来事であることに複雑な思いだった。

「えっと……」

魔女を知らないハリーファに説明するのに、ジェードは少し言いづらそうにして言葉を選んだ。魔女とは、悪魔と肉体的な関係を持ち特殊な能力を身に着けた人間のことだった。

「悪魔と【契約】を交わして印を貰うと、魔女になって特殊な能力が身に着くと言われてるわ」

「特殊な能力って？」

「不老不死とか、読心術とか言われてるけど……」

自分で言っウィッチてジエードははっとした。

魔女は読心術を使うという。もしかするとハリーファは魔女ウィッチなのだろうか……。

座っているハリーファを見下ろすと、金色の前髪の下の翠の瞳は、真剣な眼差しをジエードを向けている。その髪と瞳の色を見て、ジエードの心の疑念は即座に晴れてしまった。

「魔女は……、黒髪の女性ばかりなの……」

金色の髪で男のハリーファが魔女ウィッチのはずが無い。ジエードは無意識に呟いていた。

ハリーファはジエードの黒髪や漆黒の瞳を凝視した。

「……じゃあ、お前はウィッチなのか？」

「ち・違うわよっ！」

ジエードは顔を真っ赤に染めて怒った。

間接的に黒髪のことを言われたことに対してもだが、クライス信仰では成人を迎えるまで異性との付き合いもご法度だ。敬虔なクラ

イス信者のジェードは、自分の清純さを否定されたような言い方に腹を立てた。

「ではお前の姉上は？ 悪魔と契約を交わしたのか？」

「そんなわけないでしょ！」

ジェードは顔色を変え、大きな声で怒鳴った。

「姉さんが悪魔と【契約】なんかするはずないわ！ 姉さんには恋人だって居たのよ！ そんなことありえないんだから！」

怒っているのに、ジェードの顔は今にも泣き出しそうだった。

「だからわたしは毎日天使様に祈っていたのよ……。本当のことが知りたいから……」

ジェードは辛い記憶を思い出して、目から涙が溢れた。これまでハリーファに涙を見せたことは一度も無かったが、胸の内に抱えていた聖地まで足を運ばせるほどの思いが溢れ出した。

「姉さんは魔女じゃないわ。その証明が欲しいの！ 姉さんの魂を救ってあげたいのよ！」

ジェードは押し寄せてくる自分の感情に、立っていられず床に座り込んで嗚咽を漏らした。

《その為に聖地まで来たのに……こんなことになるなんて》

ずっとハリーファに突っかかっていたジェードが、この時初めて

自分の心の内をさらけ出して泣き続けた。

ハリーファはジェードを黙って見下ろしていた。

「聖地でお前は救いを得たのか？ 姉上は救われたのか？」

暫くしてハリーファは足元に座り込んだままのジェードに穏やかに問い掛けたが、ジェードは頭を垂れたまま横に振った。

「だろうな。神は生と死以外の何も与えてはくれない。救いはお前自身の心が生み出さないといけない」

アルフェラツと同じ事を言うハリーファに、ジェードは驚いて顔を上げた。ハリーファの表情からは怒りも哀れみも読み取れなかった。

ジェードは澀みない瞳でハリーファに問い掛けた。

「ねえ、ハリ、教えて。魔女や神魔は本当に存在するの？」
ウィッチ ジン

日頃ハリーファは返事をせず黙っていることも多かったが、ごまかしたり言葉を濁したりすることは一度も無かった。だからこそ、いつものようにはつきり否定して欲しい。ハリーファがそれらの存在を否定してくれるなら、きっと信じられるような気がした。

ジェードは祈るような思いでハリーファの答えを待った。

「天使と悪魔がこの世に存在するなら、魔女や神魔も存在する」
ウィッチ ジン

自分の問いを今こそ否定して欲しいと願ったが、ハリーファの知る真実はジエードの望む答えとは違った。

「そんな……」

ジエードは悲哀の表情になった。ハリーファが嘘をつかないと分っていたはずなのに、どうして望む答えを言ってくれないのかと怒りが悲しみになって溢れ出した。

ポロポロとこぼれる涙が頬をつたってジエードの唇や顎を濡らす。止めようと思っても、こぼれてくる涙を自分の意思でどうにも出来なかった。

「お前は聖地で【天使】に会ったんだろ。矛盾したことを言うな」

「でも！ アルフェラツ様は自分のことを【天使】だとは言ってなかったわ」

ジエードは感情に任せてアルフェラツの正体と名前を口にしたことに気付いていなかった。

「いや、アルフェラツは【天使】の名前だ」

「どうしてそんなことをハリが知ってるのよ！」

「俺は【悪魔】の名前も知っている」

「……悪魔……？」

ハリーファの言葉を受け止められず、ジェードは頭を横に振った。

「ハリ、……あなたは神魔^{ジン}に憑かれているの？」

《人の心を見透かしているの？》

ジェードは涙で濡れてぐしゃぐしゃになった顔を掌で拭うと、真っ直ぐにひたむきな視線をハリーファに向けた。

「……俺は、神魔^{ジン}に憑かれてなどいない……」

その視線から逃れるようにハリーファはジェードから目を逸らした。ハリーファはいつものような自信や明瞭さがどこか欠けているようにジェードには感じられた。

* * * *

ジェードは一晩中部屋で泣き続けた。おかげで今朝は目が腫れてしまつて頭痛がひどく、ハリーファに文句を言う気力もなかった。

ここ数日ハリーファがほとんど食事を取っていなかったので、ジェードは小瓶の液体を混ぜずにそのまま食事を出した。するとやはり、見抜いたかのようにハリーファは食事に口をつける。

ジェードとは違って、ハリーファは何か落ち着いたようなすっきりした表情を見せていた。

「ジェード、二つ程教えておいてやる。奴隷において、主人殺しで主人が死ねば死罪だ。それに逃亡も死罪だからな」

ジェードは冷や汗が出るのを感じた。知らなかったとは言え、もしハリーファが死んで居たら自分は処刑されたのだ。驚いて返す言葉も無かった。

「今日までに俺が死ななくて良かったな」

「……………」

いつもなら言い返すところだが、昨夜の疲れでジェードは黙っていた。

《良かったってどういう意味よ!》

ジェードが心の中でハリーファに文句を言うと、ハリーファはどこか楽しそうに笑みを浮かべた。ハリーファのいつもの不敵な笑みだ。ジェードが何か言い返しても相手にせずに、ハリーファは余裕で笑みを浮かべるのだ。

目の前でむっとしているジェードを気にする様子もなく、ハリーファは久しぶりの朝食を優雅に口に運び続けていた。

お前が食べればいい

ハリーファは食事を食べない時はいつもそう言っていた。だが、

小瓶の液体を入れた時に限って、ハリーファが食べると言ったことは一度も無かった。

そんな事に気が付くと怒りは収まり、代わりに疑問が沸きあがってきた。

《やっぱり心を見透かしているの？　ねえ、どうなの？　答えてよ、ハリ》

その時ハリーファはふいとジェードの方を見た。だが何も答えはくれず、ハリーファが人の心を見透かしているのかどうかの確信は得られなかった。

気が付けばシナンから貰った瑠璃色の小瓶の中身はほとんど無くなっていて、ジェードは不思議とほっとした。

その後、ジェードがシナンと二人で会う機会も無く、日は過ぎていった。

信仰告白

植物の穂は少しずつゆるやかに頭を垂れ、暑氣の続くモリスにも秋の訪れを知らせる。

皇都の西を流れる川の下流は水が氾濫し、乾いた土地にひと時の潤いを与えていた。

その日の朝は、いつもと少し様子が違った。

ジェードが一回目の水汲みから帰ってくると、閉めていったはずの【王の間】の扉が開いていた。

いつもハリーファが起きて寝室から出てくるのは、大抵ジェードが三度目の水汲みから帰ってくる頃だ。

ハリーファが起きて何処かへ出て行ったのだろうか？

ジェードは汲んできた水を入り口のそばの大きな瓶に注ぐと、気になって応接を覗いた。すると、奥のハリーファの寝室の扉も開け放たれたままで、そこに部屋の主の姿は見当たらなかった。

ジェードが井戸へ行っている間に、誰かが【王の間】に衣装を届けに来ていたようだった。

応接の長椅子の上に、綺麗な衣装が無造作に広げて掛けられていた。上品な濃紺の生地で、縁には金色の糸で飾り模様が刺繍されている。よく見ると布地全体に同じ濃紺色の糸で細かい飾り刺繍がされていた。

服の他に長い布地も何枚か広げられていた。それらはジェードが見てもわかるほど、とても質の良いものだった。

「きれいな……」

思わず口から言葉がこぼれた。ジェードはうっとりとその美しい衣装を眺めた。

宰相やシナーンが普段着ている衣装よりもずっと豪華だ。きっと何か特別なものなのだろう。

明るい金色の髪や深い翠の瞳を持つハリーファは、質素な服を着ていても惹きつけられてしまう程の美少年だ。この美しい衣装を、あの容姿端麗なハリーファが着たらどんなに美しいだろうか。ジェードは想像して思わず胸がときめいた。

だが、ハリーファが袖を通した瞬間、もしかしたらこの衣装の方が色褪せて見えるかもしれない。

ジェードは一人苦笑すると、二度目の水汲みへと再び【王の間】を出た。

三度の水汲みを終えた後、ジェードは厨房からハリーファの食事を持って戻ってきた。

食事の乗ったトレーを抱え応接に入ると、ハリーファがあつた麗な衣装に袖を通してゐる所だつた。

脱いだ服は長椅子の背に投げ置かれ、ハリーファは人目などはばかる様子もなく素肌をさらす。あまりに真白な肌の少年の半裸姿に、ジェードは思わず入り口で足を止めてしまった。双子の弟のおかげ

で男の裸も見慣れていたはずだったのだが、弟よりもっと白く見える肌にジェードは思わず視線を泳がせた。

ハリーファはジェードのことなど気にもとめず、濃紺の衣装をさつと羽織り袖を通した。そして、手馴れた手つきで、腰に長い布を引いては巻いていく。その姿をジェードは黙って物珍しそうに眺めた。おそらくジェードが手伝いを頼まれたとしても、異国の衣装の腰布の巻き方などわかるはずもない。そんな事をわかっていたのか、ハリーファは全て自分一人で着付けてしまった。

故郷のアレー村では、鮮やかな色の絹の衣装をまとった貴族を見ることは全くない。

ハリーファの髪や瞳の色は、ファールーク皇国の皇族としては異様なだろう。だが、壮麗な衣装に身を包んだハリーファは、金色の髪と翠の瞳が映えて、それだけでヴァロニアで言う『貴族』のようだ。

そして、ジェードの思ったとおり、衣装ではなくハリーファ自身が華やいで見えた。

その姿は、まるで姉が聞かせてくれたおとぎ話に出てくる王子のようだ。絹の衣装をまとった金色の髪の王子様。異国の服だが、ジェードの想像していた姿が目の前に現れたかのようにだった。

ジェードはすっかり心を奪われて、ハリーファの姿を眺めていた。

「……すごくステキよ。皇子っぽくなったわね」

ジェードの声が少しうわずった。

「馬鹿なこと言うな」

褒めたつもりだったのだが、ハリーファににらまれた上、あっさりといさめられてしまった。

「そんな事を言うのはお前くらいだ。呆れるな」

《なによ！　せっかくほめてるっていうのに！》

ジェードは不満な気持ちを表情と態度にあらわし、テーブルの上に運んできた食事の盆を手荒に置いた。

「そんなきれいな格好して。今日は何かあるの？」

「成人の式典だ」

《……成人ですって?!》

ジェードはハリーファの年齢を知らなかった。勝手に自分と同じくらいと思い込んでいて、今まで一度もそんな話をしたことはなかったのだ。

「成人って、ハリは今何歳なの？」

「12になった」

ハリーファの年齢を知って、二つの意味で驚いた。

一つ目は、

「この国は12でもう成人なの?!」

二つ目は、

《ハリはわたしよりも年下だったのね》

「男は12、女は10で成人だ。国じゃなくて宗教的にだけどな」

「信じられない！ 10や12で成人だなんて早すぎるわ」

クライス信仰では成人は男女とも16歳だ。ジェードにとっては12歳なんてまだまだ子供だという感覚が拭えない。ハリーファは、口調、背の高さ、顔立ちから実際の年齢よりも大人びて見える。ジェードと同じか少し上くらいに見えた。

ハリーファが12歳だと聞いて、途端にまだ随分子供なんだという気がしてきた。今までハリーファに対して怯えていた事が、少しおかしく感じられた。

「宗教的にじゃなかったら、いくつで成人なの？」

「ファールークの法では14だ」

ジェードはちょうど三カ月後に14歳になる。その時、13の忌年もようやく明ける。三カ月後に自分が大人になれているとは思えなかった。

「この国は法よりも信仰の教義の方が守旧されているからな」

「14だって、やっぱりまだ子供よ」

ハリーファは腰布の端を詰め込み、服の裾や胸元を引っ張って服を整えた。

「ならお前は何歳なら成人として認めるんだ？」

そう問われてジェードはクライス信仰の16歳を思い浮かべた。だが、答えるよりも先にハリーファが口を開いた。

「クライス信仰は16で成人だったな。クライスは禁欲主義者なんだろう？」
ジェイド 『禁欲』」

ハリーファが珍しくからかうかのように、いつもとは違う韻律でジェードの名を呼んだ。その韻律には聞き覚えがあった。ファールーク皇国に連れてこられた頃、リユーシャが同じ韻律でジェードの名を呼んだのだ。だが、ジェードにはその呼び方の意味する事はわからなかった。

ハリーファがなぜ天使を禁欲主義者と言うのか、すぐには理解出来なかった。家奴隷達やシナーンから聞いた話をあれこれ思い出して、ようやくモリス信仰が一夫多妻制だということに気付く頃が熱くなった。ヴァロニアでは他の宗派は『異教徒』と聞かされ、教義はもちろんのこと、名前もろくに知らされないのだ。

モリス 天使信仰の成人の儀式とは一体どんなものなのだろうか？
ジェードの好奇心がかきたてられた。

宗教的な儀式ではないが、ジェードの故郷のアレー村では、毎年成人を迎える男女を祝う小さな祭りが行われる。16歳は職に就いて四年目と言うこともあって、その祭をきっかけに結婚する男女も多かった。

「ねえ。成人の式典ってどんな式典なの？」

「聖典を読み上げて、その後酒を口にするだけのつまらない儀式だ」

ハリーファの言葉の意味に反して、ジェードの目が輝いた。

「聖典って、モリス信仰の聖書のことなんでしょう？」

「そうだ」

「ハリが聖典を読むの？ 聞きたいわ！ ねえ、着いていつちやいけないかしら？」

ハリーファは年下なのに、ジェードから無意識に兄達に頼みごとをするように甘えた声が出た。

そんなジェードの態度をハリーファは全く気にも留めていない様子で、

「どうせすぐに終わるぞ。まあ、着いてくればいい」

と言うと、素足に靴を履いた。

「行くぞ」

ハリーファはジェードが運んできた食事には目もくれずに、ジェードを連れて礼拝堂へと向かった。

* * * * *

本宮への立ち入りを禁じられていたハリーファも、今日は中に入ることを許されていた。

建物を取り囲む回廊を渡り、本宮の入り口を入ると大きな丸天井のホールがあった。見張りの兵士に先導され、ハリーファとジェードはホールの真ん中を歩いていった。

天を仰ぐと、夜空を見上げているような黒く大きく丸い天井が遙か頭上に広がっている。壁には幾何学模様を組み合わせた装飾が施され、床には色の違う大理石が紋様を描きながら敷き詰められていた。その上に、黒と金を基調とした長い絨毯が、入り口からホールの奥へと続く道のように敷かれている。

ジェードは初めて目にするホールを見上げ、思わず感嘆の声を漏らした。

だが、ハリーファも兵士も無言のまま振り向きもせず進んでいく。ジェードは慌てて二人を追いかねばならず、天井の壮麗な装飾をゆっくりと眺めることはできなかった。

ホールの奥まで行き着くと、そこにはレリーフの彫られた両開きの木の扉があり、片方が開いたままになっていた。扉の前で兵士に先を譲られ、ハリーファは黙って部屋の中へと入っていった。

ジェードは小走りでハリーファの後についていった。

礼拝堂とは独立した建物ではなく、本宮の一階のホールの奥にある小さな部屋のことだった。

ジエードが想像していたよりもずっと狭い部屋だ。すぐ外のホールが大きいため、余計に狭く感じられた。

扉を入ると、真正面には質素な造りの木の机が一つ。その下にくすんだ紅色の敷物が敷かれ、その上に古びた大きな本が置かれている。後方の壁際には扉の左右に、低い背もたれと肘掛付きの木の椅子が四脚ずつ置かれているだけだった。

床や壁は一面、良く磨かれた灰色の石が張られていた。

礼拝堂の中はひんやりとしていて、普段全く感じることはない湿度をかすかに帯びていた。

礼拝堂には既に大人の男が三人居て、前方の机の脇に立って話していた。

彼らはハリーファの姿を確認すると、三人共が恭しく頭を下げてきた。ジエードは、ハリーファに対しこういう態度をとる大人達を初めて目にした。急にハリーファの後に居るのが居心地悪く感じた。

二人が男達のそばに行くと、一番年配の白い服を着た中年男がハリーファに話しかけてきた。

「ハリーファ殿下。本日はお慶び申し上げます。ご立派になられましたな」

男の祝辞に、何故かハリーファの表情がいらだったように見えた。続けて式典の流れを説明しだした男に、ハリーファは右手を上げて話を制止した。

「知っているから説明はいい。早く終わらせたいんだ」

「然様ですか。シナーン殿下の式典の時に同席しておられましたな。では、本日は、宰相殿とシナーン殿下と、ハリーファ殿下の乳母殿^{リユーシャ}ハルダーン殿。それに、この書記官アンバーと、この歴史家イヤスが『証人』として立ち合い人とならせて戴きます」

まるで司祭のような姿の白服の男は、横に控えている壮年の二人の男をハリーファに紹介した。宰相と同じ位の年端の男二人が、それぞれハリーファに深く頭を下げた。

ジェードは郷里では、大人が子供に頭を下げたり、子供が大人に指図する光景など見たことがなかった。今更ハリーファが高い身分にあることにはつきりと気づかされた。

《……だけど、わたしはこの国の民じゃないんだもの。関係ないわ！ 絶対ハリーに服従なんかしないんだから》

ジェードは一人、自分の心を力づけた。

ハリーファはジェードに後ろの椅子に座るように指図した。ジェードは左側の椅子に静かに腰掛けた。ハリーファはその隣の椅子に座ると、少し怒ったような表情で腕と足を組んだ。

ハリーファが何故こんなに面白くなさそうなのか、その理由がさっぱりわからない。普通、お祝い事は嬉しいものじゃないのかしら、と隣のハリーファを見て、ジェードは心の中で首をひねった。

モリス信仰の成人の式典は男子のみ執り行われる。

聖典を詠唱し、それにならう誓詞を読みあげる。立ち会った六人の成人が『証人』となることで新成人として迎え入れられる。

ハリーファは今までにはなかった第二皇子という立場のためか、六人の『証人』役もハリーファが宮廷に留められている事情を知る者ばかりだった。宰相の後継者であるシナーンとは違い、式典自体も公にされず、つましく執り行われるようだった。

しばらくして、ジャファルとリユーシャ、そして老人が連れ立って入ってきた。先に居た男達はまた恭しく頭を下げた。

ジャファルとリユーシャは右手の椅子に腰掛けた。最後に入室してきた老人は、一度同じように椅子に座ったが、礼拝堂内を見回すと前方に居る三人の男達の方に歩み寄った。

老人はしわがれた声で白い服の男に話しかけた。

「^{イマム}宗教家殿よ。もう、全員揃っているのか？」

「ハルダーン殿、シナーン殿下が参られれば整います」

イマムと呼ばれた白服の男は、老人に向かって少し困ったように答えた。

先に礼拝堂に居たアンバーとイヤス、そしてジャファルとリユーシャとハルダーン老。それにシナーンを含めると六人になる。だが、シナーンはなかなか礼拝堂に姿を現さなかった。

書記官は宰相を待たすことを良しとせず、ジェードの方を見て宗教家に告げた。

「イマム殿、ハリーファ殿下の^{ジャーリア}女奴隷をシナーン殿下の代わりに『証人』に出来ないのか？」

「殿下の女奴隷はクライス信仰者だと聞いている。彼女はモリス信仰での成人とは認められん」

宗教家はハリーファのそばに行くと、そつと告げた。

「殿下、シナーン殿下が来られるまで今暫くお待ちください。そしてどうか、式典の間は、^{ジャーリア}女奴隷にはご退室を」

宗教家にそう言われ、ハリーファは隣に座るジェードに告げた。

「ジェード、お前は外で待っている。聖典詠唱を聞きたいなら外で

も聞こえる」

ハリーファにそう言われ、ジェードは黙って立ち上がると、礼拝堂を出ていった。

ジャファルは礼拝堂を出て行くジェードを見て、隣に座っているリユーシャに耳打ちするように話し掛けていた。二人はジェードの事を何か話していたが、その声は周囲には聞こえなかった。

ジェードは礼拝堂を出て、入り口の扉の前で一人佇んでいた。

（シナーンもここに来るのね……。会ったら、何て言えばいいの……？）

以前、ハリーファが神魔^{ジン}に憑かれているかを確認するようにシナーンに言われ、瑠璃色の小瓶を渡された。シナーンは本当にハリーファは神魔に憑かれていると疑っていたのか。それとも自分がかわれただけだったのか、良くわからない。

そのことを考えると嫌な気分になった。だが、ふとホールの天井を仰いだ瞬間、途端に悩みが心の中から姿を消した。

漆黒と紺の濃淡で美しく彩られた夜空が頭上に広がっていた。そこには星の形に似た複雑な模様が規則的に散りばめられている。そして、屋根と壁との境には薄緑、橙、赤、黄などの色付きガラスの飾り窓が、丸い天井を縁取るように埋め込まれていた。そこから光がホールに優しくあふれ、ホールを心地よい明るさに照らしていた。

（ランスの、聖ソフィア大聖堂も、こんな感じなのかしら……）

ジェードは夢見ごこちで天井を眺めた。

噂でしか聞いた事のないヴァロニア王都の大聖堂の姿を思い描く。さつきはゆっくり見ることが出来なかったホールを、今度はじっくりと心ゆくまで眺めた。

燦爛たる天井を見上げて、ジェードは胸をふるわせた。

絨毯の道を歩く衣擦れの音に、ジェードは我にかえた。

美しく着飾った二人の女奴隷がジェードの前を横切った。一人は透明硝子のグラスを乗せたマホガニーの丸い盆を持ち、もう一人は茶色の細長いビンを抱えている。ジェードの存在などまるで居ないかのように無視し、二人は礼拝堂へと入っていった。

程なくして、先ほどビンを持ってきた女奴隷だけが、一人礼拝堂を出て去っていった。

前ぶれなく、謳うように演説する声が聞こえてきた。

先ほどの司祭のような白服の男の声だ。ジェードにとって耳慣れない韻律の詞は、まるで不思議な音楽のようだった。

続いてハリーファの声が聞こえてきた。

モリス信仰の聖典を朗読しているのだろう。聖典は感情をこめずに延々と読み上げられている。その響きは教会で朗読される聖書と

同じように、耳ではなく胸で聞き、頭で思考するのではなく心で受け止めるもののように感じられた。

ジェードは礼拝堂の入り口近くの段差に腰掛けた。膝を抱えて目を閉じ、礼拝堂の中から聞こえてくるハリーファの声に耳を傾けた。

聞こえてくる内容は、天上の楽園に暮らすリダーとアズルという男と女の話だった。人物の名前が少し違うが、ジェードの知っているクライスの聖書に収められた話にも似た一説があった。

朗々と聖典を読み上げるハリーファの声を聞きながら、ジェードは聖地に忘れてきてしまった聖書のくだりを頭の中で反復した。

文字は読めなかったので、その内容にあわせて刷られた白黒の版画を頭の中に思い描いた。

『 壁の向こうにあるという楽園

壁を挟んで別の世界に暮らしていたリダーとアズル

蛇の誘惑に負けて扉を抜けるアズル

反対側の世界の物を食したことで、元の世界に戻れなくなってしまふ
』

聖書には、向かい合って壁に手を添える男女。

そして、二人を阻む壁の上には黒い肌の悪魔の姿が描かれていた。

礼拝堂の中では、ハリーファの詠唱は延々と続いていた。
机の手前に宗教家が立ち、ハリーファは宗教家と向かい合い、『証人』達の居る後方に向けて立っていた。

初めハリーファは机上の聖典の上を目で追い、読みながら一度だけそのページをめくった。読み進むにつれて、ハリーファの視線は徐々に聖典から離れ、空ろな瞳で礼拝堂の入り口を見つめていた。

ジャファルは椅子に肘を突いて腰掛け、ハリーファが聖典を詠むのを眺めていた。しばらくして、息子が机上に広げられた聖典を見ずに、暗唱していることに気付いたようだった。

「アレに聖典を覚えさせたのか？」

ジャファルは顎でハリーファを指し、憮然とした面持ちで左隣に座ったリユーシャに問いかけた。

「……え、ええ」

（……わたくしは教えていないわ……。ハリーファ様……、一体いつの間に聖典など覚えになったの……？）

「ふん」

リユーシャは不機嫌そうなジャファルから、逃れるように身体ごと顔を背けた。その時ふと左手を見やると、先ほどグラスを運んできた女奴隷の姿が目についた。なかなか礼拝堂に現れないシナーンの代わりに、式典に参加するよう引き止められた女奴隷だった。色鮮やかな布で髪を巻いていたが見覚えがある顔だった。

（あの女奴隷は……。シェーラ様の女奴隷？ どうしてハリーファ様の式典に？）

式典の途中だったが、ジャファルの隣に座っていたリユーシャはそつと席を外した。

遙か昔に、ユースフはモリス信仰のこの儀式を経験していた。

複数の宗派を認めているファールーク皇国では、婚姻の際に男女の信仰を同じ宗派にする習わしがある。そのため、ユースフはエブラ信仰からモリス信仰に改宗したのだ。

宗教的な儀式というのは二百年経とうともなんら変わらなかった。それだけではない。執り行われるこの礼拝堂も、二百年前と何も変わっていないかった。

昔、何度も聞いてそら覚えしてしまった聖典のくだりを詠唱しながら、ハリーファは幻覚を見た。

礼拝堂の後ろに座る『証人』達が、ウバイド皇国時代の若き王サームやシャーミールの姿にかわり、やがて消えていった。

ハリーファはひとくだりの詠唱を終えた。

机上に開かれた大きな聖典を閉じる音が、静まり返っていた礼拝堂に響いた。

続いて、宗教家はハリーファに向かって歓待の辞を述べた。そしてハリーファの目の前で、用意された儀式用の透明のグラスに茜色の葡萄酒を注いだ。

モリス信仰は飲酒が禁じられているため、酒を口にするのは生涯でこの儀式のたった一度だけである。それも、葡萄酒は火にかけられ酒気はほとんど飛ばされたものだった。

「聖者モリスは貴方を成人と認めました。貴方の父ジャファル・アル・ファールーク、そして六人の先達が汝を成人として歓迎し導きます。貴方にもモリスの血が流れることでしょう」

葡萄酒の入ったグラスがハリーファに丁重に差し出された。

ハリーファは片手でグラスを受け取った。儀式の直前に酒気を飛ばした葡萄酒は、まだ生ぬるく本当に人の血を思い出させた。

ハリーファがそのグラスを口にしようとした時だった。

「お待ち下さい！ ハリーファ殿下！」

割って入ってきたのはリユーシャだった。その横に外で待っていたはずのジエードが、手首を捕まれて連れられていた。

「……乳母上？ ジエード……？」

ハリーファは驚いて二人の方を見やった。

ジャファルもまた、リユーシャの思いがけない行動に背筋を伸ばしその様子を眺めた。

「ハリーファ殿下。わたくし、殿下の女奴隷に一つ教え忘れていたことがございます」

厳しい口調で言い放つと、ジェードを半ば引きずるように連れて正面の机の横までやってきた。

リユーシャはジェードの手首を引っ張って、ハリーファの傍に立たせた。

《……痛い……》

ジェードは冷徹な表情のリユーシャに戸惑いながら、解放された手首を反対の手で押さえた。

「あなたはハリーファ殿下の奴隷なのです。己の主人が口にするものは、全てあなたが先に口になさい」

リユーシャはハリーファの手から葡萄酒の注がれたグラスを奪うように取り上げると、それをジェードに突きつけた。

《ハリーファ様、このワインには毒が入っています》

「……!?!……」

リユーシャの心に告げられ、ハリーファは思わず声を漏らしそうになった。

「乳母上、お止め下さい!」

ハリーファは慌てて二人の間に割って入った。毒入りの葡萄酒を飲んでジェードが死んでしまつては、アルフェラツに会う事が出来なくなつてしまふかもしれない。

リユーシャは心の中でハリーファに語りかけてきた。

《ハリーファ様、どうか邪魔をしないで！ 貴方様を死なせては、わたくしは宰相様の御傍には居られないのです》

リユーシャはグラスをジェードの顔の前に突きつけ、促すようにじつとジェードをにらみつけた。

「さあ！」

リユーシャの強引さに、ジェードは立ち尽くしていた。目前で波打つ血のような葡萄酒とリユーシャの形相に、何か良くない事を感じ取つたようだった。ジェードは眉尻を下げ怯えたようにリユーシヤを見上げた。

《ハリのために毒味をしろつてこと？ ここで、他にも誰かがハリを殺そうとしているの？》

《ハリーファ様が生きていれば、この女奴隷など死んでも構わないわ！》

ハリーファにしか聞こえない声が二人の心から聞こえてくる。

リユーシャがジェードに突きつけているグラスの中の葡萄酒は、ゆらゆらと螺旋を描くように波立った。

ハリーファが間に入ってもお構いなしに、リユーシャは更にジェードに詰め寄った。

なみなみと注がれていた葡萄酒は、ジェードの顔の前で大きく波打ちグラスを飛び出した。真紅のうねりがジェードの口や首、さらに胸元を濡らした。

「きゃっ……」

その一瞬、ジェードが顔をしかめた。

服の上に着けていた聖十字のペンダントも葡萄酒を浴びてしまった。ジェードの着ていた白い服は胸元が赤く染まり、銀色だった十字架は真っ黒に変色していた。

《やはり!?!》

リユーシャは目を吊り上げて、ジェードの胸元のペンダントをむしり取り、それをにらみつけた。

何事かと席を立て近づいていった歴史家のイヤスは、リユーシャの手元を覗きこんだ。

「どういうことだ! 酒に毒が入っているぞ!」

「なんと……。一体誰がこんなことを……」

リユーシャとジェードのやり取りをすべて見ていた宗教家も顔色を失った。
イマム

「静粛に! 式典は中止じゃ。日を改めなさい」

老人は椅子から立ち上がって、宗教家達の元へと歩み寄った。
ジャファルは眉間に皺を寄せ席を立った。

「……誰の所業か早急に調べろ」

静かに怒りを含んだ声で近くに居た書記官に告げると、踵を返し一人でさっさと退室してしまった。

「ハリーファ様はお部屋へお戻り下さいませ。ジェード、あなたはわたくしと一緒に来るのよ」

リユーシャは困惑するジェードを引き連れると、礼拝堂を出て行ってしまった。

宰相と、その女奴隷が礼拝堂を去ると、つかの間礼拝堂が静まり返った。やがて歴史家や書記官が机の前に集ってざわめきだした。

「……ハリーファ殿下。殿下は相当強い天使の御加護を受けておられるようですね。先の誘拐の時といい、今回といい……。貴方は運の強い御方だ。何度も命を救われておられる」

呆然として立ち尽くすハリーファに宗教家が言った。

（いや、俺じゃない……。天使の加護があるのはジェードだ……）

ハリーファが礼拝堂を出るとシナーンと出くわした。シナーンはハリーファとは対照的な緋色の服を纏っていた。

「ハリーファ。今し方、父上が随分ご立腹のようだったが。何があった？ 私が遅れた所為なのか？」

「酒に毒が入っていて式典が中止になった」

「毒だと？ 一体誰が……」

ハリーファの答えにシナーンは驚いた表情を見せた。

《ジェードか？ まさかな……》

シナーンの態度を一見不自然に感じた。だがシナーンの心の声に、ハリーファは自分の勘が外れたことを悟った。昔に比べると随分勘が鈍くなってしまった気がした。

「愚者の毒だ。儀式用の酒に毒を入れられる人物なんてすぐに判る」

「……そうか。大禍なくて安心した」

シナーンはハリーファにそう言つと、礼拝堂には入らず踵を返してハリーファの前から去つていった。

ハリーファもそのままホールを抜け本宮を出ると、【王の間】へと戻った。

* * * *

リユーシャに連れられ礼拝堂を出たジェードは、ホールの壁の模

様と同調の一見ではわからない扉を抜けた。

扉の裏側はホール横の廊下に通じていた。その奥に本宮への階段がある。

何ヶ月も前に、リユーシャに連れられてその階段を重い足取りで逆に下った事を思い出した。二人は廊下を歩み奥の階段を上っていった。

以前と逆の道をたどり、リユーシャはジェードを自分の部屋に黙って招き入れた。

部屋の奥にもう一つ扉があり、リユーシャはそこから一着の服を手にして出てきた。

「これにお着替えなさい」

手渡された服は絹糸で模様が刺繍された孔雀色の豪華な衣装だった。

「わたくし事にあなたを巻き込んだことはお詫びするわ」

以前に比べ、リユーシャは穏やかさが無くなり口調は冷たかった。言葉では詫びているようだったが、ジェードにはその心は感じられなかった。

「あなた、^{クライス}天使に助けられたわね。わたくしは天使など信じていないけれど」

ジェードは突然の出来事にいまだ困惑していた。

聖十字のペンダントをしていなかったら。もし^{ワイン}葡萄酒を口にして

いたら……。自分は死んでいただろう。

そう気付いたとたん、にわかに血の気が引いた。リユーシャに殺されそうになったのだ。手足がガクガク震え持っていた衣装が手から滑り落ちた。

（この人はわたしを殺そうとしたの？）

命を奪われそうになった事に足がすくんだ。

リユーシャが自分を殺そうとしたのは、ハリーファを助けるためだったと事実を歪曲せずにいらなかった。

「……ハリーファを助けるためだったんでしょ……？」

ハリーファを助けるために、ああするしか無かったのだと思ったかった。だが、

「そうよ。ハリーファ様が死んでしまつては、宰相様がお怒りになるから」

「でも、あなたはハリーの乳母なんでしょ？」

ジェードはリユーシャの美しい表情が曇つたことに気がついた。

「わたくしは乳母と言う『役目』はもう十分に果たしたと思つているのだけど」

そう言われ、ジェードは何も言い返せなかった。

真っ直ぐな視線を向けるジェードの心の内をくんだのか、リユー

シヤは続けて語りだした。

「自分の子ではないのに本気で愛せるとでも思っているの？」

一夫一妻制のヴァロニアでは、父親のいない子供もたくさんいた。妾の母の元を離れ、父親の元で暮らす子供もいたが、大抵継母とは仲が悪いと聞く。

自分の子じゃないのに愛せるわけなど無い。

その言葉はジェードでも十分理解できるものだった。

「そうね。ハリーファ様を我が子のように思った時もあったわ。でもきつと有り得ない幻想を楽しんでいただけ。結局それは偽りで、わたくしは女奴隷でしかないということ」

衣装を拾いもせず突っ立っているジェードに、リユーシヤは諭すように語った。

「あなたがハリーファ様に抱かれるようになればわかるかもしれないわね」

リユーシヤはそう言ったが、少し考えて言い直した。

「いいえ、やっぱりあなたにはわたくしの気持ちは一生わからないわね。あなたは宰相付きではないのだから」

以前リユーシヤから感じた『母』の雰囲気は全く無くなっていた。今ジェードと話しているのは同じ『女奴隷』だ。

「天使様を信じていないなんて。信じられないわ……」

ジエードは、ポツリと呟くように言った。

リユーシャは宰相との関係で、天使の教えに逆らっている。^{モリス}だからそんなことを言うのだろうか。

「わたくしは宰相様の為なら死ぬことも厭わないわ」

天使信仰では自殺は禁忌の一つとして教えられる。

死ぬことを厭わぬというリユーシャの意思是、まさしく天使を信じていないということを表していた。

「……宰相はあなたが死んだらきつと悲しむわ」

「あなたみたいな若くて美しい娘には、まだわからないわね」

「わたしは美しくなんかいいわ……」

そう言いながらジエードは少し伸びた髪をいじった。

誰が見ても本当に美しいリユーシャに、そんな風に言われても納得出来るわけがない。からかわれている訳ではないのだろうが、何が言いたいのかわからなかった。

「わたくしはね、宰相様になら殺されても構わないのよ」

（宰相に殺されても良い……？ それは宰相を……『愛している』っていうことなの……？）

殺される などと不穏な言葉だったが、不思議とその言葉に隠

された想いをジェードは感じる事ができた。

ジェードは黙って、リユーシャの目の前でもたもたと汚れた服を脱いだ。

渡された服を羽織ると、リユーシャが櫛を手にしてそばにやってきた。後ろからジェードの乱れた髪を櫛で整え、耳にかぶさっていた髪をするりと耳にかけた。

「あなた、まだ気付いていないのね。ハリーファ様のこと」

ジェードを眺めながら、リユーシャが独り言のように呟いた。ベツドのそばの瓶にこぼれるように活けられたピンク色の花を手折ると、ジェードの髪に飾った。

「あなたは、ハリーファ様を利用しようなんて考えないで愛せるかしら？」

「利用って……。どういうこと？」

ジェードは思わず聞き返した。

「着替えたらさっさと出て行って」

リユーシャの心がわからないまま、ジェードは部屋を後にした。

ジェードは足早に階段を下った。

扉を抜けると、もうホールを見上げることもなく、まるで逃げるかのように【王の間】までの道のりを急いだ。

（わたしが気付いてないって、何？）

ハリーファが言っていた通り、リューシャの行動は宰相の為である事を、リューシャ本人の口から聞いてしまった。

リューシャまでもがハリーファの立場を利用しようとしていたのかと思うと、悔しくて唇をきゅつと噛んだ。

（リューシャさんはハリーの味方だと思っていたのに……。違うの？）

この宮廷にはハリーファには誰も味方が居ないのだろうか。

ジェードは自分自身もハリーファの味方ではないことを棚に上げて、目に滲んできた涙をぬぐった。

* * * *

ジェードが【王の間】に戻ると、ハリーファはその姿を見て驚きの声をあげた。

「皇族付きの女奴隷っぽくなっただじゃないか」

「……馬鹿なこと言わないでよ」

ジェードが朝のハリーファと同じ台詞を言うと、ハリーファは少し笑った。

ハリーファは珍しく興味を持ったのか、惹きつけられるようにジェードをじっと見つめてきた。不思議と大人びた優しい目をしている。身動きもせず着飾ったジェードから目を離さなかった。

「随分綺麗だな」

「リユーシャさんのだもの……。とても上等なものだわ」

「服のことじゃない。お前だ」

ジェードは思わず胸が高鳴った。ハリーファの言葉にくすぐったい気持ちになる。深い翠色の視線がジェードの頭から足先へと動き、顔が熱くなるのを感じた。

ジェードは慌てて両手で胸元を隠し、ハリーファから目をそらした。リユーシャの身体に合わせて仕立てられた衣装は、胸の辺りがジェードには大きかった。

「孔雀の狭衣を纏いし黒曜石の瞳、春宵の髪に聖地の花、か。まるで『アルフライラ千夜物語』の麗しき女サフラのようだな」

ハリーファの言葉は、淡々と聖典を詠んでいた時とはまったく違う。物柔らかな口調だった。いつもと態度の違うハリーファの言葉に、ジェードは身体が熱くなった。

「その色には黒い髪が映えるな」

黒髪のことを言われると、さっきまで上気していた心が少し冷めてしまった。

「アルフライラのサフラって何？」

「話上手で夜伽上手な女だ」

「なっ……」

ジェードの顔が真っ赤に染まった。さっきまでの胸の高揚が不快感到に覆われていく。

《あなたがハリーファ様に抱かれるようになれば　なんて……》

リユーシャの言葉をふと思い出し、振り払うように頭を横に振った。

「こんなの、わたしには似合わないわ！」

ジェードはそのまま応接を飛び出すと、奥の部屋へと着替えに行った。

ジェードは着替えをすますと応接に戻ってきた。

朝に運んできた食事がそのまま置かれたままだった。器に切り分けられみずみずしかった果物も、表面は乾き潤いをなくしていた。

ハリーファが食事に手を付ける様子はなさそうだった。ジェードはまだ少しふくれたまま片付けを始めた。

さっきのハリーファとのやりとりで、殺されそうになったことの恐怖はどこかへ消えてしまったようだ。

最後に言われた言葉に思わずむっとしてしまっただが、今までお世辞でも男から綺麗だなどと言われたことはない。ハリーファが嘘を言わないことを思い出して、また胸の辺りがこそばゆくなった。

ちらりとハリーファの方を見た。ハリーファは式典の服を着たまま椅子に座って、つまらなそうにジェードの様子を眺めている。気まずさに耐えられず、ジェードは口を開いた。

「さっきはリューシャさんのおかげで命を助けられたわね」

「ああ、代わりにお前が殺されそうになったがな」

明るく言っただはずなのに、仏頂面で返されてしまった。

「そんな……。どうしてそんな言い方するの？　ずっと育ててくれた乳母なんでしょ？　ママみたいなものじゃない」

「俺が死ねば、リューシャは宰相の傍に居られなくなるからだろ」

ハリーファの言葉に動揺が隠せなかった。自分が黙っていれば良いと思っていた事に、どうして気が付くのだろう。ハリーファの気持ちを考えずに口走ってしまった事を後悔した。

「乳母になったことも、リューシャにとっては全て宰相の為だ。リ

ユーシャは父上の妻になることも、子を産むことも許されない。ただの母子ごっこだ。それも俺が12になった時点でもう終わりだ」

リユーシャと同じ事を言うハリーファに、ジエードは悲しみと怒りがこみあげてきた。

「そんなことないわよ！ ハリを本当の子供のように思ってたって言っていたわ！ どうしてリユーシャさんを信じないの？」

「お前も自分で言っていただろ。『信用しなければ裏切られない』と」

自分でも忘れていたようなことを、ハリーファに覚えられていたことが恥ずかしくなった。あれは苦しまぎれのいいわけだったのに。

「裏切られたくないから他人を信用しないの？ 信用していなければ裏切られても平気だって言うの？」

ジエードがかすかに涙声で呟いた。

「そんなのおかしいわ」

眉を寄せハリーファをにらみつけた。

「リユーシャはあの葡萄酒に毒が入っていることに勘付いていた。それでお前を俺の身代わりにしようとしたんだ。お前が殺されそうになったんだぞ」

ハリーファの言うとおり、礼拝堂でハリーファがリユーシャを止めてくれなければ、自分は死んでいたのだ。

それでも、何故かリユーシャの事を恨むことはできなかった。リユーシャが宰相を愛する気持ちを聞かされたせいだ。それにハリーファのことを話すときの、リユーシャの曇った表情が気になって頭を離れない。

きつと心が読めれば、リユーシャが本当はどんな気持ちでいたのかわかったのではないだろうか。

「……ハリーは誰のことも信用していないのね」

「お前は俺を裏切らないのか？」

ジェードは返す言葉に詰まった。

自分の天命はハリーファを殺すことだ。ハリーファの言葉は、リユーシャもジェードも信用できないと聞こえた。殺されそうになった恐ろしさを理解したはずだったのに、信じてもらえないことがとても悔しく思えた。

ハリーファは苦々しい表情で言葉を続けた。

「リユーシャだけじゃない。……俺は、唯一信じていた男にも裏切られた。その男の所為でこんな所に閉じ込められて……」

「でも！ 本当に裏切られたかどうかなんて、その人の心でも読めないといけないじゃない！」

ジェードの言葉にハリーファは何か言おうとしたが口をつぐんだ。だが、ジェードは言葉を続けた。

「何か言えない訳があるのかも知れないわ！」

「黙れ！　それがお前の答えか」

「ち、違うわ……」

《わたしだって……、天命じゃなければ、ハリを殺したくなんか
ないよ。それに、》

「奴隷はこの国では【身内】なんでしょ？　わたし、最初は奴隷な
んて嫌だって思ったけど……」

《　私の国の奴隷とは意味が違う。家奴隷の友達に教えてもらっ
たわ。他人同士が家族になるんだって……》

ジェードは悔しくなって、途中で言葉を飲み込んだ。

ハリーファとは【身内】になれない。

自分の思いと天命とが矛盾して、どうしたら良いのかわからなか
った。

《でも、リユーシャさんは違うわ。愛は疑わないこと……。家族を
信用しないなんて、家族を疑うなんてそれこそ『罪』よ！》

心の中でハリーファに対して怒りと悲しみをぶつけた。するとハ
リーファが突然激しく反発した。

「疑うことが『罪』だと！？」

ハリーファが初めて声を荒げた。怒りの形相でジェードの胸座を

掴んだ。

「だからお前を信用しろとも言つのか！？ 俺を殺そうとしている奴を一体どうやって信用しろって言うんだ！」

「……知つてたの？」

《ハリを殺さないといけないことを……》

ジェードは急に目元が熱くなるのを感じた。苦しそうに喉を詰まらせた。

「……やっぱり……人の心の中を見透かしているのね」

「血の繋がった家族だって信用ならない！ 父上も、シナーンもだ！ 奴隷達の考えていることだって俺はわかつている！」

リユーシャには巧く利用されて、あげくにお前を殺されそうになった！ お前がどんなにリユーシャを信じようと、俺には『お前は死んでも良い』というリユーシャの心の声が、あの時はつきりと聞こえていたんだ！」

ハリーファに胸座を掴まれ、ジェードは引き寄せられたまま涙をこぼした。

「今まで全部聞こえていたのね」

たった一人の【身内】であるジェードは、ハリーファの命を狙っている。ジェードは今まで何度もハリーファに不穏な思いを向けた。本当の身内である宰相やシナーンは、ハリーファに対してどんな

思いを向けているのだろうか？

そんなことを想像すると涙がぼろぼろとこぼれて止まらなくなつた。

ハリーファに突き放され、ジェードは床に座り込んだ。

「それでもお前はリューシャを信じられるのか？」

はき捨てるように言うハリーファに、ジェードは黙って小さくうなずいた。

「お前は、リューシャに殺されそうになったのに……。何故そこまですりゅうしゃを信じられるんだ」

「だって……わたしはハリみたいに人の心がわからないからよ」

ジェードは涙で声を詰まらせた。

『……父の肩を持つ訳じゃないが、一国の宰相ともなれば相当な苦悩もある。それは宰相の女奴隷だって同じだ。お前なんかに解かるわけない』

以前、そう言ったハリーファの言葉の意味が、今は少しわかるような気がした。

《リューシャさんはきつと宰相への愛で苦しんでいるのよ……。『宰相の女奴隷』じゃないわたしがわかるわけないじゃない……》

「裏切られる事になっても信じられるのか？」

「信じるしかないじゃない……」

言いながらジエードはまたうなずいた。

公正という名の（前書き）

閲覧ありがとうございます。 m（――＊）m
6 / 2 2 に若干改稿しました。

公正という名の

強い日の光が大理石の床に朝から濃い影を作っていた。

宰相の部屋では女奴隷達が食事の片付けをしている。昨日の式典での出来事は彼女達の耳には入っていないようで、いつもと同じゆったりとした空気が流れていた。

シナーンは父親に呼び出され、ジャファルの私室へと向かっていた。階段を上がり長い廊下を一人颯爽と歩きながら、シナーンは父親の用件について考えた。

ハリーファの式典での事であるのは間違いない。葡萄酒に盛られた毒の一件だろうが、自分が式典に遅れたことにも腹を立てているのではと思うと気が重くなった。

父親の部屋に着くと、奴隷達は全員部屋から追い払われた。整然と片付いている室内にはジャファルとシナーンの二人だけになった。ジャファルは籐で編まれた大きな椅子に腰を掛けていた。嫡子であっても、宰相の私室に呼ばれることはほとんどない。シナーンは目だけを動かして、宰相の私室を見回した。

ジャファルはいつもと変わらぬ厳しい口調のまま、少し離れてたずむシナーンに語りかけた。

「昨日の件はお前の母の所業だったようだ」

ジャファルは唐突に簡潔な言葉で、昨日の犯人の名を告げた。

父親の声音から、シナーンはジャファルが腹の中に抑えている怒

りを感じ取った。慌てて腰を落とし両膝を床に着くと、ジャファルに対して深く頭を下げた。

「母の愚かな行為をお許してください」

「ハリーファが死んでいたら只事では済まさなかった」

頭を下げたまま動かないシナンを見て、鈍い怒りの声も静まっていたようだっ

「もう良い、顔を上げよ。リユーシャもハリーファも、金の髪は人の心を惑わす魔性の色だ。シェーラも惑わされたのであるう」

父の言葉に従いシナンは顔を上げ、床にひざまずいたままジャファルを見あげた。

「シナンよ。そなたはハリーファの事をどう思う？」

「……どう、とおっしゃられますと？」

「お前は、何故アレを宮廷に留めているのか考えたことはあるか？」

シナンは何も答えなかったが、ハリーファが養子に出されない理由を考えない日はなかった。

自分とハリーファに対する父親の明確な態度から、宰相の後継争いになるとは思えなかった。そのため、父は気に入りの女奴隷をそばにおくためにハリーファを利用しているのだらうとシナンは常々思っていた。

ジャファルがゆつくりと口を開いた。

「歴史家からファールーク皇家の【王】のことを聞いたか？」

「【王】と言うと、聖地を我が国のものにした始祖ユースフの事ですか？」

ファールーク王国では王位は二代しか続かなかった。ユースフと、そしてその実弟のアーデイン。それ以降はアーデインの息子が世襲宰相となり国を治めてきたのだ。

「そうだ。ハリーファはその【王】なのだ」

「……は？」

シナーンは一瞬言葉につまった。

「ハ、ハリーファが【王】とは一体どういう意味ですか」

「^{マジユーン}狂人の話は知っているのか？」

「……はい。二十年ほど前に亡くなったと聞きましたが……」

シナーンやハリーファが生まれるより前に【王の間】に捕えられ、そこで死んだ老人のことだった。

「【王】は悪魔と契約し、止むことなくこの地に甦る魂を持っているのだ。狂人も【王】だった」

「悪魔と、契約……？」

シナーンは父の言葉の初めが気に掛かり、つぶやくようにくりかえした。

「今、【王】の魂を持っているのがハリーファだ」

信じがたい言葉の数々に、思わずジャファルをにらむように見すえた。

「しかし、何故ハリーファが【王】だと分かるのです？ 何かの間違いでは？」

「ハリーファの右頬の傷痕。あれは初代の宰相アーディンが【王】につけた聖痕だ」

「聖痕……」

確かに、物心つく前から毛色の違う異母弟ハリーファの顔には、薄い傷痕があった。ファールークの血筋とは思えないほど真白な頬には一筋の古傷の痕がある。

しかし、それだけではハリーファが【王】だとは納得出来なかった。シナーンの顔にはつきりと疑念が浮かぶ。そんな息子の様子に、ジャファルはさらに語りかけた。

「シナーンよ。そなたはハリーファしか見ていないからそう思うのだ。私は三人の【王】をこの目で見た。狂人、マジュースンルクン、そしてハリーファだ。三人共に聖痕があった。ルクンは狂人が死んだ時に生まれ、ハリーファはルクンが死んだ時に生まれたのだよ」

「それがハリーファを宮廷に留めている理由なのですか……？」

ジャファルは椅子からゆっくり立ち上がると、部屋の中を悠然と歩き出した。ジャファルが横を通り過ぎると、シナーンは静かに立ち上がり父親を目で追った。

「……悪魔と契約したのは【王】だけではないのだ。宰相ワシルも悪魔と契約を交わしたのだ」

「宰相も……？」

シナーンは背後に回った父親を追って、その場で身体の向きを変えた。

ジャファルはシナーンに背を向けたまま言葉を続けた。

「宰相は聖地を我が国ファールークのものにと願ったのだ。そして悪魔によって、【王】をこの宮廷に留めておくことを条件に出された。【王】をここに留める限り、聖地オス・ローはファールークのものであり続ける」

背を向けていたジャファルが振り返って息子を見つめた。

「私の言うことは滑稽か？」

「い、いえ」

にわかには信じがたかったが、何故ハリーファが王宮に留められたのか、父が愛情を掛けなかったのか、それなのに、頑なに命だけは守ろうとするのか。そういった疑問がすべて符合した気がした。

「私は子が【王】であることを不幸だと思ったが、【王】と兄弟に生まれたそなたは不憫だな。……これも神殺しの兄弟の呪いなのか」

ジャファルの言葉がシナーンの耳をすり抜けていった。

「シナーン、あの賦国フコクの娘は都合良い。奴隷として働かせ、少しでも長くハリーファを生かしておければそれで良い。私はもうファールークの者を【王】に関わらせたくないのだよ」

シナーンは美姫と讃えられた伯母レイリマシューンの話を思い出した。

レイリはかつて【王の間】に捕らえられていた狂人の子を産んで命を落としたと聞かされた。そしてその子供がハリーファの母親フアティマなのだ。ジャファルが【王】に誰も関わらせたくないと言っつのは、おそらくそういう経緯を見てきた所為なのだろう。

「シナーンよ、そなたも今までどおりハリーファには深入りをするな」

「……しかし」

「お前たちは兄弟なのだ。情が沸いては不都合だ」

「そのような心配には及びません」

「そうか？　ならばこれはもうお前に渡しておこう」

カチンと音を立てて、銀色の鍵が大理石のテーブルに置かれた。本宮にある部屋や倉庫の鍵とは形が違う。一体何処の鍵なのかと不振に思いながら鍵を眺めた。

「【王の間】の鍵だ」

ジャファルの言葉にシナーンはハツとし鍵を手を取った。手からはみ出すほどの大きさと重みのある鍵を握り締める。シナーンは作りの事のような宰相の慣習を引き継いだ事を自覚した。

だが、シナーンはまだ父の言葉に納得できないものがあつた。異例だという第二皇子の存在に対し、ずっと疑問を持ち続けていたことだ。

「……父上、失礼なことをお聞きして宜しいでしょうか？」

「なんだ」

「ハリーファは……私の本当の弟なのですか？」

ハリーファだけが、あまりにもファールークの血を引くものと似なさ過ぎる。ハリーファを産んだ母ファティマも他界しており、真実を知る者は少ない。

「どういう意味だ」

ジャファルの声は怒気を含んでいた。

「……私達兄弟はあまりにも似ていないので……」

シナーンは言い辛そうに言葉を濁した。ハリーファを宮廷に留めておくために、他人の子を第二皇子だと偽っているのならばまだ納得がいく。シナーンはずっとハリーファの父は別人ではないかと疑っていた。

ジャファルは、眉間の皺をさらに深くすると、シナーンをにらみつけた。

「迂闊なことを口にするな。ハリーフアは私の子だ」

ジャファルは微塵も迷うことなく、はっきりとそう答えた。
そして、押し黙ったままのシナーンを置いて、自分の部屋から立ち去った。

ジャファルが自室を出ると、部屋の前で待機していた白人の奴隷はジャファルの後を追っていった。女奴隷達が宰相の部屋の中へと戻り、入れ替わるようにシナーンが廊下へと出てきた。

シナーンは立ち去っていく父親が見えなくなるまで、その背中を目で追い続けた。

『ハリーフアは……私の本当の弟なのですか？』

廊下を歩くジャファルの脳裏に、シナーンの言葉がよみがえる。

（……私以外の他に、一体誰がアレの父親だと言っただ）

ハリーフアの母ファティマと、そのファティマの父親^{マジュヌーン}狂人は亜麻

色の髪に翠色の眼をしていた。ハリーファは祖父と母の金色の髪と翠色の瞳を受け継いだのだ。だが、

あまりにも似ていない。

シナーンの疑問はジャファル自身の疑問でもあった。

* * * * *

秋も深まる頃、南方の国アルザグエから再び行商隊がやってきた。

宮廷の門前広場では春にも嗅いだ甘い香りが辺りにただよい、動物たちの鳴き声が聞こえてくる。広場を取り囲うように店のテントが張られ、鮮やかな色の絨毯の上には様々な品物が並べられた。

行商隊が王宮の広場で市場を開く三日間、いつも静かな昼の時間は人や動物たちの声で活気づいていた。

ジェードをいじめてくる人付きの奴隷達の姿も広場に見えた。今なら、嫌な奴隷達に顔を合わすことなくリユーシャに会いにいけるかもしれない。

ジェードは賑わう門前広場を横目に、誰にも気づかれぬようにそっと本宮に入っていた。

ホールに足を踏み入れると、途端に外の喧騒が遠くなった。静寂で満ちたホールを素早く走り抜け、壁の扉を開けて階段をかけあがった。

リユーシヤの部屋に来るのは三度目だが、自ら足を運んだのは初めてだ。緊張しながら扉を小さくノックしてみたが返事はなかった。

（もしかしたら、宰相のところに居るのかしら……）

リユーシヤが昼間に何処にいるのか、何をしているのかも知らない。ただ、どうしても以前ハリーファの成人の式典の時に取られた聖十字のペンダントを返して欲しかった。

リユーシヤの不在に気落ちしながらジェードが元来た道を戻ろうとすると、人の話し声が階段の方から聞こえてきた。階段をのぼってくる声は徐々に大きくなってくる。慌ててリユーシヤの部屋の扉を押すと、鍵がかかっておらず扉は簡単に開いた。

ジェードは部屋の中に滑り込むと、音を立てないように静かに扉を閉めた。

人が通り過ぎるまで……。罪悪感を抱きながらリユーシヤの部屋に静かに身をひそめた。

腰を屈めて廊下の様子をうかがっていると、ジェードの足を何か柔かいものがかすめた。

「きゃっ……」

不思議な感触に驚いてジェードは小さく悲鳴をあげ立ち上がった。

見ると、芥子色の毛皮の小さな獣がジェードの足にまわりついてた。ジェードは再び叫びそうになるのをこらえながら飛びのくと横にあった棚にぶつかった。ガシャンと硝子どうしのぶつかる音がリユーシャの室内に響いた。

「誰？」

リユーシャの声が部屋の奥から聞こえた。窓の方に白い布の張られたついたてがあり、美しい声の主はその向こう側に居るようだった。

窓からの陽光に白い布地に人影が映っていた。

「う、ごめんなさい。ノックしたんだけど……。返事が無くて……」

「ジェード？」

自分の名前と同時に水のはねる音が聞こえた。ついたてに映った影がゆつくりと動き、リユーシャが姿を見せた。湯浴みをしているのか、すけるような薄い布地の衣装を着て素足には水が滴っている。肩には布を羽織るようにかけ白く細い指で押さえていた。

しつとりと濡れた清艶な金色の長い髪に、ジェードは思わず息をのんでリユーシャの姿に見惚れた。

リユーシャに気を取られていると、小さな獣はしなやかな動きでジェードの足元に身体をこすり付けた。

「きゃ……」

ジェードが足元の小さな獣に怯えるのを見て、リユーシャはくすつと笑った。

「猫^{キット}が嫌いなのか？」

「キット？ 獅子の子じゃないのか？ 王家では獅子を飼ったりするって聞いたから……、獅子の子かと……」

ジェードの答えを聞いて、リユーシャは口元を隠すようにして上品に笑った。

猫は飼い主の方へ向かうと、先ほどジェードにしたのと同じようにリユーシャの足元に絡みついた。リユーシャは足元から猫を抱きあげた。

「獅子の子は大人になってしまったら手放さないといけないでしょう」
う

ジェードはリユーシャの腕に抱かれた猫を興味深げに見つめた。窓際で見る猫の瞳は緑色だった。

「何か用があつて来たのでしょうか？」

リユーシャに問われてやつとここに来た目的を思い出した。

「わたしのペンダントを、返して欲しいの」

「あのペンダントは、今わたくしの手元にはないわ」

「そんな……」

ジェードの表情がみるみる哀しみに沈んでいった。

聖十字のペンダントはジェードが持つている唯一ヴァロニアのものだ。忌年の誕生日に幼馴染から贈られた物で、今は自分と祖国を繋ぐたった一つのものであり、天使信仰クライスの証でもあった。

リユーシャは猫を抱いたまま窓辺へ行くと、振り返ってジェードを手招いた。

暗い顔のままジェードはリユーシャの隣に並び窓から広場を見下ろした。

ジェードの気持ちとは反対に、外は光があふれていた。広場を囲う小さな市場バザールに宮廷の人々が集まり賑わっている。

「あそこの、あの銀細工職人。あの男性は貴女と同じクライス信仰者のはずよ」

そう言つて、リユーシャは上から市場の一点を指差したが、そのまま黙り込んだ。

ふとジェードがリユーシャを見ると、リユーシャの瞳は何処かを見つめていた。

「あの方、誰なのかしら……」

小さく呟くりユーシャの視線を追うとその先に、頭に布を巻いた初老の男がいた。その老人は少年と話をしている。ジェードが目凝らすと、少年はハリーファだった。

ハリーファも布を頭に巻いて金色の髪を隠していた。リユーシャが見つければ、きっとジェードは遠目にはその姿に気づかなかっただろう。

「貴女が来てからハリーファ様は変わったわ。まるで別人になられたみたい」

「……わたしが知ってるのは今のハリだけだから。わからないわ……」

ジェードの言葉を聞いて、リユーシャは微笑んだ。穏やかな笑顔なのに、何故かジェードには以前に感じたのと同じ悲しそうな顔に見えた。

「わたくしが宮廷に上がったのも、あなたと同じ年頃の時よ」

その時、突然乱暴な音を立てて扉が開かれ、リユーシャの会話が断ち切られた。

「リユーシャ！」

部屋の中に黒い髪の女が入ってきた。リユーシャより少しばかり年上に見える女性は、奴隷達とは違い小麦色の肌でシナーンとよく似ている。女性の身形や容姿から、ジェードにもすぐファールーク皇族なのだとわかった。

「シェーラ様……。こんな処まで来られなくても、御用でしたら女奴隷に頼んでいただければ」

リユーシャは猫をジェードに渡し、布を羽織りなおすと、シェーラと呼んだ女の方へと歩みよった。窓際に取り残されたジェードは、ついたての陰から二人の様子をうかがった。

「何故私がフェスへなど！　どうということなの？」

「それはシナーン殿下がお決めになられたことです」

「ハリーファを元服までさせて。ハリーファに宰相を継がせて、母^{ウナム}にでもなるうというの？」

「ご心配なさらなくても、ハリーファ様は宰相にはなれません。宰相にはシナーン殿下がお就きになります」

冷静なリューシャの態度に、女は悔しそうに齒を噛みしめた。

「お前がジャファル様に気に入られているのは、ファティマに似ているからよ」

「お亡くなりになられたのがファティマ様でなくシェーラ様でしたら、わたくしはきっとシナーン様の乳母になっておりましたわ」

「女奴隷の分際で！」

突然、女がリューシャに向かって突っこんだ。

女の手元で光がきらりと反射した。

「あぶないっ！」

ジェードはついたての陰から飛び出し、リューシャを床に突き飛ばした。

黒髪の女は前につんのめって床に倒れこみ、手にしていた細い短剣が床を転がった。ジェードは咄嗟に床の上の短剣に駆け寄ると拾

いあげた。

三人の間に緊迫した空気が流れた。

一番最初に口を開いたのは女だった。ゆつくりと立ち上がるとリユーシャをにらみ恐ろしい声で言った。

「お前たち！ 天使モリスの教えに逆らって、地獄ナールに落ちるといわ！」

女はそう言い残すと、乱暴に扉を閉めて出ていった。

突然の出来事に唖然としていたリユーシャも、ようやく立ち上がると乱れた服を直した。

短剣を握るジェードの手は震えて、顔も青ざめていた。『地獄』と言う言葉や『忌数』などは口にはいけないと幼い頃からそう教えられてきた。ジェードには女の呪詛の言葉が背筋が寒くなるほど恐ろしく感じられた。

そばにリユーシャが来ると、緊張が解けて目に涙が浮かんた。

「あの人、なんてこと言うの……」

リユーシャはジェードの手から静かに短剣を取った。

「わたくしにとっては宮廷パレスが地獄よ」

リユーシャの言葉は、本心なのか皮肉なのかジェードにはわからなかった。

どこに身を隠していたのか、再び現れた猫は何事もなかったかの

ように二人の足に顔をこすりつけた。

* * * *

ある朝、シナーンが一人で【王の間】にやって来た。

【王の間】に初めて足を運ぶ者は、皆驚いたように朱鷺色の建物を見まわす。シナーンも同じように部屋の中を歩きながら見渡した。

「監獄だと聞いたから見に来てみたが。別に普通じゃないか」

部屋の主に許可を得ることもないまま、ぶしつけにシナーンは応接室まで入り込んだ。

「何の用件だ」

突然の兄の来訪を、部屋の主は不機嫌な態度で迎えた。

「これを届けに来てやったんだ」

シナーンは懷から何かを取り出すと、じゃらりと音を立ててテーブルの上に置いた。ジェードの聖十字のペンダントが、黒ずんだまま鈍く光っていた。

「それだけの為に、わざわざここまで来たのか」

「腹違いの弟に会いに来てはいけなかったか？」

ハリーファは両腕を組み、腹違いの兄の物言いに不満のため息をついた。そして思い出したように寝室に行くと、何かを持って出てきた。

「お前だろ」

ハリーファは取ってきた瑠璃色の小瓶をシナーンに向かって投げた。小さな青い塊が、二人の間を弧を描いて飛んだ。

シナーンは空中で小瓶をつかむと、さっと帯の中にしまった。

「お前の女奴隷が神魔ジンが存在するか知りたいと言っからやったんだ」

「俺は神魔ジンに取り憑かれてなどいない」

「そのようだな」

シナーンの悪びれない答えはハリーファを呆れさせた。

そこに水汲みから戻ってきたジェードが二人の皇子の居る応接を覗きこんだ。

《シナーン！？》

ジェードの心の叫びはハリーファにだけ聞こえた。

驚いたジェードの手から水瓶が落ちて砕け散った。水瓶はガシャンと鈍い音を立てて割れ、陶器の破片が散らばる。ジェードの足元が水浸しになり服の裾が濡れた。

その音にシナーンは振り返ると、扉の近くに立つジェードに言い放った。

「良いところに戻ってきたな、ジェード。約束どおり、お前を私の奴隷としてやろう」

ジェードは青褪めた様子で二人を見ていた。シナーンを見て、『ハリーファを殺さなければならぬ』事を思い出したようだった。自分の持つ天命に怯えている心の内が、ハリーファに伝わってきた。

「駄目だ！ ジェードは渡さない」

ジェードは硬直してその場を一步も動けなくなっていた。

シナーンは呆然とするジェードを相手にせず、ハリーファの方に向き直った。

「父上は私情に駆られて、お前の世話をヴァロニア人にさせたがつているようだ。だが、私は違うぞ。お前にはこの女よりもっと優秀な奴隷を与えてやる」

シナーンはハリーファに近寄ると続けて話し始めた。

「私は今まで、お前は父の血を引いていないか、神魔シンに取り憑かれているんじゃないかと疑っていた。だが、お前に憑いているのはどうやら神魔ではなかったようだな。お前に取り憑いているのは呪われた【王】だ」

ハリーファは何も言えず、シナーンの言葉に息をのんだ。

「ハリーファ、お前の中には二百年前の【王】の魂が宿っている。聖地オス・ローと天使の末裔【エブラの民】を滅ぼした呪われた【王】だ」

シナーンはファールークの血統を正しく受け継いでいる。ユースフやアーディンと同じ漆黒の髪と瞳に小麦色の肌のシナーンを間近に見やり、ハリーファはようやく口を開いた。

「……【エブラの民】は本当に滅んだのか？」

「どうだろうな。二百年前の戦争で姿を消したと聞くが、【エブラの民】などおとぎ話で、本当は存在しなかったのかもしれないぞ」

【エブラの民】がおとぎ話であるはずがないことは、ハリーファ自身が一番良く知っている。

「【エブラの民】はおとぎ話なんかじゃない！ シナーン、お前は自分の目でオス・ローを見たことがあるのか？ 【エブラの民】が居なくなつて、城砦が崩壊したままだった！ オス・ローの街も、何故二百年もあつて復興しない？ 何のために聖地をファールークのものにしたんだ」

ハリーファが苛立つて声を荒げた。シナーンに話しても埒が明かないのはわかつている。迂闊な話をして【王の間】に施錠されるような真似は避けなければならず、それ以上は言葉をぐつとこらえた。

「知っているか？ その神の地は、お前がここに居る限りファールークのものだ」

「俺がここに居る限り？ どういう意味だ……」

「【王】とはファールークの人柱だ」

シナーンの表情が一瞬曇ったように見えた。

「【王】をこの宮廷に留めておけば、聖地オス・ローはファールーク皇国のものだというんだ」

「何なんだ、それは……」

「初代宰相と【悪魔】との契約だ……」

シナーンの心に、言葉にはならない迷いが見えた。

《初代宰相の死後、ファールークが他国からの侵攻されることがないのは偶然なのか？ それとも 》

初代宰相、ユースフの弟アーディンも【悪魔】ラースとの契約したのだろうか。

聖地をファールークのものにすることを望み、【悪魔】に出された条件が転生を繰り返すユースフの魂をこの宮廷に捕えておくことだったのだろうか。

「私はお前の言うとおり、聖地に行った事はない」

「シナーン……」

「……だが、私は宰相の後継者だ。国の永続的な慣習には従い、掟も守らねばならぬ」

宰相とほんの数人にしか知らされない皇族にまつわる秘密を知り、ハリーファに同情している様子だった。

「ハリーファ。お前の命を脅かすものは私が許さない」

ハリーファは思わずちらりとジエードを見た。一番身近で自分の命を狙っている。ジエードはさっきのまま微動だにせず、顔色を失ったまま二人の様子を見つめていた。

「先日の件で、私の母はフェスに追放になった」

「……気の毒な」

ハリーファが言うと、シナーンはきつぱりと答えた。

「私の所存だ。母とはいえ、【王】を殺そうとするなどもってのほかだ」

どこか悄然とするハリーファに背を向けると、シナーンはジェードに話しかけた。

「ジエード、私の奴隷となるなら、お前が欲しいものを何でも与えてやろう。何なら、お前を解放してヴァロニアに帰してやってもいいぞ」

ジエードはためらいを見せたが、小さな声でシナーンに答えた。

「……わたしが欲しいのは、ハリの命よ」

「ふん。思ったよりは頭が回るようだな」

ジェードの言葉を断りの皮肉と聞いたシナーンは、両手を腰に当て不愉快そうに息を吐きハリーファを見やった。

《ハリーファ、逃げようなど考えず、ここで不自由なく暮らすといい。おそらくそれがお前にとっての幸福だ》

「たとえお前に父上の血が流れてなかったとしても、お前にはファールークの血が流れている。それは間違いない」

そう言うと、シナーンは踵を返して【王の間】から出ていった。

シナーンにとって兄弟として育った弟が【王】である事を受け入れがたかったに違いない。だからこうしてここに足を運んだのだろう。

ファールークの一族は皆どこもなくアーデインの面影がある。アーデインも、シナーンも、そしてジャファルも、ユースフの罪に巻き込まれた犠牲者だ。

去っていくシナーンの姿を見て、ハリーファはユースフの罪の重さを噛みしめた。

シナーンの靴音が消え、入り口の扉の閉まる音が応接にも聞こえた。

ハリーファとジェードが取り残された部屋は静寂に包まれていた。しばらくして、ジェードはようやく割れた水瓶の欠片を拾おうと

床にしゃがみこんだ。欠片は大きく鋭い刃物型に砕けているものもある。ジェードはその切先をじっと見つめた。

《これで 》

ハリを殺せれば使命が果たせる。そう浮かんだ時、考えるのを止めた。心で考えるとハリーファに聞こえてしまう。

ジェードが慌てて欠片をつかむと、右手の人差し指に破片の切先が突き刺さり、赤い血がにじんだ。

「……痛っ」

血はまたたく間に盛り上がりぼたぼたと滴り落ちた。石の床の上に小さなアザミのような赤褐色の花が咲いていく。次々に床に落ちる赤黒い血の色と鉄のような匂いが、ジェードに聖地での光景を甦らせた。ジェードは眩暈を覚え床に手をついた。

目の前で三人の兵士がハリーファに殺された時のことを思い出し、ジェードは呆然として動けなくなった。

「大丈夫か？ 悪かったな、シナーンの事」

そばにしゃがみこんだハリーファは、ジェードの手から握られたままだった大きな欠片を奪った。

「……ごめんなさい、すぐ片付けるわ……」

「先に止血しろ」

そう言うと、ハリーファは割れた欠片を拾い始めた。

落ちていた他の欠片をハリーファが拾う間も、ジェードの指先からは血がしたたり続け床を赤く染めた。

ハリーファは拾った欠片をまとめて端に除けると、まだぼんやりしたままのジェードの右掌を掴み顔の高さまで引き上げた。流れる血は指先から腕をつたい白い腕に赤い線を描き、肘までいくと雫となって落ちた。

ハリーファに掌の一点を強く抑えられ、右手の指先がかすかに痺れてきた。同時に指先と心臓が同じ速さで強く脈打つを感じる。ジェードの肘から落ちた血は衣服に赤く滲んでいった。

腕をつたって流れ続ける自分の血が、聖地でのことをますます鮮明に思い出させた。

あの時、ハリーファから殺意を感じた。次に殺されるのはジェードだったはずだ。

ハリーファにとっては、本当は自分など簡単に殺せるはずだ。オス・ローで兵士達を殺したように。

「お前には俺は殺せない」

右手をつかんだまま、目の前に居るハリーファが呟くように言った。翠色の瞳が、真っ直ぐにジェードを見つめている。

「俺を殺して罪を犯しても、神はお前を救ってはくれないぞ」

辛辣な視線がジェードに向けられた。だが、その視線はジェードを見ていなかった。

ジェードには、その言葉がジェードの瞳に映るハリーファ自身に向けられているように思えた。ハリーファの透き通るような翠色の瞳の所為で、視線が合わなかったただけかもしれないが。

「……せ、聖地で、兵士たちを殺したことを、悔いているの……？」

「俺は悪魔じゃないんだ。過去も、今も、人を殺めて悔いない日は一日だってない」

「じゃあ、殺さなければ良かったじゃない」

口ではハリーファを攻めるが、心の中では自分自身に対して言い訳を考えていた。

《わたしはハリを殺さなきゃ……。天命なんだもの……》

それでも、心の中では嘘をつけず、ハリーファに言った言葉が自分にも押し掛かってくる。

《もし、わたしが天命のとおりハリを殺せたら、やっぱり毎日悔い続けるのかしら……。ずっと罪を背負っていけるの？》

足に力が入らない。ハリーファにつかまれている手を離されてしまったら、その場に倒れてしまいそうだった。

「俺はなすべき事がある。捕まるわけにはいかなかった」

ハリーファはまるでジェードに対して言い訳するかのように呟い

た。

「……でも、結局捕まったじゃない。彼らの死が無駄になったわ」

「いや、無駄じゃない」

あまりに真摯なハリーファの視線に、ジェードは言葉が詰まった。

「無駄じゃなかった。俺は、お前を手に入れた」

ジェードの右手をつかんでいるハリーファの手に力がこもった。大人びた眼差しでハリーファはジェードを見つめ続けていた。

二人の間に沈黙が流れた。

《もしハリを殺してアレー村に帰れたら……？　それで、昔みたいに戻るの……？》

ジェードには天命を果たした後のことが想像出来なかった。もし果たせたとして、ヴァロニアに帰って今までと同じように、父と母、弟や幼馴染と、毎日羊を追ひ幸福な夜を迎えるような日々に戻るとは思えなかった。

「お前に俺は殺せない」

繰り返されるハリーファの言葉が『お前は祖国に帰れない』と言っているように聞こえた。

「ハリを殺さないと、わたしは帰れないのよ」

ジェードにとって一番の目的はヴァロニアに帰る事ではない。

「ハリを殺さないと、答えが分からないのよ」

止血のためにつかまれた右手は血の気を失い、ジェードには右腕全体の感覚が鈍くなったように感じた。

ハリーファはジェードを椅子に座らせた。寝室から白い布を持ってくる、その布の端を噛み切り、引き裂いて包帯を作った。

ハリーファはふと思い出したように、横のテーブルに置かれていた小さな聖十字のペンダントを手にとるとジェードに差し出した。

「シナーンがこれを持ってきた」

毒の入った葡萄酒を浴びて、銀色だった聖十字のペンダントは真黒に染まっていた。

「【黒】の聖十字なんて……」

「お前の身を守ってくれたんだ。きっと二度目もあるだろう。持つておけ」

左手で右手を押さえていてジェードが受け取ることが出来ずにいると、ハリーファはペンダントの金具を外し、正面からジェードの首の後ろに手を回して金具をとめた。

ハリーファの顔がジェードの顔に近づいた。ジェードはこのペンダントを貰った時の事を思い出した。

ジェードの瞳に映るのは幼馴染のウィルダーだった。二人の間に白い息がこぼれる。まだ銀色だったペンダントを同じようにしてジェードの首に掛けてくれた。

ハリーファに心を読まれていると気づき、ジェードは思い出すのをやめた。

ハリーファはジェードの向かいの椅子に座った。

「あの時、患者の毒を飲んでいたら俺も死んでいた」

黙ったままのジェードの手を取り、ハリーファは器用に包帯を巻いていた。

《 壁の向こうにあるという楽園

壁を挟んで別の世界に暮らしていたセヴランとエステル

アルゴル 悪魔の誘惑に負けて扉を抜けるエステル

反対側の世界の食べ物を食べたことで、元の世界に戻れなくなってしまう》

成人の式典でハリーファが詠み上げた内容が、ジェードの心から聞こえてきた。

男と女の名前はリダーとアズルではなく、セヴランとエステルで、蛇の事をアルゴルと詠んでいた。

ハリーファは顔を上げ、ジェードを見つめた。

「お前は、聖書を暗記しているのか？」

「全部じゃないわ。聞いた事のあるところだけよ」

ようやく口を開いたジェードは、珍しく疲れたような声だった。

「俺も聖典を覚えてはいるが、覚えるのに26年かかったぞ」

ハリーファは感服したように言った。

《クライス信仰の聖書と、モリス信仰の聖典の内容は同じなのかしら……？》

「名前が違っただけなのかしらね……」

ジェードは独り言のようにぽつりと呟いた。

「前から思っていたんだが、お前の名前は変わっているな」

「村でもよく言われたわ。私の兄弟はみんな意味のある名前なの」

「ジェードは……フロリスの言葉で『翡翠』か？ 男の名前じゃないのか？」

目の前の、まだ男のように髪の高いジェードを見た。

「わたしは双子なの。パパとママが男の名前しか考えてなかったのよ」

そう聞いてハリーファは思わず笑いを漏らした。

「それは災難だったな」

「双子の弟の名は『希望』^{ホープ}のホープ。わたしの名前の意味は『翡翠』^{ジェード}じゃなくて『公正』^{ジュースト}よ」

そう聞いて、ハリーファはアーデインのことを思い出した。たった一人、ユースフが厚く信頼していた弟だった。

「俺の弟もお前と同じ、『公正』^{アディル}という意味の名だった」

ハリーファの意識は一瞬過去の記憶の中に引きずり込まれそうになり、

「ハリにも弟がいるの？」

ジェードの言葉に引き戻された。止まってしまった手を再び動かして、右手首に包帯を巻き固定する。

「いや……、昔の話だ。シナーンが言ってただろ。俺の事を」

「意味があまりよくわからなかったの……」

「……そうか」

「ハリの名前はなんて意味なの？」

「誰がつけたか知らないが、皮肉な名前だ。まるで呪いのようだ」

「ハリは呪われてるの？」

「……いや、違う。本当に呪われたのは俺じゃないんだ……」

「誰なの……？」

「【エブラの民】だ」

「エブラ信仰の？」

「俺は【エブラの民】にかけられた呪いを解いてやらないといけない。なのに何も為し得ていない」

ハリーファは何故ジエードにこんな事を言っているのか自分でもわからなかった。

「その呪いを解くことがハリの天命なの？」

「天命なんかじゃない！ ただの約束だ！」

やりきれない思いをジエードにぶつけてしまい、自分自身が情けなくなった。

「あいつの言ったとおり、本当にこの世は地獄だな……」

自分に言い聞かせるように、ハリーファは苦しそうつづやいた。

「地獄は死んだ後の世界でしょ？」

《なのに、どうしてリユーシャさんもハリも今が地獄なんて言うの……？》

「【エブラの民】は、地獄はこの世だと言っていた」

「……この世が、地獄……？」

『地獄』という詞が小さく聞こえた。

「天国は地にあるそうだ」

ジェードは不思議そうな顔でハリーファの言葉を聞いていた。

治療を終えハリーファはジェードの手を離すと、疲れたように頭を垂れた。

「俺が地獄に落ちたら、助けてくれるんじゃないのか？」

サライ。

床に視線を落としたまま、ハリーファは独り言のように呟いた。

「……ハリは天国にいきたいの？」

「……俺は、本当の意味での死をいつも求めている……」

《死にたいだなんて……。ハリも天使を信じていないの？》

ハリーファが顔を上げると、ジェードはひたむきなまでに真っ直ぐにハリーファを見つめていた。

《……ハリは、何故救いを求めてるの？》

まるで祈るようなジェードの心の声に、突然ハリーファの頭の中で金属が砕けるような音が響いた。

粉々に砕け散った鉄の鎖がじゃらじゃらと音を立てて崩れ落ちていく。

思い出せていない記憶が、既視感の波となってハリーファを飲み込んだ。

「じゃあ、わたしが助けてあげるわ」

《わたしが殺してあげるわ》

『わたしが絶対助けるよ』

ジェードの声と、ジェードの心の声と、記憶の中のサライの声が、重なってハリーファには聞こえていた。

海を眺める男

ジェードがファールーク皇国にきて、天使に教えられた天命は果たせないまま、一年が過ぎようとしていた。

この一年間で、ジェードは思いがけずハリーファの秘密を知った。

一つ目は、【王】であること。

ハリーファが【王】であることを宮廷の一部の人間は知っているようだったが、奴隷達は誰一人として知る者はいない。

二つ目は、人の心の声を聞く異能を持つこと。

人の心を読む異能は、ジェード以外には乳母だったリユーシャしか気付いていないようだった。

ジェードには、他の人には聞こえない【天使】の声が聞こえた。

そのため、ハリーファの不可解な能力を知っても、不気味だとは感じなかった。むしろ、何処か親しみを覚えた。

ジェードが、いつからどのようにそんな能力が身に付いたのか聞くこと、

「さあ？ 物心付いた時からこうだった」

と、そっけない返事がハリーファから返ってきた。秘密を知られてからも、ジェードに対する態度は以前と変わらない。

だが、ハリーファの秘密を知ったあの日以降、ハリーファが何か少し変わったようにジェードは感じていた。

*
*
*
*
*

新年を迎えて最初の七日間、王宮では毎夜祝宴が執り行われる。

新しい年を迎えて六日目。

その日、ジェードは14回目の誕生日を異国の地で迎えることになった。

祝いの雰囲気は最高潮を過ぎたが、宮廷内に暮らす人々はまだまだ浮き足立っている。昼夜にかけて、いつもより忙しく働いている家奴隷達もどこか楽しそうだった。

今朝は水瓶に水を注ぐ音に混じってジェードの鼻歌が聞こえてきた。ジェードが嬉しそうにそわそわしているのは、傍から見ても明らかだった。

《天使様。今日はわたしとホープが祝福を受けた日です。14度目のこの日を迎えられたことに感謝します》

水汲みを終えた後、天使に感謝を述べるジェードの心の声が聞こ

えた。陶器製の瓶を床に置く音がゴトンと響く。次に扉を開閉する音がバタンと耳に届いた。

いつもより軽い足取りで朝食を運んできたジェードを、ハリーフアは不思議そうに眺めた。給仕の時も始終ご機嫌で、こんなジェードを見るのはハリーフアも初めてだった。

食事の手を止めて、テーブルの向こう側に立っているジェードを見やった。ジェードがご機嫌な理由は心から聞こえる声で見当がついたが、敢えて言葉にしてみる。

「今日は随分楽しそうだな。何か良い事でもあるのか？」

声を掛けると、ジェードは澄んだ漆黒の瞳を大きく見開くと、真っ直ぐにハリーフアに向けた。

「何って！ 忌年が開けたのよ！」

アーディンと同じ意味の名前と、同じ色の瞳を持つジェードが、『これを喜ばずに居れるものか』と言わんばかりに微笑んだ。

残念ながら、それがどれほど喜ばしいことなのかハリーフアには全く理解できなかった。だが、ジェードのこんな笑顔を見たのは初めてだ。見ているとつられて口元が緩む。不思議と気持ちが落ちつき、この笑顔がずっと続くことを願った。

「今日はお前の誕生日なのか？」

「ええ、そうよ」

《パパやママやホープと一緒に祝いが出来たらよかったのに……》

笑顔の下に隠したジェードの本心が漏れ聞こえてくる。

「わたしの村ではね、誕生月に金属製の身に付ける物を贈られると一年間病気をしないって言い伝えがあるの」

「ファールークでも金属は魔避けだぞ。^{マデイン}男が帯に挿している短剣は魔避けだ。実用品じゃない」

《じゃあ、シナーンが持っていたのは、ただの飾りだったの……？》

「いや、シナーンや宰相が付帯しているのは本物だ」

ジェードは複雑な気持ちを押し隠すように、話題を元に戻した。

「わたしね、毎年ママからボタンを貰ってたの」

《ウィルから貰ったペンダントは真っ黒になっちゃったけど……》

胸元のペンダントを気にするジェードの心から、見知らぬ少年への想いがハリーファに伝わってきた。

「それは『男』から貰ったものだったのか」

ハリーファが言うと、ジェードの顔が真っ赤になった。耳まで赤くなったかと思うと、口をとがらせた。

「心を読んだのね！」

顔を紅潮させたままむっとしている。

「聞きたくなくても聞こえてくるんだ。嫌なら何も考えるな」

「そんなこと出来る訳ないでしょ！」

ジェードは手に飲み水の瓶を握ったまま、ハリーファに背を向けてしまった。

「訓練すれば出来るようになる。昔この国にもそういう暗殺者が居たんだ」

「暗殺者？　もしわたしがそんな暗殺者だったら、ハリーは殺されてたわね」

ジェードは振り返りながら少しふざけて皮肉っぽく言った。

「心の声が聞こえない奴なんて居ない。不自然だから逆にすぐに気付くさ」

ハリーファは久しぶりに子供っぽく言い返した。

「それより、誕生日なんだろう？　俺からお前に何か贈ろう」

「本当！？」

まだ頬をピンクに染めたまま、ジェードはテーブルに身を乗り出してきた。

「ボタンでいいのか？ それとも何か他に欲しいものでもあるのか？」

「何でもいいの？」

「ああ」

そう言っただけしばらく思案していたジェードの顔から笑顔が消えた。

「短剣を。パパの短剣を返して欲しいの……」

「短剣？ 父親の？」

「聖地で……、あの時、ハリがわたしから奪った短剣よ」

ファールークの兵士を刺した短剣だ。あの兵士の遺体に、短剣は刺さっていなかったのを覚えている。たとえ王宮にその短剣が持ち込まれていたとしても、武器はハリーファ自身も入手することが出来ない。

ジェードがいわく付きの短剣を欲しがる理由は、アルフェラツにあの短剣でハリーファを殺すように言われたからだだろうか？

「お願いよ。あの短剣はパパがママから貰った大切なものだったの。それをわたしに預けてくれたのよ。本当に大切なものなの」

ジェードの顔は曇り、今にも泣き出しそうになった。さっきまでの笑顔は何処かへ消えてしまった。

「……無理だ。俺には武器を手に入れることは出来ない。他のものにしろ」

喜ぶ顔が見たいと思ったが、ジェードを喜ばすことは出来そうになかった。

皇族やその奴隷達は部屋から出てこない昼の時間、ハリーファは一人で厩舎へ向かった。

遠くに厩舎が見えた。その隣にある厩務所の前に見覚えのある人影があった。

ジェードと壮年の厩舎守が向かい合って話していた。近づくにつれ、段々と二人の表情も見えてくる。ジェードが悲しそうに落ち込むと、厩舎守の男はジェードの肩を叩く。するとたったそれだけでジェードの顔には笑顔が戻り、二人は楽しそうに話が続いていた。

その様子を少し齒がゆく思いながら、ハリーファは二人に近づいていった。

「ハリ……？」

ジェードがハリーファに気づいた。

男は慌ててまだ離れているハリーファに一礼すると、厩務所の中に消えた。ジェードは突然話し相手を失ってしまい、ハリーファの

方に歩み寄ってきた。

ジェードの心の声を聞くまでもなく、顔を見れば『こんな所に来るなんて珍しい』と言いたそうだった。

「どこかに行くの？」

「いや。何処にも行かない」

厩舎守に用があつたが、こんな場所でジェードと顔を合わすとは思っていなかった。厩舎守は奥に引っ込んでしまったので、今日は諦めることにした。

「お前は、俺より色んな所をほつつき歩いてるようだな」

「わたしね、馬が一番好きなの。だから、ここにはよく来てるのよ」

ジェードの心から偽りの言葉は聞こえてこなかった。

「ねえ。今度ハリが外に行くときに、わたしも着いて行きたいわ。この国の外の生活を見てみたいの！わたし、この国の普通の人達がどんな暮らしをしているか全く知らないんだもの」

ジェードの瞳から好奇心が溢れ出た。

「わたし、この壁の向こう側の事を何も知らないの」

「俺はここから出られないんだ」

ファールーク皇国は宰相と【悪魔】との契約でフロリスから守ら

れている。その条件が【王】を王宮内に留めて置くという事だというのをシナーンから聞かされた。

ジェードが超えられないはずの国境を越えてオス・ローに入ることが出来たのは、あの日ハリーファが宮廷を抜け出したからなのだろう。宮廷を出て自分の国を危険に晒すわけにはいかない。

「俺は、お前を外には連れて行つてやれない」

ぎらぎらと照り輝く太陽が佇んで話す二人の頭部を焼きはじめた。どちらともなく、城壁沿いにある細い日陰の方へと歩みだした。

「もし外出を許してくれるなら、わたし一人でもいいのよ」

《家奴隷もお遣いに出たりしているじゃない。逃げたりなんかしないし、ちゃんと戻ってくるわ！》

ジェードの心の言い訳を聞かなくても、砂の地に不慣れなフロリスの人間が、徒歩で砂漠を超えられるわけがない。

「市井は宮廷の女奴隷が一人で行くような場所じゃない。お前みたいに、この国のルールが分かってない者はなおさらだ。外出は許可できない。誰か連れて行ってくれる者が居るなら別だが」

すぐ傍の城壁までたどりつくと、ハリーファは日陰に身を収めるように壁にもたれた。

「宮廷の女奴隷は随分不自由なのね」

ジェードがすねたように悪態をついた。そして、ハリーファの傍

らで、目の前に迫った壁を見あげた。

《壁の外には一体何があるの？　どんな人達が生活してるのかしら？　この壁の中だけの自由なんて……》

「お前は奴隷だ。自由人じゃない」

ジェードはハリーファに向き直ると、真直ぐな瞳でハリーファを見た。

「その言い方は気に入らないわ！　わたしの国では『奴隷』っていうのは『罪人』のことなのよ」

《わたしは罪人なんかじゃないわ！》

「なら教える。ヴァロニアでは『奴隷』のことを何と呼ぶんだ？」

「『使用人』よ。女は『メイド』って呼ぶわ。わたしの姉さんは賢かったから、領主様の所でメイドをしていたの」

「『^{メイド}支える人』か」

ハリーファがモリスの言葉の韻律でつぶやいた。

ジェードはハリーファの言った言葉の意味がわからなかったように、同じ高さにあるハリーファの顔を見つめて軽く首をかしげた。そして、また壁を見上げた。

「それに、奴隷には自由はないなんて言っても、心の自由は誰にも奪えないわ」

《奴隷だけじゃない。人の心は皆自由なのよ》

炎天の下のはずだったが、ジェードの言葉が心地よい風のように、ハリーファの心の中を吹き抜けていった。

ハリーファはジェードを連れ城壁沿いを東へ向かった。太陽は二人の真上にあつて、城壁の陰も途中で姿を消した。

宮廷内には、いくつか手入れの行き届いた小さな植物園のような場所があつた。ジェードは所々に生えている花を見つけてはハリーファに問いかけた。

「ねえ、この花は何ていうの？」

白い小花を沢山つけた茎をハリーファは一本手折るとジェードに渡した。

「これはエルファというんだ。それと向こうの大きい白い花はハルダル、薬草だ……」

「薬になるの？」

「ああ。薬草園の植物は迂闊に採るなよ」

「わかったわ」

「薬草に興味があるならもつと詳しく教えてやるつか？」

「本当？ 嬉しいわ！ それなら村に帰っても役に立つと思うの」

ハリーファの言葉にジェードが明るく笑った。ただ、『帰って役に立つ』為にはハリーファを殺さないといけない。その事に気付いたのか、言った後少しジェードの口数が減ってしまった。

石畳の小道が途中で途切れ、二人は黙ったまま、聞こえるのは砂地を蹴る乾いた靴音だけだった。

やがて城壁がゆるく曲線を描く場所にたどり着いた。そこには壁と平行に幅の狭い石の階段が作りつけられていた。

城壁の頂上へと向かう階段は、城門近くにある階段と比べると随分粗雑な造りだった。

ハリーファは迷わず、その狭くて危なかしい階段を登っていった。ジェードは下からハリーファを見あげた。

「こんな所で何するの？」

「いいからついてこい」

階段の幅はとても狭かった。足を滑らせたら下まで転落してしまいそう、ジェード城壁に手を添わせながらのぼった。足を踏み出

すごとに鼓動が早くなつていくのがわかった。

頂上に辿り着くと、城壁の上には大人が二人で並んで歩けるくらいの通路が続いていた。通路の両端には腰の高さほどの大きな石が並べられている。そして外側の壁には等間隔に壁の無い部分が作られていた。

壁が邪魔をして聞こえてこなかった波の音が耳に届いた。

ジエードは熱をもった低い壁にすっかり手を添えながら、恐る恐る外を見渡した。

城壁の上から外を眺めると、岸壁の向こうに荒波が寄せる大海が見えた。

果てしなく続く海と空が目の前に広がっていた。空の青とそれよりも濃い海の青、少しの白が混じり、溶けてゆく。

今まで忘れていたなつかしい潮の香りがジエードを包みこんだ。

「わたしの村にも似たような岸壁があるの。夏はよく羊を連れて行ったわ。でもこの海とは違う……。もっと穏やかな海よ」

ジエードはハリーファを振り返った。

「お前が言ってるのは北側のエトルリア海だな」

エトルリア海は亡国シュケムの北にある、左右の大陸に挟まれた湾だ。そして蝶を模った世界は、シュケムを頭にして、右にフロリス、左にモリスと言う名の羽を広げている。

「……ヴァロニアに帰りたいか？」

「もちろん帰りたいわよ。……でも、」

《ハリを殺さないと帰れないんだもの……》

ハリーファの言うように、ジエードはハリーファを殺すことは出来ない気がしてきた。

「俺にはお前が必要だ」

「わたしのやってる事なんて、他の誰でも出来るじゃない……」

ルカのように皇族の奴隷に憧れている者は沢山居るだろう。

「お前みたいな気安い奴隷は他に居ない」

ハリーファの答えに一瞬ドキツとした。

《それは私のことを身内だと思ってくれてるってこと？》

心の中で呟くと、ハリーファが微笑んでくれたように見えた。

「お前の名にある『公正』を信じようと思う」

《でも、わたしはハリを殺さなきゃいけないのに……》

うつむいて何も言わないジエードに向かってハリーファは真剣な面持で言った。

「ジエード、俺はいずれはお前に殺されてやってもいい」

ハリーファの言葉にジェードは耳を疑い、目を見開いてハリーファを見た。

「今すぐじゃない。それに条件がある」

「条……件？」

「天使に会わせてくれ」

ハリーファは真剣な表情だったがどこか寂しそうに見えた。透き通るような明るい翡翠の瞳が憂愁を帯びた。

「……え？」

「もう一度アルフェラツに会わせて欲しい。そうすればこの命、お前にくれてやる」

ハリーファがあまりに真剣な顔で言うのでジェードは何も言えなかった。

ジェードは姉が死んでから、天使の声が聞こえるようになった。姉の魂の救済と真実を求めるジェードに、天使の声はいつも、聖地に来るようにと言っていた。

《でも……。あれから天使様の声が聞こえない。聖地に行けば、また会えるかしら……》

ジェードはハリーファに背を向けると城壁の壁の無い部分に膝を抱えて座り込んだ。

後ろにいるハリーファが動く気配は無く、声もかけてこなかった。

《もしハリを殺せなかったら、奴隷として死ぬまでここで暮らすのかしら……》

海を眺め物思いにふけりながら、手ではエルファの花を弄んだ。熱さでこめかみに汗が流れたが、そんなことは全く気にならなかった。

《皆元気かしら。もうこのまま二度と会えないの？ パパ、ママ、兄さんたちにホープ。それにウィル……》

胸元から聖十字のペンダントを取り出す。銀色だった聖十字は自分や村の皆の髪のように黒くなっていた。

《会いたい……。帰りたい……》

乾いた空気の中、荒い波音だけが聞こえてくる。

ジェードは家族や羊飼いの仲間のことを想い、ハリーファの目にも横顔が寂しそうに映った。そして目元を手でこすったり、時々鼻をすする音も聞こえてきた。

ハリーファはそんなジェードを見て、しばらく声をかけずにそっとしておいた。

本当は、何と声をかけてよいのかわからなかった。反対側の低い壁にもたれると、うずくまっているジェードの背中を眺めた。

サライもジェードのように自分を想い、ドームの城壁から海を眺めていたのだろうか？

ドームの城壁もこんな感じだったのだろうか？

サライのことだから、ジェードと同じように鼻をすすっていたに違いない。

ユースフに会いたい……と。

何度も生まれ変わっても自分はその頃と何も変わらず、今ジェードにかける言葉さえ見つけれない。あの時サライにも酷いことを言ったとほろ苦く思い出した。

「この高さから落ちたら死んじゃうわね」

突然、ジェードの声が感傷に浸りかけたハリーファを現実引き戻した。

さっきの寂しそうな顔はなんだったのかと思うくらい明るい声だが、擦られた鼻が少し赤くなっていた。ジェードは立ち上がって城壁の下を恐る恐る覗き込んでいた。

「お前には天使の加護がある。落ちてもきっと助かるだろ。そのままヴァロニアに帰るといい」

「わたしは自ら命を捨てるような真似はしないわ！」

《それに逃亡は死罪だって言ってたじゃない！ 冗談が酷すぎるわ

！

怒りながらハリーファを睨みつけて文句を言った。

この時ハリーファにふと悪戯心がわいた。

突然、ハリーファはジェードの腕をぐっとつかんだ。ふざけて壁下に突き落とすようにジェードの身体を押す。

「きゃっ……」

ジェードは消え入りそうな小さな悲鳴を上げた。

ハリーファはつかんでいたジェードの腕を、今度は自分の方へ引っばった。反動で戻ってきたジェードを力強く引き寄せ抱きとめる。思っていたよりも軽く、華奢な身体だった。ゆるゆると波打った髪の毛の甘い匂いが、ハリーファの鼻腔をくすぐった。

「やだっ！ やめてよ！」

ジェードが涙を滲ませ本気で怒りだした。ハリーファの束縛から逃れようとするが、ハリーファはジェードを抱き寄せた腕を緩めない。

ジェードの慌てる様子がおかしくて、ハリーファは声を上げて笑った。

《し、死ぬかと思ったじゃない！》

「俺はお前を離さなかっただろ」

ジェードはじたばたとあぐのをあきらめたようだった。ハリーファを見つめる頬がかすかに紅く染まったように見えた。

力の抜けたジェードの手からエルファの花がはらりと落ちた。

「あつ……」

ジェードはエルファの花が落ちていく様子を目で追った。

花は城壁の下へとゆらゆらと揺れながら落ちていく。城壁をこすり転がりながら、ぽたりと地上に落ちた。

花が落ちたところに男が立っていた。

見覚えのあるシユケムの軍服を着た男だった。

まだ太陽は真上にあるはずなのに、薄い影が男を覆う。

黒髪の男は足元のエルファの花を拾い上げると、城壁をふり仰ぎハリーファの方を見上げた。憂愁を帯びた漆黒の目はじつとハリーファを見つめている。三十路近い男が、まるで親に怒られている子供のような顔をしていた。

『どうした？ 何故泣いてるんだ？』

男はハリーファに向かって声をかけてきた。ハリーファは慌てて

服の袖で顔を拭ったが、涙など出ていなかった。

（何言ってる！ お前こそ、自分の気持ちを吐き出すために海に来ていたんだろ！）

ハリーファが心の中でそう言うと、男は空気に溶けるようにすつと姿を消した。

「ハリ？」

気がつくのと、引きつった表情のハリーファの顔を、ジエードはいぶかしげに覗き込んでいた。

ジエードにはあの男の幻は見えていなかったのだろう。

「なんでもない……」

（こんなことをしている場合じゃない……、わかってる……）

王宮という城壁に囲まれた閉鎖的な空間での生活。それは【エブラの民】と同じだと、ハリーファは今更ながらに思った。

そして、ここから外に出られるのは、きっと彼らと同じように、自分の『弔い』の時なのだろうとも考えていた。

ヴァロニア王国 ホープ

ヴァロニア王国、ヘーンプルグ領アレー村。

アレー村では、これから来る冬に備えて本格的に冬支度が始まっていた。

村を取り囲んでいる森の広葉樹の葉は散り始め、色が少しずつ赤錆や黄色に変化してきている。

切り立った海沿いの一番高い丘には、村の所有する風車小屋があった。

朝から絶壁を下から上に冷たい風が吹き上げ、高台にある風車を力強く回していた。昼になっても風の勢いは止まらず、海側の高台では寒さが一層増すようだった。

村の集落から風車小屋までは一本道で、そこを通るのはほとんど荷馬車ばかりだった。

そのため、風車小屋へ向かう道には草が生えず、土がむき出しになった二本のみことな轍わたちが出来ていた。

秋に吹く強い風が雲をかき乱し、薄く引き裂かれたような雲が空一面をおおっている。

真上にある太陽の日差しは雲にさえぎられ、村を吹き抜ける風は冷たい。秋とは思えぬ冷え込みに荷馬車を御していた少年は身をふるわせた。

少年と荷馬車は丘の上にある風車小屋へと向かっていた。

二本の車輪が轍をなぞり、空の荷台はガタガタと揺れた。荷台の前方で長い手綱を握る少年のゆるく波打った短い黒髪も同じように揺れていた。

丸い胴体に円すい屋根の建物が近づいてきた。十字に組まれた四枚の羽根が風を受けて力強く回転している。ごうんごうんと重い石が回る音が外にまで聞こえていた。

黒髪の少年は風車小屋の前に荷馬車を乗り着けた。羽根車の裏手にまわり木の扉を開けると、中からはますます轟音が響いてくる。少年は大声で風車小屋の番人の名を呼んだ。

「こんにちは！ オーバンさん」

小屋の中心には太い木の支柱がぐるぐると回転しており、その周りに付けられた大きな石の車輪が平らな石のテーブルの上をころころと重たい音を立てて滑走していた。石臼の引いた粉が小屋の中を舞っている。床も白く粉をかぶり、足を踏み入れることに靴が白くなっていた。

小屋の中を見渡しても風車守は見当たらず、小麦の粉っぽい香りにむせそうになりながら少年は奥へと入り込んだ。

そして二階へのはしごを見あげて大声で叫んだ。

「こんにちは！ オーバンさん？」

「おう！ おはよう、ホープか」

時間はそろそろ昼が近いというのに朝の挨拶が返ってきた。グレーの髭をたくわえた中年男が四角く切り取られた二階への入り口から顔を出し、ホープの顔を見るとすぐにはしごを降りてきた。オーバンのグレーの髪も白い粉をかぶってすっかり白髪になっていた。

「今日もいい風だね。教会の分は出来てる？」

「ああ、二十袋だ。ここから持っていけ」

オーバンは壁沿いに積み上げられた袋を一つ軽々と持ち上げるとホープに渡した。袋の重さにホープが少しよろけるのを見て大口を開けて笑った。

ホープは重たい袋を肩に担ぎなると、荷馬車に積みこみ小屋を出た。

風がない日、風車小屋の主は崖の上から海に向かって釣り糸を垂らしているのを、ホープは知っている。秋の初めから風の強い日が続き、収穫後ということもあって最近オーバンはずっと働き詰めだ。去年は小麦が不作で仕事の少なかったオーバンも、今年はどこか楽しそうだった。

ホープは小麦粉の入った袋を一袋づつ肩に担ぎ、前に停めた馬車の荷台に積んでいった。何度も扉を出入りし、ようやくその作業にも終わりにさしかかった。

「これで最後だよ。ありがとう！」

ホープが小屋の入りの敷居をまたぐと、粉の挽き加減を見ていたオーバンが顔を上げホープに手をふった。が、オーバンは慌てた様子でホープを呼び止めた。

「おいっ！ ホープ！ お前さん怪我してるのか？」

「え？」

呼び止められ、ホープが肩に小麦粉の袋を担いだまま振り返ると、オーバンは大きな石臼の横をすり抜けてきた。髪や顔、体中に白粉をはたいた様になりながら、オーバンはホープの右腕をそっとつかんだ。

ホープはつかまれた自分の右腕を見て、黒い目を大きく見開いた。

「わっ！ なんだこれ！？」

驚いて担いでいた袋を下ろすと、床から白い粉じんが舞い上がった。

服の袖に血がにじみ、茶色の布地が黒く染まっていた。指先から腕へと血が流れた跡があり、白い手に赤黒く乾いた血がこびりついていた。

「おい、えらい血じゃないか。大丈夫かい？」

オーバンが心配そうにホープを眺めたが、血はすでに止まっているようだった。

「おかしいな。痛くもないのに」

ホープは足元の袋が血で汚れていないことを確認すると、外に飛び出て積み終えた袋も汚れていないか調べた。

不思議なことに小麦粉を入れた袋の方には全く血は滲んでいなかった。大切な糧食が駄目にならず、ホープはほっとした。

「いつこんな怪我したんだろ……」

ホープの右手の親指と人差し指が、なぜか強く脈打つように微かに震えていた。

(……ジエード?)

ホープは一瞬不思議な感覚に捕われた。昔から、双子の姉のジエードに何かあった場合にこんな感覚にとらわれることがあった。

徐々に右腕が痺れるのを感じ、ホープはしばらく右腕を押さえ続けた。

変わり者のヘーンプルグ卿

ヘーンプルグにまた冬がやってきた。

海沿いのアレー村から街道を東へ進むと、クランという領主の住む街がある。ヘーンプルグの中では最も都会ではあったが、それでも小さな街だった。

その小さな街の外れにヘーンプルグ領主の大きな屋敷があった。

アレー村での魔女騒動から一年が過ぎた頃、ホープは一人でヘーンプルグの領主の館を訪ねた。

都会と言ってもヘーンプルグは森に囲まれた田舎領だ。領主の屋敷も手入れの行き届いていない鬱蒼とした森に面する場所に建てられていた。

雪雲が空を覆い日の光は遮られて、昼間だというのに辺りは夕方のように薄暗い。半分を森に面した屋敷は天気の良い日でもどこかしら日陰になり、天気の良い日などはさらに不気味さを増していた。

ホープは使用人に領主に拝謁したいことを伝えと、白髪の女中メイドがホープを案内してくれた。広い館の中はひっそりとしていて人気があまりなかった。ヘーンプルグの領主は、今は最小限の使用人しか雇っていないようであった。

無口な老女中に連れられて辿りついた部屋の扉を、ホープは恐る恐るノックした。

「入れ」

若い男の声で入室を促されホープは扉を押した。ぎいっときしんだ音が取っ手を握る手に伝わってきた。

領主の居る部屋は日の当たる方角にあるようで、窓からの弱い光が部屋の中を照らしていた。

正面の大きな窓と暖炉以外の壁は全て天井まで届く本棚になっていて梯子が立て掛けられていた。暖炉に火は入れられていなかったが、部屋の中は微かに湿っぽく廊下よりは暖かく感じられた。

部屋のあちこちにイーゼルが立てられていて、そこに大小様々な大きさのキャンバスが置かれていた。描きかけや完成した絵が並んでいる。ホープは部屋の奥へと進みながら、横目でそれらの絵を見た。黒い髪の天使像や、黒く塗られた人間や、太陽だか月だか炎だか、何か良く分からないものが描かれていた。

室内は雑多に散らかり、居るはずの領主の姿をホープは簡単に見つけれなかった。

窓の前には大きなデスクがあり、その上は本が山積みになっていて壁を作っていた。その壁の向こうに、革の長靴ブーツを履いた長い足が乗っているのが見えた。

デスクの上に足を投げ出し本を読んでいた人物が、けだるそうにホープに話しかけてきた。

「叔父なら旅行に出かけているぞ。すぐには帰ってこない」

ホープは意味が分からず呆然とした。随分若い男の声だった。ホープが返事をしないでいると、

「なんだ？ 地税の直談判にきたのではないのか？」

声の主は、軽やかにデスクから足を下ろすと、読んでいた本を閉じ本の壁の隙間からホープの方を見た。

驚くほど青い瞳が、積まれた本の隙間からホープをじっと見ていた。

ヴィンセント・フォン・ヘンブルグは、今年で22歳になる若き領主だ。16歳の時、後継者の居ない叔父である前領主の養子としてこのヘンブルグにやってきた。

ヘンブルグで一番都会なクランの街でも金髪の人間は一人も居ないので、『新しい領主は金髪碧眼の美男子だ』と領中に噂は響き渡っていて、その名を知らない者は居ない。しかし実質的な仕事は今でも前領主が執り行っており、当の本人は館に引き籠もって領民の前に姿を現したことはほとんどなかった。

本の山の向こう側にいるのは、まさにその噂の人物だ。

「少年。何の用があつてここへ来た？」

ヴィンセントはデスクに山積みになっている本の上に、閉じた本を更に積み上げた。

本の壁越しに言われたが、ホープはデスクを横から回りこみ領主の前に立った。

青い瞳の青年は革張りの椅子に深く腰を掛けていた。その瞳の色は空よりも遙かに濃く、深い海のような青色だった。そして、ヘンブルグでは見たことのない鮮やかな金色の髪に、ホープは思わず

目を奪われた。

ヴィンセントの青く冷たい視線がホープに突き刺さった。ヴァロニアでも一、二を争う田舎だからなのか、若き新領主ヴィンセントは到底貴族とは思えないような簡素な衣服をまとい、それをさらにだらしなく着崩していた。折角の金の髪も手入れしていないようで、読書の邪魔にならないよう適当に結わえられていた。

実は彼については『金髪碧眼の美男子』と言うことだけでなく、『変わり者』だと言うことも領内に知れ渡っていた。噂の人物に会えたのは良い話のネタだが、引き籠もりの領主しか居なかったことに、ホープは今日ここに来たことを少し後悔した。

「領主様、あの、これを……」

ジェードの魔女疑惑を書かれた王都からの召喚状と、村の神父からの紹介状をヴィンセントに差し出して見せた。

「なんだ、これは？ 魔女の召喚だと？」

ヴィンセントは紹介状の方には目もくれず、魔女狩りの書状を広げざっと目を通すと、封の紋章を確認し、眉間にしわを寄せた。

「王都^{ランス}から出されているが、これは王太子からではないな。おそらく王太子の母君か、その取り巻きか」

椅子に腰掛けたまま、ヴィンセントは独り言のように呟いた。

ヴィンセントはちらりとホープの黒髪を見た。

「ここに書かれているのは、君の兄君なのか？」

「……いえ、姉です。ジェードが戻って来れるように、どうかこの魔女疑惑を取り消して欲しいんです。お願いします！」

「そうか。姉君に魔女の疑惑がかけられたのか。魔女裁判を勝たせたい気持ちはわかるが、残念だが、さすがに王太子の母君が相手では、私では力不足だ。もちろん叔父だとしても無理だ。姉君が捕まって辛いだろうが」

「ジェードは捕まったんじゃないんです。聖地に逃げたんです」

ヴィンセントは勢い良く立ち上がると、声を高めた。

「逃げただと？　なんて馬鹿なことを！」

怒鳴りながら書状をデスクに叩きつけた。

デスクに積まれた本の山が揺れて、ホープは身をすくめた。

「大人しく連行されていれば、少しは希望があったものを逃げたなど。国に帰ってきたとしても、裁判も無しにすぐ処刑だ」

「そんな……」

「本物の悪魔や魔女でも捕らえて、姉君が魔女ではないことを証明でもない限り、魔女疑惑が取り消されることはないだろうな」

それを聞いて、ホープは呆然とした。

「悪魔なんて本当に存在するんですか……？」

ホープの声が震えていた。ヴィンセントはホープの反応にため息をついた。

「今のはものの例えだ。『不可能』だと言っている」

ヴィンセントはホープに言い切った。

「でも、それじゃおかしく不是吗？ 悪魔が存在しないなら、その僕である魔女なんて存在しないはずなのに」

ヴィンセントは何か言おうとしたが、深くため息をつくとき口をつぐんだ。

「……やっぱりジェードはこのままヴァロニアには戻って来られないんですか？」

背の高いヴィンセントを見上げて訴えるホープに、ヴィンセントはデスクの上に叩きつけた書状を再び手に取り話し始めた。

「この書状、日付はほぼ一年前だな。君の姉君は聖地に逃れたと言ったが、そもそも生きているのか？」

そう言われ、ホープは押し黙った。

「聖地オス・ローは二百年前のファールーク王国とシーランド王国との戦争で崩壊し、今はファールークの領土となっている。その後オス・ローが復興したという話は聞かない。そして、当時の王ヴォード・フォン・ヴァロアの死後から、現在もフロリスからの越境は

禁じられている」

ホープは歴史のことは良くわからなかったが、真直ぐヴィンセントを見た。

「どう言ったら信じてもらえるのかわからないけど、ぼくとジェードは双子で、姉が生きてることはわかるんです！」

「双生児の超感覚的知覚というやつか。根拠はあるのか？」

「これを見てください」

ホープは右手をヴィンセントに見せた。人差し指に刃物で切れたような傷痕があった。

「一カ月位前に突然痛みもなく血が出たんです。でも血を拭くともうこんな風になってた。きっとジェードが怪我をしたんです」

「私がそんなことを信じるんでも思ってるのか？」

「それにジェードは！……」

ホープは言いかけて辞めた。

「それに？　なんだ？」

「いえ……」

「言いたまえ」

「……この事はばくしか知らない事なんです。他言しないと誓ってください」

そう言われ、ヴィンセントは大きく開いた胸元から、聖十字のペ
ンダントを取り出し、それを左手で持つと右手で十字を切った。

「ならば、クライス天使に誓おう」

それを聞いてホープはうなずいた。

「……ジエードには【天使】の声が聞こえるんです」

「は？」

ホープの言葉を聞いて、ヴィンセントの眉根が寄った。

「何年か前からジエードは【天使】から聖地に来るように言われて
いたみたいなんです。【天使】の御加護があるのに、死んでるはず
がない」

ホープの話に、ヴィンセントは呆れたように首を横にふった。

「ここヘーンプルグで四年前にも同じことがあったのを君は知って
いるか？ その時私はその少女の魔女の疑惑を取り下げようと
足掻いてみたのだが、結局助けることは出来なかった。魔女狩りに
宗教的な意味などない。あるのは腐った政治だけだ」

ヴィンセントの言葉に、ホープはうつむくとぼそぼそと小さな声
を出した。

「知っています……。実は……そのルースも、ぼくの姉なんです……」

「なんだって!？」

ヴィンセントは驚きを隠さなかった。突然ホープの顔をまじまじと見つめて、青い瞳を大きく見開いた。四年前まで、この館で女中^{メイド}として働いてた少女の顔を思い出したのだろう。

「ルースは逃げなかったのに処刑されてしまいました……。ルースだって魔女なんかじゃなかったのに……」

ホープの目から涙がポロポロとこぼれ落ちた。姉が魔女として処刑され、さらに下の姉にまで魔女の疑惑がかかったのだ。末子のホープでも両親がジエードを逃がした気持ちは痛いほど理解できた。「そうか、君はルースの弟か。なんという偶然、いや、これは必然と言っべきだな」

しばらく黙っていたヴィンセントだったが、迷いを断ち切るようにホープに言った。

「少年よ、君自身は【天使】の存在をどう考えている？ 【天使】が存在するならば、相対する【悪魔】も必ず存在することになる」

「【天使】は存在します」

迷わず答えるホープに、ヴィンセントはうなずいた。

「よかるう！ 明後日、王都へ出発する。【悪魔】を捕えて叩き出

してやろう。君も私と共に来るがいい」

王都への陳情にホープも同行することになった。

* * * *

出発の朝。

ホープは領主の館の一室で目を覚ました。いつもの癖で、随分早くに目が覚めてしまった。森から鳥の声が聞こえるが、窓の外はまだ暗く随分冷え込んでいた。

一昨日、ホープは遅くまで領主と話し続け、昨日も村へ戻れなかった。父や母は心配しているだろうかと気にかかった。

ホープは昨晚渡されていた服に着替えた。薄くすべらかな衣に袖を通し、胸元の小さな飾りボタンを一つ一つとめる。その上から上衣をかぶって着た。普段ホープが着ている服よりも薄手であるのに暖かく、そして軽く感じられた。

豪華な衣装を身に着けた事がなかったホープは、一緒に渡された棒状のリボンをどのように巻いたら良いのかわからず、手に握ったまま部屋を出た。

二十人は座れる長いテーブルのある広間へ行くと既にヴィンセン

トが居て、使用人達に不在の間の指示を色々出している所だった。

「おはようございます、領主様」

「ホープ、起きたか。こっちにきてくれ」

ヴィンセントは一昨日の簡素な服装とは打って変わって、壮麗な絹の衣装を纏い、外見全てにおいて完全に体裁を整えていた。服装だけではなく、貴族のオーラが滲み出ている。肌は透き通るように白く、金の髪は綺麗にまとめられ、青い瞳が一層際立っていた。

ホープの手に握られた棒タイに気がつくと、

「かしてみろ」

ホープの目の前に立ち、長身のヴィンセントがホープの胸元のタイを器用に結んでくれた。その指先の動作の一つ一つが美しく優雅に見えた。

先日とはまるで別人のように美しい青年に変わったヴィンセントに、ホープは気が引けて、その姿をまともに見ることすら出来なかった。

胸元に結ばれたタイと絹の衣装をじっと見つめて、これから向かう先のことを考えるとホープの表情が更に硬くなった。

「今からそんなに緊張していてどうする、王都はもっと悪の巣窟だぞ」

「緊張というか、不安なんです……。ヘーンプルグから出たことないし……」

「私も初めてヘーンプルグに来た時は不安だった」

「領主なのにな？」

ホープが少し苦笑して、ようやく顔を上げた。ヴィンセントはホープに応えるように笑みを見せた。

「今後、私のことはヴィンセントと名で呼べ。いいな」

「はい」

ホープは返事をしたものの、すぐに『領主』を名で呼ぶなどんでもないことだと気がついた。ヴィンセントの笑顔に魅せられてすっかり返事をしてしまい、ホープは自分の軽率さを後悔した。

*

*

*

*

*

昼を過ぎた頃、王都ランスへと向かう準備を整えたホープとヴィンセントの二人は、それぞれ馬に跨ると領主の館を出発した。他に同行する者もない、二人だけの旅だ。

街道を少しアレー村の方に戻り、そこから北東へ伸びる道を一気に進む予定だった。

空はどんよりと曇り、真冬の寒さに馬上の身がしばれた。

街道と農地の境には低く石垣が詰まっているが、道路は舗装されておらず土がむき出しのまま、馬車の轍わだちの部分が土を削ってへこんでいる。そんな牧歌的でのどかな風景に馴染むように、その街道を羊の群れが横切った。

その羊の群れの中に居た、羊飼いの少年にホープの目が留まった。

「ちょっと待ってください」

ホープはヴィンセントに向かってそう言つと、その羊飼いの少年の方に乗っていた馬を向けた。

「ウィルダー！」

ホープが手を振ると、それに気付いた少年は上手い具合に羊の中からすべり出て、ホープの方に走ってやってきた。

「ホープ！ 驚いた！ 誰かと思ったよ。なんだい、その格好？ どうしたんだ？」

羊飼いの少年はフードを取り馬上のホープを見上げた。フードの下からジエードやホープと同じ黒色の髪が現れた。幼馴染のウィルダーはホープよりも少し大人びて見えた。ウィルダーとはジエードが居た頃にはよく顔を合わせていたが、ジエードが居なくなつてからはほとんど会う事もなくなっていた。

「あれは……領主様？」

遠目に見える金色の髪の人物に気が付くと、ウィルダーは身体を曲げて頭を下げた。

「ホープ、どこかへ行くのかい？」

「王都^{ランス}へ行ってくる。ジェードの魔女疑惑を取り消してもらった」

ホープの言葉にウィルダーは目を見開いた。

「……ジェードは生きてるのか!？」

ウィルダーもまた、戻ってこないジェードは死んでしまったものだと思い込んでいたようだ。

「うん。魔女疑惑が取り消されれば戻って来れるはずだよ」

「本当に？」

ホープはうなずいた。

ウィルダーの表情がぱっと明るくなった。ウィルダーは首から聖十字のペンダントを外すと、「君に天使^{クライス}のご加護を」と馬上のホープに手渡した。

ホープはペンダントを自分の首に掛けると、ウィルダーに向かって強くうなずき、ヴィンセントの待つ方へ馬を返した。

* * * *

ヴィンセントが先に出した伝令が王太子の元に到着していた。

城の中には王太子に忠誠を誓った騎士や聖職者、王妃イザベラに
対して反感を持つ貴族達、王太子の側近など、いわゆる『王太子派』
と言われる者達が集まっていた。そこで23歳になるヴァロニアの
王太子、ギリアン・フォン・ヴァロアは暮らしていた。

「王太子殿下、ヘーンプルグから書状が届いております」

「ヘーンプルグから？」

王太子は不審に思いながらもその書状を確認すると、椅子から立ち
上がり喜びの声をあげた。

「皆の者！ 聞いてくれ！！ ヴィンセントが来てくれる！ あの
ヴィンセント・フォン・ラヴァール！ いや、今はヴィンセント・
フォン・ヘーンプルグ卿だ！」

その時その場に居た者達も歓喜した。

「ヴィンセント・フォン・ラヴァールと言えば、ランスのラヴァー
ル家の長男か。彼が味方に付いてくれるなら風向きが変わるかもし
れないな」

「しかも今まで蚊帳の外だったヘーンプルグの名を背負ってくると
なると……」

王太子の秘密を知る者達は、お互い目配せしてうなずきあった。

臆病者の王太子

森に挟まれた街道を二頭の馬がゆつくりと進んでいた。ヘーンブルグ領を出たホープとヴィンセントの二人は王都方面へと向かった。

ヘーンブルグから北東に向かう街道は、人の往来は全くなかった。

日が傾くに連れ、辺りはもやに包まれた。白いもやは二人の視界をさえぎり、外套をしつとりと濡らす。馬もそれに乗る人間も白い息を吐いていた。寒さに顔が冷やされ鼻や頬の感覚が鈍くなっていた。

ホープは少しでも寒さを防ごうと、新しい厚手の外套に付いているフードを目深にかぶった。

「ジェードが村を出て一ヶ月位経った頃から特に、ジェードの声が聞こえたり、指の傷みたいなの不思議な事があるんです」

道すがら、ホープは双子の姉ジェードと共有する不思議な感覚についてヴィンセントに説明をした。

「姉君が聞いたという【天使】の声は、君には聞こえないのか？」

「……ぼくには聞こえません。聞こえてくるのはジェードの声だけです……」

不思議な感覚はジェードと共有するのに、どうして自分には【天使】の声は聞こえないのか……。考えると、ホープの気持ちは落ち込んでいった。

「姉君には【天使】の声、君には【姉君】の声が聞こえるということか。君にとっては姉君が【天使】なんだな」

「えっ!？」

少し憂いを帯びた穏やかな微笑をたたえながら言うヴィンセントの台詞に、ホープは思わず顔が熱くなった。

ほんの一昨日から一緒に居るだけなのだが、この領主は時々ホープが聞いた事もないような、齒の浮くような気障きぢやうな台詞を平気で言ってきたりする。その度にホープは赤面し動揺するのだが、どうやらヴィンセント本人は至って真面目で、決してホープをからかっているつもりはないようだった。

森を抜けるとそこはヘンブルグの『外』だった。もやは霧雨に変わった。

やがて街道は大きな四辻に差しかかり、そこでヴィンセントは行き先を東から北に変えた。

「ヴィンセント、王都ランスはこっちでは？」

初めてヘンブルグ領を出たホープだったが、一応の地図は頭に入っている。道の間違いをヴィンセントに告げた。

「いや、王都ランスへは行かない。我々はローゼン領へ向かう。王太子に会いに行くんだ」

ホープは突然知らされた事実に驚いた。

「あの魔女狩りの書状は王太子様から出されたものではないんでしょう？ それに王太子様は王都に居るんじゃないんですか？ どうしてローゼン領に？」

「王太子は王都から追放されているんだ。今回は王太子の力を借りる」

「追放……？」

ヘーンプルグには王都や王族のゴシップなどほとんど情報が入ってこない。ホープが何も知らないのも、ヘーンプルグの人間としては普通のことだった。

霧雨に布製の手袋はすっかり濡れていた。ホープはかじかむ指先で手綱を引くと、ヴィンセントに続き馬首を北へと変えた。

* * * *

ホープとヴィンセントの二人はツンゲン領を通過した。アレー村を出てから四日目の夜半にようやくローゼン領に着いた。

ローゼン領は白いレンガの壁にぐるりと領地を取り囲まれていた。入り口の壁は一段と高く、アーチ上の門が口を開いていた。門番の様な者は居なかったが、入領できる場所が街道からだけに限られて

いるようだった。

ヘーンブルグのように森に囲まれた領内に村が点在しているのでなく、領全体で一つの大きな町を形成し、各区画ごとに名称が付けられていた。中央に位置する地区はシュノンと呼ばれ、中央の高台小高い丘の上に領主ローゼン侯の邸　　と言うより、城が立っている。道は全て石で舗装され、あぜ道だけのヘーンブルグと比べると、ローゼンは王都に並ぶほどの都会だった。

夜、通りには人影は全くなく、二頭の馬の規則的な蹄の音が家々の間に響いていた。

ホープとヴィンセントは領の中央にあるローゼン領主の城を目指して馬を進めた。

月明かりが石畳を照らした。

周りの家々の木窓は閉じられ、屋根の煙突から細くなった薄煙が昇るのが見えた。

石畳の上を馬蹄が響く中、ヴィンセントはホープに淡々と伝えた。

「最初に言っておくが、ここはヘーンブルグとは違う。ツンゲンで既に気付いたかもしれないが、ローゼンにも王都^{ランス}にも、ヘーンブルグ以外には黒髪の間人はほとんど居ない。君はおそらく好奇の目で見られるだろう」

「……………」

他領には黒髪の間人は居ないという噂はホープも聞いたことがあった。だが生涯ヘーンブルグから出る事はないと思っていた自分には、関係のない話だと思っていた。

闇夜のせいか、ヴィンセントの言葉はなぜかホープの恐怖心をあおった。ホープは寒さに身を縮めながら、ずっと黙ったままだった。

城の前に辿り着いたが、正面の大きな扉は既に閉じられていた。二人は馬から下りると、そのまま城の裏へと馬を引いていった。しばらく進んだところに背の高さくらいの裏口の扉を見つけた。

ヴィンセントが城の裏口の扉を叩くと、顔の高さに付いている四角い小窓が中から開けられた。ヴィンセントがそこに顔を近づけると、番人らしい男は蝋燭の灯りを小窓に近づけてヴィンセントの顔を確認した。すぐにガチャンと門を外す音が聞こえ、扉が大きく開いた。

「ヘーンブルグ卿！ お待ちしておりました」

「彼はホープ。私の友人だ」

番人はヴィンセントの後ろに居るホープに気がついた。一瞬身体をびくつかせたが、ヴィンセントを見て平静を保っているようだった。

番人は扉の中に向かって別の男の名を呼んだ。呼ばれて出てきた下男らしき男に、ヴィンセントとホープは二頭の馬を預けると、そ

の扉をくぐって城の中へと案内された。

真夜中ではあったが、あちこちに蝋燭が灯され、裏口近くの部屋ではまだ多くの人が眠らず働いていた。

狭い通路を通りぬけ、その先の扉を開けると広い廊下に出た。廊下は真つ暗闇で静まり返っていた。上部の小さな窓から差し込む月明かり以外に、三人の足元を照らすものは、番人が手に持っている蜀台の蝋燭の明かりだけだった。

三人の足音がコツコツと絡まって、長く暗い廊下に響いていた。

* * * * *

ホープとヴィンセントの二人はそれぞれ別の部屋に案内され、一晩身体を休めた。

翌朝。窓から朝日が差し込み目を覚ましたホープは部屋の中を見回した。

ヘーンプルグより北東にあるローゼン領はヘーンプルグよりも寒さが厳しい。昨夜月明かりで見た城の外観は石造りだったが、防寒の為、部屋の床には全面、壁にも枠組むように木が張られていた。

それでも明け方の冷え込みにホープは身を震わせた。急いで昨日

着ていた衣服に袖を通した。

「ホープ、起きているか？」

扉を叩く音とともにヴィンセントの声が聞こえたので、ホープは急いで扉を開けた。

ヴィンセントは昨日とは違う衣服を着て、金色の髪も綺麗に整えられていた。

「おはようございます、ヴィンセント」

「来給え。食事だ」

ホープがヴィンセントに連れてこられた部屋は、50人は座れるほど長いテーブルがある部屋だった。さながら食堂のごとく、既に席に付いて朝食をむさぼる人たちでこった返している。人の話す声と金属の食器のぶつかる音で、部屋中騒然としていた。

奥の厨房へと繋がる背の低いくぐり戸を、使用人達が入り出していた。せわしなく料理を運んだり空いた皿を片したりしていた。

食事をする人々はヴィンセントに気がつく、一瞬その喧騒を止めた。長いテーブルの端に座っていた数人が場所を開けるようにそそくさと去っていく。朝支度途中の騎士らしき人物の中には席から立ち上がり横を通るヴィンセントに「これは！ヘンブルグ卿！」と声をかけてくる者もいた。

座ったまま食事を続ける人々も、何か珍しいものを見るようにヴィンセントとホープを無遠慮に眺めた。ホープはヴィンセントの影に隠れるようにして、その後ろを小姓の様についていった。

二人がテーブルの角に座ると、使用人達は慌てて卓上に残された皿を片付け、肉の煮物や卵料理が雑然と盛られた皿を二人の前に置き、パンを盛った籠と水を容れた銀のピッチャーを二人の間を割って置くと去っていった。

「今日の午前中に王太子と会えるように話をつけてある」

「ほ、本当ですか！？ 王太子様がばくなんかと会ってくれるなんて……」

貴族のヴィンセントを名で呼ぶことでさえホープにとっては身のほど知らずだというのに、この後ヴァロニアの王太子にまみえるというのだ。

ほんの数日前に領主ヴィンセントを尋ねてから大変なことになってしまった。ホープは今更ながら痛感した。ホープは期待と不安で胸が一杯で、目の前に置かれた料理もあまり喉を通らなかった。

周囲の者達は興味深げに二人の様子を眺めていた。

それにしても、先ほどからいやに周囲からの視線が二人に向けられていた。ホープは自分達が見られていることに気がつく、恐る恐るヴィンセントを見た。ヴィンセントもその視線におそらく気付いているのだろう。だが、敢えて知らぬ顔をして食事をしているようだった。

人いきれで湿度の高い食堂の空気は、なおさらその妙な視線がホープにねっとり絡みつくように感じさせた。

朝食を終えた二人は王太子の側近に連れられ迎賓用の部屋へと案内された。

その部屋の壁は一面真紅の布が掛けられ、三つあるテーブルの周りに不揃いの椅子が置かれていた。その椅子の一つ一つが豪華で、背もたれに叙事詩の一場面のような刺繍がされているようなものであった。

「こちらでしばらくお待ちを。謁見の準備が整い次第お呼び致します」

そう言い残し、案内の側近が二人を残し部屋を出て行った。ホープは緊張を隠すことが出来ず、立ったままそわそわとしていた。

「私も少し外す。君はここで待っていてくれ」

傍から見ても落ち着きのないホープを置いて、ヴィンセントも部屋を出て行った。

ヴィンセントは石造りの螺旋階段に足音を響かせ、上階の『ある部屋』へと向かった。

目的の部屋の前に辿りつき扉をノックすると、中から扉を開けら

れヴィンセントは入室を促された。

部屋に入ってきたヴィンセントを見て、奥のデスクに向かっていた人物は手にしていた書類やペンを投げ置くと、立ち上がってヴィンセントの所へ駆け寄ってきた。座っていた椅子が無作法にガタンと音を立てた。

「ヴィンセント！ 良く来てくれたね！」

ヴァロニアの王太子ギリアン・フォン・ヴァロアだった。

こういう行動が王太子の地位を危ぶむ原因の一つなのかもしれないが、ヴィンセントはそんな級友のことを好意的に思っていた。

神学校時代から貴族内で、王太子は『臆病者』、自分が『変わり者』だと言われているのもヴィンセントは知っていた。

今はローゼン候の城に身を寄せる王太子ギリアンは、身分を偽るため聖職者の長服を身に着けていた。以前とは全く違う王太子の服装や頭髮を見て、ヴィンセントは開口一番に言った。

「ギリアン、随分と僧侶の格を上げたな」

ヴィンセント本人が到って真面目なのをわかっているようで、王太子は苦笑した。

「ああ、この格好は随分寒いから最初は風邪で寝込んだけどね。ローゼンはランスより暖かいけれど、いつもこんな格好でいる聖職者達には本当に感心するばかりだよ。それより……」

王太子がそう言って側近の方にちらりと目をやると、側近を残し

他に居た数名の者たちは部屋を出て行った。

部屋の中が限られた者たちになったのを確認し、ヴィンセントは話を切り出した。

「ギリアン、実は今回は頼みたいことがあつてここまで来たんだ」

黙って軽く数回頷いてみせた。先に連絡を受けていたギリアンは既に準備を整えていたようだった。

「僕は今まで何度も君に助けられてきたんだ。君のためなら出来るだけのことはさせてもらうよ」

「私の個人的な事で申し訳ないんだが、この少女を助けてやって欲しい」

そう言つて、ヴィンセントは魔女狩りの書状をギリアンに見せた。

「これはランスの、王族の烙印……。誰が勝手にこんなことを……」

王族の烙印を使えるのは、今はギリアンとその母の王妃イザベラだけだ。ギリアンは勝手に使われた王家の印を悲しそうに眺めた。

そしてギリアンもその書状に目を通すと、そこに書かれていた日付に目を留めた。

「一年前じゃないか。この処刑はまだ執行されていないのかい？」

ヴィンセントはホープから聞いた話をギリアンに説明して聞かせた。

「このジェードという少女が今生きていようと死んでいようと構わない。この魔女疑惑を撤回さえしてくれればそれでいいんだ。私個人の話はそこまでだ」

「ヴィンセント、この子も【黒】なんだろう？　ヘーンプルグの娘だ。【黒】にかけられた魔女疑惑は今まで撤回されたためしが無い。正直、僕には自信が無いよ」

「ならば確実に撤回できる方法を教えてやる」

うつむいていたギリアンは顔を上げると真剣な顔付きのヴィンセントを見つめた。

「君が王に即位するんだ」

「……そんなこと、……僕には出来っこない」

ギリアンは目を伏せて頭を横にふった。言葉と一緒にため息がもれた。

「このジェードという少女の話なんだが」

「ああ、続きがあるんだね」

「その弟の話では、その少女は今【天使】の導きで聖地に居るらしい」

「【天使】の導きで……、聖地に……？　一体どうやって？」

現在フロリスから聖地オス・ローには入れないことを知っている
ギリアンは表情に疑問の色を呈した。

「この魔女疑惑が有効である限り、ヴァロニアには戻ってこれない。
しかし、戻ってきたとしたらどうだ？」

悪魔と交わえば魔女^{ウィッチ}、天使に導かれれば聖女^{セイント}。クライス信仰
者がささやく口承は貴族でも農奴でも知っている。

「聖女^{セイント}……？ でもそんな神秘的現象は、君が一番信じてなさそう
なんだけど？」

ヴィンセントの性格を良く知るギリアンは苦笑した。

「信じてはいないが利用は出来る。反王太子派が魔女を仕立て上げ
て利用しようというなら、こちらもそうすればいい。魔女と聖女、
ランスの人間が好きそうな話じゃないか」

「……………」

ギリアンは考え込むように黙ったが、独り言のように呟いた。

「黒髪の……【聖女】か……」

そんな王太子をヴィンセントはじつと見すえた。

「連れてきたのはその双子の弟だ」

「いや、疑っている訳じゃないんだよ。僕は君が腰を上げただけで
十分信じるに値すると思っている。だけど……ヴィンセント、君自

身は信じているのかい？」

「今度ばかりは、私も信じてみたいと思ってるんだ」

ギリアンは肩をすくめて少し笑った。はなからギリアンがどうするかを知っていたかのようなヴィンセントに少々呆れながらも、今までのヴィンセントの功績から彼の行動には間違いがない事を認めているようだった。

「君を助けるつもりが、また君に助けられることになりそうだね」

ギリアンは納得したようにうなずくと、「では、謁見の間へ行こう」と、連れ立って謁見の間へ向かった。

*

*

*

*

*

その頃ホープは一人、部屋で待ちぼうけを食らっていた。

椅子ばかりの部屋に取り残され、ホープは最初はその背もたれの刺繍の絵柄などを眺めた。緊張の方が勝ってしまい、集中して鑑賞することは出来なかった。

同じ領主の住まいと言えど、ここはヘーンプルグ領主の『館』とは違い、その造りは完全に『城』だった。自分はあまりにも不釣合

いで、なんとも居心地が悪い。ホープはただ一人、綿の詰まったビロード地の椅子に身体を硬くして座っていた。

ヴィンセントが出て行つてしばらくすると、扉がノックされ先ほどの側近の男が入ってきた。

「ホープ殿、王太子殿下がお待ちです。ご案内しますのでこちらへ」
ヴィンセントの居ぬ間にホープは一人連れられ、王太子の待つという謁見の間に行くことになった。

ホープは石造りの廊下を側近の男の後について歩いた。昨夜とは違い、通路に響く足音は窓の外から聞こえる音に紛れてゆく。

「こちらです」

そう言つて案内された扉の向こうから、さざめきが聞こえた。

背の高い扉が側近の手によつて開かれた。中には貴族や騎士達が集まっていた。華やかな装いの男女は、中央の絨毯をはさんで左右にわかれて立ち、謁見の時を待っていた。ざつと見て四五十人位だろうか。彼らの視線は扉から入ってきたホープへ注がれた。

【黒】？

【黒】だ

あれは死病じゃないのか？

触れると感染るぞ……

途端にそんな密めやかな言葉がホープの耳に届いた。

人々はホープを避けるように広がり、女たちは口元を手でおおって隠した。

やがてさざめきが止み、皆がホープの真っ黒な髪を稀有なものを
見るように眺めていた。

肌寒く乾燥する謁見の間では、人々の視線はまるで刃物のように
ホープに突き刺さった。

（ヴィンセントの言っていた通りだな……）

ちくちく痛む頬に居心地の悪さを感じながらも、ホープは黙って
その場に立ち尽くしていた。

ホープの背後の半開きになった扉から、一人の青年が謁見の間に
入ってきた。立派な刺繍の施された衣装をまとった青年は、ホープ
の横をすり抜けて絨毯の道を堂々と歩み、正面に置かれた椅子に腰
かけた。入ってきた。貴族達は皆静かに脱帽し、かすかに頭を下げ
た。静まった広間に、ひしめきあう人々の衣擦れの音が聞こえた。

（この人が王太子様……）

正面の椅子にこう然と座った青年は、肘掛にしつかりと手を着き
ホープを見た。そして右の手を差し出し、指先を少し曲げて近くに
来るようにホープに指図した。

ホープは絨毯の道を王太子の方へと歩んで行った。

ヴィンセントとギリアンが謁見の間へ向かうと、入り口の扉が半開きになっていた。少し離れた場所からでも、謁見の間には既に多くの人間が集まっている空気を感じとれた。

「【黒】の少年か……。ヴィンセント、君が居てくれると心強いよ」

ギリアンの声が廊下にかすかに響いた。王太子派でも半分以上の者がギリアン本人を知らない。そういった者達の前に初めて姿を見せるギリアンも、多少緊張している面持ちであった。

謁見の間には五十人程呼び集められているはずなのだが、部屋に近づいても談笑も雑談の声も向こうから聞こえない。広間が既に静まっていることに二人は違和感を覚えた。

「ギリアン」

ヴィンセントの声にギリアンは不安を覚え、にわかに顔を青くした。

「僕は何も指示していない！」

僧の長衣ローブを着たギリアンは小走りに、扉の隙間から謁見の間に滑り込んでいった。

身分に合わない気弱な性格の所為で周囲に翻弄されるギリアンを、ヴィンセントは今まで何度も見てきた。ギリアンの後姿を見て息を

吐くと、自分は謁見の間には入らず、扉の隙間から中の様子をうかがった。

王太子はヴィンセントと同じ歳ごろの青年だった。金色の髪は肩の上で綺麗に切りそろえられ、淡いブルーの瞳は歩み寄るホープを姿を映していた。

ホープが王太子の前に辿り着くと、周りの貴族達と同じようにホープの黒い髪を見て眉をしかめた。

「よく参られた。ヘーンプルグのホープ」

王太子の明朗な声が広間に響いた。

皆がホープに注目していた。ホープは緊張のあまりぎくしゃくしながらも、王太子の前に腰を落とそうと右足を後に引いた。

『嘘よ！ 王太子様が黒髪だなんて！！』

ひざまずこうとした瞬間、ホープにジェードの声が届いた。驚いたホープは体勢を崩してよろめいた。

（ジェード！？ 王太子様が……黒髪！？）

ホープはつんのめった身体を元にもどし立ち上がった。
今ホープの目の前に居る王太子は金色の髪だ。

（この人は王太子様じゃない……。偽者？）

ジェードは【天使】と話すことが出来るのだ。ジェードの声を完全に信用しているホープは、思わず後ずさりすると周りを見渡した。
貴族達は一斉にさざめきあつた。ホープに対する揶揄も聞こえてくる。だがホープの耳には観衆の声は入ってこなかった。

（本物の王太子様は……どこに居るんだろう？）

偽の王太子の前で全員が脱帽している中、黒髪の人物は誰も居なかった。

（ぼくは、だまされているのかな……）

貴族達にからかわれているのだ。王太子は自分のような者とは会ってほしくないのだと認識すると、途端にホープは羞恥と悲哀で心がいつぱいになった。どんなに立派な服を与えられて着ていても、ここは自分の来るところではなかったのだと。

王太子様ならジェードの魔女疑惑を撤回してくれると思っていたのに、やはり王族にまみえるなど、自分にはあり得ないことなのだと思い知らされた。

悲しみと羞恥に襲われる中、謁見の間から去ろうと思いホープが扉の方に歩いて行くと、人々はまたホープを避けるように道をあけていく。

扉の近くに、完全に剃髪した若い僧侶が一人だけその場を動かず
ホープを見つめていた。

その僧侶の視線は、嫌悪の目でホープの黒髪を見ている観衆達とは違う。観衆の前で黒髪を晒すホープと似たような悲哀を浮かべていた。そしてよく見るとこの僧侶には眉毛も睫毛もなかった。

（王太子様は黒髪……、まさか……）

ホープは小さな声で恐る恐る、僧侶に向かって問いかけた。

「ギリアン・フォン・ヴァロア陛下？」

ホープの呟くような声が聞こえた貴族達はざわついた。

「よくここまで参られた、ヘインブルグのホープ・ダーク。真に僕
がギリアン・フォン・ヴァロアだ」

僧侶の傍に居た貴族達は驚いて腰を落とし、ホープも慌ててその
場にひざまずいた。

広間は静まり返った。

「僕のことを……『陛下』と呼ぶのかい？」

「だ、だって貴方は、この国の王になれる御方なのでしょう？」

ホープの言葉に、王太子派の観衆達は歓喜に湧き上がった。

ヴィンセントは扉の影から満足そうにホープを眺めていた。

* * * *

「王太子様が黒髪だったなんて……」

別の応接室に案内されたホープは、王太子の秘密を知って驚きを隠せずヴィンセントを問い詰めた。

部屋の中央にある四角いテーブルを囲うように、L字に長椅子が置かれ、他に二つ、一人掛けの椅子が置かれている。その長椅子にホープとヴィンセントは一人ずつ腰掛け、ホープは身体を斜めに向けてヴィンセントに食い入った。

「ヴィンセントは知っていたんでしょう？ どうして最初に教えてくれなかったんですか？」

「言わないと誓いを立てたからだ」

この領主はジェードの秘密も言わないと誓いを立てたのだ。確かに教えられていれば、その信用を失う事になっていただろう。

「この城で暮らす王太子派にも、本物の王太子を知らない者も居れば、王太子を知る者の中でも、王太子の髪のことを知らない者がほとんどだ」

そう言って感心した表情でホープを見た。

「何故彼が王太子だと判った？」

そう聞かれホープは正直に答えた。

「……ジエードの声が聞こえたんです。王太子様は黒髪だつて」

するとヴィンセントは胸の前で両腕を組んで驚きの表情を見せた。

「では姉君は今も生きているんだな」

「はい」

ホープの答えを聞いて、ヴィンセントは何か考えている様子だった。長い指を顎に当て、視線を流しながら思いに耽る姿は優美で、どこか人間離れして見えた。

やがてふうつと息を吐くと、

「ギリアンが王位に就けば姉君の魔女疑惑を撤回できる。だが」

ヴィンセントはそこで言葉を止めた。

「王太子様が即位できないのは、黒髪のせいなんですか？」

「概ねそういうことだ」

黒髪の人ばかりが暮らすヘーンブルグでは全く分からない理屈だ

った。

ローゼンに着いて、朝からホープは人々に痛いほど視線を向けられた。謁見後、その痛みはマシになったように感じられたのだが。

「黒髪の人が差別されているっていうのは噂で聞いた事があります。でもぼくは、今までヘーンプルグで特に不自由を感じることなく暮らしていました。どうしてもここでは黒髪だっただけでこんなに蔑視されるんだろう……」

「ヘーンプルグの人間は、私と叔父以外は全員黒髪だろう。叔父も今じゃすっかり白髪だ。金の髪だった事を知っているのは老人ばかりだろうしな」

ヴィンセントの言うとおりだった。だからヘーンプルグでは何も感じなかったただけなのだろう。余所者が訪れることもなく、他領から情報さえも入ってこない。辺境の田舎領なのだ。

だが、それは黒髪が侮蔑される理由ではない。ホープは納得できなかった。

「聖書だよ」

ヴィンセントは唐突に口にした。

「えっ？」

予期しないヴィンセントの言葉にホープは耳を疑った。

「聖書って、……どうして聖書が？」

「聖書に天使や悪魔の絵が載っているだろう。あの版画が黒髪蔑視の根源だ。クライスの教えではなく、あの絵が間違っている」

字が読めない人のために、聖書には沢山の宗教画が添えられた。白黒で刷られた絵は全て、天使は金髪で白人に、悪魔は黒い服を纏い黒髪や黒い肌で描かれていた。

「神はこの世の全てのものに平等だ。なのにあの絵はまるで白人は天使、黒人は悪魔であるように描かれている。本当に平等だと言うなら、黒髪や黒人の天使もいるはずだろう」

「黒人？」

初めて聞く言葉にホープは反応した。

「フロリスには黒人は居ないが、聖地やモリスに行けば沢山居る。黒い肌の人間だ」

「黒い肌？」

黒い肌の人間などホープには全く想像が出来なかったが、ふとヴィンセントの部屋で見た絵画を思い出した。沢山のキャンバスには黒髪の天使や、肌を黒く塗られた人間の絵が描かれていた。思えばあの絵画は、聖書の挿絵の概念を覆すものだった。

「じゃあ、悪魔は黒い肌や大きな耳で描かれているけど、それは間違いないですか？」

「おそらくそうだろうな」

「悪魔の本当の姿はどんななんだろう……」

「男も女も魅了するんだ。よほど美しい姿をしているんだろう」

男も女も魅了し誘惑する美貌の持ち主。

ホープはヴィンセントを見つめた。

悪魔はヴィンセントのような姿をしているのかも。

そう言おうと思ったがやめた。それは冗談でも言う言葉ではなかった。

「大体、フロリスを『光明大陸』、モリスを『暗黒大陸』と呼ぶのも悪趣味すぎる。そうは思わないか？」

ヴィンセントに言われても、ホープは今までそんなことを考えたこともなかった。学校や教会で教えられることはホープにとっては『絶対』であった。疑問を持ったことさえなかったのだった。

二人が話していると、部屋の扉が開いてギリアンが入ってきた。

「すまない。待たせたね」

そう優しくそうに言うギリアンに、ホープは椅子から立ち上がると緊張しながらも深々と頭を下げた。

ヴィンセントは座ったまま、組んでいた右手を外し、一人掛けの椅子をすつと差すとギリアンに座るように促した。

ヴィンセントは王太子に対しても決して毅然とした態度を崩さな

かった。気弱そうな無髪の王太子と堂々とした金髪のヴィンセントの二人を見ていて、ホープはどちらが王太子か一瞬迷うほどだった。

「驚いただろう？ 僕がこんなで」

ギリアンは自虐的な笑みを浮かべてホープに話しかけた。

ホープはまだ王太子に対する緊張が解けずどうにか顔を上げると、ぎこちないまま長椅子に腰掛けた。

「いえ、王太子様ではなくて……。ここ、ローゼン領での黒髪への蔑みに驚きました……」

「そうだろうね。ランスもデュールも、ヘンブルグ以外はどこも同じだよ」

悲しそうに話すギリアンにホープは何も言えなかった。

そんな雰囲気打ち破るかのように、ヴィンセントはギリアンに言った。

「ギリアン、私とホープは後10日間だけローゼンに留まろう。その間に覚悟を決めてくれ」

ギリアンは小さく二つうなずいた。

ホープの知らない間に、二人の間では色々と話が進んでいるのだろう。王太子が王位に就くには色々障害がある。おそらくその話をしているのだろうとホープにも想像できた。

「王太子様、どうかジェードを助けて下さい……」

ギリアンはホープにも黙って小さく二つうなずいただけだった。

三人の間に居心地の悪い沈黙が続いた。

「僕が返事をするまで、良かつたらこの城に逗留してくれないかな」

ギリアンはヴィンセントに声をかけた。

「これ以上ここに居候を増やしても仕方ないだろう。私達はクート家に世話になるうかと思っているんだが、話が通るまでは宿をとることにする」

「そうか。君は昔から変わらないな」

ヴィンセントに向かって王太子は苦笑した。

* * * *

ヴィンセントの言ったとおり、二人は城から少し離れた街道沿いの宿に移動した。

安宿の狭い部屋は薄汚れていたが、ヴィンセントは気にしていないうだった。床に荷物を置くと、外套を脱いでベッドの上に置いた。

ホープは王太子と会えて話せたことで、まだ興奮が冷めていなかった。

「それにしても、驚きました。ヴィンセントが王太子様と友人だったなんて」

「同じ年に生まれて同じ学校に通えば、皆『御学友』だろう。それに神学校なんて馬鹿な貴族の息子達の集りだ。私も含めてな」

ヴィンセントは面白く無さそうに付け足した。

「でも、王太子様はヴィンセントの事をすごく信頼しているのが、ぼくが見ていてもわかりました」

いまだ冷めない興奮のあまり、ホープはヴィンセントの王太子に対する無礼とも言える言葉遣いを指摘するのも忘れていた。

「私もギリアンもお互いはぐれ者なんだ」

「でも、王族ですよ？」

「君は王族を何だと思ってるんだ？」

「何って、王様の家系でしょう？ このヴァロニアを支える王様ですよ？」

手放しで賞賛するような言い方をした所為か、ヴィンセントは呆れたような視線をホープに向けた。

「まるで神のような言い方だな。王なんて所詮只の管理職だ。しかも管理なんてしちゃいない。結局国を支えるのは一人一人の国民だ。管理者はそれを統括して利益をむさぼり取るだけだ。そのくだらない名ばかりの管理職の座を姉弟で争って、迷惑被るのも国民だ」

ホープは王族に対する憧憬に近い気持ちを、ヴィンセントによってばっさりと切り捨てられ途方に暮れた。

「……ヴィンセントは王族や貴族が嫌いなんですか？」

「今頃気付いたのか？」

ヴィンセントの答えに、ホープは啞然とするばかりだった。

そして今頃ヴィンセントが『変わり者』だという噂を思い出して一人自分を納得させた。

悪魔の子ども

およそ二百五十年前。

光明大陸フロリスのヴァロニア王国とシーランド王国は、聖地オス・ローをめぐり暗黒大陸モリスのファールーク皇国と争った。

三十年に渡った聖地をめぐる争いは、ヴァロニア対岸の島国、シーランド王国軍の敗退で幕を下ろした。

この時、ファールーク皇国、ヴァロニア王国、シーランド王国の三国間で、フロリス人のオス・ローへの越境を禁じる調停が交わされた。

時が過ぎ、ヴァロニア王国とシーランド王国の血盟は解かれた。

シーランドの矛先は大陸のヴァロニアに向いた。冬は港が凍るほど厳しい寒さの二国が争うのは夏の季節だけだった。

長引く戦争は百年経った現在も続いている。

百年の間に、戦地近くの領地は荒れて疲弊し、ヴァロニアとシーランドの王族・貴族間の因縁はさらにこじれた。

ヴァロニアではシーランド側に寝返る領も現れた。シーランドに最も近いガイアール領は一番早くにヴァロニアに反旗をひるがえし、シーランド王国側についた。

ヴァロニア王カルロスは永続する戦いに終止符を打とうと、シーランド国王と条約を結んだ。それは、カルロスの死後は娘リナリーの夫にヴァロニアの王位を移譲するというものだった。ヴァロニアのガイアール領と王都ランスの境の街ヴァンデで調印された条約は『ヴァンデ条約』と呼ばれた。

翌年、シーランド国王ローランはヴァロニア王女リナリーと婚姻を結んだ。

その事が原因で、ヴァロニア内ではさらに各領が王威派と王太子派に分かれ、国内でも内戦が起こっていた。

\circ

\bullet
 $*$
:
 \cdot

\circ
 \bullet
 $*$
:
 \circ
 \cdot

\circ
:
 $*$
 \circ
 \bullet

\bullet
 $*$
:
 \circ
 \cdot

\circ
:
 $*$
 \circ
 \bullet

四年前

1422年、ヴァロニア王国ガイール領。

ガイアル領はヴァロニアの北東に位置する。まだ秋だというのに小雪がちらつきはじめた。

ガイアル領主が所有する海沿いの城の最上階の一室に、ギリアの姉であるリナリー・フォン・ヴァロアと、その秘書官オーエンは居た。

細長い窓から雪雲の広がった灰水色の空が垣間見える。上空の空気が更に冷たく、壁と床は石が剥き出しのままの部屋は氷のように冷えていた。

壁際にたたずむリナリーとオーエンの他に、部屋の中央には若い娘がうつ伏せに倒れていた。

娘の背には小さなナイフが突き刺さり、血の池がじわじわと広がっていた。激しく呼吸をしているのか、突き刺さったナイフが上下に揺れていた。

やがて娘の動きは鈍くなった。

突然、部屋の中は窓を閉ざしたかのように、昼間と思えぬ闇に包まれた。

娘の傍に金色の髪と翡翠色の瞳を持つ美しい男が立っていた。

男が現れたのを見て、リナリーはゆったりと編んだ長い金色の髪を背中の方にはらうと、満足そうにほくそ笑んだ。

「見よ、オーエン。私の言った通りであろう」

「あれが、【悪魔】……」

オーエンは男の姿に目を奪われ、息をのんでつぶやいた。
リナリーは横目でオーエンを見やった。

「私はローランが死んだ時に、一度あの【悪魔】を見たのだ。誰も信じようとしなかったがな。そして【悪魔】はローランの望みを叶えて、父上を殺したのだ」

そう言うと、リナリーは娘と【悪魔】の方へとドレスの裾を引きずりながら近づいていった。

「……………」

血だるまの娘の声は声とならず、最後の力で【悪魔】の足首をつ

かんだ。

『僕がここに来たと言う事は、貴女はもう助からないよ。早く望みをお言い』

足元の娘にそう言うと、【悪魔】は近づいてくる女に視線を向けた。

『これは黒魔術とでも呼べばいいのかな？』

【悪魔】がリナリーに向かって口を開いた。娘の死は【悪魔】を召還するために意図的に作られたものだと思したのだろう。

「死に逝く者の望みなど叶えてどうするというだ。そなたがローラの望みを叶えて父上が死んだ時、私は可笑しくて仕方なかったぞ」

『あなたはアルフェラツに会ったはずなのに』

「そうだ。だからこそ、私はお前の存在を確信したのだ。そして誰にも私を救うことは出来ないということも理解した」

【悪魔】は一瞬リナリーから目をそらすと、力を失って床に倒れた娘の手首をそつと足で押しやった。

リナリーは【悪魔】よりも冷たい目つきでその様子を眺めた。

「私はその娘と契約を交わしたのだ。その娘の望みは私の望みを叶えること」

『この娘が心からそれを望んでいたなら、そういうのもありだけだね』

「父上が先に死ねば、夫がヴァロニアの王になるはずだった。だがあのローランは父上より先に死んでしまった。馬鹿な男め、死ぬのが早すぎだ！ 全てが私に不利になった！ アンリはまだ一歳にもならんだぞ！」

シーランド国王ローランの予想外の病死を思い出し、苛立ってリナリーは大きな声を出した。

「ヴァロニアどころか、シーランドの王位すら義弟のオスカーに奪われたのだ」

「僕が何もしなくても、貴女の子はいずれヴァロニアの王になれるんじゃないの？」

「アンリはオスカーに奪われた。あの男、私を追いやってアンリを利用し、ヴァロニアの摂政になるうなどふざけたことを。オスカーを殺せ！」

「この娘はオスカーの死なんか望んじやいない」

「ではギリアンでも構わぬ！」

リナリーの怒りの形相に【悪魔】は微笑した。

「僕は死に行く魂の願いしか聞けない」

「私はもとよりシーランドなどに興味はないのだ。私が欲しいのはヴァロニアだ」

『貴女の望みを叶えられるのは、貴女が死ぬ時だ』

「悪魔よ。死に逝く者の望みなど叶えても無意味ではないか？」

『望みはこの世への想い。捨ててもらわないといけないからね』

リナリーは金の髪の【悪魔】をじっと睨みつけた。

『僕が人に与えられるのは「死」だけさ。人の世に捕らえられている僕の子なら、貴女の願いを叶えられるかもしれないな』

そう言い残すと、周りの闇を引き連れて姿を消した。
冷たい床に倒れた娘は、もうピクリとも動かなかった。

しばらく経って、オーエンはようやく口を開いた。眼前には若い娘が息絶えているというのに、それ以上に凄惨なものを見たようだった。今頃足がガクガクと震え、冷たい壁に手をつかずには立っていられなかった。

「……僕の子とは……【悪魔】の子供の事なのか？ それは魔女の産んだ子と言うことなのだろうか？」

あの【悪魔】と渡りあった気の強いリナリーを見て、オーエンはこめかみに浮かんだ汗をぬぐった。

「ふふつ。母上は悪魔などいないと言っていたが、やはり悪魔はいたな。ギリアンもやはり悪魔の子なのだろう。そして母上こそ魔女ウィッチ

なのだ」

叫びながらリナリーは勝ち誇ったように笑った。

「まさかギリアン殿下が本当に悪魔の子だと？」

王妃イザベラを魔女呼ばわりすることは、さすがにオーエンにはためらわれた。

「ギリアンのあの不気味な黒髪。そなたは知っていたらう？ 悪魔じみていると思わぬか？ なんなら母上を問い詰めてみても良いぞ」

リナリーは残虐な笑みを浮かべた。

「いや、しかし……、本当にあの美しい【悪魔】の子どもなのだとしたら、黒髪なのは逆におかしいのではないかと……」

秘書官に指摘された事実のリナリーは唇をかんた。

「オーエン。仮にギリアンが悪魔の子でなかったとしても、私にはもう一人心当たりがあるのだ。あの【悪魔】によく似た男を一人知っている。本当に良く似ている。最初に見た時は驚いたほどな」

「それは……、どなたですか？」

リナリーはかつて騎士の見習い時代という頃に顔を合わせていた少年を思い出した。金色の髪の恐ろしく美しい男。

「ヴィンセント・フォン・ラヴァール。ギリアンの親友の無礼な男

だ

「ヴィンセント・フォン・ラヴァール……？　　」と言うと、あの『ヴァンデの悪魔』ですか？」

リナリーの左の眉がピクリと動いた。

「あの男、そんな異名もあるのか？ 奴には確か弟も居たはずだが、弟の方はあまり似ておらぬな……」

リナリーは目を細め笑いをかみ殺した。壁際にたたずむオーエンを置いて部屋を去っていった。

○
 ●
 *
 :
 ●
 ○
 ●
 *
 :
 :
 ○
 ●
 ○
 ●
 :
 :
 :
 *
 ●
 ○
 ○
 ●
 *
 :
 :
 ○
 ●
 ○
 :
 :
 :
 *
 ●
 ○

ホープが王太子と謁見した翌日から、ホープとヴィンセントの二人はローゼン領のクート家に身を寄せていた。

王太子からの返事はまだなく、逗留期間の半分、五日が過ぎた。

ヴィンセントは毎日ローゼン候の城に通い、騎士達と何か計画を企てているようだった。

ホープはと言うと、ローゼン領では黒髪は注目の的だった。それ
も興味だけでなく悪意の入り混じった視線を向けられる。居候先に

一人でとどまることもいたたまれず、毎日ヴィンセントに同行してローゼン候の城に通って過ごしていた。

そして、ホープは毎日王太子ギリアンと顔を合わせていた。王太子の話に耳を傾けたり、ヘーンブルグ領の話を要求されたり、何かしら彼の傍に居ることが多かった。ホープは何故王太子が自分に対してこんなに積極的に接してくれるのかが不思議で仕方なかった。

五日目も、ホープとギリアンは談話室で話していた。

部屋の中央辺りにテーブルを挟んで並べられたソファーに、二人は向かい合って座っていた。二人の他に誰も居らず、暖炉の薪がはぜる音が時々部屋に響いた。

「魔女狩りは、僕らが生まれるよりずっと以前から続いている。だけど、昔【魔女の報復】にあつて以来、魔女狩りの数は随分減って、魔女狩りの目的も変わってきたんだ」

「【魔女の報復】？」

「【魔女の報復】というのは、二百年位前のことかな。魔女狩りで魔女を怒らせて、王都の領民の半分以上が呪い殺されたと伝えられているんだ。でも魔女の呪いなんかじゃない。本当は流行り病さ。死病が蔓延したんだ。……皮膚が黒くなり死に至る病が」

皮膚が黒くなって死ぬ。

ホープの頭に五日前に初めて聞いた『黒人』の姿が思い浮かんだ。

「その後、魔女狩りの数は減っていたんだ。なのに、ここ四、五程前から魔女狩りが急激に増えている。四年前、僕はまだランスに居たから、何度もその火炙りを目にしたよ」

ギリアンの口から『火炙り』と聞いて、向かいに座るホープは想像してぞっとした。

「魔女は火炙りにあつても死なないというからね。魔女の疑惑は命を落として初めて晴らされる。酷い話だろう」

王太子の言葉に、ホープは姉ルースの事を思い出しうつむいた。

「ああ……」

王太子はホープの挙動に気付き、何か言おうとしたが結局口をつぐんだ。

「すまない。そんな言葉の続きが聞こえた気がしてホープは顔を上げた。」

「……火炙りになった人の中に、本物の魔女は居たんですか？」

ギリアンは頭を横にふった。

「そんな訳はない。【魔女の報復】以降に魔女として処刑された者は、政治犯や、政治にとって危険な思想を持っていた人物だ。本物の魔女なんて居るわけないんだよ」

ギリアンの考え方は、ヴィンセントと同じだということにホープ

は気がついた。

だが今回、ヴィンセントはホープが話した、姉ジェードに聞こえる【天使】の声を信じて腰を上げてくれたのだ。

ホープはギリアンに魔女の存在を否定され、まるでジェードに聞こえる【天使】の声まで否定されたかのように感じた。

「だから、今まで国政にほとんど関わっていない君の故郷ヘーンブルグからは、魔女疑惑の対象とされる様な人物はいなかったんだ」

「でも……」

「君の二人のお姉さんの事だろう？」

ホープは黙ってうなずいた。ルースやジェードが政治犯や危険思想の持ち主のわけがない。

「君のお姉さん達とヴィンセントはどういう関係だったんだい？」

「上の姉のルースは領主様の……、ヴィンセントの館で使用人として働いていました。それくらいしか……」

ルースはヴィンセントの館で働くようになって、政治的な何かに関わってしまったのだろうか。そしてジェードはその事をルースから聞かされたりしたのだろうか。

ホープの頭にはその程度しか思い浮かばなかった。

「気になるようなら、ヴィンセントに直接聞いてごらん。彼は何も隠したりしないと思うよ」

「はい」

「あの不動心のヴィンセントが酷く取り乱したのは、後にも先にも四年前のヘーンプルグの魔女狩りの時だけだよ」

ギリアンの言葉は、ホープにはとても温和に聞こえた。

「ヴィンセントがヘーンプルグに行くことになったのにはちょっとした事情があつてね。本当はヘーンプルグを出ることは許されていないはずなんだ。だけど今回、君の為にそれを破ってここまで来たんだ。それに、四年前も。【黒】の少女、つまり君のお姉さんを魔女裁判から救うために一度ランスまで戻ってきたことがある。だけど結局助けられなかったんだ」

「そうだったんですか……」

ホープはヘーンプルグでは館に引き籠もっていたヴィンセントのことを思い出した。

「その後、彼は元帥の称号も返還してきた。きっとその時、もう二度と王都や王侯貴族と関わらないと決めたんだろうと僕は思っていたんだ」

「ヴィンセントは元帥だったんですか？」

「そうだよ。ヴィンセントは在学中にヴァンデでのシーランドとの闘争での功績から、元帥の称号を与えられたんだ。15歳の時だったかな」

来年15歳になる自分には到底真似出来そうにもない。ホープは思わず感嘆のため息をもらした。

ホープのヴィンセントに対する憧憬の眼差しを見て、ギリアンは少しすまなそうな表情になった。

「僕は騎士ではないので戦場での事実是不知。でも、元帥の称号を得た戦いで、ヴィンセントは戦場での残忍さを悪魔に譬えて『ヴァンデの悪魔』と呼ばれていたんだよ……」

「残忍……？ ヴィンセントが『悪魔』……？」

「一人で一万人のシーランド人を殺したとか……。噂だけだね……」

ヘーンブルグの館でだらしく服を着崩し、デスクに足を乗せて読書に耽っていたヴィンセントからは想像できなかった。

王太子は悲しそうに目を伏せた。

「だからヴィンセントが16歳でヘーンブルグに行ってしまったって、正直僕は安心したんだよ。ヘーンブルグなら、彼がもう争いに借り出されることもない。親友が『悪魔』と呼ばれるのを聞きたくなかったから」

ヴィンセントに『悪魔』と呼ばれるような所業はして欲しくないと思う王太子の気持ち、ホープにも伝わってきた。

「だけど、またヴィンセントを引っ張り出してしまった」

優しすぎる王太子の言葉に、ホープはヴィンセントをヘーンブルグの外に連れ出したことの責任は自分にあるのだと感じずにはいられなかった。

「……それはぼくの所為です」

「いや、君の所為じゃないよ。君の所為じゃないんだ……」

ギリアンは自分にもホープにも言い聞かすように繰り返した。そして視線を自分の膝に落とし、思慮深く何かを考えているようだった。

「王太子様はどうして、ぼくなんかにこんなにも良くしてくれるのですか？」

そう聞かれて、ギリアンは視線を膝の上の自分の手からホープに戻した。

「……こんな風に言うと君は怒るかな」

ギリアンはためらいがちに口を開いた。

「君と話していると僕は『王太子としての自我同一性^{アイデンティティ}』を維持できるように感じるんだ」

「それはぼくが同じ黒髪だからですか？」

ホープの質問に、ギリアンの顔が曇った。

「……半分は正解だね。でも、『同じ黒髪だから』じゃないんだ……。僕の中にも【黒】を蔑む心が存在している……」

そう言って、ギリアンはホープから目を逸らし、苦渋の表情を浮

かべた。

「僕は君が【黒】だから仲間だと思っているんじゃない。僕は【黒】のことを哀れんでいるんだ。君の言うとおり僕も同じなのに……。心の底では【黒】を蔑んでいるんだ……」

かすれ声で話すギリアンに、ホープは何も言えずただ黙っていた。

「こんな僕が本当に王になってもいいのか、わからないんだよ」

と、ギリアンは言葉を振り絞るように言った。

* * * * *

その日の夕刻。

街中を歩くヴィンセントとホープの姿があつた。石畳の上に長く伸びた自分達の影を追うように、坂道を並んで歩いていた。

コート家までの帰途、ヴィンセントはホープに尋ねてきた。

「ギリアンは返事をしてきたか？」

あれからギリアンとヴィンセントの二人は顔を合わせていないようだった。ギリアンからの返事はホープにするように伝えられていた。

「今日はそんな話はしていません」

「君たちは毎日何時間も、一体何について話しているんだ？」

自分も黒髪でありながら、自分の中の【黒】を蔑む心に苦悩するギリアンの姿をホープは思い出した。

きつと王太子の苦悩は、いくらヴィンセントとはいえ、金色の髪を持つ人間には理解できないだろう。だからこそギリアンは黒髪である自分には打ち明けたのかも知れない。そう思うと、その話題をヴィンセントに話すわけにはいかなかった。

「ヴィンセントについてです」

「私の事が」

ホープは少し嫌味っぽく言ってみたが、ヴィンセントは全く気にした風ではなかった。もう少し驚いてくれても良いのに、相変わらずヴィンセントは平常を保っている。それどころか、話題に上がったも当然というような余裕すら感じられた。

「嘘です。本当は魔女狩りについて色々聞いていました」

「なるほど」

ギリアンに言われ、その後ホープは一人で姉ルースとヴィンセントの関係について色々考えた。

二人が出会った頃、ヴィンセントは16歳、ルースは15歳だった。男と女の事なのでどうしても野暮なことしか思い浮かばない。

初めてヴィンセントを訪れた日のことと、ギリアンの話しぶりを思い出すと、ますます二人の関係が疑わしく思えた。

しかし、ルースは貴族の目に止まるほどの美人でもなかったし、冷静に考えれば、二人の身分が違いすぎる。

ヴィンセントは領主なのだ。領民は領主の所有物とされ、男女の婚姻の際は領主に許可を得なければならないという古い慣わしが、まだヘーンブルグにはあった。

そんなはずないだろう　と、ホープは自分の考えを否定する気持ちの方が強かった。

「ヴィンセントがジエードの為にここまでしてくれるのは、ルースの事で、ぼくの家族に対する罪滅ぼしなんですか？」

ホープはわざとルースの名前を出すと、そつとヴィンセントの顔を見た。ヴィンセントの顔は逆光で影がかかり、表情はよく分からなかった。

「私はそこまで善人ではない。これは私自身の罪滅ぼしだよ」

ヴィンセントの声色からは動揺も悲哀も感じられなかった。

ホープはギリアンに言われたことを思い出した。

ヴィンセントに直接聞いてごらん。彼は何も隠したりしないと思うよ

末っ子のホープは、兄たちに色恋沙汰について訊ねたことがあった。そんな時、きまって怒られたりはぐらかされたりしたものだ。

ホープは一人で悶々と考えていることに耐え切れず、ヴィンセン

トに問いかけた。

「あの……、ぼくは何も知らないんですが。姉さん……、ルースとヴィンセントはどういう関係だったんですか？」

ヴィンセントは立ち止まると、青い瞳でホープを見つめた。

「私達は恋人同士だった」

ヴィンセントは夕日を浴びながらためらいなく答えた。

まさか二人が恋人であるはずがない。そう思っていたホープの裏返しの期待をヴィンセントは予想通りに裏切ってくれた。

ヴィンセントの真っ直ぐな言葉に、ホープの心の中のもやが一気に消え去った。ホープの方がはかしくなり、頬が赤く染まった。姉ではなく、まるで自分がヴィンセントの恋人として選ばれたかように、不思議と胸の奥が熱くなった。

「そう思っていたのは私だけかもしれないがな」

ホープの胸のときめきなど知らず、ヴィンセントは少し空しそうに言った。

ルースの死んだ今となつては、ルースのヴィンセントに対する気持ちはホープには知りようがない。

だがホープには、ヴィンセントは『貴族の火遊び』ではなく、言葉通り本気でルースを愛していたのだろうと思えた。

「そうだったんですか。その事はぼくの家族は皆きつと知りません

……」

「ルースを助けることが出来なくて申し訳なかったな」

ルースの処刑執行から四年が過ぎている所為なのか、ヴィンセントは感傷的になることもなくホープに話した。

「ヴィンセントの所為じゃありません」

ホープはそう言ったが、ヴィンセントの方はそうは思っていないかったらしく、厳しい口調で切り替えしてきた。

「本当にそう思っているのか？ 今の話で君も気付いただろう？ 何故ヘーンプルグのダーク家の姉妹が魔女に仕立て上げられたのか。原因はこの私だ。私を王都に呼び戻すための政治的意図だ。おそらくは反王太子派のな」

そう言うと、ヴィンセントはホープは置いて先に歩き出した。

ホープは敢えて追いつかないように、ヴィンセントの後ろをとぼとぼと歩いていった。

しばらくして前方のヴィンセントが立ち止まり、後ろに居たホープを振り返った。ホープは自分も歩みを止めると二人の間に距離を置いた。

「ホープ！ 今回私がローゼンまで来たのは、君の姉君、ジェードの話信じたからだ」

黄昏の街中で、ヴィンセントは離れたホープに聞こえるくらいの大きな声で叫んだ。

* * * *

そして、約束の期日の十日目。

王太子は私室にヴィンセントとホープ、そして側近、数名の騎士達を呼び出して宣言した。

決して広くはない部屋の中に、合計十人ほどが肩を並べていた。

「僕はヴァロニアの王として戴冠を受けようと思う」

騎士達は声をそろえて歓声をあげ、ホープの顔には笑顔が浮かんだ。

そんなホープを見て王太子はそっと付け足した。

「君の為にね、ホープ君」

「……あ、ありがとうございます！」

君の為に……と言う王太子の言葉の身に余る光栄さに萎縮してしまった。王太子の言葉には、ホープ個人の事情だけでなく、きっと

【黒】に対する想いも込められているに違いないのだ。それが分かっていても、ヴィンセントに言われた通り、まるで神の言葉を授かったかのように感じた。

「誰かの為に何か出来るというのは、僕にとっては有り難い事だよ……」

昨日まであんなに話をしていた相手なのに、改めてギリアンは王太子だったのだと、いずれ王になるべき人物なのだと、ホープは頭と身体が緊張に支配されてしまった。

宣言とは裏腹に、ギリアンの表情は暗かった。ギリアンが大手を振って王位戴冠にのぞむわけではない事は、彼を知る者誰もが感じていた。

そんな様子のギリアンに敢えて問いたただす事をするのはヴィンセントだけだった。

「ギリアン？ 君は何を躊躇っているんだ」

他の者達が居る席で敢えて聞くヴィンセントに対し、ここで口をつぐんではいけないと察したのか、ギリアンは苦しそうに口を開いた。

「実は……母が、悪魔を信仰しているようなんだ」

「悪魔……信仰？」

初めて耳にする言葉に、ホープは思わず口にして繰り返した。

悪魔信仰。

ホープ以外は悪魔信仰を知っていたが、『王妃が』という所に驚きを隠せなかった。

聞いていた騎士達が噂話を口にした。

「ランスでは悪魔信仰が広まりつつあると聞いたことがある」

「悪魔を信仰するのに魔女を処刑するというのか。なんと辻褄が合わないことを……」

ギリアンは口々に話す騎士たちの話の間に割り込んだ。

「いや、悪魔信仰の噂がもし本当だとしたら、魔女狩りなんて有り得ない。そもそもあの魔女狩りの文書は誰が出しているのだろう？ ランスの……、ヴァロア家の烙印は僕が母しか使えないはずなのに」

他にランスの烙印を使えたのはギリアンの父と姉だった。しかし、前ヴァロニア国王のカルロスは四年前に急逝、一つ上の姉リナリーは、前シーランド国王ローランと結婚してシーランド王国に居る。

ギリアンの父 前王のカルロスは、シーランドとヴァロニアの抗争を終わらせようと尽力した王だった。

ヴァンデ条約により、ヴァロニア王カルロスの死後は、王女リナリーの夫となったシーランド国王ローランがヴァロニア国王に就き、二重王国制となるはずだった。

しかし、多くの貴族や幕僚達がシーランド国王にヴァロニア王位

を譲ることに反対をした。

正統なヴァロニア王家の血族、ギリアン王太子によるヴァロニア王位継承を提唱した。

これがギリアンの王位正当性を推す『王太子派』だった。

「四年前に父が亡くなるまでは、魔女^{ウィッチ}として処刑されたのは所謂政治犯だった。主に下級貴族の男だった。だが、父が死んでからというもの、特に政治と関係のない【黒】の女性ばかりが魔女として処刑されている。これらの魔女狩りは一体何を扇動しているんだろうか……」()

静かに語る王太子の言葉に、その時部屋に居た者は黙って耳を傾けていた。

悪魔の子ども（後書き）

（ ）^{ウィッチ}魔女には男性もいますが、男のウィッチでも日本語では『魔女』と訳されています。

母と子

もうすぐ暦は春になるというのに、王都ランスの空には雪雲が広がり、静かに雪が降っていた。

ランスでは、つい先週からようやく初春の暖かさを取り戻してきたところだった。それが昨晩から突然ぶり返した寒さに見舞われた。薄暗い空の下、人々は久しぶりの大寒を逃れ家にこもり、暖炉に薪をくべていた。

時折通る馬の蹄の音も、柔かく降り積もった雪に吸い込まれていった。

王都ランスのラヴァール家では、既に養子として出て行った兄が突然の来訪した。

そのことに妹のラシエルはひどく怒っていた。連絡なしに帰郷したばかりか、家主に許可も取らず勝手にある人物を実家に呼び出した事に対して怒り心頭だった。

ヴィンセントの妹はホープと同じ歳位に見えた。応接室は既に暖まっているのに、ストールを肩から羽織ったまま、暖炉の前を苛立ちをこらえるようにうろうろとしていた。兄に良く似た美人だったが、この時は眉を吊り上げ目を尖らせていた。

「四年振りに現れたかと思ったら！ お兄様はどうしていつもいつも恐ろしいことを考えておられるの！」

長椅子に腰掛けるヴィンセントとホープの前で、信じられないといった様子で、怒りと共に大袈裟なため息をもらした。

ラシエルのそんな様子を見て、ホープは帽子も取れないままであつた。

小一時間前、この屋敷にはヴィンセントに呼び出された、ヴァロニア王妃イザベラが来訪していたのだつた。

ヴィンセントとホープがラヴァール家に到着した時。積もつた雪の上には、屋敷の入り口へ向かう車輪の跡が描かれていた。ラヴァール家の正面の入り口の前には既に黒い箱馬車が停まつていた。

応接室では、目立たぬ様黒い衣装に身を包んだ女性がヴィンセントの到着を待つていた。

ギリアンの母親、ヴァロニアの王妃イザベラだつた。

イザベラは金色の髪を隠すように被つた毛皮の帽子もそのまま、首元にファーの付いた黒い重苦しいコートや、ビロードの手袋を外すことすらしていなかつた。

暖炉の中でパキパキと音を立てて燃える炎を、イザベラは立つたままじつと見つめていた。

「お待ちせしました、王妃陛下」

時間に少し遅れて入室してきたヴィンセントの外套の肩には雪が積もつていた。

ヴィンセントは外套を外し椅子の背に掛けた。暖められた応接では、間もなく雪が解けて絨毯を濡らした。

「よくランスまで戻ってきましたね、ヴィンセント・フォン・ラヴ
アール。私にはあまり自由な時間はないのよ。手間を取らせないで
頂戴」
わたくし

「では私の嫌いな御託を並べるのは止めておきましょう。手短に。
陛下の御愛息の話です。ここなら誰にも聞かれることはないでしょ
う」

イザベラは『何を知っているのか』というような視線をヴィンセントに向けた。

「陛下の噂がギリアンの耳にも届いています。悪魔を信仰している
と」

「悪魔信仰など！」

イザベラは短く怒鳴りつけ、ヴィンセントをにらんだ。

「何が目的？ あなたも私を脅迫するつもりなの？」

「脅迫などんでもありません」

「私は魔女ウィッチではないし、ギリアンも断じて悪魔の子ではありません。
もちろん不貞の子でもない。あの子は間違いなくカルロス陛下の御
子よ。今更こんな話をして仕方がありません。言いたい事がそれ
だけなら帰らせて頂くわ」

イザベラが扉の方に向かい歩みだした。

「ギリアンが戴冠する決意を固めました」

ヴィンセントの言葉に、イザベラは驚いて振り返った。白い肌がいよいよ青白くなったように見えた。

「無理よ！ 聖ソフィアの大司教は、ガイアールに人質に取られている！ それに大聖堂のあるランス東方はシーランドに侵略されている！」

「その程度の障害なら取り除くのは容易いことです」

イザベラは険しい表情になった。

「やめて！！ ギリアンを王にしてはいけない！」

「【黒】だから、ですか？」

ヴィンセントの言葉に挑発されるかのように、イザベラの表情がますます険しくなった。

暖炉の中の薪が燃えて、パキンと割れる音が部屋の中に響いた。

王妃は苦い顔をして、かすれた声を絞りだした。

「……そうよ。魔女狩りの蔓延を知っているのでしょうか？ ここ数年で何人殺されたと思っているの？ それも【黒】の女ばかり。今ギリアンが【黒】を公表すれば、あの子はきつと悪魔の子とされてしまう。そして私は悪魔の子を産んだ魔女として処刑の身だわ。シ

ーランドの思う壺よ」

「先程、ギリアンはカルロス王陛下の子だとおっしゃったではないですか」

「ヴァロア家に黒髪はいない。どうしてもギリアンがあんな髪に生まれてしまったのか、私にもわからないのです……」

王妃は悔しそうに黒いコートの裾を両手で掴み握りしめた。

「リナリーが【黒】^{ウィッチ}を魔女であるように仕立て上げて、ギリアンと私を追い詰めている。そして悪魔の子をシーランドに差し出すようにと要求しているのよ」

「それはシーランドのローラン王がカルロス王陛下より先に死んだ所為で、ヴァンデ条約が無効になってしまったからでは？ リナリー殿下は息子のアンリをヴァロニアの王にしたいのでしょうか」

ヴァンデ条約の通り、ヴァロニア国王カルロスの死後、シーランド国王ローランがヴァロニアの国王になれば、ヴァロニアとシーランドで二重王国が成立した。二国間の争いも終わるはずだった。

だが、シーランド国王ローランは病でヴァロニア国王カルロスより先にこの世を去ったため、ヴァンデ条約は無効になった。相次いでヴァロニア国王カルロスが崩御した所為で、ヴァロニアでは王位後継で混乱した。

「……私の子ども達は姉弟で争うのね。不憫だと思うわ」

イザベラは視線を少し落として、寂しそうにつぶやいた。

「もうこれ以上は長居出来ません。ヴィンセント、あなたが私に言いたかったのは、ギリアンの戴冠の意思表示だけ？」

王妃は顔を上げ厳しい表情に戻ると、ヴィンセントを見た。

ヴィンセントはゆっくりとうなずいた。

「おっしゃる通りです」

「私がわざわざここまで出てきたのは、私からもあなたに直接伝えたいことがあったからです。シーランドが身柄を要求しているのはギリアンだけでない。貴方もよ。それもギリアンと同じ、四年も前から」

「なるほど。ヘーンプルグの娘が二人、魔女として疑惑を受けました」

目の前に身柄の引き渡しを要求をされているヴィンセントが居るというのに、イザベラはヴィンセントを捕らえようとはしなかった。そして王太子の所在も詮索しようとはしなかった。イザベラはシーランドからの要求に応じるつもりはない様子だった。

「ヴィンセント。どうかギルの傍に居てやってちょうだい」

その一言だけ母親の顔で言うと、イザベラは屋敷を後にした。

王妃の去った応接室で長椅子にヴィンセントとホープは並んで腰掛けていた。その前を、ラシエルは何か問いた気にうろろするばかりだった。

そんなラシエルを無視して、先程まで出された茶を啜っていたヴィンセントが立ち上がった。

「外套が乾いたな。戻るぞ。ホープ」

ヴィンセントは暖炉の傍に置いた椅子の背に掛けていた外套を手にとると、ラシエルに声を掛けることもなく颯爽と部屋を出ていった。

ホープは慌てて席を立つと後を追った。その時、ヴィンセントの妹をちらりと見ると、訝しげな視線をホープに向けていた。彼女は何も言わず立ち去る二人を見送った。

ずっと被ったままだった、ホープの帽子の下を気にしている様子にも見えた。

鎮守府シュケム

余寒の王都から戻ったホープには、ローゼン^{ランス}は随分と暖かく感じられた。

早朝にシュノンの街の屋根を白く変えていた霜はすっかり溶けて朝露となり、今は朝日を浴びて屋根をキラキラと輝かせていた。

ローゼン候の城のギリアンの私室に、ランスから帰還したヴィンセントとホープ、そしてギリアンの三人が集まっていた。

石造りの城内はまだ肌寒く、ギリアンは分厚い長衣を羽織っていた。

ホープが長椅子に腰を掛けると、布張りの椅子からもひんやりと湿った冷たさが身体にしみこんできた。隣に座ったヴィンセントをちらりと見やると、寒さなどまるで感じていないようだった。いつもと同じように平常を保ったままゆったりと腰掛けて長い足を組んでいる。ホープはしばれる手に息を吹きかけると、そつとこすり合せた。

ランスで、さすがにホープはヴァロニア王妃とは顔を合わす事はなかった。

あの時、ヴィンセントと王妃の間でどんな話がされたのか、ホープもまだ聞かされていなかった。どうしてここに自分まで呼ばれ同席させられているのかも分からない様子で、向かいに腰掛けたギリアンと、隣に座るヴィンセントの会話に黙って耳を傾けていた。

ヴィンセントは王妃イザベラと話した内容をギリアンに話した。

シーランド王国がギリアンと自分の身柄を要求している事についてだけは言及しなかった。

「魔女狩りはリナリーの働きだ」

ヴィンセントの言葉を予測していたのか、ギリアンはさして驚かず小さい声でつぶやいた。

「そうか……。しかし、何故姉上が魔女狩りなど……」

「リナリーが指示している魔女狩りは、政治犯の駆逐ではなく【黒】の迫害だ」

【黒】と聞いて、ギリアンは視線を床に落とした。

ギリアンは黒髪の下で父親に疎まれて育ってきた。そんな彼をじっと見据えながら、ヴィンセントは言葉を続けた。

「カルロス王陛下が亡くなられてから、王威派（反王太子派）は実際に前ほどの勢いを失っている。ヴァンデの条約も無効になって、何事もなければ君が王位を戴冠することになっていただろう。だが、リナリーは先手を打って出た。【黒】の風評を立てさせておけば、君は王位に就き難くなることをリナリーは知っている」

一つ年上の実姉リナリーのことを思い出したのか、ギリアンは目を伏せて頭を小さく横に振った。

「ヴァンデ条約は無効になったが、リナリーは息子のアンリを王にしたいのだろうな」

「……そうだね。甥のアンリがヴァロニアの王位に就いて二重王国

制が確立すればシーランドとの争いが終わるだろうから。それが父の願いだったなら僕は……」

王位などいらない　　と言おうとしたのだろう。言い終わる前に、
ヴィンセントが口を挟んだ。

「君は王位継承権を放棄するのか？　リナリーの思惑通りだな。1
2年後、アンリが成人して王位に就いたならば、二重王国制という
名目でヴァロニアはシーランドの支配下に統一される。そうならば
当然シーランドとの戦いは終わるだろうな。だが、【黒】の迫害は
なくならないだろう」

ギリアンの顔が曇った。

「……ヴィンセント、僕が王になれば本当に【黒】の迫害がなくな
るのかい？　シーランドとの争いも終わるのかい？」

ギリアンの問いにヴィンセントは答えなかった。

歴史を遡れば、【黒】の迫害もシーランド王国との争いも百年程
前からだ。

「印刷技術が出来て聖書が普及したのも、黒皮病が流行したのも二
百年前。【黒】が虐げられている原因はわかっているじゃないか……」

「ギリアン、大司教を救出することやシーランドとの戦いに勝つこ
とよりも、人の心の中に出て来た【壁】を壊すのは容易なことじゃな
い」

ヴィンセントの言葉に、ギリアンは頭を抱え込んだ。

「良く聞け。もしヴァロニアとシーランドが統一すれば、いずれ伝承者クライスの聖地を手に入れるために、ファールーク皇国と争うだろう。今までフロリスの二国間での争いが、次は二大陸間に変わるだけだ。聖地やモリスには沢山の黒人がいる。きっと彼らをも巻き込んで、【黒】はますます迫害を受けることになるだろう。これが本当に神の望むことなのか？ 私はそれは決して善い事とは思えない」

「そんなことは僕でもわかっている、でも」

二人の話はヴァロニア王位の事から、いつの間にか二つの大陸の話にまで飛躍していた。

自分にかかる重責に思い悩んで口数の減るギリアンに対し、ヴィンセントは逆に饒舌になっていた。

「何故この世から差別がなくならない？ 私達の信仰心が間違っているのか？ かつて聖地は全ての信仰を受け入れていた。全ての信仰、全ての人種、全ての身分を」

「聖地は全てを受け入れる……か」

「そうだ。だからこそ聖地はモリスのもでもフロリスのものでもないや、人によって所有されるものであってはならない。聖地は聖地として存在することに意味がある。聖地とは只の『象徴』なのだ。救済を求める人々の心の拠所だ」

ギリアンとヴィンセントの二人が話すうちに、滅多に表に出さないヴィンセントの思想が語られた。

「聖地が争いの原因となるならば、それはもう聖地ではない」

「ヴィンセント！ 頼むからそれを聖教者達の前では絶対に言わないでくれ！」

ギリアンはそう言って手で顔をおおった。

「異端として、君が殺されてしまう……」

「身分も信仰も、神ではなく人が定めたものだ。なのに何故それを乗り越えられない？ 切り崩せない？ 私はそういう人と人を遮るもののない世界が見たいんだ。私にそういう世界を見せてくれ、ギリアン」

親友の懇願も、ヴィンセントの口を閉ざすことは出来なかった。

ギリアンは顔を上げ伏し目がちにつぶやいた。

「……その世界は君の魂を救うのかい？ ヴィンセント」

「私は地獄に落ちようと構わない。だが、ルースの魂は救われるだろう」

ヴィンセントの口から突然ルースの名前が出て、ホープは驚いてヴィンセントを凝視した。

「……シユケム論か」

つぶやくように漏れた王太子の言葉にヴィンセントはうなずいた。

「ああ、そうだ。聖地は『全てを受け入れ、そして捨てさせる』のだ。身分も地位も、金も欲も。人種さえもだ」

義務教育しか受けていないホープは、二人の話していることは理解できないでいた。ギリアンの口から出た言葉の意味がわからなかったが、王太子と領主の間に割って入ることは出来なかった。

そんなホープの様子に気が付いても、ヴィンセントは気にせずギリアンに訴えた。

「昔、まだ聖地が『聖地』として機能していた頃、中央の地にはシユケムという小国があった。そのシユケムが聖地を管理していたんだ。その時の左右の二大陸の均衡は聖地によって保たれていた。それを取り戻さないといけない」

「矛盾してるよ、ヴィンセント。それならいずれはファールーク皇国と戦わなくてはならない」

「必要なのはオス・ローの復興と、第二のシユケムとなる国の存在だ」

ギリアンとヴィンセントの会話は、ホープには手の届かない雲の上の話だった。

「僕のような人間がそんな大それた事が出来るとは思えない」

「君がヴァロニアの王になれ。君が王になってこの百年の戦争と【黒】の迫害を終わらせるんだ」

ヴィンセントが激励しても、ギリアンは黙って思いつめるだけだった。

ギリアンは黒髪の所為で父親に虐げられて育ってきた。父親とほとんど接した事がなかった。

「カルロス王陛下が婚姻で戦争を終わらせようとしていたのは理解しよう。だが計画は狂ったのだ」

ヴィンセントは語り続けたが、ギリアンは口を固く結んだままだった。

「ギリアン、君の父は死んだ。死んだ人間の心など何もわからないぞ。いい加減、父親と言う鎖から自分を解放してやれ」

ギリアンの表情は苦悩に満ちていた。ヴィンセントには何も言い返さず、心の中で自分自身と戦っているようだった。

「君は父親とは違う人間だ！ 君がヴァロニアの正義ジユストとなれ！」

ヴィンセントの鼓吹に、ギリアンは顔を上げて親友を見つめた。

ヴィンセントは親友の視線をまっすぐに受け止めると、穏やかな口調で語りかけた。

「今度は君が父（王）となり、君が成し遂げられずとも、子供（子孫）達に足掛りを残してやればいい。君にはこの城に集ってくれる腹心の部下や騎士がいる。私もその一人だ」

「ヴィンセント……」

王位に就く決意をしてもまだ煮え切らない態度だったギリアンが、

ヴィンセントの叱咤にとうとう心を動かされたようだった。

「ギリアン、君は不貞の子でも、ましてや悪魔の子でもない。間違はなくカルロス王陛下の息子だと母君は言った。その黒髪は紛れも無い王家の血筋のものだ。君が救われると言うのなら、私がそれを証明してやる」

ホープにはヴィンセントの言葉は、まるで不思議な魔力を持っているかのように感じられた。全く根拠のない事なのに、この男が言うとまるでそれが真実のように人の心をつかんで離さなかった。

「ヴィンセント、……どうして君の心の中はそんなに強暴なんだい？」

ギリアンは困ったように少し呆れた声を出したが、ヴィンセントの言葉に励まされて、心中では思いを定めたようだった。

この時、不思議な魅力で人の心を動かすヴィンセントに、ホープはすっかり魅せられてしまった。

* * * *

長いテーブルのある会議室に、王太子派の幕僚と騎士団の団長が王太子を中心に囲むように集まっていた。

歴代の王たちと同じく、ランス東部にある聖ソフィア大聖堂で、王太子が戴冠を受けるための作戦が練られているところだった。

ヴィンセントとホープはその輪には入らず、窓際の壁にもたれてその様子を見守っていた。

会議の話が一段落した時、ヴィンセントは壁を離れテーブルの方に近づいた。

「ギリアン、君の為に私も正式に王太子派に名を連ねよう」

その言葉を聞いた騎士達が、元元帥の参加に改めて歓声をあげた。

「もちろん、ホープ、君もだ」

ヴィンセントは壁際に居るホープを振り返って言った。

「ええっ!？」

ヴィンセントに突然言われたことが信じられず、ホープは自分の耳を疑った。

「あ、あの、ぼくは騎士でも何でもないんですが……」

いつの間にか大事に巻き込まれてしまっている事に気づいた。

「自分は関係ないとも思っているのか？ 私の名を言ってみろ」

「……ヴィンセント・フォン……ヘンブルグ……?」

「そうだ。私はヘーンプルグの名で王太子派に参加する。ヘーンプルグの名をもって戦場に出るのだ。ヘーンプルグ領が王太子派として名乗りを上げたのだぞ。もう今までの様に知らぬ存ぜぬでは居られなくなる。必ずこの戦いに勝利しないことには、ヘーンプルグまで【黒】蔑視の波にのまれてしまう事になるぞ」

「そ、そんな……」

「ヘーンプルグ領自体が侮蔑の対象となるだろうな」

「ぼくはジェードの魔女疑惑を撤回したいだけなのに……」

偶然なのか、もとよりヴィンセントの考えていた策略なのかわからなかったが、ホープは後に引けなくなってしまった。

オトコの頭の中はいつも朦朧としていた。

身体はやせ細って骨が浮き、鉄の枷がつけられた右足は、皮膚がめくれ骨が露出している。歩くときは鉄鎖の音と右足を引きずった。時々、呂律の回らぬ舌でブツブツ呟く以外に、言葉を発することもない。

食欲を感じることも少なくなり、生きているのかわからなくなった。日に一度だけ運ばれてくる食事を口にするのも三日に一度ほどだ。

オトコは空腹のときだけ、身体感覚が自意識の支配下に戻った。激しい喉の渇きに喉をかきむしる。右足に付けられた太い金属の足枷が嫌なほど重い。苦痛がまだ生きていることを実感させてくれた。

重い右足をじゃらじゃらと音を立てて引きずり、血染め土の色の部屋から逃れようと試みる。

だが、やがて足枷に付けられた鎖の長さの限界で引き止められるのだった。

朱鷺色の部屋に閉じ込められ、気が狂うほどに時が過ぎた。

ある時、面格子のついた窓の外、さらに外の鉄柵の向こうに少女がいた。柔かい亜麻色の髪に翠色の瞳をした、白人の少女だ。歳は七、八歳位だろうか？ 朱鷺色の建物の中の様子をうかがっている。

る。

よく見ると不思議な顔立ちの少女だ。混血児なのだろうか、西大陸^ス人の顔立ちなのに、髪や瞳の色は東大陸^{フロリス}人のものだ。まだ幼い少女の瞳は憂いて、どこか【自分】に似ている。茜色の夕日をつけて、幼い少女の髪は一段と明るく輝いた。

また、^{シャバハ}幻覚か……。

そう思った矢先、少女と目が合った。驚きが全身を駆け巡り、右足の足枷と鎖がじやらりと鳴る。鉄鎖の重みに瘦せた身体がよるめいた。

空腹で腹が刺すように痛むが、代わりに意識はハッキリとしている。少女が幻覚でないことにオトコは気がついた。

オトコは木製の格子窓を内側に開いた。目の前には更に鑄物の面格子が外界との接触を遮る。しかし、鈴を転がすような少女の声は、何にも遮られずオトコの耳に届いた。

「宮廷にあたくしと同じ色の肌と髪と目をした者はあなたしかいないわ。あなたがあたくしの父^{アブ}なの？」

そう言いながら、少女は肩よりも少し長い自分の髪をつかんでその色を確認した。

突然話しかけてきた少女の言葉に、オトコはこの建物が宮廷内にあるのだと悟った。

「……お前など……知らない。俺は……お前の父親では……ない……」

久しぶりに発した声は随分と老けていた。一体ここに閉じ込められて何年経ったのだろうか。

もう少し話したい。オトコにそんな欲求が生まれた。

オトコは少女に問いかけた。

「お前の母親は……何と言う……名前だ？」

オトコのかすれた声が聞き取りづらかったのか、少女は少し遅れて答えた。

「母上様はレイリといひます」
ウナム

聞いた事のない名前だった。

「……お前の母親は……美しい人なのだろうな……」

話すごとにオトコは生きていることを実感した。

面格子と鉄柵の向こうに見える少女は、大人びた雰囲気を持ち、瞳にはどこか寂しげな色が浮かんでいる。

「母はあたくしを生んですぐにお亡くなりになられたの。だから、
美しいかどうかなんてわからないわ」
ウナム

「お前を……見ればわかるよ」

「あたくしの目の色はどんな色？」

「姿見……か？」

「ええ」

鏡のないファールーク王国では他人の瞳に自分を映すことを姿見と言った。女はいつでも姿見を好むものだ。美しい詞で花を持たせてやると女達は喜ぶのだ。

（姿見は不得手なんだが……）

オトコは目を細めて数メートル離れた場所に居る少女の瞳を見つめた。幸いにも、目は悪くなっていなかった。少女の瞳は薄い翠色で、まるで影がおちるように少し灰色がかっていた。

花の色や自然の情景に譬^{たと}えてやりたいが、オトコは何十年もこの朱鷺色の壁しか見ていない。悲しげな色を浮かべる美しい少女の瞳に、気の利いた姿見をしてやりたかったが、鈍った思考ではふさわしい言様が思い浮かばなかった。

「……『ホールの丸天井の色硝子のような翠色』だ」

無粋だと思いつつ答えた姿見だったが、少女の頬が少し紅く染まった。それまで姿勢良く立っていた少女は、食いつくように鉄柵をつかんだ。

「やっぱり！ あなたの瞳とあたくしの瞳は同じ色だわ！」

少女は子どもらしくはにかんだ。

「……お前の名は？」

皇都サンドラの西に流れる大河の氾濫もすっかり落ち着き、ファールーク皇国にも名ばかりの冬が来ていた。二月はヴァロニアでは最も寒さ厳しい真冬にあたるが、ファールーク皇国では井戸の水位が上がるくらいで、毎日真夏のような暑さが続いていた。

ジェードがファールーク皇国に連れてこられてから一年が過ぎた。

今日もジェードはいつものようにルカとおしゃべりしながら、水を汲み上げるのを手伝っていた。

季節の変化は井戸水を汲み上げる綱の長さでしか感じることはない。ジェードにとって、どこか非現実な生活は、時が経つのを忘れさせている。しかし、男のように短かったジェードの不ぞろいな曲毛はヴァロニアにいた頃と同じくらいに伸びていた。

首筋に張り付いた髪を後ろにはらうと、手に触れる髪の長さがジェードに時の経過を思い出させた。

「髪、伸びたね」

ジェードが髪をかき上げる仕草を見て言うルカは、今日は頭に紅い布をくるりと巻いて髪を隠していた。ジェードが物珍しそうに頭布を眺めていると、ルカは少し愚痴るようにつぶやいた。

「十三にもなって髪を下ろしているのは良くないって、母に言われ

ウナム

たの」

「そうなの？」

クライス信仰者にとって十三歳は忌年だ。ヴァロニアでは言うのも聞くのも嫌らわれる忌数であるが、ルカはそんなことを知るはずもない。それはクライス信者の問題であって、モリス信仰者には全く関係ない。

そんな感覚の違いがジェードはふと不思議になる。ヴァロニアでクライスの教えしか知らずに育ったジェードは、今までそんなことを考えたこともなかった。

「ルカのママもここに居るの？」

言いながら足元に置かれた桶に井戸水を注いだ。石畳の上に飛び散った飛沫は、程なくして地面に吸い込まれるかのように消えてゆく。

「そうよ。ワタシの父も母も^{アフ}宮廷の家奴隷よ」

ルカの言葉に、ジェードは自分の両親のことを思い出した。

父と母とホープは元気ではいるだろうか？ 戻ってこない自分を心配して探しているのではないか？ それとも、もう死んでしまったと思われているのだろうか……。

井戸の石枠に腰掛けたジェードは、ルカが水の注がれた桶を少し離れた洗濯桶に運ぶ姿を眺めた。少しルカの姿がばやけて見える。心の中の寂しさをこまかすように、ゆるゆると波打つ自分の髪先を摘んでくるくと指先に絡めた。

「ジェードは御主人様がいるんだから、しっかり見せつけなきゃね！」

いつの間にか戻ってきたルカの声に驚いて、ジェードの指の動きが止まった。思いに沈みそうな姿をルカに気づかれぬよう、ジェードは慌てて瞬きをした。

「え？ 何？ 何を見せつけるの？」

「長い髪は女の象徴なのよ。髪を濡らして奴隷皇子様を誘惑するの」
そう言つて、ルカは空になった木桶を再びジェードの足元に桶を置いた。洗濯桶を囲んで洗濯する大人たちに聞こえないように声を落とし、

「男は女の濡れ髪を見て欲情するのよ」

長い睫毛をぱちぱちと可愛らしく瞬かせ、悪戯っぽく笑った。

「わたしの国じゃ、そんなことしていたら風邪ひいちゃうわ。すぐに火にあてて乾かさなきゃ！」

ルカの大胆な言葉に、ジェードは動揺する心をこまかすように少しとぼけて返した。

「もう、ジェードったら！ 乾かしちゃダメよ！ 乾いたら髪が縮んじゃうじゃない！ 男は真っ直ぐで長い髪が好きなのよ！ ほら、リユーシャ様だって、あの綺麗な真直ぐな髪のおかげで宰相様付きになれたんだから。奴隷皇子様だってきつと真っ直ぐな髪が好きよ」

ルカの言葉に、ジェードは湯浴み上がりのリユーシャの濡れた髪を思い出した。しつとりと濡れた清艶な金色の髪に、ジェードも見惚れてしまったほどだった。男でなくともあの美しい真っ直ぐな髪には惚れてしまう。

「あの怖い宰相様だって、リユーシャ様にだけはすごく優しいですよ」

「……そうかしら？」

付け足されたルカの言葉には、ジェードはあまり同意できず眉根を寄せた。

宮廷内を自由に散策するジェードは、時々宰相とリユーシャの姿を見かけることがあった。美しいリユーシャを傍に連れていても宰相の表情はいつも無然として厳しそうだった。二人が仲睦まじく言葉を交わしている姿など見たこともない。

洗濯女たちの催促の視線を感じた。ジェードは急いで井戸の綱を引き上げながら、ファールークの宰相の微かに憂愁を帯びた漆黒の瞳を思い浮かべた。

「……リユーシャさんがそばにいても、宰相は悲しそうな目をしているところしか見たことないわ」

「悲しそう？」

「どこが？　とでも言いた気に、ルカは怪訝そうに首をかしげた。

「それに、宰相には奥さんが何人も居るなんて。わたしには信じら

れないわ。ここでは普通のこと？ ルカのパパもそうなの？」

「まさか！ 奥様が何人も居るのは皇族や名士で裕福な御主人くらいよ。だって沢山の奥様をちゃんと平等に愛さなきゃならないんだから」

引き上げた水桶の綱が、思わずジェードの手から離れそうになった。複数の女を平等に愛する男など、女としてとてもじゃないが許し難い。ジェードは受け入れ難い文化の違いに思わず啞然とした。

「皆平等に愛するですって！？ ううん、宰相は平等に愛していないの間違いよね？」

ジェードの真剣な発言を皮肉に取ったのか、ルカはぷつと吹き出した。

ジェードは落としたかけた水桶の取っ手をつかむと、また足元の桶にひっくり返した。

「だって、ハリもシナーンも、宰相の本当の家族のはずなのにまるで他人みたいだもの。宰相は奥さんを本当は愛していないんじゃない？ 宰相が本当に愛してるのはリユーシャさんなの？ そんな風にも見えないんだけど」

ルカはそんな事を考えたこともないようで、困ったような表情で「うーん……」と悩みだした。

おしゃべりに夢中で手の止まっている少女たちに、年配の女奴隷が話に入ってきた。

「ルカ。ジェードの言うように、リユーシャ様だって宰相様から本

当に愛されてるかなんてわからないよ。宰相様はリユーシャ様にファティマ様の面影を見ているだけかもしれない。ファティマ様とリユーシャ様は年も近いからね」

声を掛けられてルカは慌てて、桶の水を洗濯桶に注ぎに行った。

「ファティマ様？」

ジェードは初めて聞く名前について、物知りの女性に問いかけた。

「ファティマ様ってのはね、奴隷皇子様の母上様だよ」
ウンム

空になった木桶を持ってルカが話に戻ってきた。

「そういえば、宰相様は亡くなられたファティマ様のことをとても愛してたんだって聞いたことあるわ」

「宰相はハリの本当のママのことを愛していたなら、どうしてハリの事を愛せないのかしら……」

「ファティマ様が亡くなったのは、奴隷皇子様を産んだせいだからじゃない？」

「そんな……」

母親の産褥死はハリーファの所為ではないのに……と、ジェードはハリーファが気の毒になった。少し前までハリーファを殺さなければと必死になっていた心は、どこかに置き忘れていた。

年配の女奴隷は時折若者たちに口を挟んで、ルカの知らないよう

なこともジェードに色々と教えてくれる。

「宰相様が愛してらしたのは、本当はね、姉^{ウフト}のレイリ様なんだよ。異母姉のレイリ様のことを宰相様は母親のように慕っていたからね」

姉。そう聞いて、ジェードはふとルースのことを思い出した。ジェードも姉のルースが大好きだった。忙しく働く母親より一緒に過ごした時間は長かったかもしれない。ジャファルの姉に対する想いを、ジェードは少し理解出来そうな気がした。

「奴隷皇子様の母^{ウシム}のファティマ様はね、そのレイリ様の娘なんだ。レイリ様もファティマ様を産んでお亡くなりになられたんだけどね」

「じゃあ、宰相様は本当はファティマ様のことを憎んでいたのかしら？」

ルカは女奴隷に屈託なく問いかけた。

「いいや。ファティマ様はレイリ様に生き写しの様にそっくりだったから、宰相様はファティマ様が随分小さい頃から可愛がってらしたよ。まあ、レイリ様とは違ってファティマ様は金色の髪に白い肌だったけどね」

「奴隷皇子様が皇女様なら良かったのかしらね。奴隷皇子様もレイリ様に似ていたら良かったのに」

「アーラン様のこともあるし、どうだかね。男と女はそもそも魂の性別が違うんだよ。男の考えてることなんて、女には到底理解も納得もできないもんだよ。特にファールーク皇家の男たちはね」

ジェードとルカは年功者の話に何と答えていいのかわからず、お互い顔を見合わせ肩を竦めた。

ジェードは井戸端を離れ一度【王の間】に戻ると、昼の休憩時間は厩舎に向かった。昼間はあまり人気がない。乾いた空気の中を厩舎の方から馬の嘶きが響いてきた。

日の最も高い時間、砂色の建物や壁にも光が反射して、目に見える景色はとても眩しい。

厩舎の中から、厩舎守と別の奴隷が手綱を引いて出てくるのが遠目に見えた。出てきた三頭の馬は既に馬装されている。その中の一頭はひとときわ黒い艶のある毛並みの馬だった。遠目でも美しい毛並みや立派な体格は人目を引くほどだ。それが宰相の馬であることをジェードは厩舎守から聞いて知っていた。

（今日は宰相が何処かへ出掛けるのかしら？）

日ごろ、ジェードは厩舎守に宰相の馬にだけは触れることを禁じられていた。今ならいつもより近くで黒馬を見れるのではないかと駆け寄った。

その時、横手の建物の方からジャファルが二人の供を連れてこちらに向かって来た。ジャファルは暑気の中でもいつもと同じように黒い服に身を包んでいる。無然とした表情で振り向きもせず従者に何かを話していたが、その声はジェードにまでは届かなかった。

ジャファルの姿を見つけて、ジェードは足を止めた。

ジャファルもジェードに気がついた。話すのをやめ、少し離れた場所に一人たたずむジェードにはつきりと視線を向けた。悲しみを湛えたように憂いた漆黒の瞳がジェードの姿を見すえた。

その瞬間、ジェードの胸の拍動が強くなった。まるで何かに触れられたかのように。

ジャファルは悠然と歩みながら、視線だけはジェードの方に向けていた。何かを強く訴えてくるような漆黒の瞳がジェードを捕らえる。

ジャファルの憂愁を帯びた瞳に惹きつけられて、ジェードはジャファルから目を逸らせなかった。ヘーンプルグでは見慣れた瞳の色であるのに、ジャファルの漆黒の瞳に浮かぶ憂いの色を見て、胸の奥から何かこみ上げてくるような不思議な感覚にとらわれた。

ジャファルがジェードの正面を通り過ぎると、二人の視線は自然と外れた。

ジャファルは厩舎守から手綱を受け取ると、そのまま馬に跨った。城門の方へと馬を駆って去っていくジャファルの姿を、ジェードは見えなくなるまで見つめていた。

* * * *

ジェードがファールーク皇国に来てから、雨が降ったことは一度もない。空に雲が出ていることもまれだ。そのおかげで、毎朝洗濯女に洗われた衣や布は、乾燥した空気に晒されて、真昼のうちにすっかり乾いてしまう。

日が傾き始める前に再び井戸に行こうと、ジェードは【王の間】を出た。扉を開けると、そこに大人の男性が来訪してきたのに出くわした。

ハリーファの『成人の式典』の時に見た若い歴史家だった。若いといっても青年とも中年ともつかない。おそらく宰相と近い年齢だ。宰相と同じように黒い長衣を纏っているが、宰相とは対照的にどこか物腰の柔らかい男だった。

歴史家は出てきたジェードにゆるやかに会釈した。つられてジェードも軽く頭を下げた。

「ハリーファ皇子はご在室か？」

「……ええ。中に居るわ」

それだけ聞くと、歴史家の男はジェードの横をすり抜けた。男はものもしく扉を引き開け【王の間】へと入っていった。

歴史家が応接の入り口に立つと、金の髪の部屋の主は既に男を見据えていた。

《【王の間】とは……。皮肉だな……》

男は軽く息をつき室内を見回した後、応接の椅子に座る部屋の主に目を向けた。

「歴史家か。ちょうどいい。聞きたいことがある」

ハリーファは男に入室を促した。

「イヤスと申します」

イヤスは腰を曲げて深々と頭を下げた。

「ああ。何度か会ったな」

イヤスは宰相の秘書官として仕官している。ハリーファとシナーの式典の時や、それ以前にも時々イヤスの姿を見たことがあった。

「直接お話するのは初めてですね。殿下が私に聞きたいことから伺い致しましょう」

ハリーファは椅子から立ち上がると、部屋に少し入ったところで立ち止まったままのイヤスに近づいた。

「【エブラの民】についてだ。【エブラの民】は本当に滅んだのか？」

ハリーファの質問は、イヤスの意表を突いたようだった。

《一体何をお聞きになりたいのかと思えば……》

「殿下は【エブラの民】にご興味がおりですか？」

「聞いているのは俺だ。シナーンが【エブラの民】は二百年前に滅んだと言っていた」

「そうです。神の末裔は滅んだと言われている。近年【エブラの民】は元より存在しなかった、架空の存在とも伝えられております」

【エブラの民】は架空の存在などではない。シナーンと同じことを言われてハリーファの眉間に皺が寄った。

イヤスは続けた。

「しかし、【エブラの民】は実在の存在です。それはシュケムの歴史書が証明しています。二百十五年前のシーランドとの戦争でオス・ローは崩壊しましたが、【エブラの民】の住む城砦^{ドーム}だけは崩壊を免れました。ですが、その時既にドームには【エブラの民】は居なかったと言われております。彼らの姿はもつと以前から見られなくなつたと、そう伝えられております」

まるで教本のような答えにハリーファは肩を落とした。イヤスの答えはハリーファの知る事実とほぼ一致していた。

ハリーファは少しくさりながら、イヤスに背を向けると椅子に戻り腰掛けた。今度は腕を胸の前で組み、床を睨んで声を落とした。

「……俺は、本当に皇家の血を引いているのか？」

ハリーファはモリス信仰の慣習により、今まで一度も鏡を見たことがなかった。それでも白い肌と視界の端に揺れる金色の髪で、自分がファールークの皇族とは異なる容姿であることは幼い頃から自覚している。シナーンがハリーファの出生を疑っているのも無理もないのだ。

「ハリーファ殿下……。殿下のそのご容姿では、御身の血筋を不安に思われるのでしょうか。ですが殿下はファールークの血を引く紛れも無い第二皇子です。殿下の母上、ファティマ様も殿下と同じように金色の髪に白い肌でした」

歴史家の言うように、過去の記憶の中の幼いファティマは、顔立ちこそファールークの血筋であったが、白い肌で髪は亜麻色だった。そして、瞳は『ホルの丸天井の色硝子のような翠色』だった。

「私はファティマ様が四歳の頃から宮廷に身を寄せているのです。殿下がお生まれになった日の事もはっきり覚えております」

「俺が生まれた時？」

立ったまま話を続けるイヤスに、ハリーファは組んでいた腕をほどいて顔を向けた。イヤスは懐かしむようにうなずいた。

「十二年前の十月に、ウクトゥーバル殿下は後宮でお生まれになりました」

《ハリーファ殿下の生まれた日。あの日、ルクンが命を落としたのだ。忘れられるわけがない。あのような神秘的な現象を……》

（ルクン？）

初めて聞く名を思わず聞き返しそうになり、ハリーファはきゅつと口を閉ざした。

「……殿下は、もしや御自身の身の上を御存知なのですか？」

「……俺が【王】だということか？ それならシナーンから聞いた」

ハリーファの答えを聞いて、イヤスが気の毒そうにハリーファを見た。今までこの建物に閉じ込められた【王】の処遇と末路を知っているのだろう。

「殿下。私はここに来て三人の【王】を見ました。その内の一人がハリーファ殿下、貴方です。宰相殿も懊悩されたのです。我が子が【王】の証を持って生まれてくるとは夢にも思っていなかったでしょうから」

「【王】の証？」

「聖痕、殿下の右頬にある、古い傷痕です」

ハリーファはそつと自分の右頬に触れた。触れた指先に微かに違和感を感じる。頬の皮膚が引きつれていた。だが、これは聖地でジエードから短剣を奪おうとして揉み合いになった時の刀傷だ。頬の古い傷痕というと、アーデインに斬られたあの時のことが思い浮かんだ。

「私は自分の目で、殿下と同じ聖痕を持つ男を他に二人見ました。一人は狂人と呼ばれていた老人。もう一人はルクンという名の幼い子供でした。その二人ともに、右頬に殿下と同じ聖痕があったのです」

ハリーファは狂人^{マッシュスン}の名を聞いて、思わず手をぐつと握り締めた。
【王の間】に永く閉じ込められ死んだ過去の自分だ。右足首に違和感を覚えた。

「……【王】がここに留められているのは何故だ？」

【王】はファールークの人柱……。【王の間】に監禁されるようになったのはアーデインが死んでからだ。きっとアーデインがあの【悪魔】ラースと何か契約したに違いない。

「それは存じ上げません。私もまだ師^{シーク}から全てを受け継いだわけではないのです。ですが、おそらくその理由は宰相^{ワジール}だけが引継ぐものなのでしょう」

「そうか……」

「殿下。歴史家は一步引いて皇家を見守ることしかしません。しかし、【王】がファールークの皇族の中に生まれたことは、私は奇跡だと思っております。正直に申し上げると、私の方が殿下に色々お聞きしたいくらいだ」

勿論、私の個人的な興味からですが、とイヤスは付け加えた。

しかし、ハリーファは黙ってしまい、二人の間をしばし沈黙の間が流れた。

ハリーファ自身が皇家の血筋であろうとなかろうとどうでも良かったが、ハリーファはファティマのことがふと気になった。

幼いファティマはハザールが父親だと言った。それは真実なのだろうか？ 過去の自分は、本当にファティマの父親なのだろうか？ 過去の自分は、今の自分の祖父なのだろうか？

「……ファティマの母はレイリと言う名なのか？ ファティマを生んで死んだというのは事実か？」

「はい。ファティマの母は宰相殿の異母姉ウフトのレイリ様というお方です。皮肉なことに、レイリ様もファティマ様も、御二人とも御子を生んですぐにお亡くなりになりました」

「では、……ファティマの父は誰だ？ 俺の祖父にあたる男は？」

ハリーファは少しためらいながら聞いた。

イヤスは渋い顔をしてため息をついた。

《これは言って然るべきなのか……》

答えるべきか考えている様子のイヤスの心から声が聞こえてきた。

《レイリ様は御懷妊を隠し通して、たった一人でファティマ様を産んでお亡くなりになられたはず。あの事件では、宰相殿も酷く心を痛められたと聞くが……》

イヤスはしばし閉口したまま思い悩んでいたが、やがて口を開いた。

「……ファティマ様の父親は、狂人だマッシュヌンと、言われております」

「マジュヌーン
狂人……」

ハリーファの脳裏に幼いファティマの口から出た言葉が甦った。

ジャファル様はあなたのことを狂人と呼んでいるのだけど。
マジュヌーン

今まで夢だと思っていた曖昧な記憶が、ハリーファの脳裏で鮮明さを取り戻した。

少女の言っていたことは真実で、過去の自分がハザールを犯したのは夢ではなく現だった。そして生まれた子が、ハリーファの母親だ。

「ハリーファ殿下？ 大丈夫ですか？」

ハリーファの顔色に気付き、イヤスがそばに来てハリーファの肩を支えた。

「ご気分が優れないのでは？」

「……大丈夫だ……」

イヤスは腰を落とし、片膝を床に着いてハリーファに語りかけた。

「マジュヌーン
狂人も殿下と同じ【王】でした。ですが、本当にファティマ様の父なのかどうか、真実は誰も知りません。真実を知っているのはレイリ様のみです」

イヤスの言葉も、ハリーファの耳を虚しく通り過ぎた。知っているのはレイリだけではない。マジュヌーン
狂人と呼ばれたハザールも知っている。

その時、バタンと【王の間】の扉の開く音が応接に聞こえた。イ

ヤスは入り口の方を振り返り、ハリーファも廊下の方に青褪めた顔を向けた。

ぱたぱたとサンダルが床をはじく軽い音をたてる。白い布の山を抱えたジエードが廊下を横切った。一瞬、ジエードはハリーファの方を見たが、足を止めることなく通り過ぎた。

ジエードの足音が聞こえなくなると、イヤスはハリーファの方に向き直った。

「ハリーファ殿下。私からお訊ねしても宜しいでしょうか」

答える代わりに、ハリーファはイヤスに視線を向けた。

「一年前、殿下が宮廷から失踪されたのは、誰の手引きがあったのですか？ 第一夫人様シェーラですか？ それともヴァロニアが関与していたのですか？」

「……あれは、俺が自分で抜け出しただけだ」

「殿下が御自分で？ あの粉砂漠を、お一人で？」

イヤスの表情には嫌疑の色が浮かんでいた。何も教えられていないハリーファが一人でオス・ローに行けたとは信じられないようだった。

「フロリスとの国境が封鎖されてから二百年以上経ちますが、メンフィスの交易家だけは秘密裏にフロリスと繋がっていると噂があります。メンフィスは元々交易で栄えた街。フロリスとの繋がりがあってもおかしくない。殿下の誘拐にヴァロニアか、メンフィスの名サドル

士が関わっているのではないかと思っているのですが……」

「メンフィスの名士^{サドル}？」

メンフィスで貿易商だったハザールの記憶が甦る。

各都市には名士^{サドル}と呼ばれる家系が在り、皇家と繋がりのある家が多かった。ハリーファのような第二皇子を養子として受け入れたり、皇女を妻として迎える。そしてファールークの血を引く子どもが女なら宰相の妻として、また宮廷に呼ばれることもあった。

「殿下は姉皇女^{ウフト}のアーラン様とはご親密だったはず。そのアーラン様はメンフィスの名士^{サドル}、ラシード殿のもとに嫁がれました」

「アーランは何も関係ない」

ハリーファは寄り添うイヤスを振り払った。

「そうですね。近頃、ラシード殿のところの奴隷が頻繁に第四夫人^{アイシヤ}様を訪ねてきているようなので……。余計な憶測をしすぎたようです。どうかお忘れに」

ハリーファは黙ったまま何も答えなかった。

「……殿下。御気分が優れないようなので、私はもう下がらせて戴きます。女奴隷を呼んできましょう」

イヤスがジエードを呼びに行こうとすると、ハリーファは顔を上げて再びイヤスを見あげた。

「イヤス、……お前はシュケムについては詳しいのか？」

「聖地の鎮守府ですか？ 勿論です。シュケムの何がお知りになりたいのです？」

「……最後の王の、……ファールークのことを……」

ハリーファは実に齒切れ悪く、なんとか言葉にした。

国の名ではない、個人の名前としてファールークの名を言うのがためられた。ハリーファの言葉尻が小さく消え入るようだった。

「ファールークとは、アル・マリク・ユースフの父ファールーク？」

『シュケムの英雄』ですか？ それならば、歴史家よりも語り部に語らせるほうが良いでしょう」

ファールークが英雄と呼ばれるに至った経緯は、今も物語として語られているのだろう。

「……いや、物語じゃない。実証が知りたいんだ」

「承知しました。ですが、殿下。それはまた次の機会に。私も再度皇国の起源を深く遡って勉強して参ります」

イヤスの心の中からはハリーファの体調を案ずる想いが聞こえた。イヤスは頭を下げると【王の間】から去ろうとし、応接の入り口まで歩んでようやく自分が【王の間】に來た目的を思い出した。

「そうでした。今回お伝えにきた用件を忘れるところでした」

イヤスは柔かい表情に戻りハリーファに向き直った。

「ハリーファ殿下、成人の儀式はどうなさいますか？ 延期にされてそのままになっておりますが……。宗教家殿が随分気になさっているのです」

「もうあんな茶番はごめんだ。……俺は酒は大嫌いなんだ」

「承知致しました。イマム殿には上手く伝えておきましょう」

本来の目的を果たし、イヤスは【王の間】を去っていった。

夕方、ジェードはランプの灯を点しに応接にやってきた。

傾いた西日が、朱鷺色の壁をますます茜色に染めている。そんな中、ハリーファは応接のテーブルに突っ伏していた。

「……ハリ？」

寝ているわけではないのに、名を呼んでも顔も上げず返事もない。ハリーファの姿を見て、ジェードは弟の^{ホプ}ことを思い出した。末っ子のホープは、何かあるとこうやって拗ねてジェードの気を引こうとしたものだっただ。

だが双子の弟とは違い、ハリーファの考えていることはさっぱり

わからない。自分の考えはハリーファに筒抜けだというのに……。ジエードは少し困って眉を寄せた。

「お腹すいちゃった？ わたし、先に食事を取りに行ってくるわ」

答えないハリーファをおいて、ジエードが厨房へ行こうとすると、

「……いない……」

伏せたまま発するハリーファの声はくぐもっていた。ハリーファのそんな声を聞くのは初めてで、ジエードは困惑した。

ジエードはハリーファの傍まで行っただが、結局どうしていいのか迷い、ハリーファが座っている長椅子の前で立ちつくした。

「……俺は……罪を犯した……」

聖地オス・ローで兵士を殺したことを懺悔しているのだろうか？

「……誰だって罪を犯すわ。だから、罪は償わないと……」

「……ファティマに……」

「え……？」

《ハリのママに？》

「……死んだ者にどうやって償えばいいんだ……」

井戸端で聞いたことがジエードの頭をよぎる。

ハリーファは自分が母親を死なせたと思っているのだろうか。そのせいで父親を不幸にしたと思っているのだろうか？ 父から愛されないのも自分のせいだと思っているのだろうか。

「ハリーのせいじゃないわ」

「……………」

「ハリーのママが亡くなったのは、ハリーのせいじゃないわ」

ハリーファはようやく顔を上げると、ジェードの方に顔を向けた。ハリーファは泣いていなかったが、涙を流していたのはジェードの方だった。

ジェードの瞳からこぼれる涙を見て、ハリーファはうろたえた。

「………… お前は、勘違いしている…………」

「何が勘違いなの？ わたしがハリなら寂しいわ」

「お前が泣くな…………」

そう言われて、ジェードの瞳からはますます涙がこぼれた。

「泣く自由も奪ってしまうの？ もうハリーの言うことなんか聞かないわ！ わたしは自分の良心に従うんだから」

まるでハリーファの身代わりのように、ジェードは涙を流し続けた。気の済むまで泣くと、ジェードは自分で涙をぬぐった。

椅子に座ったままのハリーファに近づき、

「ママはハリをゆるしてくれてるわ。絶対に」

そう言つてハリーファの髪に軽くキスをした。母親が自分にしてくれたように、自分が弟にするように、心をこめてハリーファの金の髪に口づけた。

そして思い出したように、ジェードは持ってきた火種からランプに火を点けた。いつの間にか薄暗くなっていた部屋がぼんやりと明るくなる。橙の炎の色がハリーファの金色の髪に映ってきらきらと輝いた。

* * * * *

【王の間】の周りには、いつからか剣のように細長く背の高い葉の植物が生えている。その葉は長く伸びて窓を隠し、外から中の様子を隠すほど成長していた。

ハリーファの懺悔から五日経った朝。

ジェードが水汲みから【王の間】に戻ると、意外な人物が【王の間】に来訪していた。ジェードは驚きのあまり、水瓶を手から離してしまいそうになり、慌てて水瓶を持つ手をぐっと握りしめた。

ジャファル
宰相だった。

ジャファルは黒い長衣を纏い、惘然とした表情でジェードを見下ろした。ハリーファが不在だったため、待っていたのか出て行くうとしていたのか。ジャファルは入り口の廊下で一人たたずんでいた。

「ヴァロニアの女奴隷よ。ハリーファは何処へ行った？」

ジャファルは少しくぐもった低い声だった。初めてジャファルに声を掛けられ、ジェードの鼓動が強くなった。

「……ハリが何処へ行ったかなんて、知らないわ。わたしはハリのことを監視している訳じゃないもの」

ジェードはファールーク皇国の最高権力者と対峙し、微かに震える声を隠し気丈に答えた。それでも手に持った水瓶の中の水面は微かに波打っている。心臓の音も聞こえそうなほどだ。

「大人しくしているのかと思えば、度々歴史家呼び出しているそうだな」

「度々って……、二回だけよ」

ハリーファのあの懺悔の後、歴史家が【王の間】を訪れたのは一度きりだった。ジェードはハリーファが歴史家から何かを教わっているのだと思っていた。

「それに、ハリは勉強しているだけじゃない」

ジェードの答えに、ジャファルの眉間の皺が深くなった。

「余計な事は何もするな。ハリーフアには何も教えてはならん。ここで大人しく暮らして居ればよいのだ」

ジェードにはジャファルの言葉がひどく冷たく感じた。ジェード自身は勉強を怠ってきたが、それは自分の父と大いに話し合った上でのだ。

そして先日ハリーフアのことを思い出して、悔しい思いが沸きあがってきた。

「どうして学ぶことがいけないの？ どうして何も教えないの？ ハリにはシナーンと同じようにしてあげられないの？」

感情的になるジェードに対し、ジャファルは変わらず冷静なままだった。抑揚のない低い声で答えた。

「私はハリーフアに武器を持たせるつもりはないのだよ」

「ハリは武器なんて何も持っていないわ！」

望んでも武器など手に入らないのは、ジェード自身この一年間で強く実感している。そんな自分の悔しい想いもその言葉に混ざった。

「ヴァロニアの娘よ。そなたは文字も読めないのだろう。そのような者にわかるのか？ 知識がこの世で最も強い武器だと言う事が」

ジャファルの言葉にジェードは息が止まった。

ジャファルとハリーフアは同じ事を言っている。それはハリ

「ファがジャファルから教えられた言葉なのだろうか。」

「……あなたはハリの父親なんでしょう？ どうしてこんな処に一人で住まわせるの？ ハリを……愛してないの？」

「一人？ ハリーファにはそなたが居るではないか。奴隷は身内だ」

背の高いジャファルを見あげ、ジェードは押し黙った。

ジャファルはジェードの横を悠然と通り過ぎ、入り口の扉の手前で足を止めた。

「それでも私は随分寛大なつもりだ。ファールークの一族は『神殺し』の血脈。だがハリーファは【王】に生まれた故、『神殺し』の血を引く男子でありながら宮廷に留めておいてやっているのだ。枷も付けず、鍵もかけずな。そなたはそれ以上の何をハリーファの為に望むのだ」

そう背中越しに言われたが、ジェードには意味がよく分からなかった。だが、それが以前ハリーファが言っていた、ハリーファを宮廷に留める専横でない『理由』なのだろう。

ジェードは振り返ってジャファルの背中を睨んだ。

「それがハリを宮廷に留めてる『理由』なの？ リューシャさんを愛しているからじゃなくて、ハリが【王】だから？」

「そうだ」

振り向かずに答える黒衣の宰相は、自分の父よりは随分若い男だ。漆黒の髪はジャファルの後姿を見て、ジェードの胸には急に寂しさ

がこみ上げてきた。

「あなたはお姉さんのことを愛していたんでしょう？ ハリをここに残しているのは、本当はハリがそのお姉さんの孫だからじゃないの？ どうして、」

ジェードが言い終わらぬうちに、ジャファルはジェードに向き直った。

「ヴァロニアの女奴隷よ、そなたは少し頭を冷やすといい」

宰相は表情を変えずジェードの手から水瓶を奪うと、ジェードに頭から水を浴びせた。

ハリーファが【王の間】に戻ると、床に這いつくばるジェードの姿が目に入った。ジェードは濡れた床を拭いている。ハリーファが戻ってきたことに気付いたが、床を拭きながら振り向きもしないでつぶやいた。

「まだ、食事の用意出来てないの」

ジェードの髪はびしょびしょに濡れていた。水に濡らされたジェードの髪は波が緩やかになり、その先からしずくがポタポタと落ちていく。衣服も身体にぴったりと張り付き、背中の骨が服越しに透けて見えた。

西の大陸では、どんなに暑くても貴重な水を無駄遣いするものは居ない。湯浴みにしても必ず湯桶に水を溜める。ハリーファは水浸しの床とジェードの姿を見るなり、怪訝そうに声を掛けた。

「お前……、何をしているんだ？」

「……濡らしたのよ。髪がまとまらないから」

ジェードが嘘をついているのは、その態度を見ているだけでもわかった。ハリーファはジェードの心から宰相の来訪を知ると、呆れてため息をもらした。

「床より先に自分の顔を拭け」

ハリーファは応接に入り奥の自室から大きめの布を一枚持って戻ってきた。

「これで拭け。みつともない」

布を広げて肩からかけてやると、ジェードが床を拭く手を止めて立ち上がった。ジェードは伸びてきた髪を束ねて絞ると、濡れた黒い髪の前から水が滴り落ちた。

「男みたいだったのに、随分伸びてたんだな」

ハリーファは水に濡れ緩やかに伸びたジェードの黒髪に手を伸ばした。

その瞬間、ジェードはハリーファを振り払った。

ハリーファがジェードの髪に触れた一瞬に、ジェードの心に様々な想いが垣間見えた。

濡れ髪

誘惑 欲情、

男

恋人

金色の髪

姉

魔女、見殺し

《いやっ！！！》

髪に触られ、ハリーファの手をはたき弾いた。そのジェードの嫌悪の形相に、ハリーファは驚いて手を引いた。

「……ごめんなさい……。髪に触られたくないの……」

ジェードは怯えた表情でハリーファに謝った。ジェードの顔は血の気を失い、肩で呼吸をしながら壁に寄り掛かった。

ハリーファは蒼白のジェードをそつと支えると、その場に座らせた。

以前からジェードは事あるごとに髪を弄っているのをハリーファは目にしている。皇国の慣習的趣向までもが絡み合って、ジェードが抱える傷に触れてしまったようだ。

「お前の抱えている問題は何なんだ。姉上の死に関係しているのか？」

「……言いたくないわ」

座り込んだジェードは壁にもたれると目を閉じた。

「なら心で考えろ」

「……考えたくもないの」

そう言いジェードは目を閉じたまま、また無意識に手で濡れた髪を弄っていた。ハリーファは片膝を立てて座り、ジェードのその様子を見守った。

ジェードが目を開けると、ジェードの様子を覗き込んでいるハリーファと目が合った。

ハリーファはずっと真直ぐジェードを見つめている。

吸い込まれそうな翠の瞳。
グリーン

その上には輝く金系の髪。

《優しい……》

《金の髪の王子様……》

《姉さんを見殺しにした……》

ハリーファを目の前にして、ジェードは姉の話を思い出しかけた。知られたくなかったことを隠し切れず、ハリーファには伝わっただ

ろつ。ジェードは気持ちを落ち着かせようと小さく深呼吸をした。

「ヴァロニアには……」

「うん？」

言い訳しようと、なんとか言葉を振り絞ったジェードに、ハリーファは相槌を打ってくれる。ジェードは涙を堪えたが、声は上ずった。

「……こんな真っ黒な髪の間人はあまり居ないらしいの……」

「らしい？」

「わたしの住んでいたヘーンブルグは皆黒髪だったの。でも王都や他の領には黒髪の間人は一人も居ないんですって……」

姉ルースから教えてもらった話だ。黒髪の間しか居ないヘーンブルグではこんな話をした事はなかった。

「そんなはずはないだろ？ 俺の知っているヴァロニアの王太子は
ドーファン漆黒の髪と瞳だったぞ」

「嘘よ！ 王太子様が黒髪だなんて！！」

ジェードの声がまるで悲鳴のように部屋に響いた。

ジェードは王族や貴族にも黒髪は一人も居ないと聞いていた。ヴァロニアではそれが周知の事実だ。ヴァロニアで黒髪の間がいるのはヘーンブルグだけという事も含めて。

「嘘を言わないで！」

座ったままジェードはハリーファに食って掛かった。

「俺は嘘なんか言わない。お前は会って確かめた事があるのか？俺は実際に王太子と会ったことがあるんだ」

同じように腰を屈めたまま、ハリーファはジェードに答えた。

「皇子とは違うのよ。……わたしなんか会えるわけないじゃない」
あなた

言葉尻が小さくなる。だが、ハリーファが嘘を言わないことをジェードは知っている。自分達が教えられて信じていたことが間違いのだろうか？ そう考えた時。

「……いや、すまん。俺も現在の王太子の事は知らない。だが、ヴォード・フォン・ヴァロアはお前と同じ、白人で漆黒の髪に漆黒の瞳だったんだ」

「ヴォード・フォン・ヴァロア……？」

ジェードが知っている国王の名ではない。だが、聞き覚えがあり、ジェードは学校で習ったことを必死で思い出した。

「……ヴォードって……」

「オス・ローを巡ってファールークと戦ったヴァロニアの王だ。昔、俺が会った時にはまだ若い王太子だった」
ドーファン

「昔って、いつの話……？」

「二百五十年程前だ」

「……二百五十年……」

年代など言われたところでジェードにはわからない。ハリリーファが言うことの真偽はわからなかった。

「今も政はヴァロア家が担っているはずだろ？ ヴォードは国に戻ってから没落したのか？」

「そんなことないわ。彼は英雄のはずよ……」

「歴史は都合善く変えられる。実際は何かあったんだろう」

「でも……学校でそう習ったわ」

「それが正しいとは限らないだろ。さっきの王太子ドーフアンの黒髪の事も併せて、歴史に伝えられることが全て真実じゃない。大体、お前がまともに勉強してたとは思えないしな」

言い当てられて頬が熱くなった。ジェードは膨れると、重ねていた足を少しずつらして組み替えた。

話しているうちにジェードの顔色は回復していた。

「歴史は真実は伝えない。都合良く歪められて伝わるものだと思つづく実感したところだ……。それに、歴史は人の心も伝えない」

言いながらハリリーファは立ち上がった。珍しく言葉に不満が混じ

っていた。

「皆、ハリみたいに人の心がわかればいいのに」

そう言われてハリーファは、しゃがんだままのジェードを見おろした。

「人の心なんてわかりたくもない」

人には無い能力のことを言われ、ハリーファはそっぽを向いた。

「……わかり合いたい、と思ったことはあるけどな。もう遅い」

ハリーファはジャファルと同じように背中越しに語った。

「遅い？」

ジェードが立ち上がると、ハリーファは振り返った。

「死んだ人間のことはわからない。歴史家の記録も、何も伝えてはくれなかった」

《死んだ人間……？》

ハリーファの母親のことだろうか？ ジェードがそう考えていると、ハリーファが小さな声で答えた。

「……父だ」

《……父？ 宰相はまだ生きてるのに？》

ジェードは不思議そうにハリーファを見つめた。
ハリーファの視線は、まだ乾ききらないジェードの黒髪を見つめていた。

黒人奴隷

ファールーク皇国に連れてこられてからも、ジェードは祈りを欠かしたことはない。ひざまずき、小さなベッドに両肘を置く。小さくくりぬかれた窓から差し込む光に向かって手を組んだ。

【天使】様、どうかおたえください。
どうか、もう一度姿をお見せください……

しかし、【天使】の声は聞こえなくなっていた。

* * * *

暗黒大陸と呼ばれる西大陸^{モリス}では春を呼ぶ風^{ハムシン}が吹き始めた。風は上空にまで粉砂を舞い上げ、青い空を砂色にくすませる。

そして一月ほどして風が吹き止むと、皇国は春らしからぬ陽春を迎える。

空は雲一つなく青い空が高く広がり、真夏のような強い日差しが、宮廷の石畳を焼いていた。

春先には宮廷へ出入りする者の数が増え、城門広場や脇の水飲み場に外来の馬や駱駝^{ジャムル}が繋がれ、主が戻ってくるのを待っている。

その中に宰相の馬によく似た黒い馬が繋がれていることがあった。ジェードは一目見てその黒馬が宰相の馬とは違うことに気がついた。駱駝たちの中にまぎれ主人を待つ黒馬に近づき、そつと首をなでる。黒い馬は、先が白くなった睫毛を瞬かせ、黒い大きな瞳でジェードを見つめ返した。

「あなた、外から来たのね。どこから来たの？」

馬から答えが帰ってくるはずもない。しかし、馬は答えるようにブルブルと鼻を鳴らした。ジェードは苦笑した。

「あなたの言葉がわかったらよかったんだけど」

動物たちは人間の言葉を理解しているのに、何故人間は動物たちの言葉が解らないのだろう。

ジェードは心から残念そうに呟いた。そしてふと、他人の心が読める少年のことを思い出した。

(……ひょっとして、ハリは動物の心もわかるのかしら?)

もし動物たちの心がわかるのならなんて楽しいことだろう。明日の昼にでも連れ出して確かめてみたい。ふとしたひらめきに、心が踊りだし明日が待ち遠しくなった。

翌日の昼下がり。ジェードが昼休みに【王の間】に戻ってきた頃には、ハリーファは既に何処かへ行ってしまった。少々肩を落としたしながら、結局ジェードはいつものように一人で厩舎へ向かった。

太陽は夏に向けて少しずつ高くなり、天から痛いほどの日差しがふりそそぐ。人気のない庭園の砂地の上にはゆらゆらと陽炎がたゆたっていた。

今日は駱駝を連れた商人たちは来ていないようで、昨日の黒馬一頭だけが広場の横手に繋がれていた。

門前の石畳の広場の手前で、ジェードは必ず一度足を止める。陽炎の中、石畳の上に水面のように光が揺らめいている。

ジェードは手で目の上にひさしを作り、目の前の光景を肅然と眺めた。水は、青空を映してゆらゆらと微かに波打つ。ヴァロニアでは見たことのない美しい情景だ。あの幻水を『サラブ』というのだとハリーファに教わった。幻想的な景色に熱さを忘れ、時間が止まる。

綺麗。まるで泉みたい……。

ジェードはサラブに心を奪われた。近づけば逃げてゆく、触れることの出来ない神秘の泉だ。

しかし、幻想の世界からジェードは突然我に返らされた。黒衣を纏った人物が幻の泉の上を横切った。

黒い布を頭に巻き、その上から頭布の付いた真黒い上衣を纏っていた。聖なるものを蹴散らすかのように、泉の上をかまわず駆けと踏み歩く。ジェードの視界を横切ると、広場の脇に繋がれていた黒馬に寄り添うように立った。

あの黒馬の主人なのだろうか。黒尽くめの格好だが、背丈からしてやはり宰相ではない。なぜか足がすくんでその場から動けなかった。

(……誰かしら?)

思った瞬間、ジェードは思わず息が止まった。

頭巾の下顔がはつきりと見て取れた。年頃はジェードと同じくらいだろう。とても美しい造作で、瞳は優しく慈愛に満ちていた。そしてどこことなく憂愁を帯びている。口はきつちり結ばれて表情は凜としていた。

頭には布を巻いていたが肌は黒い。遠目でもジェードにははつきりとわかった。

(　　ア・アルフェラツ様!　　)

黒い馬の主はアルフェラツに似ていた。会いたいという願いが届いたのかと、ジェードは激しく打つ胸に手を当てた。ただ自分と同じ年頃のように、聖地で見た姿よりも歳若くは感じる。

アルフェラツに似た少女は、すらりとした黒い手を馬に伸ばした。愛しむ様に首をなでる。馬の耳に向かって何か語りかけ、首を抱くと唇を寄せた。

悪魔のような真っ黒な衣装を纏った【天使】に魅了されたかのように、ジェードは少女の美しいたたずまいから目をそらせないでいた。

主は馬をなでる手を止めた。ジェードの視線に気づいたのか、ゆっくりと振り返った。

その瞬間、ジェードは背を向け逃げるようにその場を走り去った。サングルの底に砂が入ってもかまわず走り続けた。

心臓は激しく鳴り続けている。あんなに【天使】に似ているのに、

ジェードの心は不安で覆いつくされていた。

休憩もそこそこに、ジェードはいつもより早く【王の間】に戻る
ことになった。

朱鷺色の部屋にまだハリーファの姿はない。テーブルの上に、何
か書かれた紙と本が散らかっていた。

（……ハリ、どこへ行ったのかしら？）

もう休憩も終わりに近い。ジェードはいつものように部屋の掃除
を始めた。

ハリーファが散らかしていた書物を束ねて整え、部屋の隅の棚
の上に運んだ。一人黙ってぬらした布でテーブルや椅子の背を拭く。
しかし、さっきのアルフェラツに似た黒人の少女のことがジェード
の頭を離れなかった。

不安な気持ちだが、ジェードの身体の動きを鈍らせてしまう。不安
を拭い去るようにテーブルを拭くが、気が付けば手の動きが鈍くな
りやがて止まった。

神は時々人の姿をして地上に降り立つという。もしかすると、先
ほどの人物は【天使】^{アルフェラツ}が人の姿を借りて現れたのではないだろう
か？ もしあの少女が本当に人の姿をしたアルフェラツなのだとし
たら。もしあの人物とハリーファを会わす事が出来れば。

（もし……、もしあの人がアルフェラツ様だったら……）

ハリーファと会わせることが出来ればハリーファとの約束が果た

される。そうなれば、ハリーファは約束を守っては自分に命を差し出すだろう。ジェードは天命を果たし、ヴァロニアにも帰れるはずだ。

しかし、ジェードの心はざわついた。

聖書に描かれていた悪魔の絵がジェードの脳裏に浮かんだ。悪魔は人の心を惑わして甘美な罠へと誘惑するという。聖書の中で悪魔の姿は頭から足まで真っ黒に描かれていた。

聖地で会った【天使】は白い服を身に纏っていた。先ほどの真っ黒な服に身を包んだ黒人は、本当に【天使】なのだろうか？ もしかして、悪魔では？

ジェードは考えを振り払うように頭を横に振った。

《黒い服……。でも顔は【天使】様と同じだったわ……》

混乱する頭を冷やそうと、ジェードは両頬に当てた。水に湿った掌の温度が心地良く頬に沁みてゆく。強く打つ胸の拍動を落ち着かせようと、そつと息を吐いた。

その時。

「ジェード」

突然背後から声をかけられて、ジェードは息が止まりそうになった。口から飛び出しそうになった悲鳴をなんとか飲み込んだ。

入り口の方を振り返ると、黒尽くめの人物とはまるで対照的な、金色の髪の白人少年がジェードを見つめていた。

「ハ、ハリ！ お、おかえりなさい……」

まるで言い訳するように、いつもは言わない言葉をひきつった笑顔で言った。あからさまな態度にハリーファの眉根が寄った。

「……天使が？ どうしたんだ？」

ジェードは近づいてくるハリーファの顔をちらりと見やった。このまま黙っていても、きつと自分は不安を隠しきれない。それに、ハリーファが戻ってきたことで、少しだけ不安が和らいだ。

「……さっき、黒い肌の人を見たの」

ジェードの言葉にハリーファは再び眉をしかめた。

「黒い肌？ 宮廷に黒人の奴隷は一人も居ないはずだぞ」

ハリーファの言うとおり、皇族や宮廷に仕える奴隷が皆白人なので家奴隷も全員白人だ。それは家奴隷と過ごすことの多いジェードだつてよく知っている。

「外から来た人だと思うの。馬を連れていたから。その人……、アルフェラツ様にとっても似ていて……」

思わず声が小さくなった。

驚くと思っていたハリーファは、動揺する素振りの欠片もない。

「そいつの髪の色は？」

「髪……？ ええと、髪は、布をかぶっていて見えなかったわ……」

「なら目の色は？」

「……目は、黒かったわ。……多分」

ハリーファは呆れたようにため息をもらした。

「お前はヴァロニアを出てからアルフェラツ以外に黒人を見た事がないだろ。目が慣れてないと、異人種は皆同じ顔に見えるものなんだ」

ハリーファが否定するならば、あの少女は【天使】様ではないのかもしれない。だが、ジェードの不安はまだ消えていなかった。

「で、でも！ アルフェラツ様に間違いないわ！ あんな綺麗な人を見間違えたりしない。本当に【天使】様に良く似ていたのよ！」

「そういえばお前は、聖地で俺を初めて見たときも『天使』のようだと考えてただろう。本物の【天使】の前でよくそんな事考えたものだな」

気恥ずかしさに、ジェードの頬が微かに染まった。心を読まれるなど羞恥以外のなんでもない。

「わ、わたしは昔からずっと天使様は金色の髪の人だと思ってたのよ。ハリーはアルフェラツ様のあの御姿を見て、すぐに【天使】様だって信じられたの？」

「アルフェラツは俺の知っている天使の姿そのものだ」

あっさりと切り捨てられ、ジェードは返す言葉に困った。共感し

てくると期待していたが、ハリーファの持つ感覚はヴァロニア人の概念と違いすぎる。ジェードはがっくりと肩を落とした。

「それに……まさか【天使】様が……」

《人殺しを命じるなんて、思わないじゃない……》

ジェードは心の迷いを口に出ることが出来なかった。

さつき見た少女が悪魔ではないかという不安だけではない。もし【天使】なのだとしたら、彼女をハリーファと会わせることが出来れば、ハリーファは。

「前に言っただろ。【天使】に会わせてくれれば、俺の命はお前にくれてやる」

その言葉にハリーファの顔を見ていられなくなり、ジェードは視線を床に落とした。

天命は果たさなければ。

姉のために。

だけ。

この一年、【天使】の声は一度も聞こえなかった。ハリーファのそばで過ごすうちに、ジェードの心は揺らいでいた。

どうしてハリーファを殺さないといけないのか。聖地で会ったあの黒い肌の女性こそ、本当に【天使】なのか疑いもした。しかし、ハリーファがアルフェラツは天使だと言うのだから間違いはないのだらう。

「……わたしの国では黒い髪や目は魔女だと、悪魔の僕だと疑われるのよ。黒は魔の象徴とされているの。それに、……黒人なんて知らなかったわ。肌が黒いなんて、そんなこと……」

ジェードはうつむいたままつぶやいた。

「黒が魔の象徴か。何故そんなことになったんだ」

「黒い髪なんて大嫌いよ」

ジェードの言葉尻が小さくなった。

「お前が嫌いなのは黒い髪なのか？ 金色の髪じゃないのか？」

ジェードはまた無意識に自分の髪を弄っていたことに気づいて、指に絡めていた髪をほどいた。

「それともその逆か？ お前は金の髪に何か強い憧憬を抱いてるのか？」

ハリーファの言葉にジェードの心臓がはねた。身体が一瞬強張る。ハリーファに悟られないように、心で何も考えないように努めた。

ジェードの反応を見て、ハリーファは息をはいた。

「黒が魔の象徴とか言うが、お前は【悪魔】の姿を見たことがあるのか？」

ジェードは顔を上げてハリーファを見つめた。

「……ないわ」

首を横に振ると、やわらかく波打った黒い髪が揺れる。聖書に描かれた悪魔の姿しかジェードは知らない。

「教えてやろうか？」

「え……」

「ファールークでは金の髪が魔性の色と言われている」

ハリーファはそう言って軽く鼻で笑った。

ジェードが黒い瞳を瞬かせた。やはりハリーファはジェードの心を読んで、ジェードが何に怯えているか気がついているのだ。自虐的にも思えるハリーファの言葉を申し訳なく思ったが、まだ笑い返せそうにはない。ジェードの心の中にはまだ何か重いものがあつた。

「……わたし、悪魔信仰の噂を聞いたことあるの。悪魔信仰者は悪魔を召還するんですって」

「悪魔信仰？」

「恐ろしい事だと思わない？ 悪魔を召還するだなんて」

モリス
西大陸では複数の信仰が認められていたが、その全てが天使信仰であつた。

「モリスには悪魔を信仰する人間なんか居ない」

ハリーファの表情は神妙になり、口調も重くなっていた。

《……さつき見たアルフェラツ様に似た人は、目も肌も、服も全て黒かった……。あの人、天使なの？ それとも悪魔なの？》

ジェードは心の中でつぶやいた。

【天使】様、どうかおこたえください。

もし、あの方が【天使】様なら、どうか ハリと会わないで。

それから数日が過ぎたが、ジェードが昼間に広場に行っても、もうあの宰相の馬に良く似た黒馬の姿を見ることはなかった。

* * * * *

真昼の炎天の下。強い日差しを浴びながら、宮廷内の石畳の遊歩道を歩く少女と少年の姿があった。

ハリーファはジェードに誘われて厩舎に向かっていた。ジェードは手をひいてハリーファを急かす。昼の休憩時間がさほど長くないからなのだろう。ハリーファを連れ出すことに成功して、女奴隷の心から嬉々とした想いが伝わってくる。

二人のサンダルがパタパタと音をたてた。

まるで子供のように急かすジェードに不思議な既視感を覚えた。
昔、こうして自分の手をひいたのはサライだったか。ジェードよりも小さな手の感覚が甦る。

「ねえ、ハリは馬に乗れないって聞いたんだけど。ほんとうなの？」

ジェードの声がハリーファの思考を遮る。

確かにハリーファ自身は乗馬の指導は受けたことはない。馬に乗ることが出来たのも、オス・ローへの道を知っていたのも、ユースフの記憶があるからだ。

「お前と会った時まで、俺は宮廷から出たことすら無かったからな」

余計な事を言う必要はない。話をはぐらかしたつもりが、その必要はなかったようだ。ジェードはハリーファの胸中に気づかずに微笑んだ。

「乗馬なら、わたしが教えてあげられるわよ？」

「お前が？ 俺は駱駝ジャムルなら何度が乗ったことあるぞ」

「駱駝に！？ 本当？」

「ああ。秋に行商隊が着たら乗せてもらえ。駱駝の歩みは慣れたら揺れが心地良くて眠ってしまうぞ」

「そうなの？」

「慣れればな」

ハリーファの言葉にジェードはますます楽しそうに笑った。

動物好きなジェードにとって、馬は特別な存在のようだ。馬に乗りたくて仕方がない気持ちがジェードの心から伝わってくる。

「馬に乗ろうなんて考える女奴隷はお前くらいだろうな」

楽しそうに言葉を返すと、ジェードはハリーファに心を読まれて
いる事に気がついた。

「ねえ？ ハリーの正体は本当は動物なんじゃない？ 動物は人の心
が読めるのよ」

「ああ、そりゃ、ちがいない」

ジェードの突拍子もない言い分に、ハリーファは笑いがこみ上げ
てきた。

「お前は呆れるほど動物好きなんだな」

「ええ、大好きよ。動物たちは嘘をつかないし」

ジェードは歩きながら答えた。

《そういえば、ハリも嘘をつかないものね。やっぱり動物なんだわ
！》

隣で一人でくすくす笑うジェードを見て、ハリーファは軽く肩を
すくめてみせた。

他の奴隷達からすれば、異国人のジェードはする事も言うことも
とんでもないことばかりだろう。最近特に、ジェードはハリーファ

の身分などお構いなしだ。

ジェードの胸裏にハリーファに対するあざとさもへつらいも見たことはない。今もジェードの胸のうちにあるのは、幼く無邪気な好奇心だけだ。ハリーファには少女の心の中がきらきらと輝いてみえた。

人気がない広場に差し掛かると、熱さが増して石畳の上に陽炎がゆらゆらと揺れていた。地面から照り返す光に思わず目を細める。

厩舎を目前にしてジェードは立ち止まり、ハリーファを振り返った。どうしたとか、さっきまで上機嫌だった笑顔はすっかり消えている。何かを必死で隠そうとしているが、ジェードの顔には不安の色が浮かんでいた。

「ごめんなさい……。やっぱり今日はだめだわ……」

ジェードの心からは、あの馬の主に会いたくないと聞こえてきた。

馬？

ハリーファが前方に目を向けると、ジェードの肩越しに黒い馬が城門近くに繋がれているが見えた。

「宰相か……？」

ジェードは視線を地面に落としたまま何も答えなかった。

広場の向こうには陽炎が立ち上り、^{サラフ}蜃気楼の泉が静寂の中を揺らめいていた。

ハリーファは城壁沿いを一人歩いていた。悟られたくないことがあつて、逃げるように去って行ったジェードを引き止める気にはならなかった。

そついうところが自分の駄目なところだと自覚している。無理にでも引き止めて、何があつたか聞き出すべきではなかったのか。昔から、他人の心ひとに触れるのが怖いのだ。それ以上に自分自身の心をさらけ出すことにも怯えている。軽く頭痛がするのは、暑さのせいだけではない。

一人炎天の下を歩いていると、いつの間にか海側にまで辿り着いていた。岸壁に打ち付ける荒波の音が、城壁の向こう側から聞こえる。珍しく、海鳥の声も聞こえてきた。

歩きながら、以前ジェードを連れて来た時のことを思い出す。あの時、城壁の上で故郷や家族や友人を想い涙するジェードを見て、同じように涙を見せたサライのことが胸をかすめた。

同じようにユースフのことを想っていたのだろうか？ 壁の中から外に出たいと思っていたのだろうか？

城壁の上に登る階段に近づいた。

ハリーファは日差しから目をそむけて歩く。階段の真横に差し掛かると、頭上から砂がパラパラと落ちてきた。肩に降ってきた砂を

手ではらい、階段を仰いだ。

階段の途中に人影があつた。

逆光で、はつきり見えるまで少し時間がかつた。黒衣を纏つた黒人だ。

その容姿を見て、ハリーファは驚きで口が震え、咄嗟に言葉が出なかつた。以前、ジエードが言っていた少女に違いない。

アルフェラツ！？

造作はアルフェラツに似ている。しかしオス・ローで見た姿より年若い。黒人は頭に白い布を覆うように巻き、それがまるで白く長い髪のように見えた。頭布の下に見える瞳はジエードの言つた通り黒かつたが、サライと見間違ふには十分だつた。

【天使】 似の黒人少女は、狭い階段の途中に立ち尽くした。ハリーファの強い視線を感じて、面食らつたように目を見開いた。

「　　サライ……」

思わず言葉がハリーファの口をついた。黒人は驚き、狭い階段から足を踏み外した。

「わっ……」

黒衣の人物は小さい悲鳴とともにザザーツと壁を滑り落ち、すぐに地面に転がった。ハリーファの眼前に砂埃が巻き上がった。

安否を問いかける言葉が、ハリーファの喉で詰まって出てこない。

『おい！ 大丈夫か？』

サライにかけたユースフの声が頭の中で響く。

「うう……。いつてえ……」

小さくうめく声が聞こえた。黒人はうめきながら四つ這いになり地べたに座りこんだ。着ていた黒い衣服は砂だらけだ。ずれたターバンが覆いかぶさって顔は見えない。黒い手が白いターバンをつかみ、忌々しげに取りはらわれる。地面に投げ捨てられた布の下から現れたのは、短く切りそろえられた黒い髪だった。

男？

ファールーク皇国では長い髪は女の象徴であり、成人を迎えた男子は皆髪を短くするのだ。男にとって切り整えられた髪は富の象徴でもあった。

黒人は痛みに顔を歪めながら、右手で左肩を押さえた。

目の前の黒人が男だとしても、ハリーファを見あげる表情はあまりにもサライに似ていた。年齢のせいで、その姿はアルフェラツよりもむしろサライに重なる。

ハリーファは呆氣にとられて立ち尽くした。ジェードに聞いた話から、噂の人物は女なのだと思い込んでいたのだ。地べたに座り込む黒人の少年を見下ろした。

「……なんなんだよ。見世物じゃねえや。ここじゃそんなに黒人^{ザンジュ}が珍しいのかよ！」

ハリーファの視線を浴びて、少年は忌々しげに舌打ちした。

黒人の少年はハリーファの視線に不平をもらした。膝と壁に手をつきよろりと立ち上がった。いててと時々うめきながら、砂にまみれた服を両手でしばしとはいた。

立ち上がった少年はハリーファよりも少し背が高かった。小柄だったサライとは異なる。少女のような美しい顔立ちだが、服装も体格も声もまぎれもなく男だ。

「……ここには黒人^{ザンジュ}は一人も居ない。お前、何者だ？」

ハリーファがようやく口を開くと黒人の少年は向き直り、眉を寄せながら黒い瞳をハリーファの方を向けた。

「見りやわかるだろ？ ただの使いっ走りだよ。ここんとこ宮廷に入るのにも随分ものものしいじゃないか。行商隊が来たときに、何かあったのか？ 黒人^{ザンジュ}だからって俺ばかりやたらと調べられて、いい加減頭にきてるんだ」

ハリーファが皇子だとは気づいてないようだった。金色の髪の白人の少年は宮廷の白人奴隷^{マムルーク}と思われるのだろう。余計な文句をつけ足して答え、不機嫌そうに衣服の砂をはらい続ける。

「お前は行商人じゃないな。お前の主人は何処の誰だ？」

黒い肌の少年は砂をはらう手を止めた。

「メンフィスのラシードだ」

メンフィスはサンドラから北へ十キロほどの交易の盛んな街だ。以前、歴史家イヤスから聞いた、まさに名士^{サドル}の家系だ。最近出入りしているラシードの奴隷と言うのもこの少年のことだったのだろう。

「ラシード？　ではお前は、ラシード・アル・ハリードの奴隷^{ラキーク}か」

ハリーフアの質問に、黒人奴隷は顔も上げず「そうだ」と答えると、また服をはたきはじめた。

ラシードという人物はジャファルの従兄弟にあたる男だ。ラシードの父ハリードはかつての皇国の第二皇子だ。最近調べていた系譜で見た名前を見たところだった。そして、ハリーフアより一ヶ月先に生まれた腹違い^{ウフト}の姉アーランが嫁いだ相手だ。

「アーランは……、息災なのか？」

ハリーフアの言葉に、黒人の少年の眉がぴくりと上がった。砂をはらう手を止め身体を起こすと、ハリーフアを凝視してきた。

「あんた、誰だ？」

「アーランの、腹違い^{アフ}の弟だ」

「じゃ、あんたがハリーフア皇子？」

そう聞いて、黒人奴隷の少年は大きく目を見開いた。少年の驚く顔もサライを思い起こさせる。

「……これは……ご無礼を」

黒人の少年は口では詫びたが、ハリーフアを疑うように眺めた。

ハリーファの事情をアーランから聞かされ知っているのか、漆黒の瞳にどことなく憐れみの色が浮かぶ。そんな気がしたが、心からは何も聞こえてこなかった。ハリーファに向けられた視線は、ハリーファを哀れんでいるのか、蔑んでいるのか、それとも疑っているのか。黒人少年の心のうちは何も伝わってこない。

ハリーファは急に違和感を覚えた。少年の心がわからない、何も伝わってこない。自分の異能が突然消え去ったのだろうか。ハリーファは焦る気持ちを表情の下に隠して少年に問いかけた。

「今日が初めてじゃないな。ラシードが一体何の用件だ？ それともアーランからの遣いか？」

「ハリーファ皇子？ あんたさあ、弟^{アフ}なのになんにも聞かされてないのか？」

黒人少年は随分なれなれしい言葉で語りかけてきた。少女のような表情が歪み、哀れんだ視線がハリーファに向けられる。

「皇女さんの御母堂の体調が優れないんだよ。知ってるだろ？ ココの病気だ」

少年は右手の親指を自分の胸元にあてた。

「主人^{サイド}に遣いを頼んできたのはアイシャ殿下本人だぜ。オレは市井で流行っている薬を遣いで届けに来てるんだ」

メンフィスはオス・ローの医者や職人が多く移住した街だ。異母^{アイ}姉^{ラシ}の母親がもう何年も前から体調を崩していることも事実だった。だが、少年の言うことが本当に正しいのかどうか、心の声を聞く

ことに慣れすぎていたハリーファは判断できなかった。

「なぜこんなところにいる？　ここで何をしていた？」

「殿下がさ、最近昼間、海鳥の声がうるさくて休めねえって言うんだぜ。城壁の上に巣でも作られてないか見てこいってさ！」

使い走りの少年に怪しいところはなさそうだったが、相手の心が聞こえないことにハリーファは内心穏やかでなかった。なぜこの少年は心の声が聞こえてこないのだろう……。何も考えないように訓練されているのだろうか？

ハリーファは一瞬、人知を超えた能力を疑った。自分と同じように何か不思議な力を持っているのだろうか、猜疑心がハリーファの心を覆い始めた。しかし、普通じゃないのは自分のほうだ。

『ハリーファのように人の心が分からないから、たとえ裏切られる事になっても人を信じるのだ』と、以前そう言ったジェードの言葉がふと思い出された。

「……ここには毎日来ているのか？」

「前に十日ほど毎日つめて来てたけど、先週から週に一回だ」

「お前、名は何というんだ」

「ソル」

さらりと答えた少年の名は、ファールーク皇国の市井ではよく聞く愛称の一つだった。おそらく本当の名ではない。市井では忠実な

人付の奴隷は主人以外に本当の名前を明かさないと聞く。そんな奴隷の少年に言っても無駄かと思いながらハリーファは尋ねた。

「ソル。俺はこの通り不自由な身だ。お前のように、自由に外と出入りできる奴隷が欲しい」

あまりに唐突な言葉に、ソルと名乗った少年は目を白黒させた。

「……オレの主人はラシード^{サイド}だけだ」

「別にお前をラシードから買い取ろうとは言わない。遣いを頼まれて欲しい。報酬ならその都度与える」

「ふーん……」

ソルは不振な目付きでハリーファを見定めた。

「オレは、金持ちや高い身分のやつらは自由なんだと思ってたんだけどな。そうじゃないのか？」

ソルは胸の前で腕を組みながら首をかしげた。

「……俺は軟禁同然でここからは出られない」

軟禁という言葉をはりーファの口から聞いて、ソルは笑いをかみ殺した。

「別にオレじゃなくても、皇子様なら奴隷なんか沢山いるだろ？」

「いや……」

ハリーファは思わず口ごもった。その様子を見てソルは眉をしかめる。

「もしかして奴隷もないのか？ やつぱり異例の第二皇子様は冷遇されてるってことか？」

納得したような表情で、ハリーファの服装を再び眺めた。

「そんなんで、本当にちゃんと報酬が払えるのかよ。いくら皇子様が相手でも、オレはタダ働きはしないぜ？」

「先に払えばいいだろう」

そう聞いてソルは頭を縦に振った。そしてわざとらしいほど大げさに右拳で左手をぱんと打ちならした。

「あー、そうだ！ 金是要らない。代わりに阿片アフィウンが欲しい。なければ麻ハシシユでもいい」

ハリーファは眉をひそめた。おそらく国交のないファールークにとつて、今は金子よりずっと価値があるのだろう。

「ここにあるのは医療用のものだ」

「ああ、粗悪品はいらねーんだよ。純度の高いものが欲しい。最近メンフィスでも手に入りにくいんだ」

ソルは口の端を少しあげた。元々阿片や麻の精製技術はシュケムから持ち込まれたものだ。争いの起こらなかった二百年の間に、亡

国から引き継いだ技術さえ衰えてしまったのだろっ。

相変わらず奴隷少年の心からは何も聞こえない。しかし、報酬として望むものを出せないなら取引に応じるつもりはないようだ。

「……わかった。ここから北西位置に赤土色の離れがある。義母上を見舞った後に来てくれ」

「御意のままに」

ソルが皮肉っぽく返事をする、早速ハリーファはソルにある用事を頼んだ。

細かに指示する間、ハリーファは黒人少年の心に耳を傾けた。しかし、その間もソルの心からは何も聞こえてはこなかった。

日が落ちて、【王の間】のランプに灯が点された。

薄暗かった室内が明るくなり、少し不機嫌そうなハリーファの顔がジェードの瞳に映った。

ハリーファは応接の長椅子に深く腰を掛けている。珍しく乱暴に足を投げ出し、腕組みをしながらジェードをじっと見つめた。

《……ハリ、昼間のことを怒っているのかしら》

ジェードの心は、ハリーファに対する罪悪感でいっぱいだった。ハリーファにわびる言葉を探したが、あきらめてため息をこぼす。

ハリーファはジェードの心の声を聞きながら、ソルの心の声が全く聞こえてこない事について考えていた。今までそんな人物に出会

ったことはない。本当に何も考えないように訓練されているのだろうか。

「ジエード。心でものを考えない人間がいると思うか？」

ハリーファはまるで独り言のような口調でジエードに問いかけた。目も合わせずに話しかけられ、ジエードは困ったように首をかしげた。

* * * *

皇都サンドラから北へ十数キロ程ゆくとメンフィスの街がある。メンフィスはかつてはフロリスとの交易で栄えていた街だ。

近くに流れる川の水を利用して、荷運びの小船が行き交う水路が街を網羅するように作られている。皇都サンドラよりも緑が多く、街の至る所にナツメヤシが生え、その根元や大きな建物の周りには緑の芝が生いしげっていた。

およそ二百年前に国境越えが禁じられてからは交易も廃れたが、モリスの中では今も異国風情の感じられる街だ。

ソルがメンフィスに着いた頃には、東の空の裾が勝色に染まりつつあった。斜めに差ししてくる日差しに目を細めながら、首元にじ

む汗をターバンの裾で拭いとる。往来に入ると馬から下り、その手綱を引いて人の行き交う中を歩いた。時々見知った顔ぶれがソルを見つけると声をかけてきた。

「アキル、お前も疲れただろう？ 帰ったらゆっくり休めよ」

独り言のように黒い馬に話しかける。

街の中心地に黒人奴隷ソルの主人であるラシードの屋敷はあった。ソルは格子柄の門を開け中に滑り込むと、馬を厩舎へと連れて行った。餌箱と水を確認すると、玄関まで戻り館の中に入った。

「ソロモン殿、おかえりなさい」

ソルの帰還に家奴隷が声をかけてきたが、ソルの耳には届かなかった。ソルはものすごい勢いで玄関のすぐ横の階段を駆け上り、主人であるラシードの部屋へ向かった。

主人が在室なのは分かっているのに、軽く戸を叩くと返事を待たずに戸を開ける。ベッドの上で身体を起こしていた人物は、帰ってきた奴隷少年の姿を見て微笑みかけた。

「ソル、戻ったか」

「うん」

ベッドに身体を起こして座っているのが、ソルの主人のラシード・アル・ハリード、かつての第二皇子ハリードの息子で、ファールーク皇国の宰相ジャファルとは従兄弟にあたる。ジャファルと歳も近い。ラシードの黒髪と小麦色の肌は父親譲りだ。

だが、今年に入ってからラシードは急な病に倒れた。そのせいで実際の年齢よりも老けて見える。病気のせいで頬はこけ、漆黒の髪は切ることが出来ず少し伸びて肩に掛かっている。今は気分が良いのか、言葉も明朗でソルを見つめる黒い瞳には光が宿っていた。

ソルは黒い上衣を脱いでわきの椅子の背に投げ掛けると、主人のもとに駆け寄った。そばに置いてある椅子には座らず、ベッドの上に座り込むと主人の足元であぐらをかいた。

「義母上はどうだった？」

ソルの行動をとがめることなく、ラシードはソルに笑顔に向けた。

「かなり良くなってきたみたいだ。薬があつてるんだと思う」

「そうか。それはアーランも喜ぶだろうな」

元皇女の名前を聞いて、ソルは口を尖らせた。

「さあね。あいつが喜ぶところなんて、オレには想像もつかねーよ」

ラシードが妻の母を気遣う言葉に、ソルは少し渋い顔をした。数年前からラシード自身も病を発症しているのに、それを公にしないまま日に日に弱っている。そして自分の命が長くないことを悟ったラシードは、つい先月、奴隷達に金品を与え解放してしまった。この家に残っているのは家奴隷二人だけとソルとそしてアーランだけだった。

（あんたの方がよっぽど悪いのに……ラシード）

宮廷にいる皇族達と同じ、漆黒の髪と瞳、小麦色の肌をしたラシードを見て、ソルは今日出会った人物を思い出した。

「そうだ、ラシード、聞いてくれ！ 今日面白いやつに会ったんだ」

「面白い？ 一体誰だい？」

「第二皇子のハリーファ殿下」

「ハリーファ皇子？ あの異例の第二皇子か」

「うん。確か、箱入りでほとんど人前に姿を見せないって言うてる？」

「皇族の血が薄いと聞いたがな」

「ああ、それぞれ！ 噂以上に毛色の違う奴だったぜ。白人奴隷と勘違いしちゃった」

「白人奴隷か！ 宮廷の奴隷は宰相の趣味で皆白人だからな」

そう言いながらラシードがはっと笑った。主人が声を出して笑うのは久しぶりだ。

「白人で、しかも金髪だぜ？ あれで皇家の血を引いてるなんてありえねーよ」

「ハリーファ皇子か。ジャファルは金の髪が好きなようだからな。ファールークの掟を破ってまで宮廷に残すなんて、よほど気に入る」

なんだな」

主人の問いにソルは肩をすくめた。

「いや、それが何やら、ハリーファ皇子の方は色々不自由してるみたいだぜ。宮廷からは一步も出してもらえないみたいだな。その上奴隷も居ない。どうやら離れに隔離されてて、哀れな第二皇子様だ」

二人が話していると扉がノックされた。ソルと同じように返事を待たずに入ってきたのは黒髪の少女だった。

銀のタンブラーを盆をのせ、黒く長い髪を揺らしながら、真直ぐにラシードの傍らに歩み寄った。

「貴女にこんなことをさせてすまないね」

「構わないわ」

少女はベッドの横の台に盆を置くと、持ってきたタンブラーをラシードに手渡した。

ソルは昔から、この少女に対する主人の態度が気に食わない。ソルの顔からは笑みが消えた。自分のことなどまるで気にもとめない少女をにらみつける。

「ありがとう、アーラン」

ラシードの感謝の言葉と笑顔にも、アーランと呼ばれた少女は表情を変えず椅子に腰掛けた。その様子を見て、ソルは黙ってベッドの上から降りるとそっと部屋を後にした。

アーランの態度に軽いいらだちを覚えた。いや、本当はラシード

をアーランに盗られたことに腹を立てているのだ。階段を下りる足について力が入り、バタバタとみっともない音をたてながら、ソルは玄関への階段を下った。

「ソル！ お待ちなさい！」

先に階下を下りたソルを追って、アーランが手すりに身を乗り出して声をかけてきた。アーランには聞こえないように軽く舌打ちすると、ソルは振り返って上方を仰いだ。

アーランの肩にかかる黒く長い髪、小麦色の肌はラシードと同じ皇族の血筋のものだ。漆黒の大きな瞳が階上からソルを見下ろした。

「ラシードから聞いたわ。あなた、今日ハリーファに会ったの？」

「ああ。あんたとは随分似てない弟だな！」

階段の上のアーランに向かって、強い口調で答えた。

宰相の娘のアーランを見ると、なおさら今日出会ったハリーファだけが、同じ宰相の血を引いていながら、異様なほどにその外見が違うことに改めて気づかされる。

「ハリーファに近づいては駄目！」

唐突に言われた言葉にソルは目を丸くした。

「あのなあ。いくらあんたでも、オレはラシードの命令しか聞かないって言っただろ」

「ハリーファは人の心を読むのよ！」

そう言いながら、アーランはソルを追いかけて階段を下りてきた。

「はあ？ 人の心を読む？」

ソルは近づいてきた主人の妻に向かって眉をしかめた。

「ハリーファは人の心の声が聞こえるのよ」

「からかってんのか？ そんなの戯れ言だろ？」

「戯れ言ではないわ。真実よ」

「姉弟で心が通い合うほど仲が良かった、ってか？」

「お黙りなさい！」

アーランの顔は怒りで赤くなった。ソルは肩を竦めて見せると、茶化すのはやめて真剣な表情で答えた。

「皇女さん。人の心が読めるなんてのはな、^{シャイターン}悪魔か^{ジン}神魔だけだ」

ソルの真っ直ぐな視線を受けて、アーランはそれ以上何も言わなかった。

「まあ、確かに、あの髪と肌の色は皇族にしちやかなり異様だな。それとも、あんたの弟は^{アラ}神魔^{ジン}に取り憑かれてるってのか？」

「……」

アーランは押し黙ったまま、やや不満そうな顔でソルを見上げた。ソルはふんつと鼻を鳴らした。話は終わったと思い、身をひるがえし玄関に向かう。

「お待ちなさい！」

「うるせーな。何なんだよ！」

「あなた、今から何処へ行くの？」

「^{バザール}夜市に行くてくる」

そう言いながら、袖口から出した一枚の金貨を上方に指で弾くとはしつと受け止めた。

「……いいわ。お行きなさい」

ソルはアーランに背を向けると、きつちりと着ていた衣服の首元を緩め胸元を大きく開けた。そして袖を捲り上げると、玄関の大きい扉を押し開け外へと出ていった。

* * * *

翌週の午前中、ソルはハリーファに言われたとおり、宰相妃殿下を見舞った後に【王の間】にやってきた。

本宮に比べ明らかに年季の浅い異質な朱鷺色の館に入っていくと、応接室にハリーファの姿を見つけた。

「なんなんだ、ここは？」

そう言いながら朱鷺色の室内を見渡した。ソルが来るか来ないか半信半疑でいたハリーファは、ソルの来訪にまんざらでもない様子だった。

ソルは腹の帯に挟んでいたモノを取り出してハリーファに差し出した。

「頼まれてたモノだ。これでどうだ」

ハリーファは受け取ると、掌の上で包み布を一边一边広げていく。その中に包まれていたものを見てハリーファは満足そうにうなずいた。

「思っていたより良い出来だ」

「腕のいい職人を知ってるからな」

ソルは自慢げに言うと、近くの椅子にハリーファの指示を待たず勝手に腰掛けた。

「メンフィスでは今もフロリスとの交易が行われてるのか？」

「いや。港も閉じられてるし、陸は国境が通れないからな。それに

今はフロリスなんか頼る必要ない。モリスだけで勝手にまわってるだろ？」

ファールーク王国が繁栄も衰退もしない不気味な状況が続いているのは、皇都だけでなく皇国内全土のようだ。聖地オス・ローが復興しないのも、あそこがファールークの領土だからなのだろう。

まるで国境に大きな壁があるように、外から干渉されることもなく、偽りの平和の中、ただ時間だけが過ぎてゆく。

（これがアーディンと【悪魔】との契約なのか……？）

ハリーファはソルには気づかれないよう小さなため息をこぼした。そして、思い出したように小さい麻袋をソルに差し出した。

「これは次の分だ。本当に金じゃなくていいのか？」

ソルは微かに笑いながら立ち上がると、ハリーファの手から麻袋をむしり取った。

「ありがたいね。また来るよ」

そう言って、ソルはそのまま【王の間】を出て行った。

ソルの心の声は今日も何も聞こえてこなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0205k/>

天国の扉

2011年12月7日22時50分発行